

三倍をかたむけたりといふもあり。ナインやりたれとすまず面白き人あり。何れ劣らぬ勇士の列伍四五の飯櫃を悉く空虚となしぬ。

忽にして詩吟の聲起り軍歌の曲之に次ぎ俗語さへ之に和し、かしましともさわがしとも、げにわれながら驚きたる程なり。半ばにして印牧先生より菓子を振舞はる。よろこびて打食ひ腹鼓をうちならしてえ動かさる人もありけり。

誰が發議しけむ藝盡しの團樂は開かれたり。劈頭第一、吉田秀雄君、沈痛なる聲音に悲壯なる詩を吟じ給ふ。其次に坐したるわれ、なすべき藝なく四ツ這ひに人の前を這ひあるけば抱腹絶倒する人もありけり。あやしと思ひたるは田仲君の郷里の踊歌(ボン)の馬場君の歌。とりわきておもしろきは熊谷君の歌なり。佐野君立ちて「われは西洋手品をせん」とはやしをいひ立て、「さて何をなすとも種なければなす能はず、誰かわれに印牧先生より給ひたる菓子と巻煙草一本を寄附せよ」といひ何處よりか義捐せられたるを手にとりて「だますに手なし頂戴仕る」といひて退きたる、げにうつくしく巧にやられたり。先生先より傍觀し給ひしがこれを見て賞讃してやまさりき。柳井君終りに出で、藝をやり給ふこと夥し。先生高向げなる歌を唄ひ給ふや。後を見ずしておのが室にかへり給ひき。其夜は十二時頃までもかしましくいひてありしがいつしか夢路を辿りぬ。

二月廿八日、朝の曇り、忽ち變じて日本晴となる。

あけぐれの頃、目を覺ましかなたこなたにヒソ／＼ときこえし話聲は忽ちにして喧噪なる劇場の如く、よべの藝盡しの餘波なほ盛に打返すさまなり。天はいかにとこととふに打曇りたれども、まだ滴の落つるを見ずといふに半失望せしが忽ちにして何處が曇れるにか、この晴天をくもれりとはいかぬる目か、あけぐれの空の黒きは理の然らしむる所なり。「あなやまり給ひそ」とたしなむるやからあり、蒲團の中にてよろこぶ聲しきりにきこゆ。

朝食幾碗を重ねけむ、便々たる腹打撫でつゝ、立出し頃は八時頃なりけり。白瀧に行くまへに、吉村君案内者の銃にてツグミを撃ちしも、音のみにてやみぬ。後の方にて姫野君先生の二連銃にてヒヨドリを打ちしが、初に中らず二度目にて見事に打ちおとしたり。

きのふ、夕方追ひしあたりに行くに草の屋より立出でし農民甲斐々々しく案内しくるゝに誘はるれば麥のたゞなるはなく食ひ盡したり、こゝには其數しれずといふによるこびて追ふ。石炭ガラの響、なりわたるや衆之に和し遠くよりきけば、山のなりひゞくかと疑はる。追ひよせきて、また取れぬかと落膽せるに高き處に萬歳の聲起るに、きけば一匹を獲たりといふ、うれしくてまた萬歳の聲起る。

隣れる山を追ひしも得ざりしが山を越えて大きやかなるを

狩る、こたびは一匹を得、一匹は網をくゞりてかなたの林に逃げ入りたるを見たり、といふに勇氣百倍してまた其山を追ふ。小松生ひ茂り、茅、薄等地も見えなくに、生ひたるを押分けつゝ、上をはやくせよ。下はあまりはやし。おそく／＼と追手の呼ぶ聲しきりなり。

網に近づけばまた獲たりといふ、こゝにも萬歳の聲わくが如く案内せる農民得意然たり。

今朝曇りたる空ははやく拭ひたるが如き晴天と變り、そよ吹く風だになく暖かき春日覺えて、心地よきこと限りなし。藤本安東兩君奮ひて幹旋の勞をとられ獲たる兎を晝食のかすにせばやと、村家に着きて器物を徵發し給へり。いづれも田舎の朴訥質素なる良風に、加ふるに、耕作物大害をなす兎を狩るにすれば、心よく引受けられたりとぞ。凡そ四軒より徵發せし物品、鍋、箸五十人前。茶碗四十餘。里芋若干。大根數本。牛蒡數本。薪一二束。庖丁二。マナ板一。醤油一樽。杓子二本。水桶一荷。ザル一荷。

田北君解剖に巧なれば、他を勵まして三匹の兎を料理し給へり。残りの者は休むもあれば、眠れるもあり。心あるものは我先にと手傳ふ。戸次より安東、藤本、兩君が肩にして來給ひたる蒟蒻四十丁を茹で、そを指にて摘みきるもまた一興なり。携えたる鎌、短刀、ナイフなどにて大根牛蒡をそぎ落すもをかし。山の高き所をほりくぼめて竈となし、鍋かけて

火を盛りに焚くもおもしろし。醤油、砂糖、不足なりとて十町あまりある所に求め來る有志家あり。總て互に相扶け相救ひて成さむとする。是豈同級生の親睦にあらずして成し得んや。

やがて第一の鍋に充實すれば、火は盛に焚かれて美香紛々として鼻を撲ち、空腹なるわれらにはいかんぞ垂涎三千丈の感なきを得ん。

忽ちにして丘頭に圓座を設けられぬ。煮立てたる兎は前に列らべられぬ。泥の如き醤油にて煮たるものなれども饑者は食を擇ばず、舌鼓打鳴らしつゝ、鹽梅よして賞讃するにわが腕前なれば旨からざるべからずといひたる憎さきくにはあらで破顔大笑するもおもしろし。

第二の鍋を忽ちにして食ひ盡したり。時に日稍西に傾き時辰儀四時前十數分を示せり。則ち食後の始末を整へて發足す。藤本君等と借りたる家に心ばかりの謝禮を齎らして、返すに「それにては」と押返すさま都には見られぬことなり。

ツグミの居るを見て安東君先生の銃をかりて放ちしに驚れんと思ひし鳥は「またこよ」といはぬばかりに森のかなたの枯枝にとまりたり。われえたへで其銃おつとりて、忍びより木蔭よりのぞむに鳥は空仰ぎて空うそぶけるさまなり。おのれと狙ひすまして引けば轟然たる響に應じてヒラリと地上に落つ。田仲君後より「中根旨いぞ」と呼ぶ。うれしくて鳥打ちふ

りつゝかへる。

先發の隊に加はれば、網番山に張れる最中なり。やがて散兵線をはりて追ひはじむるに勇氣百倍せる健兒の聲森林をも動かさんほどにていかなる猛獸もえ住むまじう思はる。山長き爲め後ろは聲かれくゝになりて、近き者とする低き話聲は枯れはてゝきくうべもあらず。

聲に恐れて躍りいでたる兎の網にかゝりしも網番の少なくして、遠き所にありしたため、僅に其體にさわりしのみにて取逃せしといふにいと口惜しく思へど、詮なし。見ればからだの形にぬげたる毛、草間にふぐたみたり。益々残り惜しく、いかで之を取りてむといひしも日西山に沈まんとすれば、やむなくて歸途に就く。

新道よりかへるに、富岡のあたりにて日暮れはてゝ人顔さへ定かならず橋の袂にてまづ萬歳の聲をあげ、一部と別れたり。われらは先生と共に學校まで來つ。松坂神社の社前に於て藤本君殘の一兎を恭しく先生に捧げ先生の萬歳、中學校の萬歳、四年生の萬歳を三度唱へて歸舎す時に午後七時なりき。

寄宿舎生、田仲、城内、安東、藤本、鈴木、梅田、齋藤、野村の八君及、余は其夜夕食を食ふ所なければ、田北君に談判して同氏の宅にてしたゝむるに決し、江島舎監の許可を得て赴く。藤本君牛肉一斤半を用意し給ひたれば、そを大根と

煮て食ふ。空腹には旨きこといはむ方なし。われ學校にありて快なる旅をなせしこと實に尠からずとせず。然れども今回の如く愉快を極めし旅行は再び得難きものなりと信ず。昨年の二月廿三日に於ける旅行、而も同じ旅宿に於ける快固より快なりしに相違なし。然れども其快未だ以て今回に及ばず昨日は一兎を得今は四兎を得たり。昨日得たる總てを先生に捧げたりき。今は快瀾なる丘頭に之を屠り、吾人が珍膳に供へ而もなほ一頭を先生に捧げたりき。

先生は此の旅行に熱心せられ。壹圓を寄附し玉へり。われらが一頭の兎を先生に贈りしときもおのれは寄宿舎に寄附せん心なりしをと辭せられたり。嗚呼先生の徳此謙遜に於て已にあらはれたりといふべし。十時就寝。

## 中學時代の回顧

十期 藤本恕一郎

私は明治二十六年入學同三十一年卒業の第十回生である。此時代は我國學制の過渡期でもあつた日清戦争や母校新校舎の落成、教員の大異動、寄宿舎自炊制度の創設、運動部の躍進等々種々の意味に於て頗る重要な時期であつたと思ふ。

以下兎糞的に記述し當時を偲び度いと同時に多少とも現在の學校當事者生徒諸君及び當時の學友諸君の御參考になれば誠に幸甚である。

一、當時の學制——當時我國の學制は小學校四年（各町村一校を原則とす）高等小學校四年（郡立にて各郡一校を原則とす）中學校（縣立にして各縣一校を原則とす）高等中學校（國立にして第一東京、第二仙臺、第三京都、第四金澤、第五熊本の五校）帝國大學（國立にして東京に一綜合大學）傍系としては高等師範男女各一、高等商業一、醫學校は高等中學校の附屬として五、高等工業二、商船學校一、郵便電信學校一、陸軍士官學校幼年學校各一、海軍兵學校一、私立學校では慶應義塾、早稲田專門學校、明治法律學校、法學院、和佛法律學校、専修學校等で中學卒業生の上級學校に進まんとするものは此等の諸學校を選ぶのであつた、而して高等中學校は明治二十八年迄は第五丈だけは少くとも無試験であつた大學は無論試験なしだから中學の入學試験に合格すれば學資があつて本人がやる積りなら試験なしに大學迄は進學出來たものである。傍系諸學校は入學試験があつたが各私立學校は無試験であるから、中學の入學試験に合格する事が將來の運命を決する最も重要なものであつた。

二、入學試験——吾々の明治二十六年度の入學試験は高等小學校卒業程度による最終のもので、翌明治二十七年から

高等小學二年修業の程度に變更された即ち六年制小學校二年制高等小學校の學制に變更する前提と見るべきものである。之は現在の制度と同様である。吾々の入學試験科目は算術、漢文、英語、地理、歴史、動物、植物、礦物、作文、圖畫、習字等で漢文の如きは近古史談中より白文を出して句讀解釋を課せられた程度に六かしきものであつた。私は縣北邊陲の孤島に生れ高等小學校の寄宿舎生活をするの外なく貧乏の家に生れた爲め悠々として居られぬ境遇であつたから、一年に一ヶ月四年に二ヶ月計二年三ヶ月しか高等小學校の教育は受けて居らず。加之縣内各地より雲集した二百名の秀才諸君と受験したのだから、二十六年七月十日頃の炎暑の中で不一方苦んだが憐憐にして合格する事は出來た。尤成績は決して良好ならず、中根が一番で矢田繁一が二番であつた事は一年一の組の級長が中根で二の組の級長は矢田であつたので明白であつた。入學は二十六年九月十日頃で當時新校舎落成直前で既に寄宿舎の北舎は取毀たれ教室一つ不足の爲め雨天體操場東北隅を仕切つて臨時教室を作り、一年二の組であつた。

私は此假教室に收容された。暗くもあり、暑くも寒くもあつたが、別に不足にも思はなかつた。當時五四三年各一學級で二年と一年が二學級宛であつたと思ふ。従つて教室は僅かに七室で充分であつたのである。其二年生即ち第九回生は四年の時に中津分教場より轉じたる學友を合併し、吾々も二十九

年四年の時に中津からの學友と合併したので、四年迄は各二學級を保つて居たが五年の時少しは人数は多かつたが何れも一學級となつた。百人入學して途中中津の學友を加へて六十名前後で卒業したので、種々の事情で共に卒業迄同伴しなかつた諸君の如何に多かつたかは此事實が雄辯に物語つて居る。明治二十七年からは入學程度の低下と共に校舎の許す限り募集人員を増加して明治三十年校歌の出來た頃には總人員五百名に達したのである。

三、縣下中學校の増設——明治二十六年中津分教場新設され一二年生を募集したのは九月であつた。二十八年と二十九年とは其三年生修了の諸君の大部分は大分本校に轉ぜられ本校の四年生と合併されたが三十年四月中津分校は獨立して大分縣中津尋常中學校となり、新たに宇佐分校を加へ大分中學校では中津分校は離れたが、新に杵築、臼杵、竹田の分校が加はつた。併し此時の分校は中學増設過渡期の現象で、四年生の出來る前に全部獨立して吾々の卒業後ではあるが縣下に六中學が出來た譯である。

四、先生のことども——吾々の入學前二十六年五月に紛擾があつて校長教頭は交迭したるも、多數教師は入學試験時迄は残つて居た。其暑休中に大交迭が行はれ、九月入學の時には僅少の先生の外全部新たに赴任された先生であつた。新校長が大改革を行つたものと思ふ。吾々は幸に入學當初より新

陣容による先生の教授を受けて明朗なる空氣の中で教育された。以下臚氣ながら私の記憶のまゝ先生の事を列記してみたい。

校長金子銓太郎先生——縣内舊杵築藩士にして東京に生れ、東大法科卒業内務省試補、陸軍豫備歩兵少尉、明治二十六年五月紛擾後の母校に來任せられ温厚篤實にして威嚴あり、生徒の薫育に熱心せられしが僅に一年餘にして日清戦争の時召集せられ出征中、生徒の留任切願も効なく辭任せられ、凱旋後大阪府北野中學、高知中學校長を経て第六高等學校長、第三高等學校長、静岡高等學校長を歴任し現に東京に健在せらる。

校長武田安之助先生——舊福山藩士江戸丸山阿部伊勢守邸内に生る。曾て本縣師範學校教諭たりし人金子校長辭任後、明治二十八年三月校長に就任、金子校長を慕ふ空氣濃厚なりし時に來任せられし爲め、當初は物足らざる感を與へしも、元來豪放磊落にして禪味を帯び果斷にして可と信する改革發展に猛進さるゝ人であつたので此時代に於ける學生訓練には最も合致したる適任者として一般生徒の信頼を受けたりと思ふ。二十九年より試験を廢止し席次は身長順となし生徒をして各其長所を發揮せしめんとする基礎を與へ。運動部を大擴張してスポーツ精神を打込み寒稽古の際には午前四時頃大分町より出校して擊劍を指導し。苟くも浮華輕佻の風を嚴禁して

質實剛健の氣風の養成に邁進されたり。故田村守衛君、常に「何方に連れて行かれても此人居れば更に恐怖の念なかりし」と云つて大に武田校長を追慕せられしが蓋し適評ならん。吾々の卒業後辭任せられ一時東京令兄の家に假寓せられしが明治三十二年秋田中學校長を経て函館中學校長に在任せられし時、明治四十一年末私は大阪新田帶革の番頭として札幌に行き居りしに新聞の人事往來に出て居たりとて電信を寄せられ「俺の繩張を素通りするとは怪しからぬ」と叱られたから、歸途十二月十五日五稜郭の中學校に往訪し校長官舎に一泊し快談十時間餘、此時害鳥驅除の爲め射殺したる鳥の佃煮を食はされた。翌朝五時頃雨後氷結したる悪道路を徒歩で送つて頂き(五稜郭より函館港迄約一里あり)恐縮したが鳥と云ひ難道徒歩と云ひ、飽く迄舊弟子を質實剛健に導かんとする先生の精神は、今尙感激の思出である。大正の初め中風に罹られ辭任して秋田市に閑居せられしが數年ならずして一代の名校長は永眠せられた。

◆教頭金田檜太郎先生 大阪府堺市の人帝大理學士受持「地理」明治二十六年五月來任二十七年轉出現に堺市に健在す。

◆教頭西村謙三先生 佐賀縣の人明治二十六年九月來任「英語」主任二十九年轉出現に佐賀市に健在鍋島家の佐賀圖書館等を主宰す。

◆教頭尾田信直先生 宇和島の人帝大文學士「歴史」を受持ち

明治二十七年九月來任、三十年轉出、晩年病氣の爲め郷里宇和島市に閑居せられしが數年前逝去。

◆教頭印牧順作先生 金澤市の人米國大學出身明治二十九年來任、「英語」主任三十二年轉任昭和八年逝去。

◆今關常次郎先生 千葉縣の人帝大農學士、明治二十五年來任受持は博物理化、二十九年轉出後東京蠶糸專門學校教授に任ぜられ農學博士の學位を受け、最近迄同教授たりしが現在退職して東京に健在せらる。

◆境野昇次郎先生 静岡縣の人明治二十六年九月來任、受持は數學三十一年轉出兵庫縣師範學校臺灣總督府師範學堂山口縣豊浦中學校に歴任、大正十年頃退職静岡市に閑居せられしが大正十四年逝去。

◆山田小太郎先生 中津の人慶應出身、明治二十六年九月來任受持英語三十七年退職せらる。先生は獨身生活を保持して學生の訓練を終生の樂みとせられ、退職後二豊學寮敬愛寮等を主宰して縣下出身學生の訓育に熱誠を注がれたる後、七十歳の高齡に達し今尙東京に健在す。

◆鶴 清氣先生 佐賀縣の人明治二十六年九月來任、受持圖書(當時は畫學と稱す)三十二年轉出後佐賀市に歸郷鍋島家祖を祀る松原神社の神官として同市に健在。

◆峯原平一郎先生 佐賀縣の人明治二十六年九月來任受持國語二十九年轉任出明治末年頃逝去。

◆松野重太郎先生 靜岡縣の人明治二十六年九月來任受持數學二十歳をやつと越したる年少教師在任中資格試験に合格、二十九年頃轉出後「正」と改名、名古屋市立女學校長として同市に健在。

◆石川總弘先生 日出藩の老儒にして、帆足萬里先生の高弟なり漢文倫理習字の受持にして開校直後來任、明治二十九年任中老病にて逝去せらる。習字手本村田海石筆「陳情表」「出師表」を讀み聞かせる毎に感涙滂沱たりし老儒者の倂は今尙忘れ難き思ひ出のたねである。

◆家永泰吉郎先生 佐賀縣の人帝大法科中退、明治二十六年十二月來任受授英語、地理且つ專任舎監たり。二十八年領臺後拔擢せられ臺灣法院判官に任ぜられ、累進新竹州の知事たりしが病の爲め退職大正中葉逝去。

◆渡貫 勇先生 水戸の人、明治二十七年五月來任、受持漢文年少氣鋭にして水戸學派の流れを汲み、皇國精神の鼓吹に努められたり。二十九年轉出後東京府立第一中學校漢文習字の教職に永年勤続せられ東京に健在。

◆多田寅松先生 千葉縣の人、明治二十七年九月來任受持國語二十九年轉出。後千葉縣女學校長たりしが東京に健在。  
◆淺香洋吉先生 平戸の人明治二十八年來任受持「地理」三十一一年の頃轉出元來蒲柳の質平戸猶興館中學校在職中逝去。  
◆中西保人先生 臼杵の人米國大學出身、明治二十九年來任

受持英語三十年浦和中學校に轉任後東京府立第一中學校に轉じ永年教職にあり遂に教頭に進みしが數年前退職現に東京に健在。

◆菊川虎雄先生 臼杵藩の儒者石川先生歿後來任受持漢文三十四年四月臼杵分校に轉職後同町に於て逝去。

◆出田 新先生 日出町の人北海道大學の農學士、明治二十九年來任受持博物、後諸縣の教職に轉じ數年前迄山口縣農學校長たりしが現に速見郡日出町に閑居せらる。

◆吉原健吾先生 西國東郡高田町の人、東京高師出身、明治三十年來任受持歴史三十六年頃福井縣に轉出後大分高等女學校長たりしが、明治四十年其在職中逝去。

◆本多清之助先生 栃木縣の人明治三十年前後來任受持國語  
◆山内愛治先生 明治二十九年來任受持國語三十年轉任

◆樋口勇夫先生 東京の人、明治三十年四月來任受持漢文後東京朝日新聞社に入り樋口銅牛の名にて印章學の大家として認められしが大正末年逝去せりと云ふ。

◆孔梅藏先生 玖珠郡の人受持漢文、後山口縣豊浦中學校に在職せしが十數年前逝去。

◆川角捨兵衛先生 島根縣の人明治三十年四月來任受持國語三十一年轉出後金澤中學校の教職にありしが現に島根縣に閑居。  
◆石田斯文先生 熊本縣の人、明治二十六年九月來任受持體

操、二十九年頃臺灣に行き後大連にありしが十年前逝去。

◆平川袈吉先生 熊本縣の人明治二十六年十二月來任受持體操、二十七年日清戰爭に従軍、凱旋後復職せられしが二十九年頃退職後逝去。

◆後藤克己先生 直入郡竹田町の人特務曹長、明治二十七年來任受持體操轉出後日露戰爭に出征歩兵大尉に進級凱旋後第五高等學校教師たりしが大正年中逝去。

◆下瀬五郎先生 大分町の人、陸軍歩兵少尉、明治二十九年來任杵築中學校に轉出後逝去(年月記憶なし)

◆江島文吾先生 宇佐町の人、明治三十年來任陸軍歩兵少尉受持體操兼舎監後日露戰爭に従軍し歩兵大尉に進級し現に宇佐町に閑居健在。

◆諸岡忠一郎先生 長崎縣の人明治三十年來任受持英語後事知るところなし。

◆柴江運八郎先生 大村藩の劍士、擊劍師範たり、吾々生徒擊劍を學ぶものは各々門弟帳に署名血判したるものなり。二十七年餘生を郷里大村に養ふ爲め引退せられ其地にて逝去。

◆上田光重先生 杵築藩の人、揚心流柔道師範たり、當時校内に道場なかりし爲め、柔道修業者は上野より縣廳内道場に通ひたり、上田先生は大分武徳殿の功勞者として其敷地内に先生の銅像あり。  
◆矢野龜太郎氏 臼杵の人、永年書記を勤め庶務一切の執務

の要領よき誠に入堂の域に達したる人なり。晩年別府に居住し游泳の名師範たりしが數年前逝去……(以下略す)

五、校舎の新築移轉。入學當時の明治二十六年九月には、現在第一高女敷地内北側半分弱位が中學校、南側半分強が師範學校で中學の正門は大手通り議事堂東南角の直前西向にあり。向つて左側に二階建平家建の連続したる校舎あり。職員室の外六教室ありしのみ、其東北隅は北舎毀ち跡の空地其南隣の雨天體操場は稍過大の堅牢なる建築にて一年二の組の私共は此東北隅四分の一弱を仕切りたる假教室誠に陰鬱なるもので辛抱したり。其南側に浴場あり、師範學校と共同使用。南側即ち正門の右手は南舎と稱せられたる二階建の寄宿舎、其収容力は五六十人位なりしならん。寄宿舎の東側は食堂其東側は炊事場、體操は中庭又は北舎跡或は議事堂前の廣場にて授業せり。南舎の南側は師範學校の寢室極めて近接し居りしと浴場が共通なりし關係にて時々喧嘩の機會あり。多くの場合中學生が此機會を捉ふる事に敏捷なりし事は申す迄もなし。明治二十七年五月十四日上棟式舉行同時に中學校に引渡され。二十五日各級生徒其主任教師に従ひ新校舎に縦覽し二十日六日より二十八日迄一般公衆の縦覽に供せられたる後、二十九日 御眞影を新校舎に奉移し後諸荷物を新校舎を運搬したり。理化學器械藥品等は生徒之を携へ他は生徒役夫を監督して運びしめ、三十日自今六月一日を以て本校記念日となす旨

達せられ、同日寄宿生上野新寄宿舎に移轉、通學生の入舎希望者も此日新に入舎したり。六月一日記念式典舉行。六月二日より新校舎に於て授業開始されたり。新校舎は敷地六、二二五坪。建物總坪數九七七坪。工費總額二二、五六六圓の要目にて出來たるものにて、正門本校舎は現在の通りにて正門左側東北隅に雨天體操場あり、其南隣に現在の倉庫、正門右側前面は空地にして本校の西側に生徒控室本校南西角に小使室、本校の南側現在の教室ある場所に、本校東南隅教室の西角の線を東端として西方井戸の東側迄の間口を有する二階建三棟の寄宿舎整然と並列し、中央に一間餘の通路ありて階下は東西に二分され、北側より一舎、二舎、三舎と稱し、各東西に分れたる一舎を一部二部、二舎三部四部三舎五部六部に分たれ、階下自習室階上寢室と定め病氣以外は就寢時以外には横臥し得ざる仕組なり。寄宿舎の西南方に食堂洗面場浴室(現存の通)あり。之とT字形に西側に炊事場、寄宿舎の南側の空地は機械體操場、寄宿舎の東側倉庫より南側、土壁迄が運動場と云ふのが新校の構築である。本校は校長室、庶務室、職員室、理化學、博物、及其各標本置場、圖書教室の特別教室あり。階上中央は講堂にして、普通教室は九室あり、從て移轉當時は二室は不用なりしも、爾後募集人員を増加せし等の關係上、吾々は五年に進級後一教室に約七十人(中津分校より轉校したる諸君を含みし故増加せり)を收容された

り。

六、寄宿舎自炊創始。開校以來寄宿舎は請負賄制なりしが、明治二十七年二月頃荷揚町時代に所謂賄征伐なるもの勃發し之を契機として自治的自炊制度創設の議起り、時の専任舎監(寄宿舎に常任)家永教諭の賛成を得て二十七年四月より自炊制度實施され、毎年四月三日を自炊記念日として祝儀を擧る事となれり。其任組は寄宿生中より炊事委員を選び、會計一人、米穀係、購買係、人員係、各二名乃至三名ありて順次週番的に責任を帯び炊夫を役使して自炊事業を遂行するもの、米穀係は米麥の購入保管及び配給をなし、購買係は一週間分の献立を豫定し米麥以外一切の購買をなし、人員係は毎日三回の食事人員の調査をなして米穀係及購買係に通告し且つ各人食事度數を會計係に報告する、會計係は實費徴收及一切の支拂を擔當す實費の算出は毎月一回炊事委員會を開き算出決定大概一人一日八錢前後にて充分であつた。

七、吾々の時代の學資金。明治廿六年頃の寄宿舎の請負賄料一日約七錢、下宿屋普通一日八錢にて約二圓五十錢、月謝月額四十錢、教科書は全部學校より貸與、當時は現在の如く鉛筆全盛時代にあらずして、毛筆、石盤、石筆の幅をきかせて居た時代故、文房具は平均月十錢乃至二十錢位で月額三圓五十錢もあれば三度位饅頭屋通も出來ると云ふ有様なりしも、三十年四月より月謝六十錢となり、教科書も新らしきものは

自辨する様になつたから卒業頃には月額五圓を要した。

八、日清戰爭。吾々の二年に進級した廿七年の暑中休暇(此時代には七月十日迄に卒業式閉業式を舉行して暑休となり九月十日新學年開始)中七月下旬日清戰爭勃發し九月新學年の始まる頃には豊島牙山戰の勝利ありしのみにて一喜一憂騒然たるものでありしが、九月十五日の平壤包圍攻撃、十七日の黄海大海戰の大勝利ありし以後は意氣軒昂戰勝氣分に酔ふ有様であつた。此頃同級生數名共同して新聞を購讀する事が流行した。吾々は四人組にて相談の結果日本新聞と決定したが、其理由は明治の俳聖正岡子規が其戰地通信員であつた爲めでは斷じてなかつた。其頃吾々の間にはまだ子規は少しも有名でなかつた、日本新聞を選んだのは此新聞が我邦に於ける唯一の振假名なき新聞であつたからである、聊か當時の中學生素氣の片鱗を偲び得ると思ふから附記する。扱て戦局は連戦連勝に推移したが、廿八年四月に於ける講和會議調印後に於ける露佛獨三國干涉の結果、遼東半島還附となりし爲め、教師も生徒も全校擧つて悲憤慷慨男泣きに泣いた豪傑も少くなかつた。何故に干涉を甘受せねばならなかつたかと云ふ事が話題の中心となり、結局國力不足の爲め屈辱を嘗めたのだ、青年奮起せざるべからずと云ふ事になり。私の如きもまだ二年生で將來の目的などの確にきめて居なかつたが、此時から富國強兵に役立つ目的を樹立する事となり。耳と眼に

缺陷ある故軍人にはなれず圖書が下手だから工科には骨が折れると見込をつけて一橋高商を撰ぶ事にしたと云ふ有様、私自身は格別御奉公も出來なかつた。全國民の此意氣が國力を増進して十年後の日露戰爭に全勝を得其餘力益々發展して今日の日本帝國の世界に於ける優位を招來したるものと思へる。當時臥薪嘗膽を穩かに詠出したる峯原先生の歌は吾々生徒一般しきりに口ずさみたるものである左に收録する。

批准のすみぬと聞きて 無號軒主人

こまも 茂るこしも 今はなびけり 御國の光 かがやきそめぬ 我が敵は 敵國は 今はあらじな ありなむととも 口にはいはじ 露西亞 獨乙 佛蘭西 御國の爲めと はからふてふ げにありがたし 時じくに ひまなくぞ 思ひつづけて 忘れてむかは 今日この日を

九、運動部の擴張。日清戰後青年學徒の義勇奉公の精神勃興と國力増進に躍進せんとする緊張心は勢ひ體力の強健を獎勵する方針となり、二十九年に至り從來新校舎に昇降の際には上草履使用(汚さぬ爲め)され靴のまゝ昇る事許されざりしが、僅少の休み時間にも運動する機會を與ふる爲め靴ばきのみ、昇降することになり、明治三十年吾々五年の時には交友會運動部に新に野球(當時はベースボールと稱す)庭球(當時はローンテニスと稱す)及短艇部を新設擴張された。野球部の創設につきては器具は全部購入したが其ルールには解釋に

苦しむ點頗る多く高橋啓太郎氏の著書や、米國出來の原書などで調べても書いてある事の解釋がつかず。當時の理事中根君や運動部委員の私など學校の事はそつちのけにして研究したのだが、同年夏帝大野球部選手の先輩中山秀之氏の暑休歸郷したるを捉へて教へて貰ひ、稍理解する事を得て、兎も角野球部は誕生した。縣下他の中等學校には未設で他流試合も出來ず、寄宿生通學生對抗とかクラス對抗位のもので何でも六ボール制(今は四ボール)でもあつた様だし、捕手から二壘手に球の達するもの二三人と云ふ貧弱さ從てスコアは五〇對二〇とか二五對二六と云ふ様な大スコアの連続であつた。其後二年位を経て他の中學校にも野球部出現して他校と試合をした時此時代に仕込まれた選手が縣下第一であつたと云ふ事だ。テニスも教師に二三経験者があつたので無事に本式にやれた。短艇部は僅かの金で三隻のボートを購入せんとしたのだから入手する迄には或は縣を通じて海軍の古物拂下げなどの交渉等あつたが。結局愛媛縣師範學校の短艇部廢止の結果出現した古物三隻を三十餘圓で買取りたるものが永く使用せざりし模様で、左程古くないのに漏水多く修繕せざれば使用に耐えず。濱脇の大工に依頼する爲め、漏水を汲出しながら生徒の手で回航するなど中々苦心の結果、五月中には使用し得る様になり新川の監督者に保管を依頼して練習を開始、七月の水泳大會には第一回短艇競漕を舉行したが、上野新川

の距離遠いのと古ボートである爲め故障多きとの結果かどうも發展性薄く吾々卒業後遠からず廢止したらしい。

一〇、かきよせ。吾々時代には大中は縣内唯一の中學だつたので、交通不便の各郡から集中したから寄宿舎生非常に多く徒級友間又は舎生間には相互扶助の感念強く病人ある場合には級友交代に看護する有様であつた。又級友關係以外に起居を共にして居る爲め交友關係も廣く且つ親密であつた。此時代には自治精神も強く自制心も堅かつた良友を撰んで厚く交はり各其缺點を忠告し合ふとか、學問上の智識を交換する事が流行して居た。私は英語は不得手の癖に英語を最も必要とする高商を志望する矛盾を敢てしたが、幸に何でもござれの中根君を親友に持つて居た爲め、四年頃より交話及通信は總て英語でやる申合せをして不自由の目には逢つたが其お蔭で高商に合格する事が出來たのだと今尙感謝して居る。寄宿舎生活は甚だ明朗なもので私は當時悪友と稱する人は殆ど居なかつたと思ふ。消燈、起床、自習等の刻限は相等嚴格に守られて居たと記憶する。食費滯納とか内部的の盜難と云ふ事は故は絶體になかつた、火災防止の注意なども自省的によく守られて居た。自習室、寢室、喫煙室(當時は禁じてなかつた)等の使用規定も尊重されてふしだらなことはなかつた様に思ふ。私は寄宿舎生活は中學時代を最後として居るので、今尙當時を偲び非常な懐かしみを持つて居る。

修學旅行も亦追懐深き享樂の一つだ、今はやらぬそうだが此時代には春秋二回は行はれ、一回は縣内一回は縣外とし縣内旅行には全部武裝して發火演習を行ふ事が内規の様だつた。私共は廿六年秋から三十年秋の九回の旅行中汽船に乗つたのは四國旅行の往復と佐伯旅行の歸途だけ。汽車に乗つたのは三津濱から松山迄。行橋から豊津迄。門司から福岡迄と最後の時に久留米から熊本迄で其他は全部徒歩軍で一日十里以上行軍した事もある。一番弱つたのは汽車と並行して歩く時で行程の長短よりも之が最もいやだつた。人間は氣の持様でないとなればどんな難儀でも平氣で忍び得るものだ。所謂「無いが思案の總仕舞」とはこんなことを云つたものかと思ふ。旅行費は今から考ればお話にならぬ少額でもよくあんなに樂しめたものだと思ふ。尤も當時は貨幣價值も高く縣廳から一日九錢乃至拾貳錢の補助はあつたが、三十年秋の旅行は生徒の納付金貳圓六拾錢で日出、中津、口の林、日田、吉井、久留米、熊本(二泊)、陣内、宮地、竹田の十一泊それに久留米熊本間の汽車賃も含まれて居るのだから驚く。

日清戦争後一般生徒の氣風が大に緊張して來た事は前にも述べたが廿八九年頃から、神身の鍛鍊と云ふ事が流行して來た。二十八年九月中旬に於ける四年生三年生の寄宿生有志二十餘名の「氣性試」も亦其發露の一つで、之は偶然の事から大量受罰と云ふ大問題に發展したがやつた事は純無垢の試練に

過ぎぬので罰した學校(少くとも校長は)も罰せられた吾々も左程反省に値する感を持たなかつた。九月十八日(?)晝間に(一)監獄の墓 (二)豊海寺の仁王堂 (三)祇園山神社境内(四)運動場の東柵外の共同墓地の四ヶ所に書附を置き消燈後器械體操場の柵の上を本陣にして有志集まり配付者(柴田基二君)から其位置を聞き志望によつて取りに行く仕組みで、此夜は曇天でポツリ／＼雨の降る詭へ向きの天候で出發時間は十二時(丑みつ前)と定めた(二)から(四)迄には二三人宛志望者があつたが(一)には志望するものなく私は餘程尙一回行こうかと思つたが、其少し前に擬戦の時墓地突進中棺桶に片足踏込んだ經驗があるので行けなかつた。そこで柴田君自身で行く事になり其歸途青天井で火葬して居た脊骨二片を持ち歸つたのを柵の上に置いたまゝ就寝した後大雨となり燐火を發したりとの噂が翌日から喧傳され、遂に大阪朝日新聞紙が攻撃的に報導した爲め縣廳より學校に處分方を嚴達されたので、九月廿六日附にて停學二名特待生剝奪四名三週間の謹慎を命ぜられしもの約二十名と云ふ大量受罰が實現した。處罰の理由は「寄宿舎規定を犯したるを以て」であつた門限時後外出したのと就寝時後構内なりたりとも外に出て居たと云ふ事らしい。吾々謹慎組は何でもなかつたが、停學と特待生を剝奪された連中は甚だしく迷惑した。併し何人も氣持は憂鬱ではなかつた様な事を記憶して居る。是と信じてやつた事

には罰せられても悔みもせず疚しくもなかつた感である。

## 感想 一一三

十期 日銀理事 司城元義

大分中學校創立五十周年の盛典を挙げらるゝに際し、遙に深厚なる祝意を表します。在學中の想出話を試れば色々の事もあるのであるが、我々のクラス及其の前後の事は同級の藤本忍一郎君が最も善く記憶せられて居り且興趣豊かに語らるゝ術に長じて居られるから、同君より今回詳細の寄稿があることと思ひ又之れを楽しみに待つて居る。依て其等のことは省略して二三の感想めいたことを述べて置くこととする。

自分は明治二十九年に中津分校三ヶ年の課程を了りて本校に入り後滿二ヶ年間此處で學んだ者の一人であり、矢張り其の一人たる野依辰治君(現今三井生命保險の重役)と在學中一つ宿に居り常に行動を共にして居つた。轉來當時の事を率直に言つて見れば中津分校生の學力は大體平均して居り又何れの課目が特に飛抜けて得意と云ふ程のこともなかつた。然るに本校生の方は人に依つて相當學力の差違があり又中根貞彦君(現今三和銀行頭取)の如く何事にも優越した者もあつたが

それは寧ろ例外で多くの者は學課により得意不得意の差が著しく其の得意とする課目(數學よりは寧ろ文學的方面)又は學課外の餘技に於て目立つて圖抜けて居た者があつた。今その一二の例を擧げて見れば、同級の柳井幸弘君の大友氏に關する史實の調査研究の如きも相當のもので郷土史研究の未だ十分ならざりし當時に於ては特に偉とすべきものであつた、尙一年下の丸山布峰君の文才、殊に紀行文に於て(の如きもそれであつて當時の流行雜誌「文庫」にも度々寄稿し其名前は廣く知られて居つた。

その他大分中學校では柔劍道や、游泳や、器械體操等でも拔群の優者が居つた。即ちそれは本校當時の教育方針が大體放任主義でこそせよした試験等の事も無く天才教育と申してもよい遣り方であつた、めであると思ふ。其の可否に就ては當時でも議論のあつた事と思ふが、其後大中の卒業生を見れば政治家と云ひ、實業家と云ひ、又美術家と云ひ、其他種々の方面にも夫々相當の人物を出して他の注目を引いて居るのは、其の結果だと思ふ尙其原因の一とも見るべきは大中の所在地が當時町の人家からズット隔たつて居り世俗の塵を浴びることが至つて少なく、其の境地は大友氏の舊據に接して視野廣闊土地柄と云ひ歴史的因縁と云ひ人間を大きく養つてゆくに適して居つたと思ふ、校歌にもある通り大友時代の盛時を追想し、何事も他縣人に負けてはならぬと互に激勵し合つ

て居つた。

それに卒業後に於ける入學試験の心配も今日のやうなことはなく、さき／＼の就職難の事などは夢にも想はなかつたこととであるし、當時又世間に今日の意味で謂ふ所の思想問題で累せられること無かつたことであるし、右の境地に於て何等の屈託もなく得意の方向にス／＼伸びゆく力を其儘に育て上げられたのである。而して各學級には夫々相當の中心人物があり殊に我々の學級では中根君の如き思慮周到な指導者があつて右のやうな放任教育の中に於ても自治的に善くやつてゆき、一般に素朴であつたがこれと云ふ程の亂暴者はなかつた。

武田校長の從容迫らざる風采も今になつかしい。校長より自著の教科書で化學を教はつたが、それは至つて要領を得たものであつた。印牧順作先生の英語の教授は其發音も譯し方も巧者であつて、自分としては初めて英文に興味を感じるやうになり、自分の受けた中學教育中中津分校での福泉雅一先生の信念を打込んだ倫理の講義、阿部半三郎先生の透徹した數學、殊に幾何問題の解説と共にそれは後々まで深い印象を留めた事であつた。其他下瀬士官の體操教練殊に其の兵式訓練は嚴肅其のものであつたが、それも今はなつかしい思出である。自分は山田小太郎先生より授業を受けたことは無かつたが、同先生の徳化は校内全體に及んで居り大中の校風を造

られた大なる力の一つであつた。

それより春風秋雨三十有餘年の歲月が流れた。世の中の變化によつて中學も元のまゝで濟まして居ることは出来まいが、創立後半世紀を経た今日に於て過ぎ去つた跡を顧み、傳統の尊ぶべき點はシツカリ之れを把持してゆくことを念とし。その上時運の進行に伴れて取捨鹽梅宜きを期することが肝要であると思ふ。生涯中最も愉快な中學時代の思出……それは今日の中學生では味ひ得ない愉快な時代の思出……を爲すと共に希望の一端を陳べて置く。

## 忘れ得ぬ「うごん」の味

十期 九軌専務 村上巧兒

明治二十六年から三十年頃まで中津町に大分中學校の分校があり、そこで三年級を修了して大分の本校に轉向することになつてゐた、私共は即ちその第二回の轉向組で、仲間は野依辰治(三井生命専務)、司城元義(日本銀行理事)、半田貢(伊勢電鐵常務)、倉知四郎(上海紡績常務)、小野喜作(東京在住辯護士)、阿部貞章(同上)、植山八郎(死亡)の諸君であつた、今でこそ何れも相當の分別面をしてゐるが、その頃は紅顏の

美少年、草鞋脚絆に身を堅め、母親の涙に送られつゝ、中津から大分まで二十里の道をテク／＼徒歩したものである。人力車で通せば一日を費して賃金壹圓、途中立石に一泊すれば宿料十五錢だつたと覺えてゐる。二人三人同伴してゐても曉や夕暮など立石日出間の淋しい山道は随分心細い思をしたのであつた。

大分本校四年生に編入された時、氣の引けたような記憶は更にはない。在學時代は短か、つたに拘らず感銘は却つて深い。今も當時の友人に會ふと話は必ず同窓の奇談や先生の追懐、扱ては上野臺の風景のことなど、一物一草懐かしい思出の種ばかりである、中にも十分間の休憩時間に校庭の塙を乗り越えて裏山の「うどん屋」に集まり、一杯一錢の珍味に舌鼓を打つた甘さは今も忘れ得ぬ、校門前の駄菓子屋に「銀棒」と稱する犬糞のような珍菓を喜んで嚙つた記憶も新しい。人事の追憶は更に多いが不名譽なことがばかりだから書くのは見合せる。

たゞ不名譽も極めて愉快な不名譽で、他人には面白くないことも私等同人間には實に年を忘れ、地位を忘れ得る程の尊い話柄である。恐らく死ぬまで重寶する「若返りの妙薬」はこれであらう。

中學を出てより三十有餘年、東西に流寓して知人は何千を以て數へられるが、扱心の底を打あけて交る友は不思議にも

大分中學時代の同窓が大部分である。今も東京に十日會と稱する同窓の會があり、中根貞彦(三和銀行頭取)、竹岡陽一(東邦電力常務)、阿部養夫(東京鐵道省病院外科部長、醫博)、野依辰治、司城元義(前出)、後藤文夫(内相)、藤本忍一郎(九軌囑托)、藤波正(日本赤十字病院長、軍醫總監)、朝倉每人(富士電力常務)、宇佐美力(三井信託部長)、一宮房治郎(前代議士)の諸君と毎年三回遠近を問はず萬障を繰合せて會

合するが、一杯飲むと大臣も中將も重役も浪人も忽ち一律平等の腕白小僧に立戻り、心の底から打とけて快談放語に夜を更かす例となつてゐる。それも話題は一切時事問題抜きで、中學時代の元氣潑刺たる追憶が必ず中心となるから愉快である。會合も多いがこれほど眞に愉快な會合は全く比類がない。自分が死んだら眞實追悼の涙を流して呉る、友人は此仲間だと信じてゐる。死ぬといへば同窓六十二人の中既に鬼籍に入つたものが二十二二人、學校創立七十五年の祝典には恐らく一人も參列するものはあるまいと思へば聊か心細い、フォルモン注射でも一度青線三條の帽子を冠り、裏山の「うどん」を腹一杯食べて見たいものである。

## 三十五年の昔

十二期 日本光學工業 堀 豊太郎

思へばモ一三十五年の昔であるが、其折から日誌をつけてゐる爲に時折夫れを讀んで見ると、丸で其時其儘に當時を目の當り見る感がある。私が上野の五年の内今でも頭にピンと來るものは何と云つても明治三十一年の校長排斥運動即ストライキである。其時私は五年生であつたが七月九日に大分港の游泳から歸途、四年生から新川の中洲の松原に集つてくれとの交渉があつて、ソコで暗い松の下で話を聞いたのが初であつたのである。武田校長が不都合だと云ひ聞かされて、そんなものかなと強いて思はされたのであつた。其時もそうであつたが今考へてもそうであるが、全體武田校長のドコが悪いのか私には判らない。寧ろあんな教育家は今でも澤山はあつたものでないと思ふてゐる。當時は夫れを無理に悪いとさせられて仕舞つたのである。

人の話によれば四年の四五の者が校長がイヤになつて大體話をまとめて置いて五年の二三の者の賛同を得て事を起こしたらしい。イヤそうでもない或る先生が自分の地位か何か、から四年の生徒を煽動して、起こした芝居だとの事が、今の私

其の経験から押して考へれば其説は全く事實だと思ふ。實に考へてもケンカらん事だが、世間にはヨクある事だ。實業界でも政治界でも又學界でさへもザラにある事だ。迷惑受けたは我々生徒である。勿論父兄もエライ迷惑であつた。

スタートは右様な事だ其後十五日迄毎日毎晩百姓一揆の様な行動を取つて、十六日には一同打揃ふて學校横の寶戒寺の前で運動反對者裏切者の頭株をナグつて其餘勢で學校に押かけた處を警察の手で押へられ、其晩一晩雨天體操場に監禁、其翌朝我々の重立つた者は警察へ、我々罪狀輕き者共は夫れ／＼保證人に渡され、茲に官憲の手でストライキは一段落を告げたのである。夫れでも其夏中二度有志文會合して餘脈を繋いでゐたがモ一前の勢はなかつた。其内校長も更迭があつた。新に津田校長が九月に入つて來着。其廿四日から廿六日にかけて一同停學が解けてヤット二ヶ月半振りに餘計な事を考へずに済む學校生活に復活した譯である。

良い經驗をしたと思ふた者があるかも知らぬが、其時も今も全くせんでもよい經驗をしたものである。イヤさせられたものであると思ひもし又今も思ふ。ストライキの起源は前述の様な馬鹿げたものだが、當時校長の罪狀として廿餘ヶ條擧げられ公表された。私の日誌にあるが實に何れを見ても下らないもの許りで世間から考へれば理由として問題にならなかつたであらう。原因が生徒以外からであるとすると防ぎ様が



ない工場のストライキでもそうで職工以外に其元があるとか、問題がむづかしくなる。よく會社の役員中に事を起こす迄はなくても動機を造る者があるが、そんな時は大なストライキとなるものである。そんな場合は比較的職工の蒙る打撃が大いもので、ホントから云へば職工夫れ自身の迷惑此上ないものだ。其流を我々當時なめてゐたのである。對手は純眞な青年である、先輩は餘程考へておらはねば困る。

當時行動の首領株乃至重立つた者の姓名はハツキリしないが凡てコンナ行動のリーダーになる者は世間大抵きまつてゐる。餘程の正義感の盛んな人が、正義の念にとらはれて起つ場合は別であるが、大抵此種類の行動は正義だなんかあるものでなく、私の長い経験から云ふならば義戦だなんかソコにも、にもあるべき筈がないと断定して差支ない。大抵ストライキはこんな事が好きな者か又其素質を持つてゐる者が何かのチャンスで誤解の結果起つのが起りて夫れに雷同してつて行く者が一番馬鹿と云ふ事になつてゐる。其馬鹿と云はれる者の内の大多數は、コワ、ついで行くので附甲斐無しと云はんか又哀れな者共と云はんかの連中である。然し其當時私は其意氣地無しの人であつたのである。然らばストライキに反対した連中は皆迄附甲斐があつたのであるかと云へば夫れも疑問であつたらしい。兎に角僅々數氏の手で卒業前を扣へ馬鹿氣な時間を長く費したものである。其後私は社會

に出て大小數多のストライキにブツ付つたが幸に正義感と信仰のお蔭で昔の附甲斐無しではなかつた。今から思へば學校で少しそんな修養を與へて置いてもらへば、將來一も役に立たない馬鹿なストライキなんかせんでも済んだのではないかと思ふ。即ち只教へる許りでなく自分で自分を思ふ修養の間が學校に愆しいのである。東京に居て東京に絶えず耳にする學校騒ぎを實にニガしく思ふ。皆我々の同じ途を採つてゐるのであると思ひつゝ。

## 思ひ出す事ども

十一期 宇佐美 健吉

私が入學したのは上野に新校舎が出来始めての年でありました。樺の香の高い豪奢な階段など氣持のよいものでした。當時武田校長は非常に運動を奨励したので武道など仲々盛であつた。水泳教師を白杵から招いて水泳術を教へた。雨天の際など生徒を講堂に寝せて泳ぎの型などやらせた。後年山田小太郎先生が今の内相後藤文夫氏などと一緒に別府灣横斷の壯學を行つたなどこの校長の水泳奨励が素因をなして居ることと思ふ。

角力もよく取つた。藤本忍一郎氏など今の様な瘦骨ではなくて精悍なものでつた。ジョイ(忍一)さんの赤裸とても有名であつた。

其頃寄宿舎東側の運動場で野球もやつた。大體野蠻な野球で素手素足生爪を剥がぬ日はなかつた。前記藤本氏や中根貞彦氏と自分と三人で帝大の高橋慶太郎氏の著書を買つてルー等研究したのです。それから美滿津邊りから道具も一揃は出来たのでした。夏休には高等學校に入つて居た中山秀之氏など歸つて来てコーチされた。一度舍生と通學生と試合をしたことがある。舍の方では茨木育人が投手、丈の高い村上武磨が一壘手に出た。自分はアンパイアを勤めて丈の低いとして近眼十二度の私がポールアンパイアをやつては椅子に飛び上つてベースアンパイアを兼ねるといふ圖は随分滑稽なものであつたでせう。通學生組の應援團長は溝邊洋六であつた。——野球中興の功勞者として藤本氏、中根氏、自分は認められてよい筈だ。

溝邊君は兵學校に行くといふので勉強して居つた。早世したのは誠に惜しい秀才であつた。當時の生徒は惡戯兒もあつたが勉強家も多かつた。英語の山田小太郎先生數學の境野昇次郎先生未だに忘れられぬ良い先生であつた。殊に多田寅松先生が國語を教へて居られては生徒間に大いに文學熱を鼓吹せられたのは否まれぬ事實である。

當時の生徒であつた中根貞彦氏が本業以外今日アララギ派の歌人として知名の士である。三和銀行頭取として大阪に來た時

我骨を何れの山に埋むべき浪速津に來てまづ思ふかな

の作を新聞で讀んだ。其他梅田三郎氏、成田忠良氏、柳井幸弘氏、中村護氏、丸山篤氏等が文科に向つたのはその薰化あるものと思ふ。そういふ譯で私達の仲間には文筆の士が多い。我等の間に回覽誌筑紫鴻があつて皆執筆した。中根氏が回覽誌に書いた校長排斥文か何かを寄宿舎で茶話會の席上柴田基次氏が武田校長の面前で讀んで問題になつて執筆者は停學といふことになつて中根氏は八百屋の二階に蟄居して居たといふ筆禍事件もあつた。孔といふ漢學の先生があつた鼻が低くて太かつた。某生洒落れて曰く「……鼻遂に孔しとは鼻無きに非ず鼻低きなり」又曰く「石川や鼻の眼鏡は落つるとも世に漢學の種は盡くまじ」これは漢文の石川總弘先生の鼻先に落して居られた眼鏡をいつたもの、この二の作者は大津作藏氏であつたらしい。私等一年生は石川先生から論語を授かつたのですが、この先生の答案には父母に對する言葉など敬語を失つたが最後零點だと先輩から言ひ聞かされて居た。

境野先生は女の様に優しい人だつたが擊劍が好きでよく僕等の稽古臺になつて下さつた。先年首藤正壽君が臺灣銀行理事をして居た事があつて豪銀の管理下にあつた鈴木商店の豊

年製油工場(静岡附近にある)を見に誘はれて日本銀行の調査役だった中根氏及丁度在京中の藤本氏等と共に静岡に行き、當時静岡縣知事だった伊東喜八郎氏等と共に静岡市鷹匠町に閑居せられて居た境野先生を訪問し、それから先生を晩餐に招待して一夕の閑談を共にした事があつた。

私は寄宿舎に居ましたが同舎した人々は今日迄特別の交友を續けて居る。なつかしい搖籃である。一度野原葬夫君の古國府の下宿へ同宿したが飯時になると蠅が飯の上にたかつて困りました。早々寄宿舎に歸つたこともある。

合では膽試しをよくやつた。或時柴田基次氏(法學士大正十二年横濱で震死)が寶戒寺の先の方から死人の骨を持つて歸つたのには膽を潰した。これは一寸問題になつたと思つてゐる。修學旅行に出掛けては布團蒸しが行はれた。有無を言はさず布團を冠せて寄つてたかつて殴るのです。同級生の誰か布團蒸しに逢つたと聞いては震ひ上つたものです。

旅行では玖珠の宿であつたか、待遇が悪いといふので大飯を喰つて宿屋の連中の目を白黒させたことがある。大食漢には遠藤淳、得能貞幹君があつた。この總指揮は太田信昌氏であつた。

私は十九の秋一高に入るため東京に轉學した。相前後して中根氏、藤波氏も上京せられた。中根氏は始め東京高商に入る筈だったが種々考へられて大學に進まれたのである。藤波

氏には祇園山散歩の折等常に法科に行く様勧めたけれど兄二人が法科だから自分は醫科に行くと言つて居られた。二氏とも寄宿舎以來今も續いて居る交友である。……

野原葬夫氏は在校中から化學が好きだつた。他日京都大學の應用化學の助教となり目下君の主筆してゐるカーリットの發明の素因は中學時代に養成せられた事と思ふ。

最後に故人柳井幸弘氏のことを書かう。君は鰻釣りの名人であつた。放課後一緒に古國府の渡し場の茶店の處に出掛けたものでした。無論同君の釣り上げるものは抜群のものである。柳井氏の鰻釣りは後年白杵中學校長になるまで續いて居た。そして川や泥水の中に浸つて遂にウィルス病で倒れる原因となつたのではなからうか。今でも痛惜に堪えない。柳井氏の大友史は在校中から新聞などに寄稿して光輝あるものでした。誰か遺稿を纏めて出版することは出来ないかしら。

### 四十年前在學當時の回顧片々

十二期 第二富士電力事務 朝 倉 毎 人

去る四月廿八日東京の同窓生それは四十年の昔、明治二十

八年大分中學入學の同期生八名舊師山田先生を繞りて一小會を催した。場所は築地河畔の九重と云ふ同國出身の名力士元豊國關の經營にかゝる旗亭である。久淵一逢「ヤー」、「オイ」「貴様」の連發直ちに昔にかへる腕白青年、而かも丸だしのお國辯に一層なつかしみを覺えた。山田先生の英語交りの話にも昔を思ひ出して一きは床かしさを感じたのである。集れる面々は伊東政喜將軍、伊東喜八郎君、渡邊全君、遠藤宗六君、村上季彦君、山崎喜久太君、それに筆者每人と當日珍らしくも新京から上京した日野篤三郎君(舊姓原篤三郎君)の八名恩師山田先生を圍みて話は上野丘上舊學窓の珍談や思出話等を宵の佳興つきず四十年一別以來相逢はざりし日野君の足跡談なども更に思を牽くものがある。

半白禿頭の老青年四十年の夢を辿りて懐想つくる所を知らず盃を傾け健康を祝して遂に歸るを忘るゝの盛況であつた、茲にその本稿にもつて來るの昔晰し思ひ出語りの節々をつゞりあはせて寄稿することにした。其序に當夜の状況を筆のすさびに紹介して見たい、御叱正を請ふ。

#### 舊友同窓會席上漫哦

清明春將逝	時靖國佳宵	會篤子上京	學友俱相邀
舊知九重櫻	橋畔殘花飄	市井燦紅綠	奈何善阿嬌
團舊師山老	追懷談更遙	豊山豊水美	髻髻自似漂
說來篤子蹤	漂逸米雲消	隱布山養氣	雄飛入滿朝

舉杯切祈康 傾畫百斤瓢 山翁迎喜壽 同友知命超  
交情如金石 凌雲志未銷 愛此別乾坤 更會太平論  
これから當夜の懷舊談を覺束ながら記して在學當時のなつかしき想出にふけりた。

私共の入學した明治廿八年と云へば日清戰爭當時のことであつた。縣下には只一つの大分中學があるのみ中津に三年級制の分校數があつたのみだから大分に集る者は縣下十二郡の中流以上の家庭に育ちた子弟が大部分であつた。二十八年は入學生二百餘名と云ふ數のレコードを造り巍然として上野丘上に聳える新裝の校舎には百花爛漫の趣を添へた。

寄宿舎生活。入學早々物珍らしく又度胸を抜かれたのが寄宿舎生活であつた。その堂々たる二階建三棟が校庭の西北端遙碧靈山に對して建てられ三百餘名を收容して居た。一棟を二部に分ち六部あり各部教室に分れ部、室に各長があつて自治的の制度である。勿論兩三名の舎監は居た。當時の部長や室長の權幕と云つたら新入舎生の自分達は縮み上るばかりであつた。當時の舎監に鶴清氣と云ふ畫の先生が居たが佐賀出身の方で當時ではハイカラな清新の氣に富み舎の改良に氣をつけた人であつた。竹田の出身後藤舎監の寛容濃厚なる態度は一同皆推服して居たことを想出す。

炊事は賄夫を雇ふ。舎生自炊制度である。舎生中から選ばれた炊事委員は當時の切れ者で頑固な青年に之を多く見出さ

れた亡くなられた河野喜一郎と云ふ好委員があつた。阿部資夫君や中根貞彦君なども名委員であつた。月末實費精算して賄料を徴収された約二圓内外と記憶して居る。御馳走は驚く勿れ米飯腹一杯一日一回は頭つきの魚がついたものだが「イナ」のマヅイには時々困らせられたものだ。

喇叭の合圖。寄宿舎の自習、食事、起床、就床、休憩等の時間の合圖は皆軍隊式のラツパであつた軍人上りの岩崎と云ふ名ラツパ手が居た。岩崎の交代相手に居た後藤と云ふ軍隊出の一青年が居た、之れも岩崎に劣らぬ吹手であつた、聞けば後藤君現在母校に勤務して居るそうだ、かゝる多年の勤務者には紀念式典と共に盛に表頌する價値があらう。

兎。狩。當時の一名物であつた全校生のそれは勿論のこと同級生、寄宿舎生の兎狩もなか／＼面白かつた。狩場は市の郊外、東は鶴崎の先き丹生、大在から松榮山にかけ北は判田松岡の邊より西は東植田石城川原、北は高崎山から柞原方面に亘る二三里の遠征である、嚴冬朔風の夜半に起きて未明の内に目的地に達する網を張り日の出と共に勢子は諸共に大聲を揚げて兎を狩り出す。網にかゝつた兎を押へ萬歳の開の聲は山河を壓する、其元氣さは今時の青年には想像がつかぬであらう。夕頃各方面より獲物を負ひて歸校互に功名話に同夜は語り明かすのである、翌日の食膳には兎飯の美味が供へらるゝのである。

非常點呼。寄宿生活中の一大鬼門であつた。全く不意打ちで夜半夢を破る非常點呼のラツパの音に驚き驟起して制服制帽をまとつて運動場に各部室弓張り提灯の下に整列するや直に舎監より人員點呼が嚴重に行はれる、點檢に次で一場の訓示が終るや疾風の如く號令直下行軍を開始し松榮山又は春日浦、碓山迄馳足行軍が續けられ汗ダク／＼の始末。途中落伍者にはやかましき訓戒が加へられる。未明に歸舎食堂に入りて食事を終へて一休みとなる。儘に當時の一難行であつたが一清涼劑である。

夕頃の運動。フットボール。夕飯後自修時間まで一時間餘りの休みの間には舎生一齊に運動場に出で、紅白兩軍に分れフットボールの蹴込仕合が始まる其勇猛さ加減足と手と頭と體とボールの様になつてワイショ／＼とセリアイ目的環内にボールを送り込みて勝負を決する獨特の烈しき競技である。江田島の棒倒しと今の蹴球とラグビーをつきませた様な運動である。當年の意氣の壯烈を想ひ出しては肉躍るの感に堪へない。

舎の茶話會。一月一回位舎生全部の茶話會が土曜の夜に開かれるの例であつた。會費は三錢から五錢位で餅と金棒煎餅の類で名演説や詩吟劍舞などが盛であつた。梅田三郎君の新體詩、故人柳井幸弘君の漢文の獨誦などは振つて居た、故柴田基次君、中根貞彦君の演説などは今も耳に残つて居る、今で

も思ひ出すが筆者より一年後輩の一宮房治郎君が新入舎生の自己紹介に立つた時、同君は本當に山出しの朴柄の少年で祿々自己紹介も出来なかつた様な始末であつたが、今では堂々たる雄辯政治家になつて居るもおもしろい。

游泳。六月末頃から七月末暑中休みまで大分港、新川沖に游泳が開始する正午放課後から列をつくつて上野より繰り出す途中黄塵の裡日に照らされて汗ダク／＼の苦しさは今も忘れぬ。海に勢一杯の泳を爲し午後三時頃に散會する。山田先生、武田校長が常に率先して導かれたことは感謝せざるを得ない。大分から別府までの遠泳も兩三度行ふた、後藤文夫君の如きは此の猛者の一人であつた。

カッター。僕等三年級の時カッターの古物を買入れて端艇部が出来てカタン港外で競争があつた。僕等の三年二ノ組が一番強チームたる榮譽を負つたことを覚えて居る。

三年二の組。此の時代が五少年の生活中最も愉快な一年間であつた當時の主任教師が山田先生である。度々土曜日の學課が済むと先生統率の下に組生徒四十餘名は嬉々として隊をなし春日浦の森に行くのである。其處で徒歩競走、旗採り競争が始まる。勝者には先生から鉛筆、ノートの賞品を給與される。運動がすむと林中青草の上に團坐して先生の講演があり、生徒の演説が實演される。筆者も此の機に於て多少の練習を爲すの便を有したことを感謝して居る。四十餘名の同級

生は能く一致し能く遊び能く勉めて全校内好評の組であつたそうだ。(後年山田先生から聞いた)これは主任教師の感化によること勿論であるが、組長伊東政喜君(砲兵監)の精勵徳望にもよる所が多い、此級生の一失敗談として今尚ほ赤面することは講堂内にて晝寝をして居たことが他の組の教師に發見せられて教員會議内の問題となり。數名譴責罰に處せられたことがある。筆者も其一人であつたことを自白する。

## 在校當時の回顧

十二期 陸軍中將 伊東政喜

今回母校大分中學校の創立五十周年紀念式典を舉行せらるゝに當り、私は遙に謹みて私の思出最も深き母校の隆昌を大に祝すると共に此の機會に於て多年生徒教養の爲に盡瘁せられたる諸先生に對し深甚なる敬意を表し、特に諸先生中既に物故せられたる方々の在天の英靈に對し嚴肅にして、且深厚なる弔意を表し奉るものであります。

回顧致しますれば私が大分中學校に入校致しましたのは明治二十八年四月の遠い昔であります。當時入校致しました同級生は二百三名で身長順に四組に區分せられ。元來身長の大

からざる私は三の組に編入せられました。當時の校長は人格識見共に高く氣宇豪壯高邁なる武田安之助先生で、又私共の級の監督の先生は今年喜壽の高齡を迎へられ今尙元氣であります。山田小太郎先生であります。

當時大分縣には大分中學校の外には中津に中學校分校がありました。大分中學校には縣下の各郡より生徒が集つて参りました。又交通の關係上愛媛縣からも年々若干の入校生がありました。其頃鐵道は小倉から中津附近まで漸く通じて居つた許りでありましたから、交通は極めて不便でありました。従つて生徒は大分町及其近郊の方々の外は皆寄宿舎に入るか、或は大分町の下宿から通つたものであります。何しろ今日の如く澤山の學校のなかつた昔の事でありましたから中學生は皆相當の自尊心を持つて弊衣破帽大分町か春日浦あたりを横行濶歩して氣宇天を呑むの概があつたものであります。

私共の山田先生は大變生徒を可愛がりました。毎月か隔月に必ず春日浦に運動會を催し、優勝者には自ら賞品を出して運動を奨励せられました。其頃は物價も安く會費五錢で櫻餅頭腹一杯食つて運動會後芝生に圓陣を作つて劍舞をやつたり詩吟をしたり、或は演説會の眞似事など致し頗る元氣に無邪氣に而して愉快に暮らしたものであります。又夏は大分港附近で海水浴を爲し、秋は遠く海部郡邊へ兎狩に行つて獲物は寄

宿舎で料理して味つたものであります。

「スポーツ」としては今日程ではないが野球もありました。又劍術と柔道とは頗る盛んでありまして、昨年逝去せられた田村守衛氏は劍術の達人であつたと思ふ。文藝部も相當盛大でありまして、其頃碩田交友會雜誌と稱する同窓會雜誌が発行せられ文筆に秀でたる先輩の名文を載せて賑かなものでありましたが、此の雜誌は廢刊となりましたかどうか、我々の如く遠く故郷を離れたるものには母校の状態を知るの機關も失ひ寂寞を感じて居つたのであります。此度同窓會の設立により再び同窓會の雜誌が発行せらるゝ事は誠に喜ばしい事でありました。

私は樂しかりし中學生生活三年の後、明治三十一年九月に東京に在りました陸軍中央幼年學校に入校致すため、其年の七月に退校致しまして慈愛深き諸先生や兄弟の如く親しかりし級友諸君と別れ東京に遊學致しました。爾後四十年の久しきになりませんが懐しき故郷の山川、思出の深き大分中學生生活は片時も忘れた事もなく今尙眼前に彷彿として居ります。

私は私共の級友が社會の各方面に出で活動せられて居ります事を深く喜びますと共に、今や漸次人生の老年期に入らんとして年々級友の物故せらるゝ方々のあることを非常に悲しみ、且心寂びしく思ふて居ります。私は常に心に思ひながらも音信を忘れる先輩級友諸君に對し、此の機會に此の紙上を

借りて其健康を祝福するものであります。

私共は在京濱大分中級友會を設け毎年春秋二回山田先生を迎へて會合を催し、大分中學生在學當時の思出を語り合ふて、互に慰め互に勵まし合ふて居りますが、在學當時の紅顏の美少年も今や皆相當の年齢に達して鬢髮霜を置くに至りまして轉た感慨に堪へぬものがあります。

今や我母校は五十周年を迎へ、數千の卒業生を送り出して、國家社會各方面に活動寄與せらるゝ幾多の人材を輩出せられ、目下の在校生千數百名の多數に上るの隆昌にあり、之と共に我大分縣の文化も大に發達し、鐵道は四通八達し、産業又大に發展しつゝありまして、誠に祝福に堪へず、更に我帝國日本は維新以來世界驚異の一大興隆を遂げ今や更に第二の一大飛躍を爲さんとしつゝあります。私は私の在學當時を回顧して四十有餘年の間に於ける大中、大分縣、而して我日本の進歩と發展とを思ふ時に更に感慨の轉た深きものがあります。

私は我皇國日本の第一次發展の初期に創立せられたる我大分中學校が、帝國の興隆に寄與しつゝ、學校亦一大發展を遂げたる過去と現在とを顧みて第二次の帝國發展期たる現在及將來に更に國家に寄與すべき幾多の人材を輩出し、來るべき百周年記念日には我日本帝國の更に偉大なる興隆と發展とを遂げ而して我母校並大分縣の愈々隆昌ならんことを祈つて止ま

ぬものであります。

## 中學時代に於ける印象

十二期 農林省技師 農學博士 渡邊 全

私は明治二十八年より三十三年に至る間上野ヶ丘の學窓に育てられたのであるが、學校時代に於ける色々の出來事は數限りなく到底限られた紙面に述べ盡されないのである。他の人々にとつて必ずしも興味のあるものでも無いから、茲には中學時代に於ける最も深い印象に就て書きたいと思ふ。

中學卒業後今日に至る迄何日までも残つて居る深い印象は諸先生に對する感謝の念である。就中山田小太郎先生に對する印象は最も深い。小學、中學、高等學校、大學等の階段を経て更に社會人となつた今日に於て過去を振り返る時に最も印象の残つて居るのは中學時代である。各時代を通じ幾十人の諸先生に訓育せられてゐるが、恩師に對する印象も中學時代の夫は他と格段の相異がある。私の今日あるのは山田先生初め諸先生の薫陶の賜である。心から感謝してゐる。

中學時代の舊友も亦各時代を通じ同窓舊友の内でも最も懐しいものである。恩師を繞りて同窓舊友の會談するのは誠に樂

しいものであつて、先生も私共も等しく中學時代に還つて故山の語り草に樂しき一夜を過すのである。

目下私共第十二回生の同窓生で東京を中心として近縣に在住するものは朝倉每人、伊東喜八郎、伊東政喜、上木竹太、遠藤宗六、奥田武二郎、笠置正、三股庫喜、村上季彦、山崎喜久太、山村嵯摩太の諸君であるが、毎年山田先生の來臨を仰ぎ先生を中心として舊友會を開催し往時を追懐して時の移るのを知らぬ有様である。昨年も神戸の内田茂君が上京した機會に本春も駐滿日本全權大使館の日野篤三郎君が久し振に上京したのを好機として臨時に舊友會を催した。

上野の學窓を出で、より春風秋雨將に四十年に垂んとするが走馬燈の様に當時の事どもが追想せらるゝ。同時に過ぎし日の私共と同様に元氣潑刺な制服姿の學生諸君が目にあたりに描き出される。諸君はやがて螢雪の功を積み夫々の徑路を経て社會に出られることと思ふが、必ずや過去を顧みて私共と同様な感銘を懐くであらう。

### 在學の當時を偲びつゝ

十二期 高田町長 縣會議員 伊藤謙作

過去を思ひ起す度に必ず且つ強く思ひ出さるゝは上野ヶ丘

に於ける五ヶ年の中學校生徒としての生活であります。

私の入學したのは日清戦争が終つた翌年の明治二十九年の四月でありますから在學中は所謂戰勝後氣分の横溢した時であつた筈であります。何分まだ子供であつた爲めかそれらの社會的情勢が私の生徒生活に影響したり又刺戟として残つておらない位に平凡な生徒生活を送つたのであります。それ丈け今でもその當時の事が懐しく思ひ出さるゝのかもわかりません。

澤山の先生に教へられた事は勿論であります。今日に至る迄も内容的に關係を持たれて忘れられないのは美術の境野先生であります。あのスナガイ相當に歳も行かれた様な御様子でコムツカシイ美術を受持たれて而かも優しく生徒に當られたのが何だか親の様な氣持がせられまして美術の時間が大層楽しく又好きになつて來ました。五年を卒業する迄數學が割合面白味をそゝつて呉れる様になりましたのは此等の關係かと思ひ出されます。

名は忘れてすみませんが、境野先生の後に代數を教へて下さつた先生(或は植村といふ先生だつたかと思ひます)も亦深い印象を今に残して下さつたお一人であります。何でも酒がお好きで朝教壇に立たれた時には既に酒をお召になつておられて、しかも長い代數の解式をスラ／＼黒板一杯にやつてのけられる手ギワのよいのには感心されたものです。

英語の山田小太郎先生の事は云はずもがなでハツキリ今にも一々話し得る丈けの特種の印銘を私等に與へられた方でありませぬ。

京大の文科を出られたと云ふ文學士の某先生が、文學士といふイカメンシイ稱號で青年生徒の好奇的となつた點もありましたが、私には夫れよりも和服を召された(和服のみといふてよい位洋服を着用されなかつたと思ふ)時の襦袢の袖模様の女めいたのが妙な感じを與へました。その先生とナマメカシイ襦袢とはどうしても離れられぬ記憶であります。其の當時どうして今少し男らしいものを召されぬのか文學をやるに對し甚だ好感を持たなかつたのであります。

私は四ヶ年間寄宿舎生活をしたので此の間の事件で他の生徒よりも特に話したい事があります。それは其の當時の本校舎と寄宿舎三棟の中最も本校舎に近い一棟との間をつなぐ廊下の少し西に離れて生徒の控室の建物がありました。此の建物の側に生徒用の便所と掲示場とがありました。此の便所は寄宿舎にも近いので便利でありますから、寄宿生はよく使つたものであります。夜就床ラツパが鳴つて寝静まつた以後廊下傳へに此の便所に行くときよく便所の入口附近にて狐に出くはしビツクリしたものであります。現在の上野ヶ丘の發展振りと考へ合せたら今昔の感が此の一事にても一通りでないも

のと思はれます。

學生と運動とは何時の時代でも離れられぬものであるがしかし時代により運動の種類には大變な差異があるものであります。私共の時は相當に運動も盛んでありましてよくやつたものであります。その状況を大要申します

機械體操 大層はやつたもので機械體操をやり得る事が一種の誇りになつたものであります。寄宿生には殊に之をやる人が多く放課後から夕食時迄は機械體操場は人だかり場となり鐵棒にアラ下るもの、木馬を飛び越すもの、柵上りをなすもの、互に技を競ひ合つたのであります。

フットボール 寄宿舎の東にあつた運動場に所狭い程多數の人が出場し、紅白の二組にわかれ蹴込みの猛競争をやつたもので、押し合ひせり合ふ勢は大層勇ましかつたのであります。しかも寄宿生は殆んど毎夕やつたといふてよい程度々やりました。

テニス やつとはやり始めた位の時でありました。何でも東京高師を卒業赴任せられた本縣出身の吉原健吾先生が大中に輸入したと思ひます。前申しました生徒控室の側にあつた掲示場にコートの圖形や競技の規則等を掲出し、その頃買入れたテニス器具を寄宿舎の南機械體操場の北の場所に持ち出し、コートを設け規則書と首引きて稽古しました。その當時用語で今に忘れぬのは「アドメンテージ」云々といふことであります。球を打つ打法も今日のとは大に異なるシナを作つたのであります。

バスボール ティームを組織し猛練習もやれば試合もした殊に他

校との試合も盛んでありました。丁度競技場の側にあつた銃器倉庫の壁にボールを投げつけて一人でボール投げの稽古をするのが便利の爲め此の倉庫の南側の壁にはボールの被害があつたもので

**水泳** 暑中休暇前になると上野ヶ丘から暑い日の下を新川又は函宮に行くのですが歸りにはクニヤリとなつて弱つたものです。それにも拘はらず水泳は盛んに行はれました。臼杵地方の出身者が游泳にかけては特技を持つておつたのを今も思ひ出します。

**登山** 生徒の自發的計畫として登山も行はれました。主とし由布山に登る位ではありましたが、土曜の午後から日曜にかけての登山組は始終出發せられ登山實行をしておりました。近年になりまして日本アルプス登山熱の勃興を聞くにつけ三十餘年前の大中生の山を制するの澁淵たる意氣には何とも云へない快味を覚えます。大分地方の學生の登山熱はその當時の方が盛んで山を禮讃する精神的内容は充實しておつたのではないかと思ふのです。

**兎狩** 夜明け前の星影を踏み大分大野の川風にさらされ大分を中心とする數里の山村に入り込み、狩場を見立て網番セコと分れてホイイ〜と終日山野を駆けめぐり兎狩に夢中になり獲つては勇み獲られずには力を落しつゝやつたその光景は今も目の前にちらつきます。

**戦争ゴッコ** 此は主として寄宿生がやつたものですが、生徒を兩軍にわけ上は大將參謀より下は兵卒に至る迄カードに示し、各々作戦圖策よく敵の虚をつき互に雌雄を決する爲め、上野ヶ丘一帯を戦場として戦さ遊びをしたものです。

生徒の最も楽しみとし好みてやつたものは饅頭食であります。饅頭食ひの爲めには何々會が色々の理由と機會とによつて開催せられました。「堀川饅頭」「櫻木饅頭」「白銀饅頭」等が生徒のねらひ處でありました。しかるに卒業前となると生徒間に「牛肉食」が始まりました。此れは時世の然らしめたものか、又は上級生になつたが爲めかその邊は今はずきりしません。しかし「饅頭」から「牛肉」への轉換は最も明瞭な事實でありました。

高山樗牛の「瀧口入道」が發刊せられた時でありました。文學趣味の生徒(主として三年生以上だつたと思ふ)はよく之を暗記し、生徒會何々會の際は朗詠的に節つけをなし盛んに讀み上げたものです。丁度近頃の生徒が音頭とかハヤリ唄とかを歌ふ様に之を用ひたのです。落合直文氏の「孝女白菊」も亦同様に取扱はれ大に流行したものです。

卒業しまして既に三十有餘年になりながら、在學の時が昨日や今日位に感ぜられます。しかし同時に入學した二百餘名(私の入學の時急に一年生入學數を増加したのであります)の同級生の行末や自分の經て來た様々の過去を一々思ひ浮べますと在學當時が中々に遠い昔の様に痛感せらるゝのであります。

母校は今年で創立五十周年に當り此の六月一日その記念式を舉行せられました。久しく御無沙汰をしております私は是

非参列させて貰ひたい考でありましたが、丁度五月末より上京するの止むなき事になりましたため、遂に式にも参列が出来ませず遺憾に存じております。又相済まざる事に感じております。よつて在學當時の所感を述べまして母校のお祝を賀する一端と致したいのであります。

### 一二三の思ひ出

十三期 ラサ工業會社社長 小野 義夫

私の父親は鶴崎の吉岡家の出で代々の醫者であつた。小野家に養子に来て大阪の高橋正純先生の門に學び醫者としては相當の修業と經驗とを持つて居たのであつたが、家政は頗る拙かつたと見えて貧乏で暮した。従て私は學費に困つた。大部分は祖父爲三郎に仕送つて貰つたのだが他人様から借りた恩借もあつた譯である。私は子供の時は几帳面に物事を整理したと見えて、小學校から大學卒業までの學資金の帳面があるから思出の種に左に摘録して見よう。

第一、小學校時代  
一金六拾九錢壹厘 明治二十五年十一月十二月分  
一金五圓六錢 同二十六年

一金五圓六拾七錢七厘 同二十七年

一金四圓壹錢七厘 同二十八年一、二、三月分

以上合計金拾五圓四拾四錢五厘也

庄内高等小學校創立第一回の卒業生で最初から二年生に編入せられ、修業年間四ヶ年を正味二ヶ年と五ヶ月で卒業した。譯で一ヶ月の學費は平均五拾參錢である。勿論自宅から通學した。帳面は月別に書いてある其中から或る月を抜録して見れば

二十八年一月分として左の通りに記載してある。

- 一金四拾五錢 大日本誌代 祖父より
- 一金六拾五錢 用器書道具 同上
- 一金拾八錢 近世算術 同上
- 一金八錢 植物學 高祖母より
- 一金參錢 日本魂 同上
- 一金八錢 日清戰爭記 同上
- 一金貳拾錢 授業料 祖父より
- 一金四錢貳厘 郵紙五十枚 同上
- 一金拾壹錢 筆五本代 同上
- 一金參錢 表紙三枚 同上
- 一金壹錢八厘 三角狀木 同上

計金貳圓七錢也  
卒業前と見へて大分色々なものを買つて居る。高祖母とあるは私を愛育して呉れて居たツイと云ふ老婆で九十三歳まで

長命して、私が中學五年で劍術の選手として京都武徳會へ出かけた留守に亡くなつた私の終生忘れ難い恩愛の人である。  
明治二十八年四月庄内高等小學校卒業後同二十九年五月大分中學に入學する迄の一ケ年間に金六圓六拾六錢五厘を費した、これで中學入學まで三ケ年七ヶ月の學費總合計金貳拾貳圓拾壹錢である。

第二、中學校時代

- 一金四拾九圓貳拾錢也 明治廿九年五月ヨリ翌年四月迄一年生
  - 一金七拾六圓也 同二年生
  - 一金九拾九圓拾四錢也 同三年生
  - 一金百參拾七圓四錢也 同四年生
  - 一金百九拾四圓五拾錢也 同五年生
- 合計金五百五拾五圓八拾八錢也

右の内一年生及二年生の時は大旨自炊したので白米一升金九錢の割で自宅から送られたものも右の計算中に加算してある三年四年は寄宿舎生活五年生の時は下宿した。

第三、早稻田時代

- 一金參百七拾參圓八拾錢也 明治三十四年四月ヨリ同五年九月ニ至ル一ケ年中等豫科時代
  - 一金參百六圓五錢也 大學一年生
  - 一金五百參拾參圓也 同二年生
  - 一金五百四拾五圓也 同三年生
- 合計金壹千七百五拾七圓八拾五錢也

りますが、後藤、一宮兩君の手紙が一番多い。今その一二通を紹介して當時の學生氣質を思ひ出させよう。

拜啓來熊前一書を奉りし以來殆ど三旬に近き日子を經申候冷氣蕭颯として金氣天に滿つ朝夕衣袖漸く冷かに相成り申候、大兄の御近狀如何に候や御伺申上候、降而小弟儀無事龍田山南の校舎に起臥罷在候乍他事御休心下され度候、小弟儀去る六日櫻蔭の地を脱して函海の水由布の峯に別れて長洲より火車迅くも筑紫の北岸を廻りて七日銀杏城下に入り申候、十日手皮提一つ提げて修學寮に入りて此處を今後少くとも一年間の宿所と定め候、十二日宣誓式あり授業は十三日より始まり中學校目に加ふる事獨逸語の二科にして減ずるところ博物學數學なり學科の豫習は比較的中學よりも樂に候、生來十有八年未曾て郷關を出でざる身の今や遙かに去りて三十里外南肥の地に寄寓す、志を立つれば其身を終始郷關に措く能はず何れの日か遂に出郷せざるべからず、出郷の二字その包含する處のもの無限無際にして成業の困難、得意の時代老いて故山に魚鳥を友とする時を想到せしむ、男子立志出郷關、業若不成死不歸、埋骨豈墳墓地耳、人間到處有青山の詩の如きは出郷進取の勇を表現したるもの何人も此概なきはなかるべし、然ども人情は常に前方をのみ見る事を許さず、故山と故人とを連れて幾多の疑問的感想は過去一切の事物を因果し胸中感慨無限一種説き難き悲愁の雰圍氣に集中し來る幾千條の鐵鎖は我頭と言はず足と云はず腰と云はず巻きつき身殆んど一步も移し難し(註曰彼氏が只一人の母を郷里に置いて他郷に遊學するを非常に悲んだのであ

一ケ年平均參百九拾圓程になる、これで貧乏書生とは自分ながら少々不審であるが。私の困つたのは最初の二年半で殊に高等豫科時代の一年半の學費參百七拾參圓八拾錢の内金壹百圓也を或る友人に貸與して返されなかつた爲めに、正味は貳百七拾參圓八拾錢也で一ケ月平均拾五圓程で暮さねばならなかつた。當時物價が安いにしても下宿料が拾圓位はして居た。これで月謝やら書物やら萬事をやつたので其の困難は今でも思ひ出す位である、大學の二年生からは私には富裕な後援者が附いて學費を十二分に貰つたから少々費ひ過ぎたと思つて居る。この後援者と云ふのは野州佐野町の豪商津久居家であつた。

私が學費中に特筆大書して長く子孫に傳へたいと考へて居る事は、今の内務大臣後藤文夫君が學生として熊本の第五高に在學中、私が東京で學費に困つたと云ふてやつた處、自分の學資金の中から毎月金參圓宛約一年有半の長期に亘りて送金して呉れた事である。私はまだ適當の機會がなくて彼氏にこの金を返金する事が出来ない。斯る貴重なる金銭は永遠に返金すべきものではあるまい。私は終生彼氏に拜借して居る積りで、私の子孫も亦彼氏の高德に感謝すべきだと考へて居ります。

一、友人の手紙。私は友人の手紙や名士の手紙を保存するのが好きであります。ですから中學時代の友人の手紙も澤山あ

る)然ども奮然として一片の志は此鐵鎖を切斷し去りて身は籠を出でたる早鷹の如く中空に向つて飄々乎として飛べり、山も川も人も我家も凡ての記念物は其影を没して今や遠く故郷を出でたるなり、高等學校に來りて以來二十四五日を經候へば大分事情も分かり候、且つ最も愉快に感ずるは競争力のある青年の多き事にて中學卒業の英才を一堂に集むると云ふも不可なき程に吾れ手の舞ひ足の躍るを禁ぜざるものあり候好個の敵手ござんなれ學問にもあれ品性にもあれ満身の元氣を奮つて一と勝負試みん哉と力む程の奴に出會さずとも限らずと樂しみに候、學科に於て多くの點を得ると其の學力を得るとは甚だ僅かな異なる所あり、吾人は此事に於て多く點數を得ん事を競はざるべく候、只品性に至りては渾身の力を奮つて競争者なくも理想の人物を敵手に競争せん心組に候、學識は以て能く事を謀るべし人を服するに至りては其價值殆んど無一文なり、品性の絶大な感動力殆ど凡ての人を電氣に觸れたるが如くに慄然として心から畏れ服せしむるものなり、學と識とは只大人物を飾る花のみ品性は大人物の骨子なり幹木強堅ならずんば花は到底其美を現出すること能はざるべし、(小弟が品性と云ふのは品格も性質も精力も其他あらゆる偉大な特性にして學識智力以外のものに候)之を古今の英雄傑士に見る其證據は瞭然たるものあるべし、アレキサンドルと云ひ、シーザート云ひナポレオンと云ひ、豊太閤と云ひ皆缺點の大なるものなきにあらずと雖も、其活動の基礎たるべき立脚地品性は實に偉大なるものありて存するなり、彼等が成功の内部的原因が茲に



存す事は彼等の傳記を透徹的に見るもの、首肯する處なるべし、  
 「品性」の修養は人間力青年時代に勉むべき最も重要なものなり人  
 多くは是等の偉人傑士の品性を以て其天稟のものなるが如くに  
 云ふ而して寧ろ彼等が之を全ふすべく造次顛沛も汝々として其修  
 養を怠らざる精力と勇氣とを天稟と云はば云ふべきを知らざるな  
 り、此精力と勇氣とは殆んど凡ての人間が天より賦與せられたる  
 筈のものなり徒らに英雄傑士は常人が如何に勉むるも及ぶべから  
 ざる底の人間以上のものとなすは愚の甚だしきもの、彼等は己れ  
 の天才を發揮すべき機會を得んして空しく一生を終らんとするも  
 のなり、然ども人或は言はん古來英雄豪傑の士少くして平々凡々  
 のもの比々皆然り故に彼等を天稟とせざるべからずと、安んぞ知  
 らん此間の消息を解するものにして始めて英雄傑士となり得たる  
 事を、即ち彼等の多くが自個の理想上に古偉人の面影を摸寫して  
 尊崇摸倣措かざりし所以の者亦以て之を解するに難からざるな  
 り、兎に角品性の修養は青年時代の大眼目にして其輕重を學識の  
 修養に比するに蓋し問題とするに足らざるなり、つまらぬ議論仕  
 りて徒らに足下をして時間を消費せしむること御氣の毒の至りに  
 候、到底愚論は愚論のみ足下に於て何の益もなからんつまらぬ事  
 を云ふ奴と御笑ひ下さるべく候、近來久しく談ずるに足る友を得  
 ず其溜りが大兄に呈する手紙に出ずる事心苦しく相濟まぬ至りに  
 候、最後に大兄の充分なる健康を保たれん事を祈り奉り候亂筆御  
 推讀願上候、頓首敬白。

小野義夫君机下 明治三十四年十月日

文 夫 拜

前畧小弟には天下只一人の妹を九歳を一期に死神の手に奪ひ去ら  
 れ候、小弟が悲痛哀哭失望落膽今架説せざるべし、實に小弟は天  
 下只一人の妹を失ひ候小弟は此事を兄に告ぐるさへ悲しみの至り  
 に堪えず候、小弟は吾が家に親子只二人と相成り候、小弟は試験  
 終了後に其報を得て早々歸途につき申候途次無量の感傷は交々湧  
 來り湧去り時に或は茫然自失母の落膽甚だしかるべきを心痛仕候  
 歸來母は意外に清く斷念され居候、死者遂に逐ふ可からず死せざ  
 るもの、健ならむ事をと小生に語られ候是れ生が悲みの中の喜び  
 に候、爾來母は甚だ健に候小生の出郷も快よく嗜し居候、一時小  
 生は入學試験結果の吉凶を問はず母の悲みを慰むべく一二年の  
 休學をなさんかと思ひしかど母の意如斯なれば且試験合格仕  
 り候程に苦しと雖も今初秋は一人の母を殘して熊本城下に遊ぶこ  
 とに可相成候、悲しみは悲しみに候へ共吾れ披山(彼氏の雅號)  
 は天下の大丈夫に候、悲みの爲めに元氣は沮喪仕らず候、妹の死  
 は小弟を驅りて益奮勵せしめ候吾が家に對し、吾が母に對し吾が  
 任は益々其重きを加へ候、兄の近書盛に氣を説く甚だ面白く感ぜ  
 られ候、孟子曰吾よく吾浩然の氣を養ふと、大學に曰く明德を明  
 かにすと浩然の氣畢竟何物ぞ、明德畢竟何物ぞ、兄の所謂氣なる  
 ものは之に外ならず候、威武も屈すべからず貧賤も移すべからず  
 天地の間に磅礴し乾坤の中に充塞するものは此の氣に候、此の氣  
 は萬物の皆具有する物に候、然らば即ち如何にして人に賢愚の差  
 ある乎、是只明德を明かにすると然らざるとに在り而して聖者と  
 言ひ英雄と云ひ愚者と云ひ凡夫と云ふ此の氣の明かなると然らざ  
 るとに依れり此の氣は天地洞池の初めより盡未來際に至る迄乾坤

と共に永久に存するものに候、而して此氣の純にして清なるものは發して孔丘が仁となり文天祥が正氣の歌となり、楠公の忠となり、南洲が膽となり、ワシントンが愛となり、リンコルンが斷となる、天下の英雄志士仁人の驚天動地の行爲皆此の氣の發動に外ならず、養ひ去り養來りて此の氣の純にして剛なるものを身に得ば乾坤茫茫限りを知らずと雖も之れ眼中一小砂粒、天下何事かならざらむ、世事も是茶飯の事悠悠たる哉天地、些々たるかな人間の事、ナホレオンが微笑を笑ひ、ピスマークが小策を嘲ける、茲に至つてか天下を経倫する力を提げて板上に魚を裂くよりも易し、凡既に此の氣を悟る悟るも養はざれば銳及も錯を生ずべく候氣を養ふことが第一に候、この頃は小弟も聊か悟る處あり此の氣を養ふて純の純なるものを得たしと存居り候多言仕り候、先は茲に擱筆仕るべく候時候柄土地柄御養生專一に候、頓首再拜。

三十四年八月九日  
南郷大兄机下

拔山（後藤の雅號）

## 中學時代の思出

### 十三期 一宮房治郎

僕等第十三回卒業生が入学した當時は、大分中學は縣下唯一の中學で、中津が三年制の分校として存在してゐたのみで

あつた隨つて北は日田郡の山奥から、南は南海部の日向境に至るまで、所謂縣下の俊童が集まつて、或は寄宿舎に、或は下宿屋に他日の大成を夢みて居つたものである。當時の學生氣質は今日より見れば、マダ素朴質實で、頗る蠻殼の氣分が横溢してゐたから、運動と言へば兎狩りとか、露營とか、同じ登山旅行でも無茶苦茶な頑張りズムであつた。今日の所謂文明式スポーツの盛なる時代から考ふると實に野蠻極はまる脱線式のものであつた。併し生徒の意氣は頗る盛んで享樂主義などは遠く彼方にスツ飛ばして、傲然天下を睥睨するの概があつた。

休道他郷辛苦多 同胞有友自相親  
柴扉曉出霜如雪 君汲三川流吾拾薪

此の淡窓の詩境が實に私共の中學時代であつたのである。私は寄宿舎に二ヶ年、下宿に三ヶ年、大分中學時代を暮らしたが、私が今日まで五十餘年の生涯中最も楽しい愉快な思出多き時代は、實に此の大分中學の五ヶ年に外ならぬ。

眼を閉ぢて當年を追想すると、色々な人物が來たり去つたり、色々な事件が現はれたり消えたりする。毎日放課後境野とか山田とか言ふ様な先生が引連れて生徒達に擊劍の稽古をつけてゐた容貌魁偉な大入道が、今に私の印象に残つてゐる。それが武田安之助校長だ。學期學年の大小試験は學校生徒に課せられ大必然の義務だと許り思つてゐた私は、大分中

學に入ると全く學期學年の試験といふものがないのに驚ろいた。それが武田校長の獨創であつた。試験は全廢されて、毎日豫習復習が試験そのものであつた。私共の如き怠け者には斯かる制度は餘り難有いものではなかつたと思ふが、遮莫當時の洵々たる試験制萬能の間に、斯かる獨創的教育方針を實行せられた武田校長は、實に優れた教育家であつたと謂ふに躊躇せぬ。而已ならず擊劍に水泳に、將又遠足に旅行に、彼氏は常に躬を以て職員を率ひ、學生を指導して居つた。その豪快颯爽たる風貌が今尚ほ私の印象に生きてゐる。私は新聞記者として又政治家とし、又時には官界にも入つて世の名士とか賢官とか、或は名將軍とか實業家とか、新聞やら雜誌等にチャホヤさるゝ人々を知つてゐるが、此等の人々は多くは時代の傍侍兒で、人物其者がそれ程尊嚴に値するかは疑問である。此等の人々にもまして武田校長の人格的印象は強く私を惹き着くる。然るに少年の無茶と言はふか、私共は三年生の時上級生の排斥運動に雷同して、此偉大なる校長を大分中學から追出したのである。豫言者古郷に容れられずとは、斯かる事を謂ふのであらうか。中等學校長たるも亦難いかな。

水泳、兎狩、遠足、旅行苟も生徒の心身鍛練に必要と思はるゝ運動には、眞先きに參加して、中學生其儘の生活を生徒と共にし、其間にストイツク哲學を語り、陽明學の修養を説き、渾身の力を中等教育に打込んだ忘れぬ先生に、山田小

太郎先生がある。私は游泳と旅行とが好きであつたから暑中休暇等に後藤文夫君等と共によく先生のお伴をして歩いた。十里の山川を跋涉して田舎の宿に草鞋の紐を解くと、酒嗜きな先生は、豆腐か漬物を肴にグビリ／＼と飲み始める。ブルタークの英雄談が始まる。二十四孝の様な孝養談が語らるゝ、物に觸れ事に應じて語り出さるゝ和漢洋の修養談は滾々として盡きぬ。而して其れが一種獨特な素朴で而も力強い口調で熱を帯んで若き私共の頭に烙印された者である。眞つ黒く鐵の如く日にやけた四角な顔に安物の近眼鏡を掛け、寒天にも羽織を着たことのない久留米耕の短衣弊袴、無帽無足袋の頑丈な先生の老書生姿は、私の一生涯忘れぬ思出の一つである。

その他後藤文夫、高江幸彦の兩君と誘ひつ誘はれつ二三ヶ年の久しき形影相弔ふが如く一緒に學校通ひをし一緒に遊んだことや、佐藤庄太郎君と下宿を同じくし、温厚老成な君を驚ろかしてやれと、茶目氣横溢せる井坂秀雄君と惡戯をしてかつかつたことや、小野義夫君が徹夜しての碁戦をおとなしく觀戰して夜を明かしたことや、同級生の制裁問題で最後まで後藤文夫君と頑張つて津田校長を手古摺らせたことや、四年の頃後藤文夫君等と共に其頃流行つた惡童振りを眞似て薩摩芋を荒らして來たら、後藤君の慈母に泣いて叱られ弱つたことや、當時の思出がそれからそれへと聯想されて綿々として

に分擔されてはゐたが矢張り同部の委員が總括して行かねばならなかつたので随分忙しかつた様に思ふ。愈々運動會のある一週間位前からは授業などは丸でそつち除けで夢中に成つて狂奔したものだ。

私は三年、四年、五年と三年間運動部の委員に選ばれたのであるが、確か四年生の時だと思ふ縣内修學旅行の際臼杵中學の陸上大運動會を參觀した時、掛員の重なる數人が赤と緑のモスリン製の派手な肩章を右肩から斜めに掛けてゐたのを見て非常に氣に入り吾々もあれに負けぬ様にやらうではないかと妙な處に力瘤を入れたものです。早速本町の横田帽子店に取り寄せさせて其年の運動會の當日彼の軍隊用の週番肩章を運動部委員が揃つてサラリと掛けて満場をアツと云はせて驚かせたのである。尙部長用として別に一つ用意して置いて差出したけれど時の部長江島文吾先生は極りが悪かつたのか掛けて下さらなかつた。あの肩章が何時頃まで使用されたか私が大正九年に母校の一職員として就任した時は蔭も形も見えなかつた様であつた。

最う二十年近き年月が経つてゐたから、吾々の上野ヶ丘時代の運動會の遺方等も今から考へると随分杜撰なものでプログラムと云つた處で單に運動種目の順序を記した位のものに過ぎなかつたので何の種目には誰が出るなどはてんで決つてゐなかつたし、又同一人が幾種類以上出てはいけない等の制

## 昔の運動會

十三期 堤 朝

(舊姓 足立)

世の進歩に伴ふて研究に研究を積んで秩序整然たる今日の競技に比べると野蠻時代とでも云はうか随分亂暴な遣方であつた事が分る。碩田校友會の組織は現在のそれとは少し違つてゐた、其當時は理事、會計、雜誌、講演、武術、運動と都合六つの部から成つてゐた。各部の委員數は一名乃至四名であつて全校生徒の投票に依つて決められ、大部分は五年生で四年生から選出された者もあつた。武術部は柔道と劍道を併せ運動部には競技は勿論野球も庭球も蹴球もボート迄も含まれてゐた。毎年催される陸上大運動會の仕事は大體各部委員

限もなく何遍でもやり度い放題であつた。一回の競技の参加人員の如きも至つて大雑駁で例へば障碍物競走なれば「第何回障碍物競走集れツ！」と掛員の號令に依つて集つた出場者を大體身長順に並ばせ番號を唱へさせて適宜に一番から十二番まで第一回、十三番から二十四番まで第二回といふ様に分けてやつたものである。元氣な連中は五回も七回も出て賞品を山の様に積んだものである。現在とは違つて随分嵩張つた支那カバンだの本箱だの机の様な特に目立つた物を賞品に出すのがお決りであつた。又各級選手の徒歩競走の如きも選出の仕方競走の方法も至つて幼稚な不合理なものであつた事に後に成つて氣づいた。其やり方は各學年から二人宛都合十人の選手が一樣に千二百米突走らされ、其中第一着の勝者を出した學年の勝利に歸したのであつた。其當時都會地には今のリレー競走の如き合理的な方法が行はれてゐたのか知らないが何等疑念を起す者も無かつたと見えて其儘で濟んで來たのは不思議な様にも思はれる。

私が大中のお世話になつたのは荷揚町から上野に移轉した間もない今から四十年前も前の頃であつて現在の本校舎は其頃の建築としては最新式の物で全國でも其類ひを見ないと云つた位大に誇りとしたものだ相です。あの本校舎の裏にそれに平行して三棟の寄宿舎が建てられてゐた（最近取除けられたとの事）其東側に辛うじて野球の内野線が引ける位の廣い場

所があつた。尤も南北の長さは其頃の野球場としては左程不充分と云ふ程でもなかつた、其處が即ち當時唯一の運動場であつた、其狭いグラウンドで野球もやれば蹴球もやり陸上運動會も行つた。先年母校在勤當時よくも斯んな所でそんな運動がやれたものだと言ふ事がつくづく、思はれた、尤も其頃は槍投だの砲丸投などはなかつた。

其頃は自分の町から上野への交通と來たら現在の生徒諸君等には想像もつかぬ程五月蠅かつた。馬車でも通れる道と云つたら東の方では東新町から戸次の方へ通ずる縣道と、西の方では裁判所の脇から松坂神社と學校との間を通つて古國府に抜ける道と二つあつた丈で肝腎な其中程には道と云ふ道がなく田や畑の狭い畦道より外にはなかつた。吾々生徒は毎日の仕事だから何も苦にはならず平氣で通ふたものだが、小供連れの婦人達が町から上野へ行く等は迎もヨダキガツタものです、男子連でも「上野迄やー」と云つて嫌がつた位でした、當時は無論外濠から上野の丘外れまでは人家は殆んど無かつた。そこで上野の様な便利の悪い處で運動會をやつても見に來て呉れる人が極めて少ない、それでは折角盛大な積りでやつても張合が無いと云ふので遠い蓬萊までも道具を態々運んで行つて春日神社前のある小高い丘のある一寸した廣場で催はした事もある。あそこも今行つて見ると矢張斯んな處で運動會が實際やれるにはやれたのかと可笑しい感じがして

# 上野風景



上 彌 榮 神 社

中 寶 戒 寺 山 門

下 松 坂 神 社





上 大友屋形西山城跡



下 百合若大臣の墓

ならぬ。

現在の運動場は吾々のクラス(十三期生)が卒業した頃に出  
来てそれが復た柴山校長時代に更に擴張されたものである。  
斯様な立派な運動場も今日の如きスポーツ全盛時代とも云ふ  
べき時勢に伴ふ自然の要求に外ならぬ。要するに吾々の時代  
には如何に勝れた技倆が有つても小にしてはほんの一校内に  
止まり大にしても縣外に一步も踏み出す機會は與へられな  
かつたが今日では一藝に秀でたる者は國內はおろか遠き世界の  
果までも其驥足を展ばし其令名を謳歌され得る仕合な難有い  
世の中と成つて來た事は何と云つても實に羨ましい次第であ  
る。

## 明治二十九年の頃

十四期 泉尾高女教諭 牧 牛尾

門。 同窓會報の表紙に見る寫眞のやうな莊重味のあるも  
のでなく簡素な少し大きい二本の柱、兩脇の袖柱も同様な木  
柱に過ぎない。觀音開きの戸など今と同じだが半分から下は  
板戸で上半分は縦柱が並んで居る透かしになつて目立たない  
ペンキで塗つてあつた。向つて右側の門柱に大分縣尋常中學

校の大きな看板が麗々しい楷書大文字で書かれたものが掲げ  
られて半町も前からハッキリ讀めたものだ。門の左手か右手  
に枝垂柳が植つて居たやうに思ふ。寫眞に見るやうな松など  
は全くなくガランとした殺風景なものでした。

門。 監。 向つて右側に門番の小舎があつて寄宿舎の生徒  
は外出や歸舎の際自分の名札を掲げるのか門監に備付のもの  
を裏返しするのが必ず立寄るのを見たものだ。この門監に  
始業終業の合圖をする喇叭手が二人控へて居つた。喇叭手は  
確か岩崎と云ふ男と後藤といふ男であつたと思ふ。この兩人  
は行軍の時はよく先頭を承つて進軍喇叭を吹奏した、中々威  
風堂々たる行軍であつた。この喇叭で授業の合圖をして居た  
のは何年頃までであつたか記憶がない。

玄。 關。 この體裁は今も三十九年前の昔も妙しも變り  
ない。玄關前の蘇鐵まで昔のまゝであるのは懐しい限りだ。  
この右か左に日清戦争の分捕品——大砲——が据え付けてあ  
つた。それは如何したのであるか見えないやうだ。將來記念  
館が出来るさうだがこの玄關こそは母校の永久に残すべき記  
念物であると思ふ。

生徒控所。 その頃正門を入つて右側は正門に添ふ校庭を  
限る芝の生えた土手があるばかりでガランとしたものだ、生  
徒控所は博物教室の西側に柱なしのバラック式の廣い一棟で  
あつた。東と西に窓があつたかと思ふが北側と南側に大戸の

ある出入口が設けてあるのみ。中に長方形の大きい机と長い腰掛が荷物の置けるだけ備付けてあるのみであつた。土間で大きな四角な木の火鉢が四隅にあつたと思ふ。現時から考へて面白いのは上級生などの盛に煙草を吸ふことであつた。それは多くはシガレットであるから恐入る今も記憶して居るがヒーロー、サンライズ、ピンヘッドなど云ふ名前は、その頃の人には頭に残つて居る筈だ。間には「火の用心」と書いた煙草入を腰にさけて居る豪傑も居た。腰にさげると云つてバンドかと思ふと西郷南洲から借りたやうな黒い木綿の兵子帯を締めて居るのだから、便利なものだ。そんな上級生が豪いやうに見えたのも時代だとおかしくなる。

生徒揭示場 控所から雨降り到校舎の方へ途中の長い屋根の土間廊下があつた、途中に校友會の揭示板と寄宿の方から来る廊下に揭示場があつた。教師が休むと黒塗りの小黒板に給仕か小使が「生徒一般」と見出しを付け次に「××助教諭心得 右本日病氣に付缺勤 最後に「何月何日」「本校」と云ふ署名した麗々しいものが出る。さあ繰上げ（先生が休まれると最後の時間を空にするやうに都合をつけて教員室に申出る級長は繰上げを級に報告する其日は一時間都合よければ二時間も早く歸れるのだ、まさか萬歳とも云はないが早く歸るのは嬉しいものであつた。

壹年參之組と境野先生 明治二十九年その四月入學許可

は不思議な位だ。(春順)

田川。加藤。脇圓藏。廣瀬。甲斐政雄。河野虎雄。阿部正巳。日下部春夫。佐伯。一宮房治郎。鈴木松郎。松原權三郎。佐藤義長。甲斐謙吉。武石茂樹。河村觀三。安藤昇。大島重雄。三浦賢。後藤文夫。吉良。河野榮。古長平。沼口。安東保。河野音治。有永義孝。丸山亮平。小野次郎。橋迫潔。溝部壽六。佐藤八太。藤村俊房。池邊稻生。三ヶ尻邦彦。田口環。牧牛尾。藤林茂。吉松辰男。矢重。有田島太郎。加賀直。宮崎收蔵。石和白。長野潔。矢野信一。堂島。加來惟義。長尾文雄。横山朝雄。

主任教師境野昇次郎先生〓とても組思ひで私は今日先生を追憶して全く先生は嚴父であり慈母であつたことがわかつて来て矢張り今日あるのは先生のお蔭であると感謝の念を捧げて居る。先生は毎日放課後あの雨天體操場で竹刀の打込を稽古して下さつて居た。春の高い先生が頭を右へ左へ打込む竹刀を駄目にさせて、ソリヤ來い。ソリヤ來い、とせき立てられるので泡を吹きくつ對つたものだ。先生は餘程近眼で居られたと見えて面の中に金縁眼鏡が光つて居た。いつか講談部の小會を一年三之組だけ教室で開かれたこともあつた、先生に對する記憶は澤山にあるが他の機會に譲ることにした。

全國の模範學校

十四期 豊州新報社長 長野 潔

我々の中學に入學する頃は高等小學が一郡に一校で、高等

された百五十餘名の新入生は春の高い壹之組と中位の貳之組と一番小さい參之組とに分けられ私達はその最小組の一員に加へられ嬉しい中に上級生が恐くて小さくなつて居たものだ。

上級生が恐いといふのは何も上級生からいぢめられるのではない。當時日清戰爭直後であつたためか體操が非常に重んぜられたのか兵式體操柔軟體操機械體操などを上級生が下級生を各個教練で鍛はれたものだ。それが鍛ふもの鍛はれるもの共に極めて眞面目で嚴格と來て居るからまるで兵卒が上官に對する氣持だつた。遠東半島還附隊新營隊といふことが生徒にまでも徹底して居たものか校風が武張つたことばかりで情弱の氣風は微塵も許されなかつた。特別に氣の弱かつた私は人一倍上級生が恐かつた譯で、中學校時代はこの頃の印象が一番忘れられなう。

教室は凹字形校舎階下の東南端。玄関から入ると廊下を左へ右へ曲つた南の方へ第二番目の運動場に面した東と南とに窓があつて運動場のよく見える明るい真の室であつた。南側に職員便所があつて周圍には檜の生垣があつたやうに思ふ。東の方は運動場の東側に南から北へつゞく木の植つて居た土手、その土手近くに白壁塗りの土藏倉——圖書と銃器とがしまつてあつた——が見え、其北隣りにトタン葺の雨天體操場があつて雨降りなどの時は俄かにガラ／＼喧しい音が聽えて來たものだ。一年級でも一之組は二階で上級生は殆んど二階だから羨しく早く二階に上れるやうになりたうと思つたのもこの頃であつた。

同級生を思ひ浮べたから記して見た。三十九年も前のことであるから名前を思ひ出せない諸君もある。しかしこれだけ思ひ出せたの小學に入ることが今の中學に入る位に考へられた、遠方の者は寄宿して居つた、中學は大分縣に大分中學が一つ、中津が分校であつた、大分中學には各郡から一名か二名の秀才が入る位のもので、斯文學校などの入學豫備校があつた、却々入學が六ヶ敷いので、青筋三本の帽子を被ることは非常な誇りであつた。

同郡出身の先輩は、非常に親切に後進の世話をして面倒を見てやる、暑中休暇の往復も行を共にする、其友情は父兄以上に厚いものがあつた。卒業式が終るとそれ／＼の郡人會で卒業生の送別會を開き、記念の寫眞を撮つて別れを惜んだ。恐ろしいのは上級生で、當時隨分歳の多い大きな生徒があつた、そして一年二年に四年五年が先生の助手として體操や柔劍道を教へる、今の三和銀行頭取の中根貞彦さんなどは、丈は小さかつたが一番嚴格であつた、陸軍中佐になつた田村守衛さんは劍道の達人で、お面を打たれると却々痛かつた。

面白かつたのは放課後の機械體操で、年に一回開かれる全縣中等學校の體育會に、選手として出る練習で、後藤文夫、玉置琢磨、その他の人々と日の暮るゝ迄遊び戯れた。

夏は山田太郎先生のお供で、後藤文夫、高江幸彦君等と新川に水泳に行き、砂原で逆立ちや宙返りの稽古に夕方まで過した。



今と違つて雑誌と云へば碩田交友會雜誌位のもの、其れに出る柳井さんの大友宗麟や、梅田さん等の美文などに感心して、我々も、土井晩翠調の新體詩など投稿して喜んで居つた。校歌の『汝が住める此丘は汝が祖先の墳墓ぞや、爲すことなくて朽もせば地下の祖先に恥なるぞ、立てや五百の吾健兒』と若い血をわかつて歌つた。

自慢は校舎の立派なこと、當時全國中學の模範建築と云はれたものだ、明治十八年に大分縣尋常中學校として開校され、現第一高女の敷地に新築されたが、校運盛んにして十年ならず改築の必要に迫られ、明治二十七年五月十四日に現在の上野ヶ丘にて新築上棟式を舉行した。

其の設計圖案は、文部省直接の指揮監督で、文部省技師久留正道と云ふ人が出張して當つた、諸般の設備完全せりと誇り、文部省も中學校の模範として、圖面を内閣勸業博覽會に出陳した程である。

玄関を入れれば校長室に事務室、二階は大講堂、東西の兩端に化學、博物の階段教室、教壇には水道も來て居る、櫛の階段が四ヶ所、通風採光、校舎の位置、全國に冠たりと威張つて居つた。

校長も初代は元玖珠郡長たりし中津の村上田長（九軌事務村上巧兒氏嚴父）二代は文相となつた鎌田榮吉氏、金子銓太郎氏、武田安之助氏などを経て、我々の時には慶應を出て、

洋行歸りの新知識と云はれた津田純一氏であつた、教師も後大抵校長になつた一見識ある人物が多かつた、今日に比べて生徒の智育の方は劣つたかも知れぬが、訓育の方は嚴格に打込まれた様に思はれる、今日の様に上級學校の入學準備に追はれる時勢に比べると、ノン氣でノビノビして居つた。

卒業生名簿を見ると、官吏方面では現後藤内相を始めとし知事が四人、軍人には伊藤砲兵監其他少將以上が八人、藤澤赤十字病院長初め醫學博士が二十二名、牧、鳥瀉、谷口の工學博士、農學博士が二名、法學博士が一名と博士が三十名近く出て居る、實業界にも中根三和銀行頭取、竹岡東邦電力事務、野依三井生命事務、司城日銀理事など多士濟々である。五十周年を迎へて此の名譽ある歴史、此の傳統を益々發揮させたいものだ。

## 努力

十五期 辯護士 山上猛虎

自分が中學を出て今日までの過去を顧みれば、不斷の努力の如何に偉大なるものであるかと云ふことを必々感ぜさせられるのである。自分の朋輩で今日隨分成功して居る者が官界

にも實業界にもあるがその成功者は大概非常な努力家である。唯頭が良いとか記憶力が良いとか天才であるとか俊才であるとか云ふ人よりも、少しは頭が悪く鈍物に見へても努力家の方が成功して居る様である。中學の同窓生の中、佐藤百喜君の如きは實に努力家である。

自分は少し佐藤君の事を書いて皆様に紹介したい。——彼は獨學で法學博士にまでなつたのであるが、最初中學でも餘り成績はよくなかつた。毎日通學する際背囊を昇ぎ片手に英語の本とか數學の本を持ち復習又は暗記をして來て居つたが、彼が進むに従ひ成績も可なりのものであつた。中學を抜け自分は五高に入つたが彼れは熊本大林區署(今の營林局)に勤め月給取りとなつた。

それより彼れは私立大學の講義録を取り法律の研究を始めた。傍ら彼れは英語の研究を怠らなかつた。自分が一年の寮生活を終へ下宿につくと彼れは僕の下宿に來て同宿した。僕の習つて來る獨逸語の研究を始め、僕が教師格となつて習つたものは全部彼れに教へた。無論英語も教へた。約一年半一緒に居つた。僕が五高を卒業し東大に入學すると彼れは又東京の大林區署の方に轉任した。其後役所の事務の傍専心法律の研究をした。高等文官試験には帝大教授の講義を聴かねばパスが六ヶ敷と云ふので其講義學説を知るに努め、特に憲法では穂積八束博士が獨特の憲法論で鋭く切り込み受験者が皆

悩まざるゝと云ふので、小生が穂積博士より習つた筆記を殆んど暗記する様に精讀し他の學科も準備が出來てまだ僕等が在學中の明治四十一年今の内務大臣後藤文夫氏等と一緒に美事高文をパスしたのである。

彼れは實際努力家であつた。熊本に居る頃一緒に散歩しても本を離した事がない。便所に行く時でも持つて居つたことがある。東京でも一緒に下宿に居たことがあるが寄れば法律の議論に花を咲かせて居つた。體格は御承知の通り小さいが聲は馬鹿に大きいので散歩する時など人が喧嘩をして居るのでは無いかと顔を振り向いたことが度々あつた。彼れは高文パス後本省入りをして累進し局長までなつて退職した。今は産業組合中央金庫の監事を勤めて居る。餘暇を以て法律の研究をやり最近法學博士の稱號を貰つたのである。

話は大分中學には關係は無いが僕の大學時代の朋輩で今日成功して居る一人に鬼頭豊隆と云ふ人がある。此の人も非常な努力家で學生時代は彼れを夔勉強家と云つた位である。頭はあまりよくないが大變勉強家であつた。實家が富裕で無い爲め彼れは暑中休暇など兄の商賣の手助を爲し反物行商に出掛けて居た。大學を出て司法官試験補となり僕と一緒に大阪地方裁判所に勤めたが當時參拾五圓の月給の内から二割(七圓)の天引貯蓄をして居つた。頭の低い男で仕事は人の分までしてやると云ふ鹽梅であるから部でも非常に評判が好く、とん

く出世して若くて札幌地方裁判所長となり、横濱地方裁判所長に轉じ、今度東京刑事地方裁判所長に榮轉した。大に將來を矚目されて居る。

斯様に成功者の話はまだあるが結局昔から云ふ様に人間は精神一統何事かならざらん、決して出来ないものでない「長者の爲めに枝を折る」出来る業である。爲さねば出来ぬ、徒に悲觀し自分は學問が無いからとか、自分にはどんな仕事は出来ぬとか自ら棄てるものではない。彼れも人なり我も人なり何も怖るゝに足らんや、俺が一つやつてやると云ふ意氣が無ければならぬ。そしてお互に努力しやうではないか。

## 十五回生の思ひ出

十五期 合銀常務 後藤三郎

私は作文が極めて下手でした。入學早々國東出身の吉雄君の「習慣は第二の天性なり」と云ふ名文を読み聞かされて其文章の巧いのを大變羨ましく思ふたことが今でも確かと記憶に残つてをる程です。同君は非常な秀才で特待生で押通し外國語學校を出て三井物産に入りハルビンで退社して縣人會長をしたり銀行を經營したりしてをりましたが、先年同地で

病死しました、惜みても餘りある人物です。

吾々のクラスで變り者は佐藤百喜法學博士です、身長四尺何寸の小男で、高田村から毎日二里の道を遠しとせず甲斐百千(現戸次町長)と二人で通學して皆を感心させたものです。卒業の時は優等で其のまゝ熊本の稅務署に稼ぎ片手間で獨學して中學の同級生が大學を出る前年に高文にパスしてをります。爾來農商務省に入り外國にも一二度遊學し營林局長と云ふ勅任官になつて勇退し。只今は産業組合の元締である中央金庫の監事をなすつゝ年齢五十歳にして論文を提出し博士となつた、其の篤學の志に驚き且つ敬意を表してをります。彼れにして人並の體格を有してをつたならば其の才能が國家有用の材として今一層役立つた事と常に同人間に惜みて止みません。

篤學の士と云へば駒場農大教授農學博士宗正雄君をクラスメイトとして有することを吾々は誇とするものです。彼れは學生時代から濃厚玉の如き人格者でした、私は試験間際になると泥繩式に彼の家に飛び込んで數學を教はつたものです。彼れは何時でも自分の讀物は傍に押しやつて私のために悠々と親切に何時間でも代數なり幾何なり三角なりの説明をすることを惜まなかつたのです。其の餘裕と親切さには云ひ知れぬ敬意と興味を感じたものです。昨年久し振に會ひましたが人格は一層圓熟してをります。斯かる名教授を持つ駒場學生

は幸福だと羨みました。

實業方面では日出出身の宇佐美力君が出世頭です、同君は學生時代からなか／＼ハイカラで貴公子でした一橋時代下宿屋で晩酌をやつてをると云ふ本人の自慢話には恐れ入つた事があります。現在三井信託の重役格で吾國信託界の先輩として努力されてをります。

特待生級の一人に法學士辯護士佐々木文平君が有ります。同君は安東藤太郎と云ふ大分辯護士界の先人、特志家の玄關番をしながら通學してをりました、夫で特待生になつたのですから大に同輩を感心させました、君も誠に濃厚篤實な人物で判事であつたら恐らく日本一の名判官だらうと思ひます。山上猛虎君も佐々木君等と共に東大法科を出て彼處此處と裁判官をして大分で辯護士を開業し一時大に繁昌しましたが現在は銀行會社の重役と色々の世話役を引受けて大分市内外の出來事なら同君に頼めば出來ぬ事はないと云ふ程の顔役です。

吾々のクラスはドチラかと云へばインテリ派が多く豪傑は少なかつた、特に五年級の時に津田校長排斥運動が起つたゝめに山崎、米田、澤熊等の豪傑連は災難に會つて他へ轉校したので軍人になつたのは陸軍中佐櫻井麟次郎、海軍主計大佐中鶴律夫の御兩君のみでした。

宇都宮文四郎君は別府で皮梅科醫として開業してをります

が同君の令姉は今村孝次先生の奥様で當時大分隨一の美人でした。其の弟だけに女にもしたい程の優男で、とても外科醫など出来る筈はないのですが習慣は第二の天性ですか手術にも慣れたと見えて大に繁昌して居ります。

大商教頭の田吹軍記君は紅顔の美少年でありました、先年二十何年目に途上で出會つて田吹君と思ふて挨拶した處が先生帽子を取ると燦然たる禿頭で全く見違へ「これは違つた」と思はしめた程の變り方に驚きました。在學當時より英語が特に優秀でしたが大分商業の學生の外國語の力が一般に認められてをるのも所以ありとなづかれます。

同期生中で私の最も懇意で面白かつた友達は飯倉虎熊君でした。同君は極めてユーモアの多い明朗な男で常に話題の提供者でした。私は神戸へ同君は大阪醫大へ入學した關係上其後も往復交渉が多く今でも獨り腹を抱へて笑ふ様な思出でが澤山あります。惜しいかな醫大三年生位で病死しました。同君を「トツコン」と綽名してをりました理由を頼と思ひ出せませぬ。

## 猪野山越し三里の通學五年

十五期 大分郡戸次町長 甲 斐 百 千

私は第十五回の卒業生で明治三十六年三月に母校を出たので、入學したのが明治三十一年の四月です。時の校長は武田安之助先生でした。入學當初は百名が五十名宛の二組に分れ卒業の時は半數以下の四十餘名と云ふ數に減じて居たのは入學當初の一年生の時代の上級生が武田校長排斥のストライキをやり五年生時代に級中の元氣者が津田純一校長先生の排斥騒擾をやつて一部放校處分を受けたり、亦脱線して原級止め置きを喰つた連中のあつた爲めでした。

光輝ある記念式典に際會して思ひ出新たなるものは在學五ヶ年間自宅と學校との間片道三里の猪野山越しの通學それは今尙ほ忘れざるもので村での話題の種として殘されてあるようだ。一體當時の學制は義務教育として尋常小學校は四ヶ年で修業で之を卒ふれば大衆は皆夫々の職業見習に就き部落の内で生活程度のよき家庭の者が進んで高等小學校に學ぶ時代で中學に志す者は一村一人か二人しか無い時代でしたので、中學に入る者は普通高等小學を卒業してからでしたが、私は貧しい農家の兄弟の多い家庭に生れたが幸に小學時代に餘り人

後に落ちない勉強振りでしたので高等小學二年修業で試みに入學試験を受けた處首尾よく合格しました。

貧しき百姓家の四男坊なので思ふ儘に學資も出す親の資力もなく、従つて最小限度の資金を以て最大限度の收穫を得んとする筆法で下宿をしたり、寄宿舎に入つての下宿料や舍費を節約しての修學でした。現在では三里も五里も六里も遠き通學を見るが、當時は汽車も自動車もなく自轉車さへなかつたのだから通學とすればいやでも徒歩によるの外はなかつた譯です。片道三里で往復六里、而かも只今では立派な縣道になつて居るが、大分郡の高田から別保村、明治村の猪野山を経て瀧尾村の下郡に出で大分川を渡船で渡り、坊ヶ小路より東新町に出で上野ヶ丘迄、其の大部分は極めて粗悪な山路であるので經費節約と云つても靴穿きでは靴がへるので之れ亦容易でないで今の瀧尾橋の袂の處に焼餅屋が二軒あつた、一錢に四つくれる名物の焼餅で時折り邪魔するので馴染となつて毎日こゝに靴を預け其より學校迄の往復には靴を用ひたから自宅までの約二里半は草履や下駄で、雨天の時は素洗足で歩いたのだつた。

全く以て節約の徹底振りを發揮して居たのですが、通學に要する所要時間は登校に三時間、下校に三時間、合せて六時間と云ふ自習時間が寄宿の僚友より少く、而かも多くの僚友は小學校で二ヶ年も多く學びし人々にて之等に伍して行か

んにはなみ大抵の事ではなく、思はず涙をしぼることもありしが、遂に名案を考へ出したのは人通り少き山路を歩く二時間歩きながら書見や暗記をなし、夜間の睡眠時間を削ぎて以て辛ふじて同僚に伍したのでした。而かも斯様なことは一人ではよく續く處にあらず丁度同時に入學したのに同村の佐藤百喜君があつて共に貧乏の程度を同ふして居たので行を共にし五ヶ年間終始一貫してやり遂げたのだつた。

それと云ふのも盆と正月と祭りか佛事等の如き時でなければ米の飯を喰ふことのない牛蒡の産地大分郡高田村の百姓家に生れたのだから子供ながらもよく親の懐具合に着眼して居たのでした。殊に今を時めく法學博士の佐藤百喜氏は坊ヶ小路の焼餅を買ふよりも腹をふくらし、且つ滋養勝れりとして明治村猪野部落の豆腐屋に走り込んで生豆腐に醬油をかけて貰つて半丁とか一丁とかを一錢五厘位で喰つて鶏卵代用だとして喰つて居たものでした。今から考へると全くおかしひ様だが卵は買へぬから豆腐を以て代用し足は痛くても靴が大車だとして、洗足になつて石ころの山路を歩き、とげやいはら踏みたてることが多かつたが苦痛とせず努力に努力を積み一路向上に突進した佐藤氏の如き、高等學校にも大學にも學ばずに法學博士の學位を獲得し、其の文官時代はよく勅任官にまで進み得たのを見ても眞面目に努力を一貫した結束と思ふと現代人の以て範とすべきものではなからうか。

〔私は中學を出てから暫く地方の小學校に代用教員や准教員を勤めて見たが向上の餘地なきを案じて數年を経て警察界に足を入れ大分、宮城警視廳を経て内務省、神奈川、長崎、臺灣等に轉々しましたが子女の教育を思ふ時農村に起居して母校に學ばしむることの切なる思ひ、意を決し故郷に販り現に二兒を母校に學ばしめ、忘れ難き上野丘の母校を座ながら明け暮れに眺めつゝ追憶禁ぜざるものがある。〕年少氣銳の時代と老成の今日に於ける僚友の今昔を對比して見ると常に濃厚着實に時流に投せず致々として努めし友にのみ物質的にも社會上の地位にも恵み厚きものがある。徒らに大言壯語して一世を壓するが如き振舞のあつた人々の末路は見るべきものなきを特に感ずるものである。

兩博士や、佐々木、山上、宇都宮、木下等の學士や後藤合銀常務や、櫻井中佐、田吹商業教諭等何れも穩健組の人々で今日の成功は羨望に堪へざるところ幸に健康を保持せられんことを之れ祈ると共に鶏卵が買へずに一錢五厘の生豆腐に滋養を仰ぎしことを佐藤法學博士は思ひ起すや否や。

## 學友の面影

十六期 利光彌七

私は東大分の出身であるが、最近大分市内中島町へ居を定め、親族も大部市内へ居住して居る關係上、度々郷里には歸省するが、年をとると俗事益々多忙で、假令歸省する事があつても、上野へ行く場合は、大抵アノ火葬場へ要事のある場合なのであります。

昨年八月偶々歸省した時に、小幡君の厚意の許に、其當時歸省中の東京の上田保君、權藤種男君と共に、卒業後初めての母校の訪問をする機會を得ました。

元居た教室、講堂、小使室、寄宿舎、食堂、門内の杉林、玄關前の蘇鐵、運動場附近の老松、萱場、間道、小祠依然として昔ながらの面影で、全く私は三十五年前の童心に立ち還つて去るに忍びなかつた。

感想 二句

破れ扉や昔ながらの草いきれ

近道や幼き時の芒原

當時の學友の面影を夢の様に辿り記して見やう。

○安東胤男君 血色の良い元氣に満ち／＼て常に運動をやつて居た

を持つて居た様にも思ふ。

○清水運平君 沈着、寡言の裡に滑稽味あり、口元の優さしいのが特徴で、其頃清水庸三郎君、平尾光藏君の三君と共に當時學生界の三劍豪として縣下を鳴らして居た、而かも三君が同郷で常に學校の往復は袖を連れて、行動を共にして居た。三君共今日の二段格以上の腕前であつたらう。特に君は膽力があつた。

○平尾光藏君 膨くらとして、金持ちの相を有し、劍豪であつたがとても謙遜家で、聲も低くて優しかつた、今尙竹刀を握り居るや否や

○千葉久一君 顔色がよくなかつたが、唇の色は何時も紅を呈し、元氣で、劍道の選手であつた服は毛の立て居る紺サーヂを着て居た様に記憶する。

○平岡太一郎君 丸顔の色の淺黒い方であつた、之も嘗て君は肋膜炎を病んで居た原因であつたらう、當時は外濠(當時岩田家の別荘)に妹さんと住んで居た、食ふ事は中々健啖で、君の所持品は何時も立派な物があつた。君のズボンにはポケットが前にあつて、左手を何時も之に突込んで居た、頭が太かつた爲か帽子の後ろを裂いて之に鳩目を三つ程打つて青い紐を通して居た。

○佐藤一英君 スラリとして餘り體格はよくなかつたが、柔道の選手であつた、又一方に君は下級生を威壓して居た。

○三浦成君 クラス中隨一の美少年であり英語が得意であつた。

○橋本正身君 春の高スマートな體で女の化身とも思はれる美男であつた、萬事控目の温厚家であつた。

○横山巖君 春は低い方であつたが、血色の麗はしい、そしてスポ

が、就中柔道、野球、ランニングが得意であつた、見かけよりも優しく、又氣分も小さかつた、そして美聲家であつた。

○町田修三君 眞面目な勉強家で、少し顔色が蒼白で、體の割合に大食家であつた、君の唇が特に記憶に残る、尙懐ひ出すのは、晝食後に運動場の南の萱の内で君のブツシング(當時の教科書)のレクチニアである。

○今泉周磨君 別ニスボーツ等には趣味はなかつた様にも思ふが、玲瓏な二重瞼の下り眼で、色の白い優しい面持の君は紺色の厚い羅紗服を着て居た、特に記憶に残るのは君の左利と、上服は少し長い方。

○佐藤忠士君 今は高知で君と二人、月に二回は會つて、昔諷もし、又御馳走になつて昔ながら其儘の交際を續けて居るが、君は在學中から脊が高く上服が特に短かく、襷衣(茶色の袴袴)が食み出て居た、そして、弓道の選手であつた。

○首藤松君 太い割合に體が弱かつた見へ、ハンカチを常に頸に巻いて居た、クラス中とても滑稽で、頓智がよく、凡てに諧謔に富んで居た、何をしても君が居なくては淋しくて、旅行でも君の参加如何はクラスの大勢に影響した程の人氣物であつた、そして聲は低くいが、歌は上手であつた。

○甲斐常一君 首藤君とクラス中の双壁であつた。

○河野新三君 君は動作が頗る敏活で常に廊下を走つて居た、體は瘦せて居たが、劍道の選手で、朋切の名手であつた、君と佐藤一英君、安東君、安部彌隆君と共に僕は本校第一回の選手として京都武徳本部に派遣せられた事は特に忘れ得ない、君は軍歌に美聲

一ツ一般學校中又縣下に鳴らして居た。萬事に勝ち氣であつたが當時安東君、玉置君と共に運動の大立物であつた。

○若林大君 萬學の努力家で大變血色がよく、劍道に優れて居た。

○牧松兵衛君 君は僕と卒業迄共に在學して居なかつたが、當時君の名前が異彩を放つて居た事を記憶する。體格は丈夫ではなかつたが、君は喉笛が太く聲に底力があつて、辯論に優れて居た。君の聲で賣生の謠曲、ワキでも動めたならばと思ふが君如何。

○玉置琢磨君 スボーツの選手で就中君の金棒は實に見事であつた。スラリとした體で、金棒に何時もブラ下つて居た。夫れに野球も主將で君をして今日にあらしめたならばと思ふ。

○清水政七君 佐藤忠士君、後藤幸士君、首藤松君と春の高い事にクラス中群を抜いて居た、君は頭腦の良かつた爲め、襟に金銀の小さい櫻の徽章を着けて居た、夫でも服地は質素であつた。

○安部彌隆君 劍道の選手の君は、左肩を擧げ、ニツケル縁の近眼鏡をかけて居るのが人目を牽いて居た。

○後藤幸士君 極く氣真面目で左肩上りの春高、帽子は後の方に被つて之を前にグット引張つた様な被り方をして居た、特に君の二重瞼が記憶に残る。

○立川甚平君 温厚な君は誰に會つても、顔色を赤くして居た、トテも小供好きであつた、今日君の専門は斯う云ふ處から立脚したのであらうか、全く適任と思ふ。

○奈須敏雄君 凡て控目のおとなしい方で、當時君を呼ぶに奈須(ナツス)さんと敬稱して居たのは何う云ふ譯であつたらうか、服地は少し毛の立つて居た地の荒い紺サーヂであつた。

○高山伊太郎君||童心の中にも才氣に充ち、談話の時左手で盛んに  
セスチユアーをして居た。

○久米隆吉君||君の金縁眼鏡が異彩を放つて居た。

○吾輩||當時少し剣道をやって居た、學校を出ると、北海道、福  
岡、熊本、福井、松山、現在此の土佐へと田舎廻りの旅役者、  
轉ぶ石に苔の着く間もなく今日に及んで居る、在學當時から頭は  
よくなかつたが、採り所は手先の仕事で、大抵の事は眞似をして  
居る。それで花は池坊、茶は裏千家、謡は觀世、書畫、盆栽、今  
は又俳句に頭を突き込むで居る、未だ其他、小鳥、養鶏、とかく  
萬事に不生産的に産れて居るが、若し郷里へ歸つたら以上の方面  
での氣マダレ諸君には相手になるかも知れぬ。

以上二十五名諸君の御顔を汚して済まないが、未だ記憶を  
辿れば夫々臍げに想ひ出す事もある夫れに、坊が小路の焼餅  
櫻木饅頭、矢野の渦巻の菓子、金棒(大豆の入つた鉛棒)、  
一步進むで室町××店の事も次ぎ／＼にパノラマの様に現出  
して来る、要するに當時は快男子が多くて何時も朗かで、何  
事も一致して居た事は當時の美點であつたらう。

## 恩師のプロフィール

二〇期 丸和商事事務 石 丸 兵 内

津田純一氏	安部志摩治氏
吉原健吾氏	孔 梅藏氏
服部捨太郎氏	秋元正四氏
小泉秀之助氏	渡邊 馨氏
下村御嶽氏	松本 弘氏
村上圭一氏	村田顯久氏
荒金盤門氏	大坪好三氏
横田稻太郎氏	

古諺に『三尺退いて師の影を踏まず』とかいふが、恩師を  
捉へ來つて、思ひ出づるまゝに、そのプロフィールを寫さう杯  
は、言いやうなき横着者、箸にも棒にもかゝらぬ忘恩漢だと  
の譏りを受けるであらうが、その片鱗を畫いて、師の全貌を  
髣髴せしめ、わが若かりし時代の、忘れ得ぬ印象として味は  
ひ返へすことは、自ら師の大意を忘れず、折に觸れ思ひ出  
は常に懐かしく微笑まるゝものがあるからである。今、そ  
の思出でを綴ることは他の同窓の人々にも、在りし昔を追憶  
せしめて、何かしかの感懐を湧かしむる詩情豊かなものがあ  
らうかと推し、赤裸々に短評する。これも五十年記念を祝ぐ  
踊り子の一所作事と思ひなして、敢てわが非禮を深くは咎め  
ざれ。

▽津田純一氏△ 私が入學した當時の校長だ、軀幹雄偉、  
堂々たる風貌、左手をポケットに、右手に書物、茫洋無頓著  
の面貌を少し傾けて上向きに悠々闊歩する風姿は、ギリシヤ

の大哲人でも見るやうな感を與へられた。スケールにも、放  
射する威望も大きく、そのブツ切ら棒の話振りに、何處と  
なく巨人としての威と徳とが溢れ、われ等の向上心に力強い  
響きを齎らしたものだ。

▽安部志摩治氏△ われ等が迎へた第二世校長で、乍失禮  
若き學徒は、ひそかに『小人島の住人』と綽名を奉つたほど、  
顔も身體も小柄らで、津田前校長とは全然、違つた感を與へ  
られた。足の爪先からの頭のテツ邊まで、謹直方正そのもの  
で固められたかに見えた。雄大、豪傲、霸氣の感化は望めな  
かつたが、緊張、細緻、整頓の薫育を受け、典型的純直の教  
育家と思はしめた。私は病後一年間、安部校長宅から通學  
し、家庭的にも御恩を受けたものであるが、安部校長は、學  
校に在るも、家庭におけるも、洵に方正な眞摯な態度を失は  
ず、ト云つて、無闇矢鱈にコセ付く人でなく、自ら身を以て  
範を示し、各自の自治自助を誨ふる風があり。一種の威と仁  
とを漂はせ、親しむべきも狂るべからず、近づく可きも侵す  
べからざるものがあつた。短的に言へば、慈父と恩師とを兼  
ねた人、潑刺粗笨の若き學徒に取つては、當時、いさゝか天  
空開潤の氣兼と鬱勃たる雄心とを奪はるゝやの不滿はあつた  
が、今日にして思へば、秩序整然たる組織的社會生活には、  
安部校長の無聲の感化は非常に力強い素地を作つて呉れたも  
のと感謝する。口邊を眞一文字に引き結び、ロイド眼鏡越し

に睨まるゝ時は、一寸尻古垂れるが、颯風一過、顎を突き出  
してニコ／＼する時は、人懐こい優さしさと柔か味があり、  
ツイ甘へたい心地を咬られたものだ、今でもその眞實味溢れ  
た優さしき風姿は私の忘れ得ぬ思ひ出だ。

私の若き魂に大きな薫化を與へて呉れた津田校長、安部校長も今  
は共に黄泉不歸の客となり、私も亦齡、知命に近く、いさゝか感  
無量である。

▽吉原健吾氏△ 國語の先生、背の低い跛足で風采は上ら  
なかつたが、面貌は何處か故大隈侯に似通つたところがあ  
つたやうに思ふ、鷹揚の裡に負けぬ氣を眉宇に漂はせ、磊落  
相に振舞ひながら教壇から一種の威壓を放射し、底力ある教  
へ方であつた、然かも一たび教壇を下れば、慈眼童心非常に  
懇切で優さしく、親分らしい處もあり、總じて思ひやりも深  
かつた、私は特に目をかけられ、いろ／＼教外の教を受けた  
ので、思出での感も深く、私はその奥底に秘そむ政治家的風  
格が好きであつた。

▽孔梅藏氏△ 漢文の先生だ。銅色扁平の澁味ある面貌、  
小太りのガツチリした體軀、黒紋袴のいで立ち、昔ながら  
の口矢釜しい道學者タイプであつたが、教へ振るも親切  
で、六つかしい顔に似合はず優さしく、諄々と講義するあた  
り飽くまで、努めて倦まざる眞面目な學者と云つた感じを與  
へられ、尊敬の念を拂はしめらるゝものがあつた。時代の人

ではなかつたが、漢學を講ずるには雰圍氣に適つた先生であつた。

▽服部拾太郎氏△ われ等は博物を教はつた。白哲美髯、軀幹長大、秀麗の感を與へられ、一寸英國人でも見るやうなゼントルマンタイプの人だ。終始苦味を含んだ微笑を堪へ、濃い眉を上げて、講義する風半容姿は端麗な感じを誘ひ、春風駘蕩とふが、薫風坐邊を動かすとも云つた趣きがあり、われ等學徒はこの時間、明朗の氣に包まれたものだ、恐ろしいといふ感じは微塵もなかつたが、その何處かに油斷を許されぬ先生だと思はしめられてゐた。又、或時は一寸キザに感ずる點もあつたやうに記憶する。

▽秋元正四氏△ 英語の先生。ヤンキースタイルの、才氣煥發と云つた清楚な風姿。歩き振りと云ひ、話し振りと云ひ、講義する時の態度も、テキハキした、齒切れの良い、そして何處となく氣取つた風があり、當時から見れば所謂ハイカラ紳士だと感じた。その應對も、その拳措も、若き學徒の氣分にピッタリ合つて、清楚明朗、先生と共に語る時、宛然として初夏の郊外を逍遙するかの心地があつた。

▽小泉秀之助氏△ 國文學の先生。眉目秀麗、肉付の良い大柄らの好男子、強度の近眼らしく思はれたが、その金縁眼鏡が一層風采を氣品あらしめたやうだ。態度も話振りも鷹揚で、丸味に富み、いさゝか鼻にかゝる風があつた。その講義

振りは意氣と熱を缺いだフン、わりした例へて申さば、南風に包被された感じを與へらるゝものであつたが、その蘊蓄と造詣とは非常に深いやうにわれ等は感得した。そして先生は教へる時も、歩く時も、何か他の事を思ひ、又何時も何事かを思索しつゝあるかに見られた、何れかと云へば、男性的の教育家でなく、女性向きの奥床しい先生だつた。

▽渡邊馨氏△ 英語の先生。營養不良で瘦せ枯れた野杉を見るやうな感じを覚えしめた程、弱々しい小柄らの先生であつた。褪せた紋付に袴姿で、ステッキ打ち振りつゝ下向きにスタ／＼と歩き、時折り顔を上げて、遠方を見つゝ又急がしく歩き續けるその風姿は、貧しき老書生といつた趣きがあつた。實際亦、先生は簡素な生活に甘んじ極めて弱々しく見えたが、然かも、その精神は烈々懦夫を起たしむる意氣と熱とに燃え、蒲柳の質と闘ひつゝ、勤勉これ努めた人である。私は先生に非常に愛せられ、先生から並々ならぬ御恩を受けたものだ、校外でも屢々教を乞ひ、或は閑さへあれば親交していろ／＼の垂示を得、又私が肋膜炎で臥床した際には先生は心から案じて呉れ、又、時には激まし、力づけて呉れた、更に、卒業後も、私が病を得て朝鮮總督府を辭して故郷に歸臥靜養しつゝあつた際などいろ／＼懇切に慰め呉れ、病癒ゆるに及んで、私の就職に付ても奔走推薦され、保證までもして呉れたのであつた。

先生は色青黒く骨立ち瘦せ細り、甚だ風采は上らず、健康は弱く、見るから貧弱教員のモデルとでも云ひたい感じであつたが、その人格の清廉高潔なる、その精神的意力の強剛旺盛なる、又、その人間的情操の豊富和潤なる點は、蓋し稀なる人物だと私は信じ、今尙、崇敬感謝の念禁じ得ない譯である。而して先生の講義振りは、懇切丁寧、種々例を引き、解説を加へ、難澁の英語も極めて平易に呑み込み得らるゝやう、恰かも、盲人の手を曳き大道を教へ示すに似たものがあり、そこに教へ兒を愛兒の如く見る優さしき心ばえが感得されるのが常であつた。

あゝ渡邊先生、今、逝いて空し、私としては本文を草しつゝ、若かりし日の事どもを彼れ個び出で追憶の涙、滂沱たるものがある。

▽下村御鋏氏△ 漢文の先生。白髮童顏、腰曲り、鬨々として、恰かも池畔の柳絮を看るの心地があつた。講義する時、眠れるが如く、聞かざるが如く、又、眼前學徒の存在を意識せざる如く、環境も心に影ろはざるが如く、靜然端坐、たゞ支那古代の聖賢の道に没入し、陶化したれるの風があつた。然かも、この周邊の空氣に微動だもせしめられないかに見えた先生が、却つて、全教室の隅々までも見透し、學徒の一舉一動を巨細に知悉してゐたことは、下村先生の鋭き精神力に感嘆せしめられたものだ。然し、若き學徒の多くは、「この老ひばれ何するものぞ」と云つた氣分で、内密にコソ／＼

いろいろな惡戯や、囁き合ふ有様であつた。老先生は之を知つても白眼視し、些しの小言も云はず、叱りもしない、こゝに先生の大腹サがあつた。この點、私は少なからず長敬せざるを得なかつたのである。

一度び教壇を下つて、いろ／＼漫談する時、この老先生はニコ／＼不斷の笑を湛え、慈心を面に浮べて諄々と語り嬉々として話す、その優さしき笑顔は、鬼神をも慚伏せしむる底のものであつた、「柔能く剛を制す」と云つた句は下村先生の態度から感得せしめらるゝ。私はこの先生に對し一種特別の懐かしみを覚えてゐた。

▽松本弘氏△ 畫の先生。「古村」と號し、輕妙飄逸、洒落温雅、氣の置けない、先生らしからざる先生、若き學徒は年嵩の友人の如く、又親しき先輩の如き感を以て接し、學徒と先生との間は常に和氣緩々、輕快明朗、頗る楽しいものであつた。色小黒く、カイゼル式の髭を支那式に下に捻り、ワザとらしく唇を引締めて、六つかしい顔付で教壇に立つ風姿は、日頃の平易明朗の先生を知れる學徒としては、いさゝか滑稽味、茶氣旺盛といつた感があつた。

一線、又一線、わざとらしい身振りで筆を走らし茶目氣分を漂はせつゝ、一體何を書くのだらうと見てゐるうち、濃淡と／＼、いつか清楚な情趣を寫せる風景畫となるあたり、實にうまいもので、筆は強きも弱きも自然のまに／＼動き走



り、先生自身はその動きを知らざる風があり、又、何か書かれるかにも無關心であるかに思はしむるほどであつた。寫生畫など實に堂に入つたものだと感嘆すること屢々であつた。雄渾の筆致は何うかと思ふが、幽雅妙趣の情景は古村畫伯得意の壇上であらう——と當時繪畫に何等知識なく、鑑賞眼なきわれ／＼すら思つたほどだ。

▽村上圭一氏△ 數學の先生。學徒は「ライオン」の綽名を奉つて、その教授振りの嚴格几帳面に一種の畏敬を拂つてゐた。「ライオン」の綽名はその面貌風姿から、口さがなき學徒が附けたのであらうが、ソウ云へば同じ「ライオン」で謳はれた故濱口雄幸氏と何處か相似する點があつた。大顔でソツ、齒で、眼光炯々、又、體軀も堂々丈夫の骨組があり、一たび怒れば、恰かも嘯み附くかの擬勢すらあつた。その教壇に於ける講義振りも、動作は男性的で荒く、説明は理論を闡明して餘す所がないが、恰かも三軍を叱咤する時のやうな底力の籠つた大聲である。ライオンの咆吼に似てゐる。

然し、個人としての村上先生は相貌風姿の粗野なのに似ず、磊落にして情味あり、叮嚀にして優さしく、極めて人間味饒かな人物である。そして亦、物を誨へ、導くに當つて、徹底せねば已まず、教へて倦むことを知らず、判り達せざれば之を廢せぬと云つた風があり、且その研究心は旺盛熱烈であつたやうに見受けた。

嚴格の半面に、慈父の如き親味を以てせる村上先生は、先

生らしき先生だと私は感じてゐた。私の友人が一時、先生の宅に寄寓してゐたが、家庭に於ける先生は實に人間的情操を多分に體得せる理解あり、優さしみある人だと評してゐた。

▽村田顯久氏△ 物理の先生、綽名は「かまきり」に羽織」と評せられてゐた程、瘦軀長身、翾々とした風姿、優さしい眼、薄い髭、血色のすぐれぬ面長の顔を伏目がちに、何事かを考へ／＼歩いて行く。偶々出合ひ頭に突き當つても、一向誰とも氣に留めぬと云つた無頓着サである。

態度なり、講義振りなり、すべてが柔軟味に富み、何れかと云へば女性的であつた。コセ付かず荒々しく叱らず、學徒が聞くと聞かざるとに拘らず、豫定した講義を心ゆくまで教授すればならず、「質問は？」と一わたり學徒を見廻はして、サツサ／＼教室を引上げる。たゞ、この最後の一瞥には、優さしき中に、人の心を射抜く光りが宿つてゐた。温和柔軟で、一見、落ち付いたやうであるが、時々、疎忽長屋の落語にでもありさうな慌はて方をしたり、又、時折り、諧謔味を交へて、ニコツと笑ふ無邪氣な身振りに滿堂を吹き出させることが度々であつた。親切入念な教へ振りで、難澁な物理學の理論も、方式も、平易に判るやうに指示する良い先生であつた。

▽荒金盤門氏△ 博物の先生、色白く髪も眉も濃く口髭も

畫いたやうな綺麗な大柄顔、終始、溢るゝばかりの愛嬌を湛へ、洒脱でノッリと教壇に立ち、一巡生徒の顔を見廻はして講義を始める。いさゝか熱のない投げやり風のある磊落な教授振りで、教はる學徒も軽るい明るい氣分で、面白く聞いたものだ。如才ない、悠々たる態度は、教師タイプでなく、寧ろ、機會を待つ政治家と云つた風格があつた。話して呵々大笑する時は、極めて氣立ての良い樂天家と云つた趣きがあつた。

▽大坪好三氏△ 國文の先生。血色は良いが水膨れしたやうな軀幹長大のデブ先生、丸顔で愛嬌があり、鳩のやうな優さしい目、いさゝか大きな圖體を持ち扱ふと云つた鷹揚サがあつた。

説き去り説き來り、諄々と親切に講義する時、如何にも面倒臭いといふ形、時々生徒をジロリねめ廻はし、笑ひたいのを殺して強いて苦澁な面を作ると云つた愛嬌があり、生徒は何れも好感を以て迎へたものだ、一寸支那式大人と云つた感じを與へられ、人を徳化し陶冶すると云つた風があつた。

▽横田稻太郎氏△ 英語の先生、白哲無髯中肉中脊、スタイルと云ひ、身振りと云ひ、態度舉措に至るまで五分の隙もない好箇の紳士。優純温和で、笑ふ時は心から笑ふ狀があり、教授振りも熱があり、一言一句も苟くもしない周到の用意があり、權式も備へて居り、威容も整つて、その半面に對者を

して信服せしめる温か味、優さしさがあつた。

口矢釜ましくは叱らなかつたが、時に面貌を紅潮させ、辭を勵ます場合があり、その時は、學徒の心に一種の「恐い響き」を與へたものだ。私は先生が非常に好きであつた。時々奇問を發して先生から笑はれたこともあるが、先生も亦、私に好感を寄せたかに思はるゝ訓へ方であつた。

雄勁な骨力は見られなかつたが、玲瓏たる風韻と氣品に富んだ先生でその几帳面な、正純な、整齊せる風姿動作は先生の內的修養の豊富サを窺ふに足り、信頼と崇敬の念を拂はしめられた一のだ。

以上、順序不同で、思ひ浮ぶまゝを、偽らず、飾らず、評し來つたが、果してその寸貌でも寫し得たか何うか？、又、恩師を月旦して、いろ／＼悪口雜言したが、決して、殊更ら、愛憎の念を挟んでの批評ではない。當るも八卦、當らぬも八卦、多少とも興を呼ぶものがあれば、五十年記念號の埋め草となる役目は果した譯である。(妄評多謝——昭和一〇、六、一日稿)

## 「海底もぐり」福田平八郎

二十期 大阪毎日新聞社 佐藤定雄

先生の事、級友の事、陸上競技、運動會、柔剣道、端艇さては上野ヶ丘を繞る憶ひ出深い感想等々廿枚餘に亘る駄文を書き綴つてあつたが「思ひ出五十年」に關する諸賢の玉稿を拜見するに及んで拙稿が殆んど大同小異であり重復の點も少からぬ事を知り遂に破り棄てた。それで何か他の方面で憶ひ出はないかと考へた末、「海底もぐり」といふ一片を書いてみた。事實は面白きものであるが秃筆を弄して徒らに紙面をけがしたにすぎない。

海の誘惑!! 少年少女や學生に限らず、私共の避暑の簡易なる方便であり、兼ねて夏の健康を保持し、闘夏唯一のものとして海を憧れ、努めて私は海に接するやうにしてゐる。

小學生時代から中學へ入つても函莖で水泳をつゞけて来た。八月の終りから九月にかけて大分港内には長い四本の尾をひいたくらげが出現し無數に遊び廻る。このくらげに觸れた一瞬ビリ／＼と針でも刺されるやうな痛痒を感じ、腕でも脚部でもその一部分が赤く腫れあがるのが何よりの苦痛があつた。これがため九月に入つての水泳は一年二年生の未だ上達して居らぬ者は港内でジャブ／＼やつてゐたが、腕達者

の上級生は何れも港外で蒼々とした海にこれこそ文字通り天空快濶の水泳気分を満喫したのであつた。

沖の濱の海から大分港埠頭までの遠泳に大中健兒五百名の約一割が参加してゐた。大中の水泳は白杵の山内流を教つてゐたので、長距離、長時間の水泳には適してゐたが、短距離の競泳には今日の如きスピードアップした水泳に及ぶべくもなかつた。豊後灣を横斷して大分から日出までの遠泳が決行され、山田小太郎先生の指揮で腕自漫の連中數名が参加したが、日出まで恙なく到着した勇士は後藤文夫氏、只一人であつたといふ水泳武勇傳も聽かされてゐた。

私共の時代には水泳に練達の先生が無かつたため、斯の如き壯舉は一回も企てられなかつた。つまり泳法を教はつた後は單獨で泳ぎ得る身になり毎日大分港に泳ぎに行き、先生が出席簿に書き込む、これを日々繰り返すに過ぎなかつた。僅か三十分や一時間で水泳中止のラツバが鳴る、寄宿生や遠路の生徒とか、大して水泳に興味のない者はサツサと引あげて歸途に就いたが、水泳好の河童連中になると、出席點呼の後再び飛び込み、誰憚ることなく全く自由奔放、四時五時までも海に浸つてゐた。

大分港の北防波堤は怒濤打ち寄せるだけ多くの捨石がしてある、十間二十間先方から大小の捨岩石が沈められてらるだけ、これに榮螺や、鮑が付き岩の間には蛸も居るので、漁夫もた。

も來るし、大分港の濱仲仕もこの榮螺採りに來るものも少なくなかつた。私は少年時代からこの潜水ぶりを目撃してゐただけ一つ自分も潜水してみたいといふ好奇心に燃え立つてゐたが、潜水眼鏡が佐賀關に注文せねば手に入らず、少年用のものが無いといふ事に失望してゐた。

中學に入り日々大分港に水泳に出かけるに及んで矢も楯もたまたま潜水熱は愈々熾烈となり、遂に塵除け眼鏡を求め、周囲の網の目の部分を蠟燭の蠟で塗り潰し意氣込んで使用してみると忽ち海水は眼鏡一面に浸り満ち全然無効であつた。我々同志も失望落膽當分潜水の話も中絶してゐたところが、偶然にも少年世界か新聞かに潜水眼鏡の廣告を見出したので早速東京に注文して取り寄せ、使用してみるととても理想的だつたので憧れの潜水は忽ち十人、廿人とこの眼鏡を注文する状態となり、竹町の松野屋にもこの眼鏡を賣るやうになつては中學生間の一流行となつた。福田平八郎君が何々會出品の繪に海底のひらめとか海底の海藻等を屢々描いてゐるのも確かに此時代の追憶を繪にしたものであると思ふ。二間三間潜水技術の上達するに深度を加へ、且つ海底に達する迄の間も餘程短縮された。

漁師の潜水は先づ脚部から沈み海中の途中で頭を下にする動作であるが、我々學生は飛込みの要領その儘に最初から頭を下にして二た掻き三掻きしたら三間位の海底に十分達して

潜水時間も熟練して先づ一分、比較的淺い所で一分半といふのが最大限であつて、海面から眼鏡で海底の状態を觀て、あの岩この石と目標をつけ勇敢に潜水し、その岩を一周し榮螺を採つて直ちに附近の岩へ移るといふの海底の作業も餘程敏速にやらぬ限り獲物も少いわけである。

鮑を發見した際、一寸でもこれに觸れたら、岩に固く密着して押しても突いても離れるればこそ、已むなく三本鎗の鉄突で固い貝殻を突き破るのであるが、鮑は深い海底に居るだけ海底でのこの鉄突作業は容易の事ではなく、數回海面に浮び上り呼吸をして數回の襲撃を試みる苦闘は一個の鮑を採るのに疲れ、その餘の潜水を中絶さす程であつた。鮑を見出した際は不意に鐵鎗の如きものを押し入れたら容易に採れる。何處の海水もこの方面で捕つてゐる。

中學生のこの榮螺、鮑採りが玄人跣足といふ域に達し、「學生さんには叶はぬ」といふ嘆聲さへ耳にするやうになつた。何しろ少い日で二三十多日日には七八十の榮螺を採つて、下級生に分配してゐた。私は特にこの潜水に熱中研究し、水中眼鏡も鼈甲縁で、空氣袋の附屬してゐるものを態々東京から取り寄せてゐた。

「オイ函莖は榮螺が少なうなつたから、白木沖へ行かうや」と白木沖まで遠征したのだが、學生の進撃に本業漁夫の繩

張りを荒らさるゝといふので「鑑札を持たぬ者は榮螺を採らさぬ」といふ抗議があり白木遠征は中止した。

海底の美観はいふまでもないが、眼前数尺の間に各種の魚が泳いでゐる、水族館その儘を見る壯観は潜水の経験者以外には知り得ないものであるが、同時に一度目を沖の海底に注ぐと蒼黒く、今にも怪物でも出て来ると思はれ凄愴そのものに怖氣づくのであつた。

それと二三町沖を汽船が航行する際、推進機の轟々たる音が鼓膜をうち、今にもこの汽船に衝突するかのやうにあるのと、潜水中に雷が鳴る、電光ピカツと一閃すればドス暗い海底もその稲光りにさつと明るくなる、同時に雷鳴が陸上に在る以上に固く耳に綿を充填してあるにもかゝらず、強く耳に響く事を思ふと、水が光りと音の如何に良導體であるかを感得さるゝのである。とに角海底にあつての雷鳴の物凄さ等は體驗した人は少からう。もし夫れ海底にあつて蛸入道の征伐、蛸を海中に追ふ壯快な場面等、正に一篇の海底物語に値すべき思ひ出である。

その後大分港も改築、擴大され、舊港の面影が無くなつたので、斯の如き「海底めぐり」等は出来ぬやうになつた事と思ふ。

福田平八郎君。平さんが今日の名を成したのも努力の資に

外ならぬ。

中學時代別に平さんが特別に圖書が上手だとも聽いてゐなかつた。水泳友達、遊び友達だつた私も其後消息を斷つてゐたが、大正七年京阪電車天満驛で學生姿の平さんに偶然會つた。當時京都繪畫専門學校に通つてゐたのだ。大正八年第一回帝展に「雪」を出し、翌年「安柘榴」が何れも入選、次の大正十年に出した「鯉」が特選となり一躍福田の名が喧傳され出したが、大正十二年には早くも帝展委員に擧げられて畫家として押しも押されぬ福田平八郎となつたのである。

私は友人平さんの逸話も知つてゐるが今更ら福田君を推賞禮讃しやうとはせぬ。邊幅を飾らぬ福田は今も尙書生つぽの福田そのものであり。言葉も多分に大分訛りを出してゐる。大家ぶらざる大家、畫家氣質の片鱗を現さぬところに眞の人間福田の生命があるやうに思ふ。

従て一劃一點の筆もゆるがせにせぬ福田は一夜づくりの濫作は一枚も出さぬ主義であり。何ものかに向つて一年々々々新開拓せんとする努力は繪畫の形式に於ては日本畫舊來の陋習を破つてゐる。中學時代から正直もの、福田は今に嘘の一つも言ひ得ず、創作に専念してゐる時に來客があつても「留守を使ふ」ことを罪惡かのやうに心得てゐる。

のつびきならぬ依頼をうけた二三十點の繪の約束を果すべく常に焦慮してゐるのを見ると多作家ならぬ福田に我等は同

情する、それだけ藝術に虚偽がなく、平八郎の繪が努力の結晶として歓迎さるゝ所以であらう。彼は暇さへあつたら一時間でも筆を手にして釣に出かけてゐるが必ずしも釣道樂といふのではなく、健康増進の方便にしてゐるのである。だが福田は魚釣りをしても何らか之によりて資料を得る事を忘れぬ男だ。問題となつた昭和七年の帝展「漣」にしろ昭和九年の六潮會第三回展の傑作「鮎三題」にせよ何れも漁業生活から得た收穫である。

或人が「彼は虚名の釣を爲さず」と評してゐるが蓋し彼の人格的の一側面を巧みに道破してゐるものと思ふ。大中が生んだ日本畫の第一人者として、飽くまで大中スピリットを忘れずに居る福田のため我等舊友は彼の健在を祈りたい。

## 母校雜筆

二十一期 住職 三浦魯一

軍神廣瀨中佐詳傳。この書は本校教諭小泉秀之助先生の執筆になるもの、廣瀨中佐傳中の白眉と稱すべきものにて小泉先生が舎監室にて執筆されつゝあるのを私は見た事もあり、其の時中佐の書簡等も先生の机の上に参考としてあるのを見

たのです。

濁流を泳ぐ。本校のことを一般讀物の單行本に書たのは本校出身で日本大衆黨の書記長をしてゐる麻生久君の「濁流を泳ぐ」と云ふ本が最初である、其中Aとあるのは校長安倍志摩治先生の長男で安倍忠君の事で同君はなか／＼文才があつて文章世界等に和歌を投じて居て國木田獨歩や「ツルゲネーフ」などの書物を読んでゐた。中學を卒業すると醫者になるために熊本の第五校に入學されたが不幸入學間もなく肺患のため志を遂ぐる事を得ず死亡してしまつた、死する數日前私の處に日記を全部送つて來たので、私は今に同君のかたみとして大切に保存してゐる、亦同君の書簡をも一冊にして私は保存してゐる、安倍君の早く死んだのは返す／＼も惜しい事である。

史蹟。母校附近は昔大友館の在つただけ非常に史跡が多い。岩藥師、百合若大臣碑、圓壽寺、寶戒寺、松榮神社、大友館、祇園の西の方の丘つゞきは横穴が澤山ある。

三浦梅園。津田純一校長はよく講話の時は三浦梅園の地動説や價原などを材料として梅園の偉大なる事を賞揚してゐられた。何分まだ郷土史研究熱がさかんでない時で梅園全集が發行されたのはそれからすつと後の事である。津田校長の後に来られた安倍志摩治先生も東國東郡武藏村の御出身であつたから梅園先生崇拜者であつた。大正天皇陛下が皇太子でお

在せし砌本校に行啓あらせられし折台覽に供したのであつたと思ふ。梅園の言語等の草稿本を校長宅で私は見た事がある、なか／＼梅園先生は文字も眞面目に書かれてあつた。

山田小太郎先生。英語の先生で「居合ぬき」を毎朝なさるゝ處にこの先生の風變りの一般を知るに足る。一生無妻でお通しになつただけに極めて性質も淡泊にあらせらる。本校に十年以上も勤続されたが、其の後も山田先生に教を受けし生徒は崇拜して居る、大分中學は教員排斥の紛擾もしば／＼あつて明治三十五年頃までは夫れ相當に亂暴な生徒もあつたが山田先生は體力も充分であつたので生徒も山田先生は馬鹿にする事はなかつた。威あつてたけからずとは山田先生の如き人を云ふのでせう。

片田徳郎畫伯。霹靂、夏山急雨等の幾多の傑作を残し最期を遂げし片田徳郎畫伯は天才肌の人であつた。中學時代寄宿舎生で私の部屋に来て私等が苦心して鉛筆畫を書てゐると片田さんが傍から面白半分苦もなく鉛筆を出せと云つて私の持つて居るのを取り描いてくれた、松本古村先生門下からは相當の美術家を出して居る、私の知れる範圍でも故片田徳郎さん、片岡角太郎君、吉田毅君、福田平八郎さんなどを出した。吉田兄の話では片田さんは藝術家肌の人でいやしくも畫家は金銭のために畫てはならぬ、自分の氣持が乗つて來ねば黄金のために畫てはよくないと常々云つて居られた相だ。

忠孝。母校正門を入るとつき當りの二階の講堂に朱子の忠

孝二字の大文字のスリモノの額がかけてある。忠孝の二字は學校にふさわしき字である、且スリモノとはいへ朱子と云ふ大家のスリモノであるから所謂名士の肉筆にまさること萬々である、私はよし講堂の室は變つてもあの額をかけて置てもらひたい。

豊山豊水生傑士。この七字の額が柔道室にかゝつて居た。たしか講道館の加納治五郎翁の筆と思ふ、いゝ句と思ふ、田村守衛さんが寄贈とうす覺えに覺えてゐる。或年の武術大會に今は大阪に居らるゝ石丸兵内君と私が撃劍の番組になつて居た、日常點取主義でろく／＼稽古せぬので双方共耻かし相に出た、勿論お面をかぶつて居るから素顔よりはよい、やがて仕合となつた、双方無茶になぐつて勝負がつきさうになり、しばらくして勝負ありと云つたので、止めたが、もう頭があつくなつて居るのでどつちが勝つたか分らぬ、そうかうして居る中に私が勝つたと云ふので賞品を氣の毒そうにもらひに行つて、其賞品は植物の本で松村任三、齋藤其共著の一圓内外のものであつた、今では武術の點取り主義でろくに稽古をせぬ生徒はあまりありませんまいと思ふ。併し私の時分にはそういふ滑稽な仕合を大會にする二三組がありました、おかげで私は撃劍も柔道も本物にならずに終りました。

田能村竹田。私共の歴史の先生に大島支郎といふ人があり

ました、號を豊南と云ひ詩や南畫の初歩を畫いて居ました、なか／＼話の面白い上手な人で歴史の時間には時間の經つのを覺えぬ位でした。後田能村竹田に關する編著を作り竹田に就て文献上先鞭をつけました、今では竹田の研究はさかんで「山陽と竹田」と云ふ月刊雜誌もある位ですが未だ其の時分まではまとまつたものはありませぬでした。又南豊の有名な詩人の作品を集めて「南豊名家詩選」と名づけて世に公にしました。此の著がなか／＼いゝので、今でも私は良書として郷土史上重く見て居ます。今では郷土史研究熱が盛んで新進氣鋭の研究者がありますが、其の時分は鶴谷佐藤藏太郎先生が大分町に居られて獨り舞臺の觀がありました。

## 追 想 記

二十二期 住職 大神 晃 憲

團體マラソン……第二十二回から第二十六回までの卒業生で、寄宿舎に居たものゝ、アルバムには明治四十二年の初夏、別府南小學校庭で撮つた色の褪せかけた大形の寫眞がある筈だ。これぞ初夏の生氣發瀾として上野ヶ丘に漲る時、舎生全員百名を四班に分けて、大分、別府間三里を團體マラソ

ンで走破した時の記念である。

マラソンといふ語を耳にしはじめてあまり間もない頃であつた。毎年一回の親睦旅行をマラソンで別府まで走つて行かうといふ議が四・五年生の間にもち上つた。早速舎監の先生にもち込む。先生もその意氣を壯として、決行することになつた。しかし學年の差ある百名を個人別にやるのでは、具合が悪いといふ處から、各學年をそれ／＼四分して、白、赤、青、紫の四班とし、これに五年生が班長となつて、先頭に立ち、舎監の先生がそれ／＼の組に腕車で附添ひ校醫辻先生が同じく腕車で、各隊の後に先になり進むといふプラン。出發點は今の合銀前のあたり、電車の終點。

抽籤できまつた順次によつて、一定の時間をき電車線路に沿ふて進み、別府の決勝點に到着までの時間の長短によつて勝を決しようといふのである。筆者は正にその白組の班長、標旗を手にして先頭に立ち、われこそ最長時間に走破せんものと意氣實に天をつくものがあつた。堀川、カンタン、白木、田の浦と白シャツの一隊は、沿道の人々が驚異の眼をみはつて見送る中をひた走りに走る。一里、一里半、漸く疲れのいろが見えはじめる。

高崎山も豊後灣もこれを楽しんで眺める餘裕がない。……：「この組が一番遅いぞ。」……：電車の線路工夫の聲がきこえる。

先き程から一隊の中からも、少しスピードを出さねば遅い、といふ聲があつたが、奈何せん、この隊長五年生中で、最も短身で、最も弱い體の所有者である上に、班長としての責任上、少々スピードは落しても全員揃つて、堂々と決勝點に入りたと思つた。それは大部分の到着時間は速くても、幾人かの落伍者があれば、一人につき五分間を加へるといふルールがあつたからである。それでも高崎山をめぐつた頃からは、一隊期せずして、ラストヘビーに入つた。眼がくらむ、足がひきつる、淋漓たる流汗をぬぐひもあへず、最後の頭張りを見せながら、兎に角、眼さす南小學校に入つた。グツタリと校庭の草に腰を下した時は、まだ正氣丈けはあつた筈だ。果して、その夜、旅宿で等級發表にあたり、わが白組は、四組中の第四等の成績といふことに一同歡喜の聲を上げたのであつた。

その時の姿をそのままの寫眞がこれである。

見よ、その意氣軒昂たる面々の勇姿を。

英語の大島教頭先生、舎監長で數學の村上主一先生をはじめ、物理化學の村田先生、數學の江藤豊吉先生、地理の吉田先生、英語の箱島先生、體操の屋形先生、辻校醫先生と、いづれも思ひ出深い諸先生を中心に五年生の天下わがものといつたやうな顔、一二年生のあどけない紅顔、とりくくの顔が、頭に制帽をいたゞき、白シャツ(ネルの縞が十七)の胸中

を黒の兵古帯で締め、半ズボンに脚絆、足袋洗足といふいでたちである。

この中で加藤成己、幸野不二男の二君が醫學、金丸精市君は鳥取縣立の農蠶學校長、安部百老君が大分荷揚小學校長、仲摩奈良門君が朝鮮は國境に臨んだ新義州で道視學、一萬田尙登君は日本銀行の調査役、繪の管一郎君、甲斐肇、同致兩君は揃つて製絲工場長、筆者の親友藤本修二君は法學士で實業等々、皆うらやましい出世振りだ、二十七年目の今日祝意と敬意を表はすと共に、一方有爲の材をあたたら故人となつた、三ヶ尻敬喜、内林董、吉川涉、小手川次郎、岡本俊吉、指原好雄、日野留、筆者の刎頸の友佐藤武雄の諸靈に深甚の弔意を捧げるものである。

忠告……「おゝ、こんばん忠告があるちゆうぞ」「や!!」色をかへて、やんわり机に倚つた。眼は書物に落してゐるが、頭に入りやうもない。松坂様の松吹く風がものすごく身に沁む。

異様な緊張が寄宿舎をつんで、氣味悪く夜が更ける。一二年生全部がやられるらしい。

何番目かに、前の部屋の障子が開いた。「Sが呼ばれたらしよ。」

二階から怒聲、罵聲が交々夜の静けさをやぶつて聞える。Sが、猫ににらまれた鼠のやうになつて、坐つて居る姿を想

ひながら氣の弱い二人は時々顔を見合せてにやりと苦い笑を交す。

足音! あゝ遂に來た。

障子が開いた。

「K來い。」屠所にひかる、羊の如く、それでも男らしく思ひながら、冷たい廊下を二階へと行く。

世の中が急にぐらくなつた。何といふ恐ろしいことか。ふるふ手足ではあるが、思ひ切つて障子を開けた。ズラリと並んだ恐ろしい顔、顔、一人一人の前に置かれた据ランプの列、重くらしい雰圍氣が苦しい程壓迫を感じる。

「眞中に坐れ!」

頭がカーンとなつて、誰の聲か判別がつかぬ。「貴様は朝上級生に禮をするか。」

「ハイ。」と返辭はしたが恐らく皆には聞えなかつただらう。

首をうなだれて、涙もろい眼ではあるが、その涙が不思議に乾いて了つてをる。

「天氣を見りやせんか。」ことさらに怒りをつけた聲だ。

ちよつと意味がわかりかねたが、相手によつて、敬禮をせぬことがあればせぬかといふ意味であることが坐つてをる間にわかつた。

いよゝゝ、ちよみ上つた。次はどんな罵聲か、鐵拳か、あ

ゝ、故郷の父よ、母よと、心に念じながら、たゞだまつてをる。と、次の聲が聞えた。

「Kは禮はようするぞ。」罵聲と思ひの外、それは援護の聲である。その聲の主は同郷の特待生、Nさんである。しかもその一聲に満座聲をのんであとは一語もない。心臓にちよみつた血が一時に全身に向つてほどばしつた。眼頭が急にうるんだ。

「もうよからう。かいれ!」

しびれた足をひきすつて、部屋を出た。ホツとして、Nさんを心の中で拜みながら、自室に歸つた。

忘れ得ぬかすく……「思ひ出の糸を手繰れば七色の色次々にうつくしきかな」

津田校長先生の威容。村上先生のチョコカク三カクケイ、板書の文字、ヒゲ、化學實驗の授業中、雑巾で顔をふく村田先生。

三浦國語先生の兩端を針の如くもみたてた素破らしく手の入つた鬚。行きちがひに當る香水のほひ、教科書そのけの面白い餘談——その餘談が生徒をひきつけてゐた。兵式の岩本大尉先生、竹下先生が轉任の際、生徒に遺して行かれた一語「ツニーアーベスト」

荷堂先生が補缺で話された一時間の講話——その後先生の補缺を希つたが遂にその一時間きりだつた。下村御鋏先生の

漢文、鉛筆をなめてエンマ帳に書き込む手つき。  
書記室の窓から顔出して小使を大聲で呼ぶ園田大人。  
ラツパの後藤フニヤ公。小使の貞公。  
島村のおいさん、おばさん。  
洗濯屋の龜公、角ん店のぢい。  
クリクリ山、その麓の井戸に顔洗ふ夏の朝。  
夕食後の松坂様の松林の逍遙。『思ひ出は盡きず二十七年の昔にかへり心若やく』

## 思ひ出三題

二十三期 藤本修二

寄宿舎生活八景 ① 點檢 ② 冬の寒い朝、まだほの暗い内に、點檢ラツパで始めて飛び起きて、寒さうに廊下に整列した皆の顔。之も寒さうな舎監の、而かも寒くなさうにした態度。弓張提灯をかざした週番部長。號令をかける各部々長等々、あの廊下も八景の選に漏れてはならぬ。

② 食事 ③ 一年の時は、朝、兩方に席を占めた上級生に味噌汁を適當に廻さねばならぬ始終注意してゐなければならぬので、おちついて食事も出来なかつた。後、一二年すると子

供が其頃の私の年頃になるのだが、自分の子供にあてはめて見ると、痛々しいものゝ限りだ。然し、あの味噌汁はおいしかつた。

③ 散歩 ④ 夕食後、三々五々散歩する。運動場わきの松原は又とない散歩場だ。或夏の夜、蒸暑くて眠れないので、押入れの戸をばづして、あの松原に敷き、蚊帳をつつて友と二人、寝たことがあつた。又或時、卒業した先輩で、美術に志してゐた人があの松原はづれに三脚を据えて靈山を描いてゐるのを最後迄見てゐたこともあつた。

④ 自習時間 ⑤ 人里離れた一軒家（と云つても三棟の寄宿舎と其附屬屋があり、人も大勢ゐるのだが）が祇園さんの松山を背景に、靜かに、闇の中にそり立つて、其二棟の窓から（其頃は二棟しか使つてゐなかつた。）燈火がぼんやり漏れてゐるのも又畫になると思ふ。尤も其頃はあまり勉強家がゐなかつたので、夜三時間の自習時間を完全に机の前で、費やす人は少なかつた。

⑤ 忠告 ⑥ 毎學期一度、定時に「忠告」といふものがあつた。四五年の人々が綺羅星の如く居並んで、其中に三年以下の生意氣なのを呼び出して忠告するといふ寸法である。障子を開けては入ると、「後をしめい！」。其處に坐ると、「もそつと前に出い！」。之では丸でお奉行様のお白洲のやうだが、まあ之に似た白科があつて、さて「き様生意氣だぞ」。「お前は今

朝禮をしなかつた」等、甚しいものになると「味噌汁の取つてくれやうが悪い」といふものもある。

⑥ 親睦會 ⑦ 學期一度の親睦會には各學年で何かしら藝をしたものだ。私共の組は藝人が多かつたので、中々熱心だつたが、少々あくどかつたと思ふ。今でも頭に残つてゐる出し物は第二十回の人々の「後の西郷」と二十二回生の「勸進帳」。之は教科書を臺本にしたのだが、よくあれ丈出来たものだと思ふ。

⑦ 小春 ⑧ 試験前になると、よく勉強と稱して祇園山に出かけた。友達に愛禽家がゐて、小鳥を捕るといつて、林に囲まれた數坪の平地の枯草の上に腰を据えて、書物はそつちのけに、をとりや打づめを注視した。之なんか少年期の思ひ出として、確かに畫になると思ふ。秋、運動場の寶戒寺寄りの櫨の木に百舌鳥がよく来て鳴いた。

⑧ 日向ぼつこ ⑨ 四年五年の寮舎を一部と云つて（其頃は靈山寄りの一棟の二階）ゐたが、此二階の窓下にある庇は日向ぼつこにあつらへ向きであつた。一人二人出ると後から後から十人餘もずらりと並んで、馬鹿話をしたものだ。秋にはつひ眼の下の庭園は荒廢して、それに野生のコスモスが咲き亂れてゐた。

以上。あまり優秀な生徒でなかつたせい、か、こんな下らないことばかり覚えて居ります。

後藤ラツパ手 ⑩ 第十一回の或先輩のお話して、或年、ブリタニカを寄贈するつもりで、學校に行つた時、門前で車を降りるとすぐ會つたのが後藤君で、あまりのなつかしさに、「後藤！ わりやまだ居るか」と言つたら、後藤君は「まだ生耻をさらしてゐるか」といふ意味に感違ひしたらしく、「後藤、まだ居るかとは何か」といきまいたさうである。

さうすると、あの後藤君は第十一回の人々の在學當時から、二十三回の私共の時迄、少くとも十數年ゐたわけである。此人は門衛をしながら、ラツパを吹き（其頃迄、時間々々の合圖は總てラツパでやつてゐた、其ラツパに生氣がなかつたので、生徒は此人に「フニヤ」といふ綽名をつけてゐた。）又時には門衛詰所を職場として、寄宿生の散髪をしてゐた。

三四年前の夏、卒業して凡そ二十年ぶりに學校に行つて見ると、休暇中のことゝて、誰もゐない。校庭の様子も大分違つてゐた。故のまゝ古びた銃機庫が開いてゐたので、其方に行つて見ると、後藤ラツパ手がよぼ／＼のおぢいさんになつて、一人淋しく銃の手入れをしてゐた。かゝる時、誰でもいい、故の知人に會ふことはうれしいことである。「後藤、わりや、まだ、まだゐるか」と言ひたい所だが、前の話しを聞いてゐたので、今度は怒られないやうに、丁寧に「後藤さん、暫く」と挨拶したところ、「あんたもし、どなたですかえ」と

私の顔をしげくと見た。眼も大分うすいやうであつた。〇〇、寄宿舎にゐて、よくあなたに頭をつんでもらつてゐた。〇〇です。「〇〇さんといふと××から来たか?」「へえ、そうじや」「〇〇さんにや、二人あるがどつちかな」とのこと故、弟の方だと答へたら、「へえ、さうですか、さうですか」と老をかこつのか、懐舊の情にたへぬのか眼には涙をたゞへてゐた。

今も尙、ゐるかどうか知らないが、此時迄既に三十數年、或はそれ以上も勤めた事になる。此永い間、中學生から大人に變り行く様を幾人も幾人も見て来たことであらう。かうした意味で、先生が一つの學校に永續出来にくい今の制度の下では、此人なんか、尊いものではなからうか。

角、ちい、其頃、町から學校への本道は、外堀から眞直に上野の丘につき當る道路が、避病院の横手を通つて、山にかゝると、右手に焼場を見ながら、よく猛死のある堂の下で、少しく左にくねつて、又右に廻つて、竹藪の多い上野の部落に入り、暫く行くと、駄菓子屋の前で直角に左折し、又右に折れて校門に達した。」

此角の駄菓子屋は一般に「角んちい方」と呼ばれ、駄菓子の外に酒、煙草、味噌、醤油、豆腐、油揚等を賣つてゐた。此家の主人は元、學校の小使か、賄方をしてゐたらしいが、「矢口の渡」の頓兵衛の如く、一克で、きかぬ氣で、ガツツリし

てゐて、それでゐて親しみのもてぬこともない、面白い風格のおぢいさんだつた。

寄宿舎の生徒も通學生もコツソリ此家に行つて「銀棒」やら、「羊羹」やら、時には油揚を焼いたり、豆腐に其まゝ、醬油をかけたりにして食べたものだが、あまり澤山たべすぎる、「親ンゼニゼ、ソゲエニヨケイニ」と叱つたものだ。或男が福壽草の五匁袋をくれと言つたら、「コリヤ、ワレタチ、買つてもらをうと思ふチ、仕入れたんぢやねえ、書生のくせに贅澤じや」と言つて賣らなんだ。誰に買つてもららうつもりかと聞いたら、此頃、此邊に何かの土木工事があつて、土方が入り込んでゐたが「土方サン」に買つてもららうンジャ」とすましてゐた。

此ぢいさん、お客サンの誰にも敬稱をつけたことがなく、皆呼びすてど、然かも概ね、例へば「マツサダ」を「マキサダ」といふが如く少しづつ讀み違へてゐた。

他の菓子屋は時々、寄宿舎に借金とりに来たが、此ぢいさんはよくくでなければ來なかつた。借金があつちや此家の前を平氣では通れまいといふのが此人の哲學であつた。

私共が卒業して一二年後、或夜ボツクリ死んださうだが、其夜、おそく迄かゝつて、貸金や其他の整理をチャーンとしてあつたさうだ。あんな一克な風格の人には自分の死期を知一種の悟があるのではあるまいかと、其話を聞いた時、ヒ

ドク感心したものであるが、今でも色々な思ひ出の内、忘れ得ないもの、一つは此「角んちい」である。

## 明治より大正へ

二十五期 海軍主計中佐 宮本 正光

私は明治四十一年の四月に入學し大正二年三月卒業致しました。在學中の思ひ出は幾多楽しい幻想となつて三十年近い昔のさまが今なほ眼前に去來します。その頃はまだ大分も大分町の時代だつたと思ひますが、鐵道が私共の四年生の頃開通した位ですから略ぼ想像されませう。實際如何にも平和な靜かな田舎の城下町といつた感でした。

私は別府より毎日電車で通學してゐましたが別府よりの通學生は相當澤山の數でみな電車でした。發車間隔が二十分位でしたから一つ乗遅れるときまつて遅刻してそれが時によると連日といふ有様で私共別府からの通學生は先生からよく叱られたものでした。時にはそのまゝ、缺席して長池の方に耐捕りに行つて大目玉を喰つたこともありませう。大分の電車終點から郡役所の前を通つて右折し眞直に町を外れると右手に地方裁判所、左手に高等小學校が見へて、遙か上野の山まで兩

側は田圃や畑でその途中には避病院の建物があるばかり廣々としたよい景色でした。山の手から間道の山路を行くとそこは麥島があつて菜種が咲いてくつきり浮んだ寶戒寺の山門——春はのどかにのびくしたものでした。大低は黒服に下駄ばきで兵式教練の時だけ靴にゲートルをつけるのが例でした。雨降りには跣足といふ随分亂暴な話でした。

晝飯の辨當は友達と運動場の草原に寝轉び乍らたべるので辨當の箸は側の竹藪から笹の小枝を切つて毎日自製するものでした。お茶代りには運動場の隅にあつたクリクリ山の深い車井戸から汲んで生水を飲んでゐました。雲雀は空に轉つて暖かい日さしの下で他愛もない雑談に夢多き青春を謳歌したものです。水泳が始まると函館の港まで毎日上野から一里か二里もある道を、蓬萊駄ノ原と炎天の街道を歩きました。電車は今の汽車のやうな定期券ではなく、毎日の日附がはいつて——一ヶ月二圓七十五錢でした——一日一往復きりなため水泳がすんで別府へ歸るためには餘儀なくそうしたのでした。學校も父兄もそんな事の世話に比較的無關心だつたのでせう。生徒のため電鐵會社へ交渉してやるといつた事がなかつたのと思はれます。

秋の修學旅行は楽しいものでした。一年の時は別府鐵輪地獄めぐり、二年は戸次吉野の梅、臼杵佐賀關でした。その時附添の先生が箱島といふ方でしたが臼杵から佐賀關への航海

中「海原に誰が産みにけん三つ子嶋乙姫様の腹を痛めし」と即詠されたのが今でも忘れずに頭に残つてゐます。三年の時は宇佐、中津、耶馬溪行。宇佐から中津までの汽車は生れて初めての経験でした。四年は宮嶋、廣島、吳、江田島、松山、道後でした。海軍志願の種はこの時時かれたわけです。五年の時は即ち明治四十五年でその七月には突然の悲報わが國上下擧げて哀悼せし明治天皇の崩御——世は大正と改元されましたが、あの時の胸を衝く悲みは今猶ほまさ／＼と思ひ出されます。その十月の旅行には京阪神、奈良の巡拜となり伏見桃山の新御陵に頼いたのでした。斯うして在校五年の後なつかしの上野ヶ丘にさらばを告げた、二十五期生は六十名もありましたが、東に西に散つて烏鬼匆々早くも二十有五年の過去となりました。

當時は中津、宇佐、杵築、臼杵、竹田に中學がありました。大分中學は主として大分附近別府出身の者で東國東や南海部も多かつたやうですが、勿論其他の各郡からも若干ありました。鶴崎あたりの人々は毎日二里もあらう處を歩いて通學してゐたやうで、總じて當時は何事にも素朴簡素質實剛健といつた氣風でした。柔道の道場に豊山豊水生傑士といふ扁額がありました。無言の靈感にうたれたものです。

思ひ出は綿々として盡期無しですが、茲に創立五十年記念祝典を迎え、われ／＼籍を一度あの端麗な構造美を持つ上

野の校舍に置いたものは郷土地方はもとより全日本、はては海外に在つても懐かしき追想に耽り、母校の將來の發展を冀つてゐることです。われら二十五期生で東京に在住する者は約十年前から「くりくり會」といふ會合をやつて、交情愈々密なるものがあります。いつ會する時でも母校や級友はた郷土の話の出ない事はありません。茲に級友諸兄と共に母校の萬歳を三唱する次第であります。

## 懐 舊

二十六期 東京高等商船教授 小野 奈良治

今年の五月であつたか、同窓會の用務を帯びて安東、小幡兩氏の東京を迎えて大中同窓會の會合が催されたのであつたが、二十九回以上が第一日とし、以後は第二日と定められた。私は二十六回なのでやつとこさと第一日に這入れた譯だつた。翌日の會には番外として出席したが此のときは古額だつた。兩日の會合に出て見て第一回の綾井大先輩から今年出た人達までを數えて見ると——成程大中也古いもんだと必み／＼思はせられる。同窓會ではまだ中堅處の私達でさえ、上野ヶ丘を去つても早二十餘年を経てゐる始末だ。

## 第一部 先生の巻

一、安倍志摩治校長……私達在校五ヶ年を通じて公私すいぶん御世話になつたものだつた。毎年運動會の日の夕飯は慰勞の意味で校長のお宅で御馳走になる慣例があつた。當時の方々はおぼえてゐる事だらう……が何でも大正一、二年頃の事かと思ふ。例の夕飯に招かれてズラリと並んだ羅漢様は其數二十名を越えて居た。所謂「五目飯」にお汁と云ふ御馳走なので、晝間からの運動でお腹は空き切つて居る、「何卒ユツクリ喰ひ給え」と云ふ校長さんの御挨拶を待ちかねて總員「打ち方始め」だ。やれお代り、それお代りと矢繼早に攻め立てるので、お給仕役のお嬢様方は汗ダク／＼の態……先づ第一にお汁が不足したらしいが此れに何とか間に合せたものゝやがて飯櫃が不足を告げるに至つてトウ／＼白旗「暫らくお待ち下さい」と來たので一同ひそかに顔見合せて快心の笑を漏らしてゐる、——一時間もしてやつと出來上つた御飯を又一齊攻撃で平けて終ひ引き下つた始末、流石の校長さんもビックリされた事と思はれる。

二、渡邊馨先生……一年から五年に至るまで渡邊先生は私達の英語の先生であると同時に受持教諭でお出でたので、随分些細の點まで御世話をして戴いたものだ、在校中の此の親密さが後に實を結んで大正十四年頃渡邊先生の御上京

を機として私達のクラス會が生れて在京十數人の結合が出来た。運動場の東北の隅に在つた「次郎坊、太郎坊」の古事にちなむ小丘（運動會の度毎に大砲を此上に引き揚げては發砲してゐたものだつた）の名を取つて「クリ／＼會」と命名、爾來先生を中心として愈々結束を堅くして來た、今年の五十周年を記念して地元にも「クリ／＼會」を組織して此處にも十數名の會員を存する事となつた。

## 第二部 先輩の巻

一、後藤さんと長野さん……明治の終りか大正の初頃かと思ふのだが、或日講演會が開かれた辯士は其當時大學を出たばかりの後藤文夫さんと同じく高商を出たての長野晋治さんのお二人……ザンギリ頭でカスリの着物を着てまだ書生姿其儘の後藤さん「豫て自分の平常の心得と致してゐること」と前提して質實剛健の必要について力説され、又長野さんはチャンと洋服を着けて紳士然として南洋視察談を爲さつた様に記憶してゐる、お二人の御講話の主旨は右に述べる通りウツスラと憶えて居る程度だが講演の後、部長の荒金整門先生に「人の講演ある時にお前達は何故居眠つたり、笑つたりするのかツ」とコツビドク叱られた事のみは今尙明瞭に覚えて居る。

二、久留島武彦さん……「私が門を這入つて來ると（ヤア、ハイカラ！）と怒鳴るのが聞えた、侮辱も甚だしい、私は



直ちに踵を返さんとしたのだが……」これが久留島さんの講演の第一語だった、大正一・二年頃の事、何でもハイカラと云ふ言葉が流行しはじめた頃のことだつたらう……だが私にとつては懐かしい母校なので遂に此の演臺に立つた」のでネルソン提督の臨終の言、臺灣の話等とても面白い有益な話をして下さつた。

“England expects evlyman will do his duty”  
ぞつとするケーブホーンの冬の月

椿の上をトンダリハネタリ

と云ふのを二十年後の今でもハッキリ覚えて居る。

三、堀吉彦さん……これは大正三年、私達がヘットクラスの時に大中名物である、吉例學校騒動（そんなものは今は無いでせう）を始めたのだつたが此のとき公務で來分中の當時參謀本部に居られた堀少佐（今の少將）が來校された、そして御講演——が此のときは暗に輕學盲動を諷しめられたものであつた、當時諸先生や親達の意見すらも無視し勝であつた私達も堀少佐の情理をつくした而も極めて圓曲な御訓戒にはスツカリ參つてしまつて反省させられる事が多大、遂には學校の爲にも生徒の爲にも好結果を齎らしたのであつた。

第三部、同僚の巻……を書かんとして紙數と時間とが盡きた、惜しいが又の機會に譲りたいと思ふ。

私は以上思ひ出したまゝを書いた。先生及び先輩の事についてはまだ數々の思出を持つて居るがそれ等は他に人もある事であらう。

明八日を以て私は北米及び布哇方面に旅立つ事となつて居る。遙かに大中五十周年の盛會を祝すると共に同窓會の愈隆昌あらん事をお祈りして止まぬものである。

（昭和一〇・六七）

### 君は志望選擇に迷つて居るのか

二十六期 陸軍砲兵少佐 山崎周一郎

○當り前じやないか自分の一生を決めるんだもの。「曰くその通り」

○少佐殿だつて迷つたのかつて「曰く然り、大いに迷つた。法律學徒か採鑛冶金の鑛山屋にならうとしたが、不圖したことから、否試しに受けた陸士の試験が通つたのでツイこんな軍人になつてしまつた。今更大いに後悔してゐる。」

○思ふ所に行きたいが親が許してくれず、殊に學資がないじやないか「曰くそれは大問題だ。親が許さぬといふなら君の才能なり性格なりが餘程それに適して居らぬ限りめめた

がよいね。その代り自分の進む道はこれ一つだと思つたら熱で動かすべしだ。學資の問題は小生が啄を入れる資格はないが、樂に學問を仕様と思はぬ限り、また君の人物次第で何とかなるよ。」

○若い者に功名心のあるのは當り前じやないか、そして同じ努力するなら努力し甲斐のあるものになりたじやないか「曰く無理からぬことだ。しかし華やかな職業に就いたからとて必ずしも功名心を満足させることは出來ぬもので、一方どんな仕事をやつても功名心を満足させる機會はあるものだ。そして努力して努力し甲斐のない仕事といふものは決してないから心配御無用。」

○時流に投じたいじやないか「曰くその考へが一ばんいかん。好景氣時分に實業家を志望しても學校を出る頃は不景氣になるかも知れんし、戰爭熱のとき軍人になりたがつてもやがて泰平になつて後悔するかも知れん。同じ時勢を考へるなら少くも十年先のことを考へべしだ。」

○いゝ先輩があるから引を待つんだ「曰くその考へも感心せぬ。縣出身の政治家が揃つて檜舞臺に立つたり、母校出身の美術家が二三人一度に名を揚げると直ぐその引でも蒙る様に考へたがるが、直接自分を引いてくれるのは五年か十年、せいゝ十五年前の先輩位で二十年も三十年も先の人は大概自分には縁のないものとあきらめるべしだ。」

○自分の頭に自信がないじやないか、試験の結果も豫側出來んじやないか「曰く泣言は止せ。世の中は死ぬるまで競争だ。競争が嫌なら總ての志望は捨てる。自信のないのは努力が足りんだ。努力が足りんのは意志が弱いのだ。正々堂々と勝つまでやるべし。一年二年が何だ、五年十年生き延びるんだ。高橋藏相は後藤内相のお父さんよりも更に年上だ。」

○身體が悪いじやないか「曰くそれが先決問題だ。健康は萬事の基だ。前述の如く一年二年を急ぎ給ふな。攝生と鍛鍊を重ねて將來の大努力の資本を先づ作ることだよ。志望なれば大なるだけ先づ身體を鍛へてくれ給へ。無言失敬

——昭和一〇・六七——

### 寮舎の窓より

二十七日 滿洲國大陸科學 北田正三  
研究所地質部長

休道他郷多苦辛、同袍有友自相親……。朗々たる微吟の聲、校庭の梅は荒され盡し、麥は既に利鎌を待つびわ色。彌榮神社の松林は寶戒寺の竹林をなびかせて吹きよせる青嵐に黄いろい花粉を紛々又紛々……

ジーン、ジーン、ジージー、のどかになき出す松虫の眠たさ、本宮、靈山、熊牟禮、遠く久住連峯がブルシアンプルールの烟れる空に淡い山姿、廣瀬橋畔の村々は水ひたひたの苗代と新緑でグリーンペールの一色。

之は今も私の網膜に蘇る二十餘年前、上野丘の初夏の點描でなつかしい昔の懐いである。

三棟の大きな、九州でもこんな大きな寮舎をもつ中學はなかつた、それに學校の異風。生徒の氣概。先生方の意氣。其の頃の大中は秀才教育ががちりしてゐた。

縣下は勿論、縣外から多く校風と學風を慕つて就學したので入學難もはげしかつた。而も全校四百たらずの生徒はのんびりしてゐた原級に止まる人の多かつたのも景色の一つ、中には十年生なんかの豪者も居た。

寄宿舎の寮舎は、百二十を越え、殆んど田舎から出た人々今考へると笑話のやうだが別府の一黨は強制入舎であつた。凡てが海軍兵學校式の大分中學。まして其の異色のあつた寮舎生活には珍話奇談が多かつた。

寮舎の一日は西南役の生残りと聞かされた後藤喇叭手のカン高い吹奏起床に驚き、クリ／＼山の井戸で洗面、まだ電燈のなかつた當時一日の疲れで早く吹けかしと願ふ消燈喇叭にランプを消した。油札片手に油倉の前で一列縦隊、一枚一合を渡された事など今の學生は想い至らぬ境地である。

試験勉強の猛烈な競争、石油箱や本箱に羽織をかけてラン

プと頭をつき込んでの徹夜、起床喇叭に驚いて眞黒にすくけた顔でしかも袴は前垂式にく／＼りつけてよく點呼に走り出たものだつた。而し乍ら點呼官M先生もあの物堅いに似ず時々あわて、着物を裏がへしに着込んで肩あてが白く四角に背にあるのも御存じなくすまし込んで、皆がしのび笑ふに憤慨されて「ナニガ、オカシ、ナニガ」とライオンの如くにがり切つてをられた御顔が今も忘れ得ぬ一つ。

ほとんど上級學校に行けた、又社會に出てもすぐ就職の出來た其の頃の中學生は幸福であつた、席順はビリでも村へ歸れば青の三筋がすばらしくハ、をきかす、社會の人も亦尊敬してくれ愛してくれた。

其の昔 皆郷里では級長で秀才揃のものばかりであつたから比較的のんきでもあり又腕白は通越してゐた。芋堀り、柿もぎ、など朝飯前、今は時めく五郡の銀行頭取殿等とよく豆もぎに出掛けて陽炎のゆらぐ上野臺のトーマメ畑にしやがんだものだつた。校門前のヲタツバ、之は親しすぎての呼び名で決して卑下ではなかつた、此の人の良い老婦人の事も想ひ出の一つ、厄介を懸け放しの人々の如何に多かつた事が馬の何とか云ふアン巻、キン棒、六方焼などの昔の味のなつかしさ、うれしさ。

私は昨年、蒙古邊境で時々護衛の兵隊が鐵兜で水をくみ、

それで食物を調理するのを見て、嘗つての上野寮舎でやつた、トタンの洗面器利用のゼンザイ、ダンゴジルの味を想ひ出し微笑んだ事があつた、其の親分は今佐伯近在で福徳圓滿な名ドクトル、Hさんであつたと記憶する、K畫伯など佐伯一黨の人々の親分であつた想い出を胡沙吹く多倫の寒空の下でしみ／＼遙かに追憶した。あれこれと、上野寮舎の想い

出、大分中學、明治末期のあわたしい過渡期の生活、ハルビン驛頭、伊藤公の悲報を聞いて社頭の夜半友と泣き、吾等も亦一死君國に報ずべしと結盟の約、講談部の席上「英雄の末路は華かなり」など熱叫する友の姿、兎追ひ、遠泳、先生引卒の活動見物、膽試し、等々今から想へば確かに變つてゐた。

何でも大中、何でも大中、人に負けるな、ドテ石、クライツケ、などと所謂、豊後魂で凡ての試合に、競争に、必ず勝つものと極めて居たから物凄。黒帯の猛者、赤紐面の豪者、劔も、柔も、縣下を壓してゐた。ボールもすぐ喧嘩になつた、相手の師範こそ迷惑至極であつたらう。

凡てが腹の訓育、人の養成に當られたA校長、M數學、M化學、A博物、Y體操、F將校、H歴史、N擊劍、T柔道、S體操劍道、S漢文の老先生、などの諸先生、初めて來任された小さなA先生、而も眞先に私は教室で叱られて吃驚して畏れ入つた今も懐かしい先生。小使部屋に入つて叱られたS

書記先生。溫柔なG先生、Y英語の先生から聞く刀劍の話。板碑の考古學的説明を聞いたM國文先生、など數へ來れば今も向心眼に一つ／＼の印象が浮ぶ、そして有難く思ふ。感じ來れば春秋二十餘年、國に盡すの薄く、母校に報ゆるの輕きを省みて嘆く。昔男なりけり。

寮舎の窓に足を垂らして、微吟して止まず、嗚呼、其の十分の一にも足らずして週々として爲すなき男一匹の今の我。されど上野丘を想へば又熱情は燃えて火となる。母校の賜と遙かに合掌す。

(二五九五・五・一〇、多倫より歸郷、阿蘇聖山莊にて)

## 恩師のおもかげ

三十期 別府市 永井清一

思ひ出の母校に開校五十周年といふ芽出度い歳が回り來つた。去る六月一日記念式の盛儀に列し翌日の慰靈祭にも參拜し、また暫く振りに校庭の隅々までそとろ歩きして、種々な思ひ出が／＼に湧き來るのを禁じ得なかつた。

私たちの大中入學は早や二十二年の昔の事となつた。まだ入學生徒が百名だつた當時。櫻の徽章に深緑の三筋を巻いた

制帽をかぶつた、何か一瞬にして今迄とは異つた力強い氣持の大中一年生となつて實に愉快だつた。入學すると丘は直ぐ櫻の眞盛りだ。あの當時既に創建以來二十餘年を経過はして居たが實に瀟洒な姿で且如何にもガツチリとして上野ヶ丘の空気を切つて居た學舎に通學することは歡喜そのものだつた。

通學途中に鬱陶しい建物はなく、鐵道官舎を離れると兩側は一面の田圃で初夏雲雀の舞ひ下りた麥畑に分け入つて巢を探したりするなど、往復の氣分も實に呑氣なものだつた。この片道十數分間かゝる通學道路に先づ感謝しなければならぬ。この道を夏冬寒暑を劇しく受けてセツセと往復したことが小學校後半期兎角病氣勝だつた自分の健康を回復増進してくれたのだ。中學五年間に立派な體格が出来、後半甲種合格、一年志願兵として兵役をつとめることも出来た。

入學第一年安東薫榮先生の算術教授が先づ思ひ起される。明治四十二年來御勤績既に二十六年、十一回生でもある同先生は上野ヶ丘校舎と共に舊いと申しあげてよい。母校の爲め獻身の努力を盡される大中の生字引、我らの時代算術を受持たれその教授振りが何とユーモアたつぷりで堅苦しかるべき此課目を面白い事例を引かれなどして教へて下さつたのがいつ迄も忘れられない。今の修身公民科の教授も屹度碎けたものだらうと想像する。一年二年四年の三學年に亘つて國漢の

元重且二先生が主任教諭として御世話して下さつた。先生の明快な解釋振りには當時非常に感心させられ。先生から一度罰に立たされたことあり。三年の時主任として御世話になつた筒井先生の名が學友名簿中舊職員名簿の中に見出せないのは如何したものか。舊職員名簿も矢張り受持科目と着任退職の年月の分る様な記載をして頂きたいものだ。

入學第一步、初めて英語といふものをステツプスを教科書として横田稻太郎先生から教はつた。先生の教授は實に徹底的であつた、徹底する爲めには當然基礎工事を最も念入りにやられた。入學當時色チヨークを使つての發音圖解は瞑目すると今もあり〜と浮び出て来る。學年が進み、譯讀の時間先生がモウ少シモウ少シで生徒が愈々こゝと云ふ適譯に行き當る迄想を練らせられたことは感謝措く能はざる所だ。又文法を嚴格に練られた、多少の難文でも讀める様になつた同窓たちは屹度先生が文法といふことをやかましく言はれた有難さを沁々と感じてゐること、思ふ。

大中五ヶ年を通じて先生には御世話になり續けたが殊に最終の年に受持主任として非常に御世話になり、同窓皆仕合せをしたものだ。私は四年生の三學期二月九日に盲腸炎を病み再發の爲め遂に五年一學期間引續き靜養し、此間休學した譯だが當時先生がいろ〜と心配して下さつた御恩は終生忘れられない。然るに可惜先生には這般の盛典に先だつこと一

年、昨夏六月六日中耳炎の病革り瀝焉として逝かれた。昨年二月佐伯山際の御住居で秘藏の刀劍や鏢を見せて頂き、清談に時の経過を全く忘れたのも今や思ひ出の種、その時の御姿が最後のものとして終生残ること、はなつた。十一月日蓮宗久成寺の基に參拜するの好機が恵まれた。法號は叡智院導養日衆居士。二十二年前もあの童顔で、横チャンといふ愛稱がよく適切したが昨年五十九歳の先生のちつとも變らぬ當年の横チャンであつた。大分府附近在住の同級生として先生にお目にかゝつた最後は去る昭和六年十月二十四日別府に於ける同窓會席上だ。

私たちの恩師の中大島、大坪、荒金、丸山、長先生何れも長逝せられて年已に久しい。いつも容儀端然、修身の授業中よくカフスを當られるお癖の安部校長先生、教壇を右に左に歩きながらの御訓話のさまが彷彿し来る、先生は歴代校長中最も長く十一年九箇月の御在職で、私たちの卒業翌月限り御退職になり其後の御晩年は御仕合せがよくなかつたさうで誠にお氣の毒に堪へぬ。

當年の恩師村田、村上、松本、兩安東、元重先生。岡田、筒井、川崎、本多、馬場、山下、熊野御堂、玉木、清水、岐津諸先生、彌御健祥にゐらせられることは眞に慶賀に堪へない、又御加餐百歳の壽を祈つて止まぬ。

兵式體操で岡田今朝市先生の印象は深い、——教師につけ

る緋名ほど刻薄に眞實に迫るものはないと思ふが衆知の同先生のカタパンも其の通りだ——何も今の如く教練なんかの矢筈しなかつた時代、松坂さんの境内や校地南の生垣に日向ボツコしながら先生の投網や魚釣の、ソレカラバ〜で何時までも盡きないお話を拜聴した愉快さと云つたら其後全く経験しない。川に魚がいつばいで網が底につかないとか。鱸を擔いで歩いて歸る途中シツボが地べたをバタ〜敲くなど勇壯な自慢話で御自身も喜び皆なも嬉しがつたものだ。同先生にも大分から宇佐中に御轉任後一度お目にかゝつたきり。先生の如き型の御人格も段々稀少となる時世となつた。

大正六年三月限り退職されて鎮西學院に轉ぜられた村上主一先生が遙々記念式に御參列のあつたことは實に喜ばしかつた。先生が代敷の時間中始終ニコ〜として解説された印象があり〜と思ひ浮んだ。被表彰者總代として謝辭を述べられたが當時と少しも變りなき力強い御聲音に接し村上ライオン未だ衰へずの感を深くした。先生の退職から學校に一騒動あつたことは衆知の如し。今尙ほ鎮西學院は名教諭を離さないでゐることは仕合せだ。去る一日祝宴の後、今は跡形もなき寄宿舎の位置をあちこち巡視せられてゐたが舎監としての思ひ出に沈潜せられるらしかつた。今も變らぬ同先生のコチン〜としたお歩き振りを拜して懐しさに堪へぬと同じく、追憶に耽る我らに取つて母校の姿を色々な思ひ出を孕む舊態の

儘にとつて置きたい切々の情を禁じ得ぬ。運動場の東北から栗ヶ山の消滅など何ともなしに淋しい気がしてならぬ。あの小塊が運動場の締りをつけてゐた様に感じられる。

二十六年の建築だと云ふ母校本館の姿には入學以來何の變るところなかつた、大正五年八月擊劍道場が校庭の南隅に移され、跡に新に講堂が建築されることになつた。が本館支關上の舊講堂の方が安部志摩治先生によくうつる、あの講堂といつしよに胡麻鹽の校長先生の温容を偲ぶ。六年三月寄宿舎第一舎が模様替され假教室六室が出来た、畫がうまかつた後藤素直君がよく怪奇な落書をしたのが此校舎の階段裏だ。三年生のとき川崎武親先生の時間、あの理化學の階段教室で放屁したことから一同放課後残されたこともあつた。(別府組は堀君の葬式に列するため特に許を乞ふて歸つたが)川崎先生が餘りに事件視して後藤君がアツサリ自分だと云ひそびれた譯だつた。後藤君今や甲南高等學校に教授として歳ありの筈。柔道家として我國一方の雄だ。

先づ堀君を失ひ、別府の同窓で小學時代以來の盟友日名子、河村兩君も已に亡し。淋しい限りだ。第三十回生は入學の年には完全に百名あつたのが、卒業式では五十六名になつて了つた。不勉強で篩ひにかけられた者や休學で後れた者や種々の事情に因ることは勿論だが、出る時となつて人数の減つたのに今更の如く驚いたものだ。殊に昨年十二月調の名簿

に既に十一名の物故者あり、其他に前記の河村君や、岩田精一、町田丁介兩君なども故人だ。物故者の冥福を只管祈つて止まぬ。其他の同窓生全部いつまでもく頭張つて元氣で居れ。今以上黒マルが殖えぬやうに。

同窓の豪傑振りを書くのも面白いが餘白も少い。記念式の日、田北、長野(今では加藤姓)、山下、河野勇藏、園田(母校教諭)諸兄と祝宴終つて松坂さんの松林で昔語りに耽つての歸途、角の店(登校道路、左へ正門の方へ曲る角にある)に入つてラムネを飲みなどしたが、聞けば往時の婆さんは數年前に亡くなり經營者も變つてゐる。自分もよく買ひ喰ひに來た店だ、此店の裏庭——今では一室増築されてゐる——で生意氣だと睨まれた連中がよく呼び込まれて殴られたのだ。鐵拳位ならいゝが(いや決していゝといふ譯でないが)靴でふんざりけつたりの制裁の道場だつた。我々の時迄は制裁もあんまり問題にならず、やられた者が唯後に申送ることでウサが完全に霧らされてゐた。此奴は團體が太い——生意氣だとなつて、バタン／＼殴られる引合はぬ連中も居た、團體が太ければ止むを得ず實質も生意氣となるの外ない時代であつた。制裁も其後漸次八釜しくなり、今では話にのみ残る蠻風として上野ヶ丘から消え去つた、今の生徒が聞けば身振ひするだらう。

運動會の呼物は何と云つても機械體操だつたらう。大車

輪、逆車輪等々、梁木(いつからか知らぬが無くなつた)の上や、その梯子の途中での逆立、實に感心して見たものだ。二十七期の先輩山口義夫君が逆車輪の練習中手が外れて頭から落ち、多少の砂はあつたが首の骨でも折りはせぬかと見てゐると一寸フラ／＼した様子だけで暫くするともう平氣で歩き出した、豪氣さに少からず驚かされた。今のことは不知だが當時は強い、恐ろしい上級生が澤山居たことを思ひ起す。

とりとめもないことを書けばいつまでも盡きぬ。祇園山の翠緑と共に母校の生命がいつまでも若々しく延び行かむことを衷心より禱りつゝ筆を擱く。

五十周年を好機として母校同窓會が隆昌となり一人でも多くの恩師と同窓とが會同する時期が今後屢々惠まれることが最も切望に堪へないことを附言させて頂く。(昭和一〇・六一〇)

## 二つの渦の中に

三十一期 大分市 磯崎藻 二

噶啞と響き渡つてゐた始業のラツパの音の中に、蠻風上野ヶ丘史と云ふものがつゞり得るとしたならば、恐らく我々の時代はその末期に相當すべきものであつたであらう。

所謂破帽天下を濶歩するの意氣の時代に對して、近代的文明の明朗性が漸時その勢力を増大して來て、幾多の改革が要求された過渡期であつたのである。上級生が下級生に示す威嚴のための唯一の武器の如くに考へられてゐた制裁も私達の時代には可成減少されてはゐたが、末期的存在にまで追いつめられてゐたゞけそれだけ、残された少數は腕力者達は決然として最後の猛威を振つたものである。

個人的な制裁は隨時隨處に行はれてゐたけれど、事ある毎に私達は松坂神社の松林中に集合が命ぜられて、マークされてゐた同輩達は一々上級生の面前に呼び出されて所謂鐵拳の厄にあつたものである。

或時こんな事件が起つた。寒中の冷たさに凍つた辨當を食ふ生徒達への無上の贈りものであつたところの中食用の湯筒が、ふつ／＼温かい煙りを上げながら各教室の入口に配布されてゐた時、當時四年の一組が業の終るを待ち兼ねて湯筒を持ち込むと、意外筒は何者かの盜難に遭つて空しく空虚の口を開けてゐた。

生徒の憤激は高潮に達して取調べて見ると之が三年生のわざと判明したので、問題は直ちに提出されて次の日の放課後三年生は松坂神社前に集合すべき命令が發せられた。

型の如く一場の訓示がすむと、すこゝのが二三人進み出て、昨日湯筒を盗んだ奴は前に出ると云ふのである。しかし

三年側には何の答へもない。激しい怒聲が起つて險悪な状態が捲き起された時、所謂暴力幹部の一人がそ奴はこゝに居ないのだと叫んだのでこの問題は兎に角落着いた。しかしために日頃目指されてゐた二三の者が引き出されて、特に猛烈な鐵拳の雨を喰つたものである。

然るにこの竊盗犯人たるや、當日もその集合の中にあつて膽を消してゐた私自身であつたのである。私は前日中までこの事あるを聞いて、實は前夜ひそかにその暴力幹部の宅を訪ふて助命の運動を行つておいたのである。暮夜權門をたたくと云ふ奴を實地に行つたのである。

こんな手もあつた。しかしその當時は犠牲者達にも氣の毒で當分は寝ざめの悪いことであつた。又卒業を控えた最後の秋の運動會の華かな幕が下りてから、四五年級間に紛争を起して大問題が突發した。當時五年の私達一同は、運動會の終了を待つて上野の山中に集合して大協議會を開いた。事件は四年生が非常に不遜であつて運動會の審判にまで兎角の口をさし入れたのは不都合であると云ふのである。しかし之は單に表面の理由であつて、私達の胸中には無言の中に時の校長代理〇〇氏始め、若手教諭連に對する日頃の不満が藏されてゐたことは事實である。

堅い結束を約して山を下る時はすでにひどい夕闇で足元も定かでないけれども、遠い街の灯を眺めてゐると異常の

感激が若い血の中に跳つたものである。

翌日一同の退校調印をまとめると同時に堂々學校側にも通告を發して四年生を學校庭に集合せしめた。例の如き一場の訓示(?)が終ると同時に五年生一同は憤然として四年の列に躍りかゝり誰れ彼れの別なく蹴る、なぐるの暴行を敢えてした後、一人々々を校庭に下座せしめてあやまらしたものである。之は以前からの申し合せであつて一人必ず一つ以上四年生をなぐることになつてゐたのであるが、犠牲者を出さない爲の幹部の巧妙な手段であつたのである。しかし白晝顔を見合せては軟弱派の私達は遂に一指も染めなかつたが何か善根をほどこした様な氣持が今も尙残つてゐる。

五年側の亂暴狼藉に四年生が奮起したのはむしろ當然である。四年の受持教師の如きは泣いて憤慨したと云ふ。

學校全體に不穩な空氣がみなぎつて情氣滿々たる中にサポタージュの状態が続いて、前校長安部志磨治氏の調停等が行はれたが、生徒側は之を一蹴して氣をよくした。一方學校當局は完全にその無能振りを發揮して何等なす處なく、辛うじて四年側を慰撫して表面を糊塗してしまつた。勿論私達の側には一人の犠牲者も出さなかつた。うるさい奴等は早く卒業させてしまえと云ふのが當局の作戦であつたさうであるが今日から考へて随分變な結果であつた。

しかし私達のクラスを最後にして生徒の數も増加されたし

その頃から縣下中等學校の競技會等が催されて、生徒の氣質も甚だしく近代化されて來るのをどうすることも出来なかつた。當時中絶してその存在を知つて居る人もなかつた校歌を苦心して復活したのもこの頃であつたし、映畫が流行しはじめて、變な桃色事件が新聞をにぎあはしたのもこの頃である。

こうした時代の流れに押されつゝも、尙且つ昔日の蠻風へのあこがれが閃光的に暴風を捲き起してゐた如くに、當時の教諭間に新舊二個の流れが看取されてゐた。即ち久しきにわたつて學校に特殊の關係を持続してゐた普代組と、所謂學校出の若手組との暗流である。この間の確執の思ひ出等つゞつてゐる暇がないが、村上、荒金、横田、安東等々々の家付き側は皆それ／＼一家風を成して、生徒間に威嚴と信望を植ゑつけてゐたに對して、校風刷新の名目のもとに學校出の若手が續々任命されて來た。そして漸時舊守派の人達を追ひ込んで行くのを見てゐると生徒達に云ひ知れぬ寂寥を感じしめたものである。こうした生徒達の純情が爆發して、よしんばそれが敵本的行動であつたとしても、校長代理一派への爆弾となつたとしたならば、先の蠻行にも一脈のなつかしい思ひ出がのこる。

授業が、運動が、校風が、あらゆる制度が、かくして急激な變化の道程に浮沈する間に、呆然として私達の五年はずき

去つたのである。

しかもほど年代を同うする、縣、園田、志村、二階堂の諸氏が母校に教鞭をとつてゐる今日を、思へば變つたものである。

思ひ出は自由な線を畫く如くにこゝろよいものである。且つて先輩達の思ひ出話に眠氣を催した私達が、今日その思ひ出を楽しく畫く時代が來た。

## 回顧

三十二期 加藤泰弘

吾が同窓會が五十周年紀念事業を企圖されましたことは、洵に有意義であり且感謝に堪へません。今日我國難の一つである思想問題に於て、其の根本的原因を教育の缺陷に歸してゐますが、然しながら一面又同窓會の隆昌如何が之等惡思想の分子を生み出すか否かに大なる關係を有つものであることを思はねばなりません。即ち確固たる同窓會が存續し、其の活動が充分に行はれ、各會員が鐵鎖の如く結ばれ、母校を愛し。母校の名譽を重んずる念に燃えてをれば、決して其の校から左様な不心得の者を出すものではないと信ぜらるゝので

あります。

從來幾多の變遷を経ました吾が母校の同窓會が企劃する今回の紀念事業は實に此の意味に於て、大いに意氣があり、大いに慶賀すべきことと存じます。

學窓を出でて最早二十年近くの歳月を閲し同期諸友も、いまや社會有爲の公民として、各人それ／＼異なる人生の旅路に安住と光明を求めて精進する身とはなつたが、嘗つては同じ學校に社會の辛酸の外にあつて、自然の恩恵の中に手を取り合つて互に談笑した楽しい過去の甘い印象は我が腦裏から容易に去ることが出来ない。

當時の學校の思ひ出はそれは何んと言つても大分市に一つしかない中學校と云ふ一種のほこりであつた事と、盲目は蛇に怖ぢずとの譬の如く、獨りよがりをしてゐた事である。

元氣溢れて凄味さへ帯んだ一種の緊張の雰圍氣が漂つてゐた事である、然し其の中に眞剣さ、純眞味のあつたことは、隨かに一顧の價値が十分あると思ふ。

師弟關係も或は自然粗暴であつたらうが、心と心の觸れ合ふものゝあつた事が思ひ出される。又生徒に隨分無茶な者もゐたやうであるが（我も他から中の一人に數へられたであらう）相當思ひ切つた無茶をやつてゐた様である。かうしてあれやこれやを過ぎし日の追想に耽り感激にひたると、なんとなく當時への思慕の情に堪へなくなる。

當時の先生には校長に安倍志摩治先生の外村上、大島、村

田、大坪、長、荒金盤、丸山、本重、横田、川崎、熊野御堂、姫野、岡田、安東速、本田、安東彌、宮崎、山下外諸先生で、校長先生は嚴格端直な方で音調が今尙耳に残る。

又思ひ出すのは運動會で、元氣一杯盛んなものであつた、四年生の時運動會の際、選手を送つて、勝ちほこつた迄はよかつたが五年生と衝突して面目問題で、ひどい目にあつた事があつた事や、故三浦市長の御仲裁で解決したストライキ問題もあつた。野球試合に師範學校に敗戦の結果大喧嘩をやり出し爾後對校試合は中止されるに至つた事、校歌を制定復活した事、講堂が校庭の東の隅に建設された事等々、數々思ひ出しては昔の若さに復へる……

又國民精神の眞髓たる質實剛健の氣魄培養は大中健兒の最も喫緊たるものとして叫ばれ、心血を傾注されてゐた事は今尙腦裡に残つてゐる、朝は黎明夢を破る憂々たる竹刀の音、夜は人の惰眠を驚かす胴面のかげ聲勇ましく實に凛々しい武者振りば今に於て目前に躍如たりです。其他寒稽古、朝起會等勇敢無比懦夫をして起たしむるが如き諸行事に於て實に目ざましい敢行貫行状態を一々瞑目追想し來ればたゞ一醉の夢として葬り去ることを得ず懷舊の念鬱勃として燃え上るのである……

閑話休題 嗚呼縣下多數優秀を咲きほこる中學校中に燦然

珠玉と輝く母校大分中學校の成果は、校長以下職員、同窓生の熱誠努力の結晶で、今や我等の學園!! 大分中學校が精華絢爛たる裡に芽出度創立五十周年を迎へられたことは眞に歡喜措く能はざるところで、不肖卒業生の一員として雀躍拍手而して隨喜の涙潑然として止らず、萬感胸にこたへて意約り指亦運び得ざるに至れるを以て惜しくも、之にて禿筆を擱く事にいたします。

最後に物故された先生及學友の御冥福と在世の諸先生學友諸氏の御多幸と名譽ある母校大分中學校をして益々光輝あらしむべく、努力に努力を重ねられんことを御祈りいたします。

尙不肖在學中は其の名「公」を用ひしも改名の結果現在は「泰弘」と成り居ります故、お忘れなき様此の際附記して爾今御後授と御指導を御願いたします。

……昭和十年六月一日別府市立田町寧靜莊東窓下に於て……

## 思ひ出断片

四十期 大在芳淳

一、いやだつた事 裏川校長先生の講堂訓話でした、クリク山をこわして校長住宅を建てるときでした。

一、サポータージュニ 一・二年生の時には大在驛が無かつたので鶴崎驛から汽車で通學してゐました、梅雨の頃や二百十日ごろ大雨があると鶴崎橋が危険だからといつて年に二・三回位授業の途中から一同揃つて取りました。

一、いたづら 工藤先生の植物の時間にタンポポの花も吹き散らかして授業を中止したり、後藤先生の地理の時教卓が教壇から陥ちる様にしたりしたものです、その外兩安東先生は僕等いたづら小僧の對象となつて居られました。

一、野球應援團 四年の時でした、五年生が大旗、小旗、大鼓、石油罐を用意して一高三高戦の應援團氣取りで應援に行つた事がありました。こんな事は學校より禁止されてゐましたが、在學生の鬼門得丸先生が不在でしたからこんな事がやれたのでした……。言論部長杉村先生は必ず應援に來まして勝つても負けてもその場で演説されました。それが名物になつて市民中にも聴衆が出來ました、……五年の時應援團長が決定してゐませんので臨時に團長をやつた事がありました。その時は負けました。余生徒の前で悲憤の涙を流して一場の演説をしました所が下級生より「泣く團長」といふニックネームを頂戴しました。

一、競技部 三年生の秋縣の大會の時です。四百米で師範の足立君が現滿洲國財政部に居る河野君にコーナでインタフエアをやり足立君を連れて來て謝罪をさせた事がありまし

た！五年生の時、縣當局に運動に對する理解が無かつたので縣大會の中止になつた事は残念でした。僕は必ず勝つ自信がありましたのですが！岡松、園田、田崎、佐藤君等は熱心でした。普通秋の運動會が終はると練習を中止するので三學期の卒業試験の終るまで下級生と共に練習をしました。これが久恒、後藤等の黄金時代を造つた原因です。

一、學内野球大會各學年より選手を出して野球大會が行はれました、その時は職員チームと四年代表との試合が呼び物です。

伊藤仙先生は胴をつけて一壘にがんばります、内外野より暴投しても胴で受けるのです、職員チームの攻撃の時ホームに大上段にバットをふりかぶる先生があつたり、見物してゐて面白くありました。

一、同級生の美談卒業試験の終つた日です、同級生一同相談もしなかつたのですが心を合せて校庭校舎の落書を全部消し掃除をした事です。この事について私は責任者として同級生諸兄に今でも感謝して居ます。年に一度大分にて同級會を開催してゐる事です。

一、久住幕營行卒業する年の夏でした。外山、吉川兩先生吉川先生の御令弟二人、在學生約廿名で、法華院にてキャンプをして久住、大船、黒嶽を征服する目的で出掛けまし

た。雨に會つて随分困難した。外山先生曰く「雨中の天壇

また參禪の道場」と。

第一日 幕營不可能につき宿屋に泊る。

第二日 雨の中を大船へ

第三日 雨の中を黒嶽へ

第四日 雨止む。久住山——硫黃山——飯田高原——湯平

——湯平驛——大分驛

飯盒炊爨をするのが愉快でした、下級生には黒くこげるのが出来る、併し僕のは大變よく出来て上級生様の御手並はと鼻を高くしました。

法華院温泉が硫黃なりし爲銀時計を黒くした連中が多かつた。僕も亡父遺品の銀時計を黒くしてしまつた。

飯田高原にて長者盛んなりし頃を偲び感慨無量でした。リ

ーダー吉川先生今は亡し。

一行中五年生は小川(別府)君と僕の二人、下級生の名前も忘れてしまつた。頭に残つてゐるのは鍋割坂を越すときウイスキーのポケット入一本を空けた外山先生一人です。先生の御健在を祈る。

在學中の思ひ出を断片的に書きました、卒業して七年経ちました。同級生諸兄もすつかり變つてゐます、學校も變りました。今後も變つて行く事せう。在學時代の事を考へますと感慨無量です、學生時代には大いに學び大いに運動せよ、運動方面の

レベルの高き時は勉強の方も成績よき時です、これが私の體驗による結論です  
五十周年記念に際して大中のますく繁榮せん事を念願致します。

## 少年の日

四十一期 醫師 衛藤大一郎

上野ヶ丘五ヶ年の生活を比較的平凡に過して居る僕には今更小事的な出来事は頭にピンと来るものを持たない。少年の日の多岐多様な生活感情すべてが今廻想する時只なつかしい丈けの一感に溶かされてしまつて居る。

大中を巢立つた誰もが云ふ様にあのラツバの響きはなつかしさを通り越して往年の純情に涙ぐませる、ラツバが聞えなくなつたのは何でも僕等が二年生になつた頃だつたらう。入學當初つたこのラツバで天晴れ天下の大中生だと非常に勇壯な自負心を抱かしたものだ。あのラツバの音はたしかに清澄でいゝ調子に若々しい心意氣を生んで今でも耳に残る。

今は大地に復られて逢ふに逢へなくなつた丈けにより一倍心から先生と呼びかけた思ひがするの青井、村上の兩先

生だ、眼鏡越しに見上げて宛名するムチで机をコツンコツン叩く、即コツン村上圭峯先生。田舎廻りの歌舞伎役者も顔まけの見事な筋肉強直性の見えを切つて教壇に春の講義の睡氣を覺した青井先生。兩老先生の慈顔を追慕してこゝに改めて哀悼の意を表します。

僕は病氣してチンバになつたものだから従つて僕の暮した上野ヶ丘の五年も特殊な感情で少年らしい澄澈さ明朗さを缺いてゐるのは事實だ。だから僕は今度の様な場合に多く語る資格もない様だし又その元氣を持たない。それは僕自身にも寂寥な秋の山路をたどる感じだし、人が聞いても愉快な事ではなし、耳をふさいで居る方が少くとも陽氣だ。

僕はこゝで改めて次の古くさい格言を提唱したい「健全なる精神は健康なる身體に宿る、學問なんぞこの事にしてウンと身體を鍛へねばならない」不具だつた爲めに却つて偉くなつた人が世の中には澤山あるが僕はからきし弱かつた、第一頸骨がはつてゐないし口元が緊つてゐない、で不健全な精神を持つてゐた。

だから今の様に偉くなり難くなつてしまつた。健康でこそ朝の體操は今も行はれてゐるだらう。何時でもいゝが特に秋の候ともなると澄徹した聖丘の大氣は又とないものだ、丁度發育盛りでもある丈けに皆んな目に見えて伸び太つてゆくではないか、僕は今でもあそこで深々と朝の空氣を味ひたいと

思つてゐる。

彌榮神社や松坂神社の社は数限りない少年の夢を包んで今も向松風が吹いてゐるだらう。この松籟を呆然と聞くともなく、梢越しに浮雲を眺めて語つた青春の憧れを失ひたくないものだ。

チヨンの降りた少年の日の永久に再上演できぬ幾幕は、それだけ懐しいもので緑の三筋に爲すことなく朽ちもせばと意氣旺んな現在學校に學んでゐる後輩を巷で見かけてつくづく羨しく思つてゐる。

## 滿鮮旅行

四十一期 和田谷三郎

「カンカン／＼／＼」と響かせながら赤い夕陽の滿洲平野を走る。あの時ほど懐かしい感激に満ちた旅はない。そしてあの鐘の音ほど旅人の心を打つものはない。離れた故郷の父母の事、國で誓つた愛する人の事、色々と旅人の瞳には熱い涙が赤くにぢむのである。

あの鐘の音ほど歴史を知つてゐるものはない。張作霖が死んだクロス事件から柳條溝爆破のこと滿洲出兵匪賊討伐、

さては匪賊の列車襲撃、事件は起り事件は消え星は移り月は

變り、時は流れ世は輝かしく「滿洲國」と地圖の色は塗り換へられてもあのなつかしい機關車の鐘の音は昔と變りなく「カンカン／＼／＼」と鳴りながら赤い夕陽の滿洲の平野を走つてゐる事と思ふ。僕も一度あのなつかしい鐘の音を聞きながら思ひ出多い滿洲旅行がしてみたいです。學生時代に反つて……

## 感想

四十三期 成城高校 安達武壽

私達の大中学生は極めてノルマルでした。當時の生徒間を支配する流れは、誠に寔々たるものでしたが、強いて云へば總括的に見て、よき意味でおとなしかつた、とても云へませう。

尤も、私達が一年の最初、特に私達のクラスが先生方の忌諱に觸れたことがありました。先生方の間に段々と悪い評判をたてられ、とにかくクラスの空氣がいけないとあつて、個人的にも私は注意をうけましたが（不肖級長を拜命してゐましたので）或日圖畫の時間に全體が騒々しいのにクラスの

人が奇聲を發したのが、山下先生（帝展などにもよく出品され、セザンヌのやうなすつきりした美しい繪をかゝれてゐたやさしい先生でした）の逆鱗に觸れて、一同放課後居残りを命ぜられ、代つて得丸先生から、懇々として、しかも火をはく如き激烈なる反省の訓誨をうけ一同すつかりシヨゲ返つたものです。が今から考へれば、もと／＼小學生根性の抜ききらないだけに「俺は中學生だ」と云ふ變な英雄的精神が、茶目氣とこんがらがつて飛び出した、云はゞ意味ないいたずらがその根本原因なので、「意識せる」デモンストレーションでは毛頭なく、従つて冒頭の大人しさ——には何等抵觸するものではないと、私は思ふのであります。

さて、「大人しい」この流れの中にも、一貫して何人も指摘し得るのは、不撓不屈の大中精神の潜在であります。蓋し何人も母校の誇りは持つものであります。五十年の古い歴史を持ち過去に於て、多士濟々、現在に於て新時代の英雄を養成しつゝある大中の誇り——この誇りが母校歴史の變遷の曲線を一直線に貫く絶體的な大中精神を構成してゐます。尤もこの豪放な英雄精神は、無軌道的に、愚昧な青年心理にかられて、先輩が代々遺していつた安價なヒロイズム（例へば極めて根柢薄弱なる私刑の如き）を作りあげてゐますが、これも又全局的に見れば、健全な精神の養成効果に比すべくもありません。

私刑（若しくは制裁）と云へば、昔は、お宮の松にぶらさけて、大勢たかつて竹刀で半殺にした時代もあつたさうですが、私達の時代、ことに上級にゐた時代は、殆んど形をひそめて僅かに残喘を保つてゐるに過ぎませんでした。勿論、私にはこれを見て、霸氣の排除とは毛頭思つてはゐません。と申しますのは、話はすこし外れますが、——先日帝都で好評を博した「坂本龍馬」の演劇を観ましたが、龍馬が呼ぶ精神は、徹頭徹尾封建制度の破壊と自由の確立にあつて、決して討幕ではなく、されば、彼が朝に幕府を切れと説きながら、夕に薩長の討幕の血に飢ゑる輩の機先を制し、後藤象二郎をして慶喜に大政奉還をなさしめ血を見ずして革命に成功して薩長の輩を切齒扼腕せしめたのも、かゝる所以からでありました。次から次へと變る龍馬の思想の豹變を友人の中岡慎太郎が「才子、才子!!」と面罵するのですが、龍馬は「昨日の時代には昨日の思想、今日の時代には今日の思想」と、めぐるましい時代思想の變遷と順應性の重要さを説くのですが、今から考へれば何でもない様であつても、當時の封建の殻に育つた人には、これが判らなかつたと思へます。

されば、變な例ではありましたが、暴力横行の盛衰が何も大中の霸氣のパロメーターではなく、蓋し大中精神も時代に順應すべきものでありませう。思へば私達の時代には、一部ではあるが、今でもさうでせうが時代に逆行した行爲、風俗



をやつてみました。尤も或日そんな話に關してある先輩の一人と話したのですが、その人の話に依れば中學時代から理性ばかりで行動したら、長生きはせんぞ。中學や高等學校の間はせい／＼騒ぐがいゝ。と云つて、今時、自由主義でもあるまい。封建を愛する純情さも一つの信念として尊いものだ。とにかく、中學の先生方がやつてはならぬと教へる中には、きつと先生方が中學時代やつたことがあるので、その悪いことは、大人になつてはじめて分る。それでいゝ、じあないか。と大笑されましたが、それもさうかも知れない。

夫れはさておいて既に卒業近い頃、手拭を腰にダラリとぶらさげるのを、學校はいましめてゐます。生徒は、オヤ／＼と苦笑しながらも段々と夫れを矯正して行く。遂には制服に下駄ばきをするものもなくなるでせう。

總てが、考へて見れば面白い歴史の變遷です。五年間の中學生活を終へた日、卒業證書を持つて、上野の坂を下りながら感じたことも、このことでした。

が、坂本龍馬がその思想の豹變の中にも、確固不動の信念は、自由の確立にあつて、討幕は最後の目的ではなく單なる手段であつた如く、大中精神は、時代に順應しながらも、確固たる意識、豪放不羈、自己の信念の進む所何人の容喙も許さぬ氣概は、大中を誇る意氣と共に、永久不動でありませう。」

筆を運びつゝ、常に頭に去來するは、恩師の顔。クリーム

色の校舎。上野の松にかこまれたグラウンド。それから、縣の大會や高商の主催での色々の競技で、勝利に酔つて狂氣亂舞したり、或は武運つたなく惨敗を潔して肅々として旗をまいて、男なきに泣いた感激の數々。

彷彿として私の眼前に展開された、懐しい思出は、いつ迄も盡きること知らな。

終りに臨んで、恩師、先輩の方々をはじめ、同輩諸兄、在校生の御健康をいのり、同時に五十周年記念の盛大なる式を心から祝ひたいと存じます。(昭和十年六月九日記)

### 教練を中心として

四十五期 佐藤博士

四年の時始めて宿泊の行軍が行はれた。五月頃ではなかつたかと思ひます。丁度滿鮮旅行の中止後で、鬱憤やるせなき時でした。中學入學以來、未曾有の宿屋泊りの事として、クラス會をやるやら、何にやら、一夜まんじりともしなかつた様に思ひます。先生も大分騒いで、先生への親しみを感じたのもこの時でした。明くれば、別府への兩中行軍、若さの元氣

別に苦痛とも思はなかつた。

五年になつてからは、十文字原に演習に行つたが、第一夜は湯山の庵舎だつた。旅行と云ふものを知らなかつた我々だから、友と夜一堂に會した事が、餘程面白かつたらしい。就寝の命令を受けても何時かな眠る様子はなく。歌を唄ふまではよかつたが、果ては、所謂有志連、寢床の上で、劇までやり出した。こんなに騒いで聞えない筈はない。天罰觀面、全員、將校部屋の前に集められ、寒い夜空に長々と御説教に會ひ、御詫を入れてやつと收まりをつけて貰つて兎に角寢に就いた。この時も晝の演習は相當に鍛へられもし、又力一ばいやつたものだ。

次の夜が鐵輪の宿に分宿した。前夜の事もあるから悪戯小僧達神妙にしてゐたらしかつたが、此度は先生が一杯飲まれて、面白い事を云つておられたそうだ。この度も翌日は、大分まで行軍をやつたのだが、M先生未だ若干昨夜のメートルが作用してか、豪快な話をなされて、聞いてゐる我々一同實に痛快に大分までの道を通んだのも懐しく思はれる。

野外演習を我々は別段辛いものと思はなかつた。遠足、旅行の代りとしてかへつて、或る程度の愉しみも持つてゐた。だと云つて、いゝ加減にやつたのではなく、やるだけの事は眞に一生懸命にやつたのだ。が今となつては元氣一ぱいの爲か、苦しかつたこと、辛かつたことの記憶は薄らいでし

まひ、教はそのものよりは、その他の些事に、印象が深められて行く。

又時に觸れ、折に觸れて、教練の時間に、よく脱線して訓された言葉の断片がちらつと頭に浮び微笑を禁じ得ないことがある。

### 在學當時の思ひ出

四十六期 福岡高校 佐藤克一

私が中學時代を顧るとき、先づ第一に私の頭の中へ浮んで來るのは次の事である。私は不幸にして中學生活は四年迄で、懐しい上野ヶ丘を降らねばならなかつたのであるが、今から考へて見ると、何か一年間非常な損をした様な氣が痛切にしてならない。この一年は恐らく、私の一生に於て、何物に依つても償ふ事の出來ない損失であるだらうと、私は今更の様に自分の早計な過失を後悔してゐるのである。

最も中學生活の充實し、眞の意義が植ゑ付けられねばならぬ最後の一年、即ち五年生の時が私から缺けてゐることは、それが人生中最も修養時であるだけに、私といふ人間を極めて不完全なものにしてしまつてゐる。私は、とりもなほさ

す、未完成のままに中學生活からおつほり出された様なものである。

實際私は考へるのだが、もしも私が幸にしてその中學生活の最後の一年を経験することが出来てゐたならば、私の人生は、私の人間そのものは、必らず今とは非常に異つたものになつてゐたに違ひないのである。勿論良い意味に於てであることは言を俟たない。

中學校を四年迄で高等學校に入るを、それは現今もそうであるかもしれないが、殊に私の受験時代には、何と誇大にも評價され過ぎたことであらう。私は見す／＼かうした風潮の中に巻き込まれてしまつたのである、その悪結果は靦面に於て現れて來てゐる。その非を悟つた現今に於ては、中學校四年から高等學校へ入つたといふ理由で、いやしくも私が秀才呼ば／＼りを受けるとするならば（これは私の眞の述懐だと考へてもらいたい）、それ程私にとつて痛烈な罵言嘲笑の言葉はないであらう。私はその度ごとに、恰も自分の古傷に觸られる様な思がしひてならないと共に、かうした間違つた考への爲に、萬一にも後進の有爲なる人々がその後を追へばしないだらうかと獨り心を患すのである。

高等學校に普通——敢て正常と言へるかもしれない——よりも一年早く入學出來るといふことに依り得る利益——それが果して利益と呼べるだらうかとさへ私は疑つてゐる——の

餘りに少ないのに對し、得ずにしまつた損失の何と多きことか。もし利益と稱せらるべきものがありと假定するとして

も、それは單に中學校一年の月謝の節約と、他人よりも、一年早かつた——尤も早かつたことが頭腦の良さを現はす唯一の證明であると盲目的に信じての沙汰でしかないのだが——その事だけに對する果無き虚榮的自己満足のみである。

かく、經濟的問題が明らかに取るに足らぬとしたならば、次に時間的に考へて見よう。人生を例へば七十年として、その七十分の一だけ人より先になつて得意然とするとは餘りに眼識が無さ過ぎる。しかも、その先に進んだといふのも今少し冷静な頭で考へて見れば、決して進んだのも何でもないので、只最も必要なものを爲さねばならぬ又最も重大な事を學ばねばならぬ一年——それは決して再びとは來ないであらう——を爲さずに學ばずに遣り過したといふに外ならぬのである。これは全く、百年の計を失したと言ふべきである。

思はぬところで筆が逸れてとんでもないことになつてしまつて、題目の「中學校時代の思ひ出」から離れること甚だしいものになつてしまつたが、これも皆貴重な一年を失つた私の、死んだ子の年を數へるの泣事と御諒承下されるやう御願ひしたい。そして又、これも考へ様によつては躓目からそんなに懸け離れた話でもないことになる。何とならば、私がかくも中學校五年といふ一年に慕ひ憧れると、それが上野ヶ丘で過

ごさるべき一年であればこそだと考へれば——實際又そうなのである。

私の大分中學校時代の思ひ出は皆悉くが生きてゐる。人間は經驗といふものはやたらに持つが、體驗は極めて數へる程にしか有たないものだと言ふけれども、私の大分中學校時代の思ひ出は總て體驗となつて私の頭の中に、心の中に残つてゐる。

私はこの體驗に依り、物を見、物を考へ、物を行つてゐるのである。私の人間の雛形は、全くあの鬚蒼と立並んだ杉に取り圍らされた、堅牢を誇るチーク材の校舎の中で、祇園山頭の嵐を聞きながら作られたのであつた。傳説と歴史の力が醸し出した大中魂の香りは高く且偉大であつた。私の心の奥底深くの大中魂は植を付けられた四十人から居られる先生方は皆んな偉い人ばかりで私はこれ等の先生方から、私の出來る限りに智識を貪り耽つた。先生方も勿論喜んで提供してくれたのだから。先生方の中には既に奉職年數を十年二十年をもつて教へる程の方々も居て、この先生方自身大中魂の權化といふ感のする方も澤山居られた。私は、かうした先生方が一日でも長く續いて教鞭を取られることを、母校の歴史と發展の爲に切望して止まない。私はこゝにかうした先生方の印象記といふ様なものを、何んなに書いて行きたいか知れない。

そして又始めからそうすることが、より題目の趣意にも叶ふのではないかと考へたけれども、それには紙數も足りないし、餘りに個人的に過ぎることを恐れてそれに出來なかつた。それで私は最後に、そうした非難を最少限度に於て切り抜け、且つ少しでも題目の趣意により多く添ふべく、次のことを書かうと思ふ。

この出來事は確かに私の中學校三年の春のことだと思ふ。私達は誰でも幼き時代の思ひ出には常にある一種の「愛いらしむ Leiblichkeit」と「馬鹿らしむ Torheit」とを感じるものであるが、それがまあ大人となると申しますか、何時か無くなる時がやつて來る。この時は誰れしも、生涯中一番大きなショックを感じるに違ひないのであるが、私も今尙その時をまさ／＼と記憶してゐる。それは丁度春の對校試合のある頃であつた。その時の試合は野球であつたか競技であつたかは憶へてゐないが、結果は我が校の負けであつた。試合は大分高商のグラウンドで行はれたのであるが、赤く夕日の燒る頃、私達應援團は選手を先頭に隊伍を爲して、上野ヶ丘へて引き上げて來たのである。それは何時もの例であつたが、この時も私達は校庭に並んだ。先ず選手代表の涙で語る辯解の辭、それに答へて應援團長の之も又涙による慰藉と激勵の言葉、それは又私達應援團全部の聲でもあつた。それは心の奥底から迸り出る言葉であり、その語の如何を問はず、一語は更に

一語ごとに只々熱血の涙を絞るのであつた。私はこの時、涙と涙による、又血と血による、強く大きな人間の結合を知つた。そして私の心は始めて、尊厳なる團結の精神の絃に觸て不思議にも慄へたのであつた。そして私は、かく千餘の大中健兒共通の悲憤に泣きながら、今や夕陽次第に紫を増して來る上野ヶ丘に立つて、祇園山頭の松籟に和す校歌を唱へてゐる私自身が、既に最早それまでの私自身でないことを發見して驚愕戰慄したのである、私はこの突發的出來事に對して何等の理論的のものを今も尙發見することは出來ないのであるが、その私は最早全く私から「愛いらしさ」と「馬鹿らしさ」とを過去のものとして失つてしまつてゐるのであつた。

かうした私自身の心的大轉機と一緒になつてゐるが爲に、あの中學時代の春の對校試合の思ひ出は、私にとつて一層鮮明なものとなつてゐるのである。

### 思ひ出

四十六期 角 加苗

昭和四年、爛漫と咲き出づる櫻花と共に、我等が春を壽ぐ若鮎の潑刺さを以て、上野ヶ丘の一員となつたのは、早七年の

昔。同期生諸君、憶えてゐますか？その第一回の作文題を、曰く「入學の喜」と、樂しかつたあの頃を思ひ出すとき、そして瞑目する時、そこに、自らなる微笑と、一抹のさびしさを禁ずることが出來ません。

蒐集といふ性質は、殆んど本能に近いものだといふことですが、僕は中學の思ひ出の種を極力蒐めました。それ等によつて見ますと、後日英語の得意？ だつた僕が一年の頃は落第點に近い點をとつてゐるのです。在校生諸君よ、如何なる學課でも決して「投げ」なされるな、要するに努力です。

四年の時の七月の頃だつたらう。暑さは何處も同じだつた。隣の組は、障子を外してしまひました。僕達の組も之に追隨したのですが、隣の組の主任は、お説教の上、窓をたてさせました。丁度その時、松坂神社では、松の落葉か何か焼いてゐました。隣の組の者達は、窓を閉めてしまひ、松の煙を教室に入れました。諸君、何の禁呪だと思ひますか、彼等は云ひました。「狸を燻べチャンノジャー」と。尤も若干の者は、襦袢等も脱いでゐたそうですが。此の時に於ける、先生の尖つた口を御想像下さい。

課外授業は、参考書をあまりやらなかつた僕には、なか／＼困難でした。然し、要するに忍耐です。諸君、大分川のほとりに出て御覽なさい。數限りない小石は、大きいなり、小さいなりに、皆同じやうに圓味を帯びてゐるでせう。併

し、白く流るゝ由布川の、高嶺のほとりに行つて御覽なさい。石は兀々として何等、相似點を發見し得ないでせう。自分の頭は駄目だと、見切りをつけないで、優者に交つて、揉れなさい。上流の石は、果して、自分が丸くなるといふ確信が、あつたでせうか。自重して、そして難しい奴(問題)と組打をなさい。桂の冠は、諸君の、手中にあるでせう。

多分、五年の時の、第二回模擬試験の時でしたらう。僕は、國漢の志望校欄に、馬專と書いて淡々消し、「ナシ」として置きました。當時、先生方の御機嫌を損じたさうですが。一旦消したものを、わざ／＼見付け出して下さる先生の御親切なこと。僕としては、その時から、大分高商と、行き先は極めておましたが、我が大中からは、主として「ボンクラ」の行く所です。高商に入るといふことは、僕としては不満でした。この落書について、或る先生は馬專等と書かんで、綠林とでも、書いて置けば「イ、ニ」と云はれたさうなが、一旦消したものを見付け出す位ならもつと念を入れて見て貰ひ度いものです。僕はチャンと「在綠林」と書てあります。今となつては思ひ出の一つとなりましたが、此の點はチョツと抗議して置きます。

最後に諸君……上野ヶ丘健兒たる者は宜しく意氣に生きよ、下級生をいぢめるな、先生をいぢめよ、所謂威厳を出すな而して教室の勇者たれ。

### 新 校 舎 成 立

頃田城を距る南二十丁、地極りて陵出つ、是を上野となす。竹樹翁鬱乎として蒼々、長江東に流れ、峻嶺西に峙ち、清秀の氣翕然四鐘す。洵に勝地也。吾縣立尋常中學校、曩に城中に在り、屋舎狹隘、仁塵首を没す。甚だ訓練研習に宜しからず。是に於て、縣議して、新に上野に築く。明治壬辰四月を以て工を起し、今茲甲午五月に至りて成を告ぐ。師生舎あり、庖裏次あり、百兩の器具、整然完備す。屋宇宏壯結構雅潔、遠くよりして之を望めば、碧瓦粉壁、風影波光の間に隱見し、峻嶺長江、之が爲めに更に精彩を添ふるを覺ゆる也。嗚呼、吾が上野は豊州無雙の勝地、而して吾中學は豊州唯一の良校なり。豊州唯一の良校を得、而して吾僑學生を遇する深且切なりと謂ふべし。果して然らば、吾僑學生たるもの、銳意奮勵、教を守り、學を勉め、徳器を成就し、進て公益を廣め、以て此厚恩に酬ゆるを期せざるべけんや。若し夫れ怠慢放肆、樂荒み行毀れ、或は徒に筆墨を弄して以て一身の利達を徼むるのみならば、則ち吾が良校勝地に負くのみならず、而して其罪や實に大なるものあらん。戒むる所なかるべけん哉。

甲午六月 頃田交友會理事謹んで在校の會員諸君に誌す。

回顧すれば大中五年間の生活は四十餘回の試験の連続でありました。苦しみも楽しみも交々味ひました。袖ふり合ふも他生の縁とか、しかも永い五年の間お世話になつた、上野が丘學園の、五十周年を壽ぎつゝ、筆を措きます。



## 思ひ出五十年

恩師が寄する數篇の思ひ出記、何れも明治廿年代……日清戦争前後の大分中學校を語るもの、正に大中の古き歴史の繪巻を展げたる金玉の文字である、而も筆者の恩師達が古稀を越へて尙鑿然たるものあるは目出度き五十周年記念式を舉げたる今日一層意義深きものがある、諸先生の愈々御健勝に亘らせらば、百歳の長壽を全ふせられんことを祈る。

### 在校當時の回顧

客員 今關常次郎

顧みれば早や四十有餘年前の過去であります。私が大分縣尋常中學校に赴任したのは明治二十五年七月のことにて、それより二十九年四月迄、足掛け五年間勤務しました。當時は全國を通じて一府縣に一師範學校、一中學校といふ位の教育制度ゆゑ、右の尋常中學校は大分縣に於ける唯一の中學校であり、今より回想すれば恰かも隔世の感があります、其の尋常中學校即ち現大分中學校が爾來校運日に日に益々隆盛にして、今茲に創立五十周年記念式を挙げられるといふことは邦家の爲、誠に祝福に堪へざる次第であります。

大分中學校は私が學生々活より始めて實社會の新生活に入

りたる最初の場所であつた、所謂人生の一轉機の所にて、當時の感想は誠に深刻なるものがあつた。在校は足掛け五年に過ぎざるも其の間を回顧すれば眞に感慨無量なるものがありますが、此處では只私個人の追憶の一斑だけを述べることに致します。

私の大分中學校に赴任せるは先輩たる農學士岡村猪之助氏轉任の後を繼ぐのであつた。當時私は東京駒場の帝國大學農科大學を卒業後、助手として研究して居りましたが、松井農科大學長等より岡村氏の後任として就職を勧められ意を決して中學校の先生となるべく、任に赴いたのであつた。其の頃までは大學卒業生は文部省より尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校教員の免許狀(受持學科は無制限)を無手数料で下附せられた。當時大分中學校の學年は東京の帝國大學(全國に唯一の大學)と同じく九月に始まり七月に終り夏休も二箇

月間であつた。私の着任せる七月九日は既に學年末にて、卒業式は済み、夫から入學試験を行ふたのみにて、後二箇月は夏休であつた。

私は大分に着任した後、縣から赴任旅費(普通旅費の倍額)を貰ひ一寸驚いたが、伊達校長から「それは當然のことだから」と言はれて、有難く預載しました。而して私の月俸は五拾圓であつた、その頃は無論日清戦争前のことにて一般に物價は著しく低廉であつた。私が駒場の農科大學在學の頃は月五、六圓の學費で足り、助手時代には月十圓内外にて生活し得たのであつたから、俄かに月俸五拾圓では、別に道樂のない所謂書生々活には餘裕もあり、自分の仕事に對して何となく勿體ないやうな氣がしました。加之、直ぐ二箇月間の夏休では有難過ぎる次第ゆゑ、此の夏休中に自分の今後受持つべき學科に對し充分の豫備知識を得ねばならぬと考へた。當時自分の受持學科は農業の外に動物、植物、地質礦物、生理、化學と新入生の英語の一部であつたから、私は先づ大分縣下の農業状態を調査し、地勢土性を觀察し、且中學校に於ける貧弱なる博物標本なども整理し、豊富にせねばならぬと思つた。幸なる哉、東京の帝國大學理科大學教授菊地安氏(礦物專攻にて後、理學博士となる人)が暑中休暇を利用して礦物採集に出張して來ましたゆゑ、之を好機として伊達校長に私費を以て縣下の旅行を願ひ、礦物標本の採集、農事の視察

を申出た所、快く承諾せられた。愈々出發の際「同行者の都合によりては大分縣下のみならず宮崎縣下までも巡回するやも知れず」と申しました。所が伊達校長は「九月初旬には中學校の規則改正の協議會があるゆゑ、夫迄には歸校せられし」とのことであつた。依て私は遲滞なく「自分は未だ教育上には無經驗であり、何等の意見もなきゆゑ諸君に宜しく御願ひしたし」と述べました所、「そう言はずに是非協議會に出席せよ」とのことであつたが、私は即座に「全然意見とてなきことゆゑ宜しく取り計らはれたし」と申して前記の菊地教授並に當時大分中學校と隣接せる尋常師範學校の篠本二郎教諭と共に旅行に出掛けました。

申す迄もなく大分縣は古來礦山に富み、各種の礦石を産出するので有名で、山岳丘陵は頗る多くあるが、殊に當時は現今と異り鐵道は全く無く、縣道すら甚だ少い頃とて交通は頗る不便であつた。先づ野津原、温見を経て竹田に出て木浦、尾平等の礦山地方を跋渉し、祖母山腹より宮崎縣岩戸に越へ、高千穂連峯の日平嶺峯等の礦山を視、延岡に出で、細島より汽船にて別府に上陸し、此處にて同行者と分袂したが夏休の時期は尙ほ餘りあるを以て私は更に單獨にて別府方面の温泉地帯を遍く巡歴し地質の構成、各温泉の性質、成分等を調査し九月八日に至り大分町に歸着しました然るに中學校よりは私の下宿に毎日使にて自分の出校を促がし居るとのことゆ

ま、直に出校したる所、伊達校長より叱責せられ、官吏服務規律の大事を説き聽かされました。

そこで私は始めて天地の間に介在する自己の姿を見直し、自分の中學校教諭である、弱年なれども先生である、と氣附きました。既にして、依て直に「私は悪うございませう。責任を痛感しますから辭職させよう」と言ひました。校長は「イヤ夫れには及ばぬが將來注意せよ」とのことにて其のまゝ事なく済みました。斯かる行動は今更ながら汗顔の至りなれども當時の大學卒業生中には私儕の如き所謂世間知らずの者も亦尠からざるやうであつた。

上記の如く私は腰辨生活の劈頭に於て官吏奉公といふ責任を自覺した結果、性來の篤鈍固より思ふに任せざるも幸に先輩、同僚の庇護に藉りて大過なく勤務することを得ました。

大分中學校は明治二十七年五月校長金子銓太郎氏の下に荷揚町より現上野の新校舎に移轉したのであるが、當時に於ては設備の完美なること全國中學校の模範として文部省より推奨せられ我々教職員も亦生徒に對して他の中學生徒の模範たるを期すべしと激勵したのであつた。

當時の中學生徒は縣下全般より募集したもので、年齢は區々、隨分年長の者もあつた。一般に質實剛健の氣風に富み稍々粗野なるも元氣の旺盛、眞に頼母敷く感じたのであつた。私も亦壯年の頃ではあり受持學科の關係上、春秋二季の

修學旅行には何時も引率者の中に加はり、日曜、休日には時々遠足をなし又放課後擊劍などを生徒と共にすることもあつた。

然るに又熟ら思ふに、學淺く修養足らざる弱輩が臆面もなく先生を以て任ずることは自ら反省して疚しき點なきにあらざるより、明治二十九年四月私は農商務省農事試験場技師に轉任し、爾後農事に關する試験研究に従事し、大正十年九月東京高等蠶絲學校教授專任となり、昭和七年三月に至り、終に退官閑地に就いたのである。

要するに私の腰辨生活は四十年の久しきに亘り、其の間幸に大過なく無事御奉公を完ふし得たることは固より聖代の餘澤に依るものでありますが、私は常に當初大分中學校に於ける所謂奉公といふ責任感が眞に一生涯の良藥であつたと思ふのであります。

折にふれてのお笑ひ草

四十年の任は退きたり夕月夜、涼風の中を今日は歩めり

任退きて家居まゝなるこの頃は垂乳根まざばとしげしげ思ふ  
かにかくに世の業了へし吾と思へ残る生命をほがらに生きむ

生きて世に在り經し吾を思ひ見ぬ數にもあらぬ現し身ぞこれ

來し方をかへりみすればかにかくに身の健けくありし尊さ

照つ代の恵かしこみ明け暮れを殘る生命の靜かりけり

事しあらば殘る生命を大君にさげまつらむ老いづく吾も

非常時とおほにし言へれ今の世に心に徹りて思ふや幾人

## 記憶を辿りて二三行

客員 西村 謙 三

私の御校に御世話になつたのは明治廿七八年の日清戰爭頃でありました。校長金子銓太郎氏は陸軍將校として出征されました。私は校長事務取扱になれとの内命がありましたが絶對に御断はり致しましたので、文學士尾田信五氏が事務取扱を命ぜられました。旅順港の陥落の當時は非常の賑はひで市中は湧きかへる様でありました。私は英語の擔當でしたが今

日記に存して居る先生達には數學に境野昇次郎君、圖畫には鶴清氣君、地理には家永泰三郎君等でありました。それから農學士の今關常次郎君も居られました。生徒諸君の中で私の記憶に在るのは吉丸一昌君（後東京音楽學校の教授となつた人）東國東の高橋某（後醫學士となつた人）大分の佐藤春吉君（後文部省の檢定試験を受けて英語の免許状を受領した人）其他尙十數人記憶にあります。其名が一寸思ひ出せませぬ。

當時は修學旅行が今日同様流行して中津より日田あたりまで行つた事もありました。日清戰爭が済みましてから武田安之助氏が校長となつて來られました。私が御校へ着任したのは明治廿六年でありましたが大分の市街より現在のの上野の高地に移轉になりました當時で、交通機關が非常に不便で、まだ別府迄の電車がありませんでした。佐賀の私宅より御地に參るには馬車ばかりで尻がむける様でした。御注文があまり急です。何ら記憶を呼び出す事も出来ません。然しあの函着瀧の風景は忘れられません。食膳に上る魚類も上等でした。學生も中々出來まして今日は政治家にも經濟家にも學者にも隨分名を擧げて居る人が居られて過ぎし昔を思ふと感慨無量であります。終りに臨み各位の御健康と盛典を祝します。

若し手元に卒業生諸君の名簿なりともあつたならば、何か端緒を

得る事もありませうが何んにもないので、此れで御免を蒙ります。終りに本年新年の作がありますそれに依つて私の年齢を御承知下さい。

迎 昭和十年

稚學 西村謙三

白髮羸身學野禪、心根未餒氣悠然、  
誰言老骨貪長壽、百歲猶餘廿五年。

## 思 出 の 儘

客員 鶴 清 氣

御下命により感想を述べますが、私は本年七十三の老人で少し老耄の気分もありますから、言句その他に間違ひの點は生ずるまいかと恐れつゝかきますので御推讀を願ひます。

私が御校に教鞭を執りましたのは今より四十三年の昔即ち明治二十六年より同三十一年までの事でありませう。年数は僅か五年位であります。御地にある間日清戦争の大快挙があつたのが多々あります。御地にある間日清戦争の大快挙があつたことやら遼東半島還付の一大痛恨が胸をさき割られるやうなことやら、二人の子供をもつた事やら御地の海岸線の絶景に酔ひ、尙又豊肥の高山幽谷を漏れなく跋渉して、自から美操

を養ひ得た事やら、御校の校長教師の中に比較的豪傑風の人や奇矯的人や、君子人のありし事と寄宿舎に百人の生徒が居り私が舎監として非常に頭を痛めたことやら、五年の間實に多忙多端の生活をいたしました。

その中の生徒諸君が如何なることをしたか、如何にして居られるかと思ふと、人にも土地にも懐かしくて夢寐忘れませぬ。藤本恕一郎君や長尾景隆君や池田篤君、莊風四郎君などが四十年ぶりに突然来てくれた時實に嬉しかつたのです。紅顔の美少年として覺へて居つた人も今連て見れば、禿頭、白髮、皺だらけのぢゝとなつて居られ、諸法諸行の常なきを感ずるのであります。

私が御地に轉ずる前は長崎の中學に居りましたが、友人の西村謙三氏が突然やつて来て大分の中學に行かうぢやないか僕は行くことにしたから是非君にすゝむるとのことであつたから、私は之を親交の同校教師の一人に相談した處此の人は云ふ、大分中學は昨今校長排斥其他で大紛亂して居るから行くことは見合せた方がよいと、そこで私はそれなら反て面白く本校は目下安泰で何も心を練ることはないから、その紛擾の大分中學に行つて其紛亂を斬りまくつて見たい、朝から晩まで平和の生活には變化がないから、大分の素れたところで腕だめしをやつて見たいと謂つたら、それなら行けと云ふ、そこで當校百尾校長に内意を漏らし決心のことを披瀝したら

遂に轉任を許してくれた。平和のよき學校を望むが人情なれど亂を治め平和の爲めに努力するのも教育の爲めなることを信じ人より物ずきと云はれるにもかゝらず遂に御校に轉任した時が明治廿六年の春であつた。當時の御校の校長が金子銓太郎と云ふ人で風采が堂々元氣が旺盛し公平にして剛直の性であつた。紛亂して居ると思つて来たところがその紛亂は既に治つて平靜無事、生徒はよく教師に服従し教室の内外に於ける行動はすべて温順之を御するに最初のところ餘り難くはない。佐賀の學生などに比する時は少しも粗暴と認むるところなく、師弟の間が至て圓滿に行ける。然かも佐賀や長崎の生徒に比する時は頭腦明哲で理解力に富みなすことすべて伶俐である。轉任したその年に大分町は大風水で町内は水に浸されたのであるが、此洪水午後五時頃學校が火事と云ふので直にかけついたら既に消し止め大事に至らなかつたが、私の荷揚町の宿所に歸らうとしたら町は水が一杯で途中胸位まで水が流れて居る。遂に泳いで歸つて見たところが床の上まで水が増し疊は悉く浮いて猫が浮た疊の上に鳴いて居る。而して妻も子供も下女も居らぬ。そこでそのまゝにして高地となつて居るお寺の善行寺まで又々泳いだら此處は避難民が一杯で家族も無事こゝに逃げておつたのであるが、寒くて凍へる様で困つて居つたところに知人より綿入をかけて貰ひ、此寺で三日ばかりは警察の炊き出しの玄米の握飯を貰ひ命を

繋いだのである。四日目に生徒が三十人ばかり自宅にやつて来て疊を干し、掃除をなし、おくどを作り、布団や家具を借り集めてくれたので漸く自宅で生活が出来るやうになつた。この困難も私に大なる印象の一であつた。其後修學旅行をしたら縣内大野川の上流大松の樹の半に鐵道線路がねぢきれてぶらさがりおるのを見ても大洪水のありさまが察せられるのである。

金子校長の次に校長になつて来たのが武田安之助と云ふ人であつた。此人が至て磊落な人で本來理學士なれど、文學に大なる趣味を有し繪畫は最も好きであつた。私はスケッチするのが好きで修學旅行の時はいつも私一人丈は獨り勝手に處に行つて寫生せよと云ふ。これが爲め修學旅行の時勿論寒暑の休暇及日曜なども畫板を肩にして山河を跋渉する事を得た。大分の海岸線は右に行つても左に行つてもすべて艶麗の景に富み、彼の耶馬溪などは何度も行つたが評判程でなく全く頼山陽からだまされた様な感じをした。けれども宇佐の山奥、由布山の絶頂、又九州アルプスと稱する九重山などに登つた時は、實にその壯大幽玄神秘の氣に打たれ何んとも云へぬ感じがした。九重山絶頂より阿蘇を右に見由布(一名豊後富士)を左に眺めるときは實に愉快である。九州で豊後の山位に壯嚴なところははないと思ふ。至るところに名山あり大河あり澤山の温泉あり連續的海岸の美勝あるところ天下いづ

このところに比すべきものあるか。古人曰く高山大澤龍蛇を生すと、豊後に多くの文人墨客を出したるも亦た自ら此の氣に養はれたるものか。私は五年の間大分に在つた幸福を神に謝するのである。尙又面白いのは大分市より近い川に濠に海に魚を捕つて遊び得る便利のあることで、これで遊ぶには至極妙であつたことを覺へてゐる。

當時の教師には毛色の變つた人が多かつた。武田校長は能く談じ能く飲み能く遊び能く努める人で游泳などには餘り獎勵しすぎた爲め生徒の反感を買ふた事もあるが、サツパリした軍人風の人で、又文學美術、殊に漢文的趣味に富んで居つたが、或日私に十枚ばかり綴じた文章を示して曰く、これは樋口勇夫と云ふ人のかいた文章ぢや、此人を漢文の教師に聘用してくれと云ふ人あり、君一度此文を読んで見てくれと云ふ、私はこれをかりて見たところが「莊子」の評論であつた。私は青年の時より莊子が非常に好きで常に愛讀してをつたから知己を得たるかの如く大に喜び嬉しく感じて通讀した。文章が非常によく出来ておるのみならず、莊子に對する感想が私と一致したので愉快を感じ直に武田校長に面會樋口氏を用ゆることをすゝめた。數日の後樋口氏は教師となつたのはよいが、武田校長は私に向て嘆息して曰く樋口君は遭ふて見たところ至極沈黙の人で何も口をきかぬのじや、あれで漢文の講義などが出来るか心配に堪へぬと云ふ。ところが漢文の力

は充分だが無口で講義が面白くないとの評判が生徒の間に廣がつたけれども後にはその素養の力に敬服したと云ふ。此樋口氏が風變りの人で普通の先生とは全く違つた人物であつた。後教師をやめて東京朝日の記者として三十有餘年操觚者を以て身を立て東京では樋口銅牛と云ふ名で俳句の大先生と仰がれ(著書多し)しが一昨年頃六十餘歳で歿したのである(同氏は尙書道の大家であつた)。

それから當時の教師で豪傑風の家永泰三郎と云ふ人が居つた、これが實に英俊豪快で義侠心に富み、大事に當つては水火も避けぬと云ふ様な人物であつた。この家永にどこか能く似て居つたのが山田小太郎と云ふ先生であつた。この人は無妻主義で酒が非常なすきで徳利は妻君である。又よく飲み能く談し奇言珍語を吐き愛嬌たつぷりぢや。生徒にももて教師にももてた人で長所は英語なれども、人物が全く漢學先生の様な風で英學者とは見られぬ。家永君と山田君と私は時々干鯛をぶらさげ瓢又はフラスコを携へながら山に登り海に行つてよく飲み放談快語、能く古人を評し時事を語り現今の教員の風とは全く異なりし事を覺へておる。

外に温厚篤實の君子として境野昇次郎と云ふ先生が居り、(既に死歿)昔の漢學者風そのまゝの人で石川總弘と云ふ先生も居り、金田橋太郎と云ふ奇才も居り、渡貫勇と云ふ至極珍妙な漢學の若先生も居つた。(現今書家として東京に居る

とのこと)教師の大半は普通の俗人ではなかつたのが今にその印象を深くした。長崎佐賀の中學に私が居つた時の先生達とは餘程違つておつたからである。

次に當時の生徒のことを申しますと、佐賀や長崎の生徒よりも従順ではあるが才氣豊かにして數理的頭腦に富み理性の勝れておる傾きがあつた。特に最も感じたのは辯舌であつた生徒の討論會や演說會などしやべる時などは實にうまいもので、いづれも雄辯家なるに驚いた。而して又よく文章をかきくものが多くて誠に筆まめであつたことを覺へておる。従つてこれらの人々が以後どんな風に發展したかを想察するのである。私が舎監をして居つた間、口の先きでやり込められたことが度々であつた。他の中學と違つて寄宿生が二百人も居る中上級生が多數を占めて居る爲め色々と理窟を云ふて舎監をこまらせたのである。私は十九才の時より佐賀中學校の教員兼舎監を勤め、長崎に居るときも佐賀に居る時も舎監はすべて兼務でやりつゞけておりましたが、大分の中學に勤めて居た時程舎監で骨折たことはないです。最も大に寄宿舎の改良を遂行したこともあるので改革する度毎に生徒の反抗を受けたのである。

一度は他に類例の無いことをやつたのである、それは寄宿舎に投書函を設けた事である、この函を設ける時生徒を集めて曰く、學校の爲めになることならば何事でも思ふ通りに書き

てこの函に入れよ、校長教師の事でも生徒間の事でも何んでも不平不満のことはすべて此函に入れよ、但し私憤をもらす爲めの投書、人身攻撃は一切ならぬ、只公憤正義で誠意誠心より出づることならば何んでも書いて入れよと申しておいた。ところが最初の間は投書が非常に多く不平不満のことを澤山入れるのに驚いた(投書は秘密に私文見ることにして他見を許さぬ)誤解的の投書が(匿名投書)あつた中總ての生徒を集めてその誤解を解き説論的の演說を度々やるのである。然るに一ヶ月ばかりの後一つも投書するものがなくなつたのは意外であつたが此投書のなくなつた時が生徒すべてが服従平和の時であつたことを感じたのである。當時長い投書をしたり又舎監に對して理窟をならべ反抗した諸子等は今何處にどうして居られるか逢ふて見たいものです。生徒の紛擾には私がよく矢表に立て及ばずながら努力しておりましたことは舎監としてこの鶴を御記憶のことと思ひますが、今一度懐舊談をやつて見たいものです。

今尙私を覺へて居られる存命の諸君に申し上げますが、私は明治十四年より佐賀中學校の教員兼舎監を命ぜられ弱年の教師として一時は色々の苦難を嘗め、同じく廿二年長崎中學に又職を奉じ御校に在ること五年で再び佐中に舞ひ戻り、佐中の教員兼舎監をつゞけたる事三十餘年の久しきに亘り、四十歳にもなりてから東京に出て東西倫理學(修身科)試験を受け健

俸にも合格してその後十五年間無事にやり通したるも學校卒業の履歴としては一つもなく只獨學でよく長い間無難やりぬけて来たことを自ら不思議に思ひますが、淺學ながらも惟誠意でいつも良心の無上命令を本となし神の御心を心としてやつて来たこと丈は自ら信じて疑はぬのです。

大正九年まで佐中に教鞭を執りしが突然にも鍋島侯爵家より佐賀縣縣社松原神社の神官になれとのことで神職の事は何も知らないまま同社の社司として十五年の間神に奉仕し、御大典の好機を得て同社の祭神鍋島閑叟公を別格官幣社に昇格することに渾身の努力をなし幸その目的を達したるを以て御遷座式を挙げ終ると同時に神職を勇退し、その後は全く自由の身となり畫をかくこと(南畫)、旅行すること、日をおくり晩年拙筆ながらも「達磨百態」と「觀世音百態」を著はし(東京書肆神書刊行會出版發行) 昨年は朝鮮の金剛山に登りて百有餘のスケッチをとりその中より五十圖を精選し「金剛山風景畫集」として本月中東京同書林にて出版することに成つて居ます。出版の上は御覽を願ひます。こうして老齡尙未だ活動しておりますから弊地に御出向き序でもあらば御立ち寄り御顔を見せて下さい。佐賀市與賀町西精住鶴清氣老齡拙稿のまゝ差出したる段恐懼に堪へず。(了)

當時の生徒諸君にして縣知事になり博士になり會社銀行などの重役になり高位の文武官に榮進して居られるのも少からず貴名が新

聞などに出る時は獨りひそかに敬意を表すると共に嬉しく感じているのであります。

### 會費月額五厘徴收督促

稟告 國にして財無くむば一日も保維すること能はざるなり富國強兵の策を講ずるもの亦此理に外ならざるなり。日本刀會の會費を催促する所以のもの諸子已に其理を知らむ、知りて而して猶出さざる者其德義に背くを知らずや、日本刀會の下にありて優柔不斷爲すべき責を爲さざる者は銳利なる日本刀を以て汝が頭に一撃を加へむ、遲滞なく會費を出すべし、是會計理事平身低頭して會員諸子に願ふ所なり。

明治廿九年一月

日本刀會會計理事 白す

## 大分中學と私

客員 出田 新

大分中學は來る六月一日創立五十周年記念式典を舉行し種々の記念事業を計畫せらるゝと聞き、私も大分中學に奉職した縁故があるから私の思出を記述して見たい。

私は日出町の生れであるが、明治十七年高等小學を了へて當時宇佐より歸られて私塾を創立せられた帆足萬里先生の高弟米良石操先生の塾に通學して漢學を修め、明治十八年二月上京した。其の時はまだ大分中學はなく大分には中等學校は大分師範があるのみであつた。私が高等小學卒業に先ち日出小學校長橋本豊彦先生に引率せられ同級生一同が師範學校に見學に行き大分に一泊したが、其の時に大分に中學校が建築せらるゝので材木が堀川?に浮べてあつたのを臚げに記憶して居る。その後米良塾の友人米良文太郎君が東京に遊學すると聞き、急に同行する事になつた。米良文太郎君は萬里先生の高弟米良東嶠先生の嫡孫で東京で獨逸語を専攻し後檢定試験により中等學校漢文科教員の資格を得明治三十四年頃大分中學に奉職せられ漢文を擔任せられたが獨り漢文のみならず獨逸語にも造詣深かつた。私は東京で共立學校に入學して英語を學んだが時の校長は現在政界の長老高橋是清氏で偉大な

牀驅を厩馬上に見受けたことを記憶して居る。後大儒中村敬宇翁の設立に係る同人社に轉じ明治十九年九月再轉して東京英和學校に學んだが、同校は青山學院の前身で漢文、數學、譯解、體操の外は全部米國教師の受持で初めの間は随分困つたが後年札幌農學校で米國教師より農學の講義を聽た時は大に役に立つた。私は明治二十一年札幌農學校に入り豫科二年本科四年の科程を了へ明治二十六年七月同校を卒業して一時休養旁郷里日出に歸つた。が此の時は大分中學は師範學校の北隣に設立せられてあり金子銓太郎氏が校長であつた。

無職で在郷約一年に及び遂に耐へられず就職運動の爲二十七年六月上京した。途中宇品に立寄りたるに軍隊が多數集合し御用船數艘に乗船しつゝあり中々の混雑で何か非常の事件が起つたと思つたが是れぞ日清の間危機に頻し已に内密に出兵に着手して居つたのであると後に至り知られた。

東京では現南大將の母堂の經營して居られた麴町區英國公使館裏の鳴谷館に下宿して同郷の先輩矢野文雄、元田肇兩氏を始め同窓の先輩を訪問して就職運動を始めた。元田氏は私の叔父富田耕司氏の竹馬の友であつたので随分盡力せられた然るに同窓の先輩齋藤藤三郎氏の紹介で青森縣の八戸中學に赴任することになつた。齋藤藤三郎氏は札幌農學校出身の英語の大家新渡戸稻造、内村鑑三、頭本元貞、武信由太郎、佐久間信恭、志賀重昂諸氏の仲間を外務省の翻譯官を務め文



學的な散文には日本人中氏と比肩する者は殆どなかつた位である。現駐米大使齋藤博氏が得意の英語も父君詳三郎氏の遺傳と薰陶によるものである。

因に私が詳三郎氏の家に出入せし時に博氏は未だ六七歳の少年であつたが、大正十三年私が米國で同君に逢つた時は紐育總領事として盛んに活躍して居られ外交官として將來を囑望せられて居られた。

明治二十七年九月私は青森縣立中學校八戸分校教諭に任ぜられ英語を擔任することゝなつたが折悪しく仙臺二高在學中の舍弟が病氣に罹り歸郷して靜養する事となり郷里には老母と幼き弟妹あるのみにて遠隔の地に居つては何かと不便であるから在職僅か八ヶ月で大分師範に轉任したが病氣の舍弟は間もなく死亡した。八戸中學では二三の秀才が私に英語の課外教授を依頼せられたが其の中で江渡恭助君は後年海軍に入り秀才の譽れ高く、歐洲大戦の時觀戰將校として英國艦隊の旗艦に乗り居りしが獨逸艦隊との大海戦に撃沈せられて戦死した時は海軍中佐であつた。

次に江渡幸三郎君は後年「荻嶺」と稱し、或る百姓の家其の他の名著によりて有名である。次に現「英文大阪毎日」の主幹松岡正男君は「婦人の友」主筆羽仁もと子女史の令弟で慶大及ウイスコンシン大學等に學び嘗て京城日報社長であつた。専攻は植民政策である。後年大分中學校の名校長として勤績數

年に及びたる津田清三君は當時の校長津田清長氏の令息で當時私の教へ子中の秀才であつた。

明治二十八年四月大分師範に轉任して見れば大分中學は大分師範の北隣にありし舊校舍(今の大分第一高女敷地)より上野ヶ丘の新築校舍に移轉して居り最新の設計に成る堂々たる建築(當時に在ては)で其の設計圖は文部省より當時開會中の京都大博覽會に陳列せられたと聞いて居つた。この時の大分中學校長は金子銓太郎氏に代つて武田安之助氏で容貌魁偉豪傑風であつたが博物の教師農學士井川(舊姓今關で井川家を嗣ぎ現在は今關姓に戻つてある)常次郎氏が農事試驗場技師に轉任するから後任に來ぬかと勤められた。それで師範には僅か一年八ヶ月勤続したのみで大分中學に轉任したのは十九年十一月十六日であつた。大分師範に奉職中師範と中學と兎狩の競争が起り己れの方は五頭取れたと云へば、いや己れの方は八頭取れたと幾度も兎狩をやり互に相手の校門に貼紙をしたなどの奇談もあつた。

大分中學では私は博物の擔任であつたが授業時間の關係上英語も擔任して居り夜は米國宣教師「ヘーガー?」氏に就き會話を學んだが其の時は阿部龜彦君(第八回)も通つて居られ面識となつた。阿部君は後年高知廣島等の知事となり盛んに活躍したが今は故人である。武田校長は前にも云つた如く豪傑風で擊劍には自分も練習に出で水泳を始めれば蘭若より別府

まで生徒に伍して自ら長距離水泳に加はり大阪商船より「ポート」を譲り受け「ポート」練習を生徒に課するなど常に新しき計畫を實行して居られた。或時に生徒の考課表(名稱は確と記憶せぬが)を作る爲教員會議を開き各生徒の長所、短所、性行等を記録に残すことゝしたが其の時に私は思つた。此の考課表を二、三十年後に對照して見たら定めて面白からん恐くは十目の視る所通りになるものもあらんが又全然反對にて或は成功し或は失敗するものあらんと、回顧すれば其の時より早や三十五六年を経過したるが當時の考課表は學校に保存してあるべく之を見たら感慨に堪へぬことゝ思ふ。

私が大分中學奉職中の最大事蹟は「テニス」を計畫した事である。私は明治十九年頃東京英和學校在學中外國教師が男女相混じて「テニス」を遊ぶのを屢實見したが規則も知らず「カウント」も分らず只好好奇心を以て見て居つた。其の後札幌農學校で内外教師が「テニス」を遊ぶのを見たが不相變規則を知らなかつた。然るに大分中學の教頭印牧順作氏(私の轉任した時は尾田信直氏が教頭で氏が神宮皇學館に轉任の爲印牧氏が教頭となつた)が米國に留學して居つたので「テニス」に通曉して居り、氏の發起で私が前記の關係より眞先に賛成して相棒となり職員間に「テニス」を始める事にした。規則は豫備門(今の一高)の教師 F. W. Strange 氏著「戶外遊戯書」(アウトドアゲームズ)と稱する明治十六年頃發行の小冊子より印

牧氏と私とが譯し印牧氏が指導者となり先づ職員間に練習を始め、漸次生徒にも教へてやらせたから當時在學中の卒業生諸君の中には覺へて居らるゝ方も尠くないと思ふ。球は軟球であつたが「カウント」は硬球式であつたから初めは六ヶ敷かつたが間もなく慣れて覺へた。此の時にはまだ「庭球」と云ふ譯語はなかつた様に記憶する。兎に角地方の中等學校で「テニス」を始めたのは大分中學が最も早き一つであつた。又「コート」の大きさも規則に従つて居つた事は特筆に價すると思ふ斯くて私は「テニス」を覺へたが三十一、二年頃長岡中學に奉職中同校長理學士村瀬光國氏の指導を受け硬球を始め村瀬校長と組んで新潟まで出掛けて米國宣教師と仕合をした事もあつた。

慶大が軟球から硬球に変更したのは大正二年であるから私共が長岡中學で硬球をやつたのは慶大よりも十四、五年前であつた。其の後大阪でも福井でも山口でも「テニス」文は盛んにやつた。尤も軟球に反つてゐる。

歸郷後は昭和八年六月關門日々主催の西日本中等學校軟式庭球大會を態々下關まで見物に行つたが大分中學の選手三組は好成績にて準優勝戦まで漕ぎ付けた。其の歸途汽車中にて偶然執印教諭引率の六名の選手諸君と同車したのは奇遇であつた。此の時の大中の戦績は豊州新報(八年七月三十日より八月一日に至る)に西日本中等學校庭球大會觀戰記と題し寄

稿した。

序に野球は私が明治十九年頃東京英和學校在學中多少やつた経験があるが現在の野球とは非常の懸隔があり寧ろ軟式野球に近きものでマスク、ミット、グローブ（只捕手丈は例外であつた）などは使用して居らず球も現在の如き堅く重きものではなかつた。現在のフォア・ボールが當時はナイン・ボールと稱し九回までは球を投げ得るのであつたから如何に幼稚であつたか想像し得らるゝ。それで東京で野球をやる學校に明治學院と駒場農林と青山學院位のもので一高即ち當時の豫備門はまだ始めなかつた様に思ふ。駒場農林當時の選手加賀山辰四郎氏は後年大分縣立農學校長（臼杵にあつた）時代大中に来校生徒と野球をやつた事を記憶して居る。

従來中學は一縣一校に制限せられて居つたから大分縣には大分中學で（中津に分校があつたが）縣下から秀才が集つて來たもので、しかも今日の如き入學難もなく就職難もなく卒業生は殆ど無試験で専門學校や高等學校に進學出來或は大學を卒業して幾多の人材を出して居る次第である。然るに此の頃より各府縣とも中學校が頻りに増設せられたる爲有資格の教員が大缺乏を來し私も斷へず諸方より引張られたものである。本縣にても明治四十年四月に宇佐、竹田、臼杵、杵築に分校が新設せられ中津分校は獨立し私は武田校長より新設の杵築分校主任に轉任の勸誘を受けたが私は年は若く又適任で

ないと思つて斷り同期の同窓生松澤辰三郎氏を推薦した。

私は何とかして農事試験場か農學校に轉任を希望して居つたが是等の施設はまだ僅少であつたしそれに先輩の新渡戸、佐久間、志賀、武信諸氏が英學界に名聲を博した爲め札幌出身者に英語は出来るが農學はだめなりと誤解を受け目的を達せず其の中に明治三十一年一月七日に新潟縣長岡中學校主席教諭に轉任したが私の去つた後に大分中學には大「ストライキ」が勃發し武田校長は遂に大分中學を去つたと聞いた。長岡中學では間もなく校長が轉任し私が校長心得を命ぜられた。此の時に校長に推薦すると勸めて呉れた有志家があつたが私は農事試験場か農學校に轉任したい希望があつたから斷然辭退した。

長岡中學で私の教へ子中より幾多の人材が出たが先般「ロンドン」軍縮豫備會議に活躍した海軍中將山本（當時高野姓であつた）五十六氏も秀才の一人であつた。在職二年半明治三十三年五月私は母校の推薦によりて大阪府立農學校教諭に轉任した時は非常に嬉しく今後の一生を農業教育に捧げんと決心し奉職六年半に及び明治三十九年九月福井縣立福井農林學校長に轉任したが同縣には實業教育を輕んじ農林學校を差別的待遇するの弊風あり屢縣當局と衝突を來した結果嫌氣が起り中學校教員に逆戻りせんかと考へたが沈思熟考の結果いや／＼自分は一生を農業教育に捧ぐると決心したではない

かと反省し爾來惡戰苦闘昭和八年三月山口縣立小部農學校勤續十七年を最後として圓滿退職し、今は財團法人帆足記念圖書館理事の一人として奉仕的に勤務して居るが、過去三十八年七ヶ月間の中等教員生活中五年九ヶ月の中學及び師範教育に従事したる以外三十二年十ヶ月間農業教育に従事したる事を追憶すれば感慨無量である。差別的待遇に憤慨した結果私の公にした著述は次の如くである。（参考の爲主なるものは定價を記す）

- 一、増訂日本植物病理學（定價二十圓）
- 一、續日本植物病理學（定價拾五圓）
- 一、北米見聞記
- 一、農學校用英文第一、第二、第三讀本及科學讀本
- 一、A Brief History of Plant Pathology in Japan（日本植物病理學會報第二卷第三號別刷）
- 一、農作物病害正圖（定價十二圓）

終に臨んで私は他郷に在て大分中學の卒業生諸君に面談の機會を得る時は實に愉快であつた。其の中私の奉職時代在學生たりし諸君を擧ぐれば福井縣で警察部長伊東喜八郎君（第十二回）、土木技師垂水輝治君（第九回）と屢面會し又先年福岡縣京都農學校に於て「北米視察談」を講演したる時に偶然京都高等女學校長小川直瀧君（第十一回）に邂逅し同校に赴き一場の講演をなした。又先年歸郷の際日出高女に赴きたるに同

校長宮崎直君は大分中學出身（第十四回）で北米視察談を講演するの光榮を得た。大正十三年私が米國に旅行し「タコマ」に赴きし時「タコマ」大阪商船支店長内田茂君（第十二回）の事を耳にし電話を掛けたるに不在にて面會し得ざりしは遺憾であつた。

最後に大分中學の名校長と云はれた津田清三君は前に記した如く私の初めて奉職した八戸中學校長津田清長氏の令息で當時秀才の譽高かりしに多年消息を知らざりしが先年歸郷の序大分中學を訪問したるに三十四年前八戸中學校の生徒であつた津田清三君が大分中學校長であつたので實に嬉しく君の紹介によりて生徒諸君に對し一場の懷舊談を試みた。

（昭和一〇、五、二一日出町望極莊に於て）

### 一行の祝詞

上野ヶ丘に新校舎新築成り、盛大なる開校式を舉行された。明治廿七年七月八日、第六回卒業生總代として山口誠一君の讀まれた祝詞が頗る簡單一行であつた事が當時の話題になつた「本校の新築工を竣へ爰に開校の典を擧ぐ佳賓來臨和氣堂に滿つ將來の隆盛以て卜知すへきなり謹で祝す」



現在の生徒が描く現在の學校、嶄新しき思ひ出とならばと……

## 中學生となつた

一年 長峯 齡一

若葉薫る五月晴の朝だ。いよ／＼夏服だ。新しい金釦が七つ胸にびか／＼光る。これで僕もすっかり中學生になるのだ。永いあこがれの中學生になつたのだ。だぶ／＼の服だが今に僕の中から、五月の若芽の様にすく／＼とのびるのである。空に泳いで居る鯉の様に張りきつた元氣をもつてゐるのだ。僕はこの中學生になる爲朝早くから、夕方おそくまで懸命に勉強した、時には随分苦しいこともあつたがそれも今はもう、皆、楽しい思ひ出となつてしまつた。思へば愉快

である。

入學式の日、校長先生からの訓話を聞いて、校訓を恪守し規則を守り、大中学生としての體面をけがさぬ様に心に誓つた。始業第一日目は友達もなく、學校の様子もよくわからずさびしいながらも一つの望と喜びとを頼りに新しい背囊の大勢の人々と共に大きい校門をくぐつたのだ。學科毎に變る先生がこはい様に思はれた。だが日一日と學校の様子もわかり英語をはじめ、始めての學科も大層面白い。揃の服装で體操や新しい「ゲートル」を着けて教練も愉快だ。竹刀の音は體がひきしまるやうだ。入學式の時誓つた事を忘れずにやつていかなばならぬ。

今年には光榮ある創立五十周年だ。最も意義ある時である。

僕等はいゝ年に入學したものだ。どの方面にも偉い人を澤山出してゐる。我等の大中の五十年間の歴史を知つて胸は躍る。僕も先輩を恥かしめてはならぬ。致々として勵けまなければならぬ。偉い先生が揃つてゐるではないか。堂々たる校舎があるではないか。縣下第一のこの中學校だ。大友氏の昔を偲ぶこの上野丘だ。努力だ。額に青筋を出して一心にやらう。

## 校舎の風景

一年 麻生 逸郎

上野ヶ丘のこんもりした森の中に聳ゆる學び舎は今年創立五十周年を迎へた榮えある大分中學校だ。正門を入ると左側に樹木に囲まれた奉安殿がある。正面には三角形の屋根をした玄關を持つ卵色の本館が突立つてゐる。前面の樹木の色と卵色とがよく調和して頗る趣がよい。本館の後に黒茶色の校舎がある。本館と校舎の間には温室や「八つ手」や「サボテン」等の植木があつて大變氣持がよい。校舎の裏に校庭がある。その端にある花園に春から夏にかけて美しい花の咲くのは我等生徒にとつて一つの楽しみである。校庭の南に劍道場、西

に控室がある。劍道場の下を久大線の線路が通つてゐる。

西に運動場がある。運動場の北隣に老松聳ゆる松阪神社の境内がある。此の老松を見る度に僕等は祖先、大友氏が九州に勢を振つたその時代を思ひ、頭に想像して見るのだつた。よく僕等は此の芝生に腰を下して由布、鶴見の高山を眺めつゝ辨當を開いたものである。これ等のことを思はせる此の木のかずゑは風に吹かれて昔のまゝの音を「さあ、さあ」とさせてゐる。本館の二階から北を眺めると眼下に擴がる大分市の北には白帆走る波靜かな別府灣が横たはり、その向ふには國東半島がぼやつと浮いてゐて實に雄大なものである。此のやうなよい校舎を持ち、よい風景を持つ中學校に學ぶ我等は一大覺悟を持つて、勉強、運動に勵まなければならぬ。

## 中學校の先生

一年 馬見塚 眞澄

つい、三、四箇月頃前途、あれ程にあこがれてゐた大分中學校へ、遂に目出度く入學する事が出来た。然し中學校へ入學したのはよいが、英語・幾何、等の様に、僕達のやうな者に判るかと思はれる程に、むつかしくて、困難な學課目が多

い。それらのむつかしい學課目を、一つ／＼丁寧に教へて下さるの、中學校の先生である。一生の春といはれる中學校時代を、有意義に暮すのは、生徒自身の努力にもよるが、先生の教へ方による場合が多い。それ故、先生は大變有難いものであると思はねばならない。又小學校時代には、先生が居なくても、どうやら判つて行つたが、中學校時代に入つてからは、英語・幾何・武道・教練、等の如く、先生を必要とする學科が多く、先生が無くては何も彼も判らない程、先生が必要である。

中學校は小學校に比べて、授業上、色々違ふ點があるが、殊に目立つのは、一課目毎に一人の先生が居られて、生徒を指導教授する事である。今僕等を教授して下さる先生方を擧げると「修身―校長先生、代數―高村先生、教練―染野先生、國語―田村先生、英語―園田先生、武道―久下先生、田口先生、理科―執印先生、圖畫―鹿兒島先生、體操―久下先生、得丸先生、歴史―諫山先生、幾何―中妻先生、音樂―佐原先生、地理―河野先生、作業―高木先生、國文法―田村先生、習字―三浦先生、作文―田村先生」でこれらの各の専門の學識ある先生方が、丁寧に教へて下さるのであるから、僕達のやうな者でも、聞いた事がよく、頭の中に入る。大分中學の先生方は、僕達の様な腕白盛りの者が多くて、教授をなさるのに、多少の困難があることであらうと思ふ。この様な事を

考へると僕達は、常に心を引き締めて、先生の一言一句をも聞き逃さず、専心勉學して、先生の御苦心を無にしない様に心掛けなければならないと思ふ。

## 作 業

### 一年 阿部吉之助

「今度の作業はゲートル着けて作業用具を入れてある小屋の前に集合せよ。黒板の隅に小さい字で指示されてあつた。

「次の作業時間にはシャベルで土を掘り返すから其の用意をして来るやうに。」先生がかう言はれた事を思ひ出すと皆が喜び勇んで土を掘る有様や砂をかけられてぶつ／＼言ひながら精出してゐる様子が想像されて作業といふものが大へん面白く思はれた。

やがてシャベルやざるを渡された僕等は先生の指圖に依つて作業場へと向ふ。先生はシャベルを擔いで行く様に言はれたが、尚、引いて行く者や杖にして行く者があつて其の騒しさと言つたら無い。作業場は道より一段低い所でもはや他の組が作業したのか隅の方はきれいに掘られてあつた。「隅の方は掘らないやうに。」と言ふ注意を受けて僕等は掘始めた。

シャベルに力をこめてぐつ／＼とついた。之が土かと思はれる程固い。其の上かん／＼に照る太陽の下で行ふ作業であるから随分に苦しい。それでも根氣良く少しづつ掘つて行く。掘つた土をそばに積上ると其處ではこの土を下田君達がさるに入れて運動場に運んで居る。隣では甲斐君が赤い顔をして汗をふき／＼掘つて居るし、前では砂をかけたといつて二人で言合つて居る。間もなく授業も終つたが最も愉快に感じたのはやはり此の時だつた。

## 應援歌練習

### 二年 安本義一郎

時は五月中旬「本日晝食後應援歌の練習を行ふから南校庭に集合せよ」五年。と黒板に書いてある。

僕が大中に入學して強い印象を與へたものは澤山あるが、その中校庭運動場の鐵棒の機械體操・水・土曜日の六限の運動・それからこの應援歌練習である。

大空には一片のちぎれ雲さへ認めることが出来ない。晝食を終へた連中がぞろ／＼と南校庭に出てくる。間もなく五年生の一人が司令臺に上がつて大きく息を吸込んだかと思ふと

「集れ！暫くして又『集れ！』と云ふが朝會の時先生が云ふとは異なつて思ふ様にゆかない。終ひには他の五年生の面々が此所・彼所に飛びまはり聲を張上げて『こりやー』といふかと思ふと急にやさしく『おい並ばんか』とおどしたりすたりたりして漸く集合終る。

臺上の五年生が「今から校歌と應援歌をやる」と言つて、額に青筋をあらはし、顔をうでだこにし有らん限りの聲を出して二・三行歌ふそれから生徒全體が歌ふのである。始めは文句がのみ込めないで紙ばかり見て歌ふため調子がまち／＼である。五年生の面々一方では「こらー早えーぞ」とおらぶ。他の一方では「やみー。やみー。」とどなる。あちらでもこちらでも「やれ／＼。」「續づけろ」と叫ぶ。又始めから臺上の五年生がやる今度は列中の者がさはぐすると五年生が「こらーこづくぞ」とおどす、列中に割込み中で監視する。漸くにして歌ひ初める次第に調子が良くなるにつれて五年生の連中が「うりや」とか「おりや」とかいつて調子を取る。かくして幾度もくりかへしてやる。目前に野球試合をひかえ皆一生懸命に練習する。おこつたり、笑つたりしながら和やかに。

## 遠 泳

二年 佐藤武見

今年も半ば過ぎた。あゝ夏も来た。空は鋼鐵を張つたやうに澄み渡り、綠樹蔭翳として翠滴らむとする。實に趣き深い夏だ。然し夏の日中を歩くのはつらい。此の頃はもう一歩あつても炎暑頻りに襲ひて汗玉のやうである。あゝ此の炎々たる夏日につけて水泳を思ふ。僕の心に殊に刻みつけられたのは遠泳である。それは去年の夏のことであつた。中學入校第一回の水泳、遠泳であつた。僕もそれに参加した。我等一同は春日浦の燈臺より出發した。始めての遠泳とて恐しくしてなんだか心配でたまらなかつた。間もなく疲れがきた、が舟上から「しつかりやれ」「がんばれ」「もう一息だ、元氣を出せ」と激勵されて、行く／＼我にかへつた。海になれた。時々荒波が頭上を掠めて行つた事もあつた。又は舟の上からお菓子も投げてくれた。それを取りながら口をもどかし、或は水に沈むのを食べようと思つて水を飲んだり、沈みつゝあるのを魚が餌を漁るかの如くつかまへ、つかみそこなつては人より遅れたり等して進んだ。到着地は目前に近く見えるけれども、なか／＼行き着かず、中には痙攣がおこつた者もあつた。

進んで終に到着地に來た。僕も無事に來つた。痙攣の爲に遅れた者もあつたが總員全部が途中でやめることなく、此の遠泳を征服した。陸に上つた時は皆へと／＼と力がなかつた。其の時のパンが與へられた時ほど皆の嬉しさは平常と大變違つてゐた。僕は此の時のやうに食物の有難さを知つた事はなかつた。

やがて皆と別れ日も西にかたむきをる頃、我が家として歸つた。

## 記念日を眼前にして

二年 曾根崎賢彦

授業の終を上げる鐘の音が、ひゞきわたると今まで靜かであつた學校が急に蜂の巢をついたやうに、さわがしくなる。そしてランドセルやかばんをかついだ生徒が、にこ／＼しながら、今までとちこめられてゐた兎が、はなれた如く校門から靴音高く我が家に急ぐ。

其の後、庭球、野球、競技部等の練習して居る者、來るべき記念運動會の稽古をしてゐる學年、或は圖畫や模型製作に心をかたむけて居る者。しづまりかへつた校内には、バット

やラケットにあたる球の音、かなづちで釘をうつ音だけが、奇妙な音樂の様に聞える。僕は今、五十周年記念展覽會に出品する爲に圖畫紙の上に筆を働してゐる。友達と共に松坂神社の境内で……。展覽會に心をこめて書いたこの圖畫を出されると思へば、其の苦心は永久の記念、思ひ出となるのだ。と思つた事もあつた。

やがて、全校をあげて此の光榮ある五十周年をむかへるのだ。三千人近くの卒業生を巢立たせ、世の中に貢獻する立派な人物を多く出した明星の如き、歴史あり傳統ある大分中學校よ！此の光榮ある記念日を、むかへながら我等は半世紀にわたる長い由來ある歴史を汚さぬ様に、英雄、豪傑となり一層名をあげて御國の爲に盡さなければならぬことを、しつかりと學び舎のもとで、ちかはねばならぬ。

今や目の前に五十周年をむかへ、もろともに聲高らかに歌はうではないか！

大空高く月澄みて、雲吹きすさぶ秋風に……と。

## 記念日の當日

三年 執行俊夫

六月一日！六月一日！榮ある大中創立五十周年記念日であ

る。僕は此の日接待受附係であつた。其の前日今日の準備をしてゐる時、校の腰掛の上に腰を下して之を折つてしまひ大目玉をくつて大分今迄の元氣が失せてしまつて疲れを感じたがしかし今日六月一日はさすがに緊張して昨日の不愉快感も忘れてしまつたかの様に元氣が出た。朝八時だ僕は新調の服を着て登校した僕等は第十控室のかゝりである。八時半になつた朝會も終つた、がしかし一人だつて僕等の掛りの父兄は來ない隣の九室其の隣の八室等の掛りにはぼつ／＼父兄が見えてゐる。第十控室掛の河野先生が「わしの様な色黒が居るから人氣が悪いんだ」と冗談に言へば同じく伊藤先生も「わしの様な人相の悪い者ががんばつてゐるから、お客さんがない」など、冗談を言はれてゐたが九時頃から段々やつてくる様になり十時半頃になると、どん／＼引き續いて來られて先生も生徒委員も大變急がしくなり第九室は手が足らず僕が度々加勢に行つた程であつた。やがて受附をしめきつて講堂にはいつた。講堂には入ると誰か父兄の方が「僕等が居つた時にあの小使さんが元氣にラツパを吹いてゐたものだ」と感慨深げに話されてゐた。式が始り色々の式辭があつた後神田君が中學代表として、いろ／＼言つてゐた僕等は大中校歌を歌つた。大空高く月澄みて、雲吹きすさぶ秋風に晴る、高峯の麓より白く流る、由布川の水に盡きせぬ恨あり、春風秋雨五百年其の時の感情は何といつたらよからうか、とても筆には

盡されぬ程壯嚴と言はうか嚴肅といはうか兎に角しんみりとした氣持であつた。最後に大中五十周年歌を聲高らかに歌つた。

祇園の若葉緑萌え

大分の川玉ひたす

此の聖丘に輝ける

高き理想の學び舎に

あゝ光榮の五十年

此の時は非常に嬉しく人に「創立五十周年記念日だ。おい創立五十周年記念日だぞ」とほこつてやりたかつた。

此の式の中で一番強く感激した時は此の時である。又先輩に劣らぬ様にしつかりやらうと覺悟したのも此の時である。

家に歸るとお父さんが歸つてゐて色々今日の事について話したがお父さんの嬉しさうな顔を見て僕も非常に嬉しかつた。なんと嬉しかつた。

あゝ、創立五十周年記念日六月一日！僕を幸福に、そして愉快にしかも深い感激のもとに終らせた六月一日！

### 五十周年を迎へて

三年 須藤 實

年月は廻り廻つて、早や本校が創立されて以來、五十年は

夢の如く過ぎ去つてしまつた。五十年！長い様で短いのが月

日である。人生の一生にも當る此の半世紀間に、吾等の大中は如何に急激なる進歩を遂げた事か。

其の最も特筆すべきは校風の變化である。世の中の物質文明の進歩につれて、人心は日々に文弱に流れ行く現今、校風は之と全く正反對に、虚弱から質實剛健の一路を辿つて、今日の記念日を一段と光輝を添へたのである。又開校當時定員の極く少數に過ぎなかつたのが、今や千二百五十名に達し、卒業生も一回の僅か三名に對して、實に七十餘倍と云ふ健實さを示し、現今まで之を通算すれば無慮三千八百四十有三人を數ふのである。其の間賢俊なる人材輩出して、吾が大中の名譽を一層躍如たらしめたのである。今は縣下第一を誇る本校も、五十年間の之等の先輩の涙ぐましい努力の結晶に外ならぬのである。

五十年！成程之を永遠なる時に比較すれば、九牛の一毛に過ぎないであらう。しかし先輩が勉勵懈らずしてよく本校に盡くした爲、此の短日月の間に急進展を見た大中である。今から永劫に續くべき大中、今はまだ更に基礎を固めねばならぬ時代である。

吾等が光輝ある五十周年を迎へて、徒らに自惚れて騒ぎ廻る前に、之等の事實を顧て、其の努力に對して満腔の謝意を捧ぐると共に、殘された事業を引き繼いで、吾が校の基礎を

一層堅實にし、以て百年の計を樹つべきではなからうか。

我が校を顧みて

三年 惟住 敏治

亭々として空に聳ゆる老杉、綠滴たゝる祇園の山頭。此の壯觀な森嚴な上野ヶ丘の一角に形造つてゐるのが我等の大中だ。

自然に富む此の丘に暮す我々は、どんな凡人でもその大自らの感化と其の尊さを感じないものがあらうか。意義ある此の上野の丘に陣取つた我が校は、神秘と此の大自らの感化により創立以來久しく、その名譽を残して來たのだ。之等は皆自然の尊さを浴び森嚴の氣と新緑に對する感傷的な心を持つて又それに松坂祇園兩神社から受ける神々しき神秘な感じを持ちつゝ、一千の健兒が偉大な教訓をつくしながら各々の身を保つた爲である。其の清い麗しい大自然の中に並ぶ英姿を、そしてその中に學業を勵む大中健兒も亦實に清淨な心を持つて堅實な歩を進めてゐる。

あゝ、創立將に五十周年、光榮の五十年、その間我が校に如何なる經歷をもつか、何千の新入生或は卒業生、或は迎へ

或は巢立ちしたゞらう。此の學舎に學び此の新清に育つ大中健兒等、朗らかに學び、そして愉快に進め。

かつて我等の先輩後藤内相が懐古に燃ゆる母校の講堂で、僅かの時間を割いて、一言の訓話を残された。それは何か、當然我等の守らねばならない「強く正しく」の一言である。此の一言を堅く守り得たならば、何の恐怖があらう。

光榮の五十年を迎へ、此の記念日と、強調された一言と、又自然の感化を併せて、老杉古木の間により一層の名譽を放たうではないか。

### 大中に學ぶ

三年 手嶋 邦雄

我等は大中に學ぶ。偉大なる先輩を送り、光輝ある歴史を持つ大中に學ぶ。さうだ。大中は早や半世紀を過ぎたのだ。創立五十周年の式典は六月一日萬人注視の裡に行はれた。初夏の光に濕る上野の丘で、向上の一路に燃ゆる若人は此時己が將來を誓つたのだ。我等の大先輩の語られし如く、強く、正しからんと。

校庭の一角に古く立つ鐵棒!! 君見ずやあの指の痕!! 摺り

へらされしはそも何と化したるか、天下に揮ふ諸先輩の鐵腕を思へ。

我等は鐵棒の下に立ち、飛びつかんとて見構へる。凹凸だらけの其鐵棒のなんと輝くことぞ!! 其時目には見えざる大きな力が上野の丘も私の心も一つにとかしてつゝんでしまふ。動悸は高鳴る、臉は熱くなる。立派な人間にならう!! 國家有爲の材にならう!!

それは此學舎に學ぶ者の眞の叫び聲なのだ。

此時ふつと我心を襲ふ、それは一抹の不安である。今の大中に誰がしたのか。諸先生や諸先輩の努力の賜ではないのか。我等は果して此校をして、より立派になし得るだらうか。いやどうしてもさうせねばならぬのだ。

つと我心の一角より此不安を除く一大勢力が生ずる。其時我等は靜に微笑む。

嗚呼 我等は大中に學ぶ!!

## 寫 眞

三年 櫻 井 春 男

「集れ」一列に並んで漸次腰を掛けた。皆んなの顔が笑ひ出

しさうな、緊張したやうな顔になる。目の前に寫眞機のレンズが光る。帽子をぬいで皆んな優等生のおとなしい坊ちゃんに早變りした。「寫しますよ」バチ!! 僕はこれを如何に待つたことか。何故ならば僕は先生のすぐ横に坐つてゐたから、先生から離れたと思ふと又押戻される。顔を赤くして、汗を流した。漸くすんで思はず「ワツ」と聲をあげながら皆んなの後

に來た時、思はず僕は吹き出した。何故? それは皆んなの服の尻が破れてゐたからだ。後から見れば先刻の溫和しい坊ちゃんはずぐにあらがるからだ。

後日寫眞が來た時、皆んなの顔の可笑さよ、口をとんがらかしてたこのやうな顔、本當の坊ちゃん顔しかめ面色々様々種々段々の顔が陳列されてある。

二年の時の學級寫眞を撮つた時の思出である。今までこれ程可笑しかつたことはない。

## 學生生活の一日

四年 莊 浩 一 路

朝會。リン／＼……朝會の初まるベルが鐘と共に鳴り響く。大部分の生徒は既に列んでゐる。體操の先生が司令臺の

上から生徒を睥睨してゐる。出席簿を提げて先生が出て來るその間を遅くなつた生徒が帽子を脱いで彈丸の様にすり抜けける。やがて、「キラツケ。」と破鐘の様な號令が掛る。生徒は一齊にバネ仕掛の様にピンとなる。奉安殿、先生への敬禮、出席點呼、服装検査が済むと朝の體操である。陽光を浴びてピチ／＼した千二百の白い塊が、威勢のいゝ先生の號令に合わせて、銅鑼聲を張り出して機械の様に動く、綜合美の極致だ。

授業。英語の時間である。先生が闇魔帳を出される。皆深刻な顔をしてゐる。神に力が有るならば、どうぞ當らぬ様にと祈つてゐるかも知れない。「A、讀んで譯せ」と、先生が云はれる。調べて來た者は當らないと返つて残念かも知れない。が、そうで無い者はほつとした顔をして當つた者を見てにやりとしてゐる。自分の不安を一掃して呉れた犠牲者? とも思つてゐるらしい。

數學の時間だ。凡そ滿點を取り易いのも、零點を取り易いのも數學である。出來る者は憎らしい程出來る。併しそれと正反對に俺はそんなやゝこしい事は判らんと云つた様な顔をしてゐる者もある。數學の試験で難問にぶつゝかつた時の顔付位悲壯な物はない。顔を火のやうに照らして、中には眼の色迄も變へてゐる者がある。若しこの様に一生懸命頭を使ひ續けたら一日もしたら死んで終ふだらうと思はれる程だ。

晝食。それは學校に來て最も待ち遠しい物の一つである。

元氣旺盛な青少年時代だ。十一時頃にも成ればもう胃は九分通り空腹を訴へる。生徒が楽しく語り合ひながら、さも美味しそくに辨當を喰べてゐるのを見たら誰でも微笑を禁じ得ないだらう。

午後の授業、殊に春から夏にかけては朦朧とした顔付をしてゐる者が多い。中には先生の講義を子守唄と聞いたか、どうか、知らないが、既に夢の國に入つてゐる者もある。お腹はくちくなつたし、外からは暖かい風が吹いて來るし、眠くなるのが自然かも知れない。併し眠さを忍んで先生の講義を聞くのが眞の生徒の自然ではあるまいか。

放課。やがて放課のベルがなる。急に學校中がざわついて來る。眠そうな顔付をしてゐた者も急に元氣になつてゐる。現金なものだ。皆出口の所で塊になつてどつと吐き出される口々に「左様なら」を交しながら家路に就く。

## 錦 衣 歸 郷

四年 波 多 野 悟

一昨年の秋であつたと記憶する。その時の我等の後藤農相

の母校訪問が未だに明らかに脳裡に印せられて居る。

閣下は吾等の大先輩として講堂に於て強く正しくということで大中健児をして興奮させた。「我が國は今や將に大危機に直面せんとして國民の大活動する時は來た。國民の中心は唯君等若き人々だ。國家は強く正しく物事をやる所の青年を要求して居る。諸君よ、何事をやるにも強い覺悟と意志とを保持して而も正しい事を正しく行ひ以て國家に盡されよ。」と烈々たる口調を以て吾等をいたく感動せしめられた。

錦衣歸郷は奮闘努力した者に限られた月桂冠であり、故郷の山川風物を悠々たる情を以て眺め得るのは懈怠の人ではない。松坂神社の松林で歓迎の宴に臨み在校中聞き馴れた松風を聞き見馴れた靈山大分川を見たとき閣下の感慨は盡くる所が無かつたであらう。

時こそ違へ、閣下も同じこの大中に學んだのだ。毎日上野の坂を上下したのだ。が閣下の足取りには元氣が一杯であり目には生氣があふれ心は強い意氣に燃え高い理想を抱いてゐたに違ひない。今日の一部の學生の如く希望も信念もなくぶら／＼と坂を昇る無氣力な徒輩とその質を異にしていたのは當然でなくてはならぬ。

閣下の大中卒業後校庭の櫻の咲いて又散ること三十回。學校の校舎の様子は變り先生も生徒も變り校風も亦時代にともなつて變化した。永久に變化しないのは祇園山頭の松と質實

剛健の校訓のみだ。五十年間嵐にも風にも雨にも敗れなかつた質實剛健の氣風だ。而し、今はこの質實剛健の氣風はあま

ねく校内に行はれてゐるか。自分はこの間に對し斷言出來ないのを悲しむ。質實剛健は昔にくらべてやゝ衰へてゐる感はないか我々は今や覺醒し奮然起つて質實に剛健に母校の光榮ある歴史の爲に盡さねばならぬ。

當時閣下の説ける強く正しくを肝に銘じ齒をくひしぱり腹に力を入れ手を握りて自分こそ第二の後藤大臣ともなり母校に錦を飾らんと覺悟したのは自分一人ではなかつた。

時経つこと約二年。未だ閣下の風貌は眼底に焼きつきあの言葉は心中に浸み込んで居る。未だに故郷に錦を飾らんとの慾望は盛んである。

## 晝 食

四年後 藤 勳

學校生活に於て最も楽しい時間は、何といつても晝食の間であらう。もう四限の終りが迫つて來ると、腹の凹み方が甚しくなつてサイレンの音が待遠しくなつて來る。その待遠しい事、實に何と表現してよいかわからない。此の一瞬に於

## 野 外 教 練

四年 工藤 正三

左を見ても右を見ても、只深い霧の中だ。ぼんやり隊の姿が見えその奥から疲れ切つた靴音がひびく。話聲一つしない冷々とした山道に湧くのは永劫に續かと思はれる様な靴音と荒い喘の息吹のみだ。

逆襲!!一秒!一秒!敵の話聲が近づいた。しーんと仕切つた緊張の氣が霧の中を貫く。張り切つた皆の氣分が爆發せんとした頃。

「ビー」合圖の笛だ。

「突込め。どつと湧く喚聲!!雪崩を打つて道の左から右から前方から突撃して行く我が軍!

思ひがけぬ襲撃を四面よりうけて凝然と立つてゐるより他爲す術のない敵小隊を圍んだ皆の顔には霧の中に快い微笑が洩れた。

又銃!!

二列に列んだ又銃の間から流れる霧が白い色を見せて頬を掠める。ぼんやり霞んだ二列の又銃とそのこちらに突立つてゐられる先生の影とが繪の様な印象を與へる。

嗚呼あの露營の夢を見る様な氣持だ。一瞬氣づいた時胸中

ては先生の言葉も一寸耳には入り兼ねる程である。やがてサイレンの音が和やかな春風に誘ふて上野ヶ丘の大中校舎を訪れると、大中健児はほつとして腹をなでるのである。敬禮も、もどかしく机につくと、我れ先にと風呂敷を展げて、辨當の蓋に手を掛けるのである。ガチャ／＼と立てるアルミニウムの音は腹の減つてゐるのを物語るに充分である。辨當の蓋を取つて次に嬉しいのは副食物であらう。自分の好物を發見した時には、今迄の喜びは二倍にも三倍にも倍加するのである。併し嫌ひな物に出會すと、寸前の喜びも忽ちして半減されてしまふ。やがて一齊射撃が始まる。その速いこと恰も火が紙を舐めてゆく様である。併しその間に、點々と交つてゆつくり／＼食べる者も目に入る。蓋し皆性格のあらはれである。

やがて楽しい晝食もすんで、腹一杯に元氣回復すると、その元氣はやがて運動場へと向けられる。仲の善いもの同士が集つて三々五々或は野球に或は庭球に戯れてゐる。或は草の上に寝ころんで雑談に耽ける者もある。かくして四時間の授業の疲れも此の晝間の休に全く回復されてしまふ。そして新しい元氣に満ちた大中健児は午後への授業にとりかゝるのである。



に湧く力強い叫が在った。

祖國日本の爲にやがてはゴビの砂嵐に塗れ、黄土の泥に、なやまされて行軍して疲れた身體を休める爲の露營の時の又銃の姿は今もかわりはないであらう。然し何と云ふ心持の運び方だ。明日を知らぬ命を草の方に休める露營の夢は眞に眞剣に尊いものではないか。「露營の夢」を見て感ずるあの切迫した氣は繪その物からでなくて畫面の裏にこもれる各人の運命の暗示によるんだ。そして目下の又銃の影に王師百歩明日の戦捷を夢みる時亞細亞新興の鐘は高鳴りて若き日本が満天の珠玉の中を王座につく日なんだ!!

僕等

四年 加藤 大八

僕等!ぼく等は中學生です。

一生の最も懐しい楽しい、詩の中に置かれた時代です。そして、その時も春にときめく嫩葉の詩です。そしてそれは雨に惱める海棠を唄った詩かもしれない。僕等は一年の云は三月の頃です。その暫く冬の眠からさめた土の香をかきながらやがて来る春を胸に描いてはかない詩的理想に邁進してゐる。

ます。

あゝ!嘆すべし僕等の理想よ。此の現實を凝視するには、あまりにも若かすぎる僕等よ。(中には賢い者もあるが)果し得ない夢と詩とを追ふ大部分です。

僕等の喜も悲しみも詩であるとは云へ、或る機に臨んで此の學校の夢を離れて社會に對する現實にひきもどされたとき空想的な憧憬や理想が得られない夢であると氣付いたとき、そこにあまい空想の破壊の姿を見つゝ、全ての美をすて、眞なるものゝ探求に向ふあはれな姿よ!

そこだ僕等青少年の繰り返す大なる誤とは。僕等!ぼく等は現時一生の基礎をつくりつゝ進んでゐる。この様な甘い夢の杯をあふりながら、無意味に此の重大な時機を經過すべきだらうか?僕等はあらゆる方面から立脚しても現實にもどるべきではなからうか。そして夢でない詩でない地上に生きるあらゆる者の欲望であり努力である『向上』に憧れの歩を進むべきではなからうか。

灰色の間に芽ばえる一莖の花も、獄屋に蠢く囚人も、萎へたその生の中に或る光明を求めつゝ明日の努力を忘れないではないか。僕等!殊に輝やかなしい未來を持つ僕等は、只徒らに無内省な空疎な價値なき生活に甘じないで明日の光明をめざして、固き機をさる一步を現實の世界に踏みこむべきだらう。

走

五年 宮崎 和作

六時間目の始まるベルがなつた。白いシャツに白のパンツを着けて朝會の隊形に集合、競走部長藤原先生の號令で準備運動、出發合圖と共に白鳩の飛び散る様にはた〜と走り出す。坂は瀧の様になだれ落ちて行く。

踏切を越して平地になるとも早歩いてゐる連中もある。コンチツシヨンのよい者はすん〜走り続ける。山南部二哩程の道を白線を描き乍ら延びて行く健兒の群こそ我が大中競走部の活躍だ。一週二日の運動日に走るこゝろよつて心身を鍛錬して居る。

柔

五年 姫野 寛一

「おい、今日も練習か」

「うん」水香場の水道で手を洗ひながら巨が訊いた。

「きちいか、試合は何時か」

「今度ん日曜じゃけん、今猛練習じゃ」

黒帯で括つた柔道衣をぶらさげながら僕は部屋を出た。

「早よう來んか、何をしをつたんか」道場の窓から眞黒い顔突き出して先着の級友誰彼が叫ぶ。

「ばか、俺あ今掃除じやつたんじゃねえか」

早々に靴を脱いで道場に上ると二三日許り前に換へた疊の香が快よくぶんと鼻をつく。「試合もすぐじやのう」口癖のやうになつた言葉を繰り返しながら柔道衣に着換へる。前日の稽古の汗が充分に乾いて居なかつたので、ぞつと冷く身震ひするやうだ。窓の外から二三人生徒を見物して居る。

「おい、やらうや」と隣りの者に一本申込む。

一禮してさつと取り組む、緊張する。大きな技が相手の腰にはつしとばかり食ひ入る、跳ね返す。又飛び込む、肉彈相搏つ熱戦だ。跳腰、拂腰、内股、背負等續いて掛る。巨體がゆらぐと見るやづでんとばかり鮮かに投げ出される。思はず浮ぶ快心の笑み。

竹刀を握つて

五年 清水 嘉兵衛

敵の攻撃はますます激烈となつて来る。汗は額から目の中

へ目から頬を通つて顎で止る。二三本の猛烈な練習の後だからか竹刀が重くなつて来た。只防禦だ。敵の追撃に對して受けるのみだ。「元氣を出せ」と云ふ聲が耳もとでした。誰の聲か解からない、兎に角最後の力を出して打つて行つた、然し思ひ通りの面も小手も打つ事が出来ない。しばらくして又前の防禦の姿勢だ。頭がぼろろとなつて来た、見えるものは只敵の眼ばかりだ。面を打つ爲か敵の眼がちらつと上を向いた、次の一刹那は無意識の中に敵の小手らしい所を意氣一ぱい打つたらしい。兎に角數秒後には俺は面をぬいで道場の柱にもたれかゝて目をつぶつて居た。

目前では次の試合が始まつて居るのだらう、元氣の好い掛聲と共に竹刀の音が鼓膜をつく。未だ大きな呼吸を俺はせざるを得ない。急に喉が渴いたので汗をふきながら道場外に出ると、庭球場の柵の上に一列に並んだ群雀が慌しく飛つた。初夏の太陽は相變らずさんさんと降つてゐる。速く運動場の方からバツチングの音だらうクワンと響いて来る。競技のピストルの音がする。未だ頑張つて居るのか。俺の胸の中に何だか敵愾心が起つた、俺は水を飲まずに元氣を回復した。そして再び道場に入つた。試合の終るのを待ちて再び練習すべく。

## 射 撃

五年 黒岩 太郎

自分は射撃をやつてゐる。じつと息を凝して標的に照準し銃把を握りしめつゝ、徐に引鐵を引く時一切の雑念が消え去り無我の境に入る。カチツと引鐵が落ちて始めて亦現實に歸へる。尤も自分等は下手であるから實彈を填めると斯んな工合には行かない。彈が填まると氣持が違ふが引鐵が落ちると同時に底響のある音を聴くと共に心地のいい反動を受ける事は實に愉快である特によく當つ時は言はずもがなである。斯様な事を味ひに遠い聯隊射撃場まで銃を擔つて行くのも木曜日の自分の日課の一である。

## 的 中

五年 山手 四朗

「ゆゆん」と言ふ音がする。音は靜に／＼それでも鋭く四方に傳はつて行く。と同時に的場の方では和らかなるに當つた音がする。弓を満月の如く引く時の妙味。とても口や筆先で

は盡せない微妙な感情。矢がさつと風を切る。息つく間も持たせず響く紙の破れる音の心良さよ。

弓を引く時には高尚なすが／＼しい空氣を感じる。それは遊びであると同時に自分の修養にもと考へつゝ引くからである。その上我々の學校の様に高地に在り世の俗塵から脱し得て自然としつくり融け合ひ得てゐる弓道部とて他に餘り無いだらふ。我々は我々の環境に感謝しつゝ弓を引いてゐるのである。又矢を放つ音がする。四方の靜かな空氣に僅かの併し相當激しい波瀾を與へつゝ矢は飛び行く。波は何處迄傳はつて行くのだらふ。頭上の杉の木附近に鳥の聲が聞へる。靜かだ。靜かだ。併し又一面活々としてゐる。躍つてゐる。

## 角 力

五年 廣瀬 康生

相撲？と言ふと野蠻的に思はれるが日本の國技ではないか。丸々と太つた堂々たる力士が四肢をふんでゐるなどは誠に勇壯な感がある。僕は生れつき丈だけ高くこれといふ趣味技能もない。二、三年頃は剣道部であつたが何か良い部はないかと見廻してゐると南すみの一角に小さな奴が十人ばかり

何かしてゐる。つまり相撲だ。よし角力部に入らうと決心し直ぐ部長の所に入部を求めた。「よし毎日練習をやれよ」との事だ。自分から求めた角力だ死んでも取らうと決心した。

次の土曜日初めて習ふマワシの締め方……腹がぎゆうとしまる。「廣瀬、河野、取れ」初めて土俵に上ると胸がどき／＼して誰か見てはせぬか、負けたら恥づかしい……と思ひながらかまえた。「やあ」の行事の聲もろ共立ち上り二三べんもんで負けた……その時の残念さ……其の後型を教へられ其の日はすんだ。朝起き様と思つたら體中いたくて起きられない。やつとの事で起きたが學校では何も出来ないくらいだつた。

二三日経つとだん／＼いたみも止み、角力になれて来た。角力部の顔ぶれを知り角力をとつてもそう負けさせぬ。近頃は分體が太つた様に思はれる良い運動だ。又角力を通して精神修養にもなる。此のサボリマンも角力に興味を持つたので毎日残こつて練習してゐる。

## 籠 球

五年 池本 治郎

初夏の午後、南からの強い日光を受けて暑苦しい、そして

眠い授業が終ると、校内は一時にざわめき始める。我先にと校門を出るのが、黄色い背を肩にしてゐる一年生、後からカバンを長くして、悠々と出るのが五年の群。そして此等の雑音がしきり續いて終る頃、僕は運動の準備を始める。あの狭い、そして砂塵の多い部屋の中で、昨日のユニホーム——まだ汗が乾かずに濡れてゐる——のを着てボールを持つて出る頃は、既に生徒も見えず、角力部の茶色の裸體と、庭球部の白いシャツと、校庭の花壇の赤白黄紫の花の色が特に目立つて見える。コートに立つて愈々準備運動をする時、昨日の眞白なラインはうすれて、昨日の猛烈な練習は物語つてゐる。そして又今日もやらうと考へる。初夏の太陽が、コートの上を強く照らし、松坂神社の松の黒い影がくつきりと地上に擴がつてゐる。其の茶色と紫色との土を、走る——僕等の靴が、そして砂塵を蹴たて……。ボールが高く揚る。中からにじみ出る。渴して来る。併し休まない。水も飲まない。兎に角頑張る。野球も蹴球も剣道も優勝した事がある。併し僕等だけが、未だ優勝を一度もしない。其處には他の考へ一つもない。漸くに人々が疲れ始める頃、中休。一二分して又猛烈な練習が始る。負けてなるものか!!

赤い夕陽が我が聖丘に輝く頃、一陣の涼しい風が吹く。何んとも云へぬ爽快な氣。臺地の新鮮な空氣が自分の肺に流れ

込む。運動場では競技部が引きあげたらしい。ピストルが鳴らぬ。野球は未だカーンカーンやつて居る。シートノックであらう。蹴球部は野球に場を譲つて松坂社の木蔭で息を入れて居る。未だ歸りそうにもない。我等も今一踏張りだ。最後の練習に取るかゝる。

## 鐵 棒

五年 佐藤止才生

運動場の西南隅に鐵棒があります。過去に於て我等の先輩は此によつて身心共に鍛えに——た者であらうと思ひます。現在我々は此の鐵棒を通じて鍛鍊してゐる。今や此の鐵棒は全盛である。我々が休みの時間放課後此の歴史ある鐵棒に飛びつく時我等の精神は緊張そのものであり、而して専心色々な事を練習する。

今我大中には大車輪を始めとして全ての種類に熟達した者が多い。此の大車輪こそは我等の最も望む所であり、必死を覺悟してやつてゐる。

現代非常時にあたつてこの覺悟こそ會心の事である。

## 花 壇

五年 平山親一

初夏の澄み切つた空に日輪がさんくとして輝く午前でさ程暑さを感じぬ光が緑々しい葉に黄金の色を映してゐる。新校舎の南側の日當りのよい處に一列の細長い花壇に。

カーネーション、パンジー、金魚草等の花が咲き亂れてゐる。私は二限の終りに其の場所にぶらぶらとやつて来てゐた。美しい花園をながめた時勉強にあき——した氣持が今は姿も消えてしまつて美しく世界に夢の様に引づられて行つた。花園の使者だらう可愛らしい二匹の蝶がもつれ合ふをして目の前にちらちらと舞うて僕をどこかにさそふパンジーの蝶に似通つた紫や黄色の花が好きだつた彼女は小さいしかし大きな花は強く心を魅する。高き金魚草も金魚の様な美しい色をしてゐる。

ベルがなつた、僕は夢國から出たそして急いで教室に向つたしかし前の時間の苦しきは二度とあらわれなかつた。此の花園が眞の學園たらしむるのだらうと僕は思つた。眞の學生には強健なる反面にはやはり優しい氣分を持つことが必要である、それにはあの花が心を美しく清らかに導いてくれる、何時迄も咲いてくれよ花壇の花。そして千餘の

學生を快らかにせよと僕は願つた今此の學校こそ眞の立派なる學園なることを思ふ。

## 木曜日 の ベル

五年 葛城啓三

學校の合圖のベルも色々に聞える。朝會のベルは急瀬を泳ぎ上る若鮎の様に香しく耳を打つ。——そしてあの力強い得丸先生の號令で手足が自然に踊る

第一限教練、五分も経つのに週番の顔が見えない。先生に後れてノツポの赤章がやつて來た。まるで朝飯にありつかぬ様な顔して居る。——而し銃を取れば國家の干城第二世様だ。

第二限公民、教室に入らぬ先から安東先生の莊重な姿が目先にちらつく。

第三限自習、南側の窓際では青葉の香をかきながらこくり／＼やつて居る。横着者も居る嚴かに響く時間終りのベルに眼を醒まして吃驚りして居る。

第四限公民、二階堂先生の熱辯「昭和十年度の帝國豫算は故藤井藏相の血を吸うて成長したものだ」と云ふ一箇月前に

聞いた言葉が耳に残つて居る。胸のわく／＼する時間だ。四限終りのベルは格別の味を持つて居る。吾等の生命線お辨當の合圖だもの。

第五限用意のベルは無意識に短く鳴つた。やがて本合圖が鳴つた。黒板に描かれる三角形の様に冷淡に。——而し今日の三角の一時間は豫想を反して愉快に過ぎた。

第六限の始まる頃から空合が怪しくなつて来た。母の命に背いて傘を持つて来なかつたことが後悔される。遂にこの時間の立體幾何はうはの空に終つた。

放課の鐘が鳴る。安息を傳へる教會の鐘の様に、但し自分は祈りも捧げずに一目散上野ヶ丘を駆け下りた。

考 査

五年 秋 吉 喜 久 人

毎學期の考査は我等に一種の恐怖と興味とを以て迎へられる。この考査時間割の發表は異常の緊張を與へ努力させられるのである。未だ自覺しない一二年の頃は勉強は考査の爲にする様に思はれてならない。斯くして試験前十日位になると試験日割の發表期日が噂に

のぼつて来る、皆の顔は次第に緊張の度を増す。ノートの整理等で仲々忙しくなる。授業の休みの時間には運動場の芝生、松坂神社の境内等と共に彼處に頁をめぐる、こうして學校の気分はなんとなく重苦しい気分鎖されてしまふ。

試験當日にもなればその気分は更に深刻となつて行く。餘裕ありげに漫歩するもの、一分一秒を追ふて教科書をめぐる者、或ひは徹夜の勉強の爲か幾分の眼の赤くなつて居る者等生徒の様子は種々雑多で只管自己の成績向上に努力して居るのである。試験用紙を配る前の一瞬間程無氣味な感じを與へられる時はない、未知の問題に關する恐怖で身體はかすかにふるへる、頭は非常な混亂で總べての知覺はぼ／＼とした煙の中に包まれる。

この様な陰鬱な空氣の中に四五日も過ぎ去つて愈々考査の終つた時の感情はわく／＼する喜びで躍り歌ひ、試験前の気分とよい對象をなして居る。

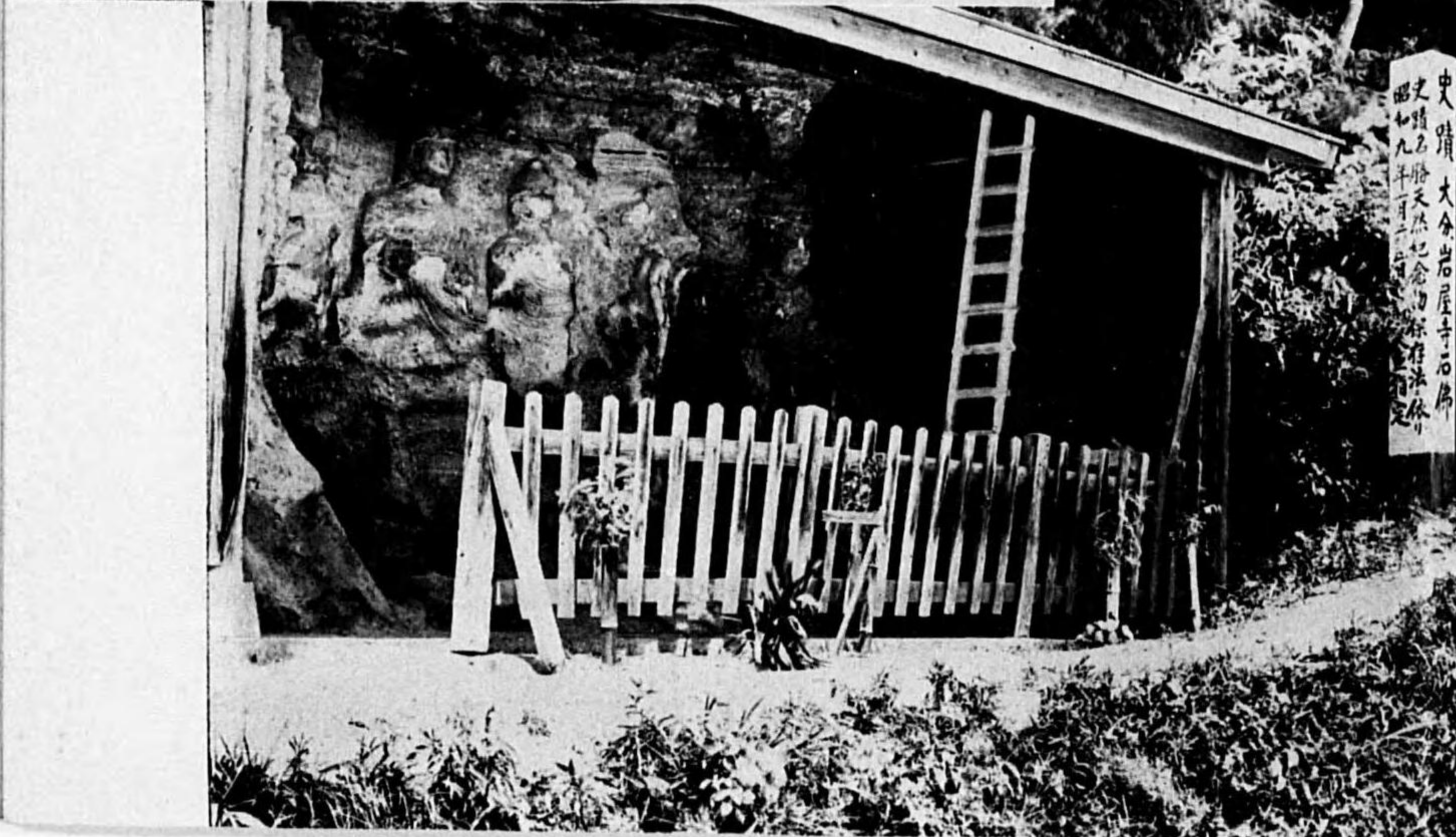
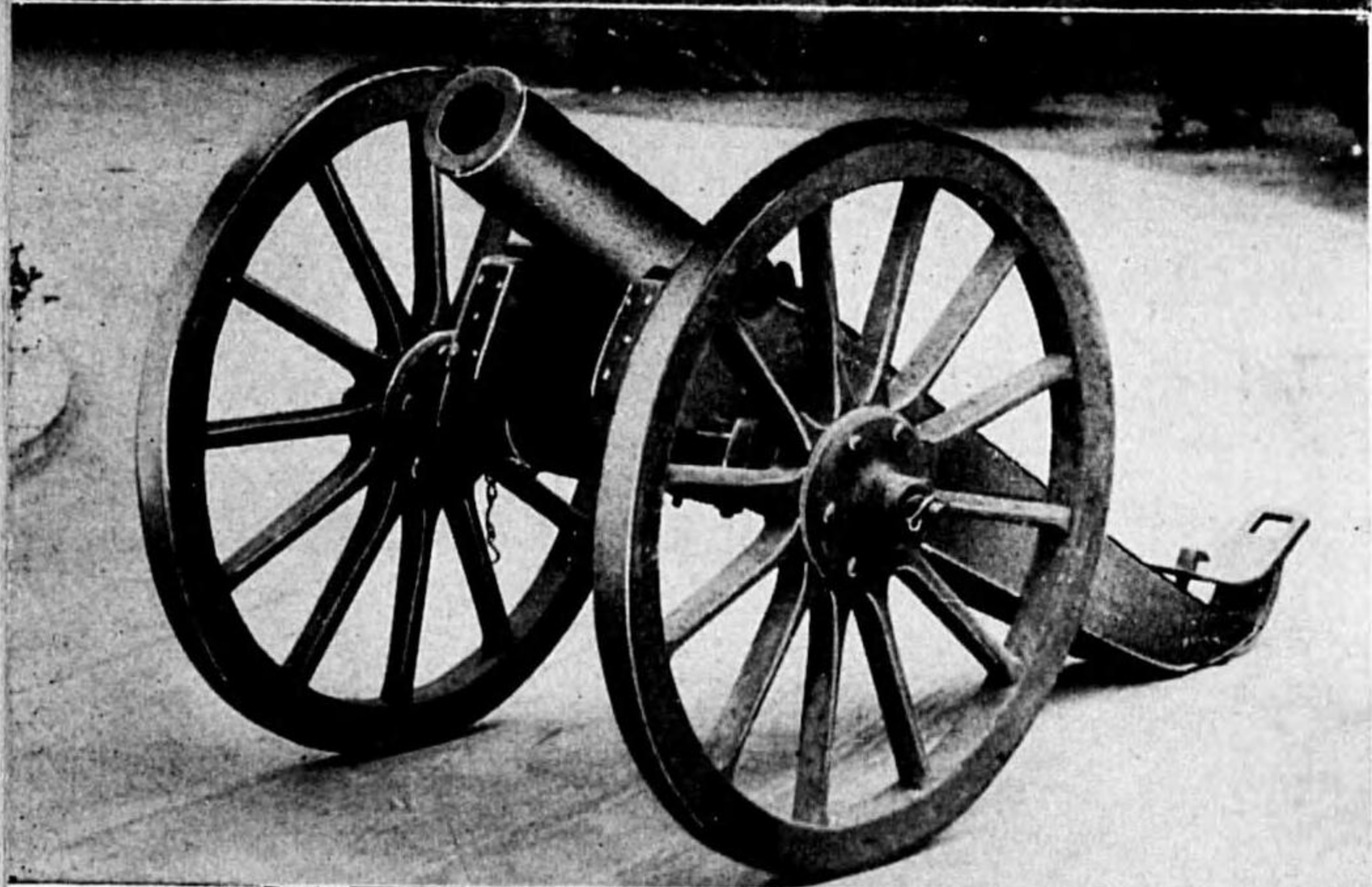
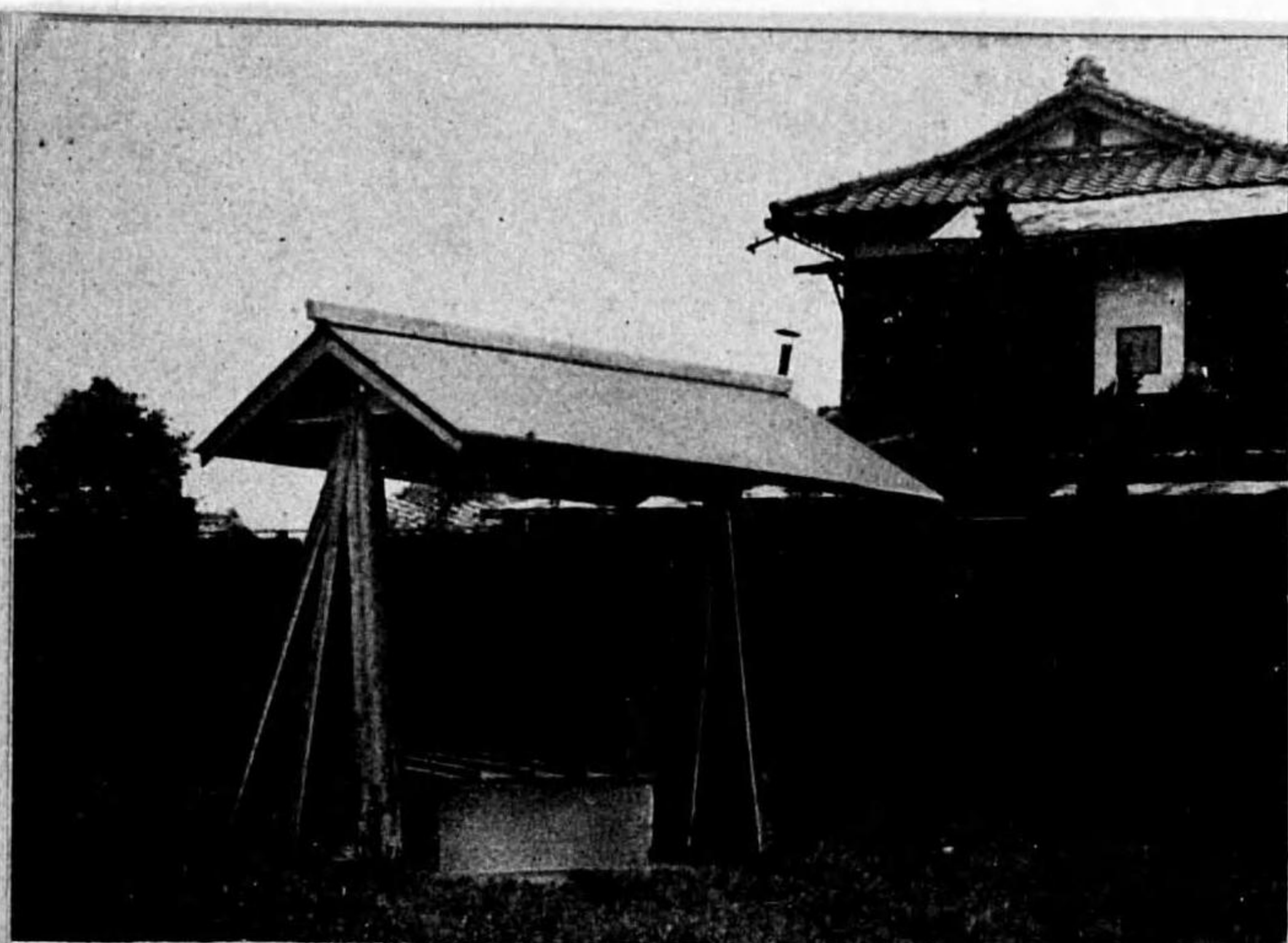
考査！ 考査！ 僕等の憂鬱なものであり楽しみであるもの。學生は考査によつて生氣を與へられ奮發心を起して更に奮闘して遠大なる目的へと突進して行くのである。

史蹟 大分岩屋寺石佛

上 クリ／＼ 山下井戸

中 大中記念品大砲

下 古國府岩屋寺石佛





# 大中の野球史

## 創設時代と黄金時代

佐藤定雄

大分中學校が大分縣における野球の草分けである事はいふまでもない、それだけ相當古い歴史を有してゐる。球投げといふ遊戯時代は別として苟も野球としてルールによつて試合を行ふたのが明治卅年、寄宿舎生と通學生の對抗試合を行ふたのが大分中學校野球史の第一頁を飾るものといつてよからう。この第一回の試合の様様を中根貞彦氏の日誌には次のやうに記してある。

- 寄宿生 P 茨木 育人 C 首藤 茂 IB 宇佐美健吉  
 2B 阿部 雲作 3B 齋藤 薫夫 RF 藤波 正  
 SS 宮崎 儀 LF 多田 虎生 CF 小野 覺

やがてベースにはチヨークを布かれCの後はネットを張り赤旗白旗はベースの上に懸れり。通學生白帽を冠り寄宿舎赤帽を頂きて共に塙に現る。赤帽先づマツチンクとなりてベースに上る。審判者吉村君ブレイを報告するや白組悉く配置につき、いで御座んなれ、いかなる球も此腕にて支へくれんと意氣頗る昂然、宇佐美君先づホームに現はる。君が平素の沈着を以てして猶且つ顔色大に憂ふるものゝ如し。數多の通學生は塙の東方に控へ、舎生は第二舎といはず第一舎といはず、三舎の階上階下人を以て満たされたり。宇佐美棍棒一振すればフォールとなりてCに殺さる。この結果が二十一對二十一の無勝負となりぬ。(下略)

第二回戦には中根貞彦、梅田三郎兩氏も寄宿舎の精銳として出場し通學生軍を撃破してゐる。當時捕手は投手の球をワ

- 通學生 P 木戸 四郎 C 中西龍夫 IB 太田榮昌  
 2B 工藤儀作 3B 吉田 茂 RF 松本  
 SS 島村貴一 LF 溝部洋六 CF 長谷部 晋

大分中第一回寄宿生年八十八



第一回入學生の面影

ンバウンドで捕つてゐたのでランナーの盗壘も容易であつた。め、兎に角スコアは二十三十といふ大きなものであつた。何分素手で捕つてゐたので最初は「イテ」と壘手が文句を言ふてゐたがこれも元氣一杯の練習で平氣でグローブ代用をするやうになつて来た。バットといはず「棍棒」といふてゐた事が面白い。元海軍大佐故溝部洋六氏の如きこの選手の一員として活躍してゐた。

この時代が二三年續いたが十二、三、四期生になると大分進歩し中津中學と對校試合を行つてゐるが、この時代には各壘手ともミットを持ち、捕手にマスクの外に罌當てといふ越中禪の改良したものが使用さるゝやうになつた。服装も第一回中津中學との對校試合にはユニフォームをつけ、脚絆に足袋跣足といふ、當時としては頗るハイカラなものであつた。け中津側の選手を驚かせたものである、勝敗は勿論大分中學の大勝である。

投手工藤芳男君がキャプテンであり、スピードの猛烈なる事はとても評判であつた、この捕手が二期生の首藤茂君、さては大分の運動界で鳴らした太田榮昌君が一壘手、木下俊信君が二壘手、村上武磨君が三壘手、松原君が遊撃手、右翼手足立潮君、中堅手矢野元君、阿部雲作君が左翼手として何れも投球捕球とも鮮かな腕前を持つてゐたが惜しい哉對校試合といふものが殆んどなかつた。め眞の力を示す機會がなかつた。

つた。

#### 四。國。遠。征。時。代。

丸山亮平、矢野元兩君時代の三十五年と安東胤男君時代の三十六年頃の二回松山に初めて對外試合の壯途に就いたが當時松山は松山中學が牛耳を取つてゐた。兩回の遠征共凱歌は松山勢に揚り空しく旗を巻いて歸校した。尤も當時鹿兒島縣加治木中學が來校して試合があつた。當時は野球選手だけが遠征するのでなく何れも修學旅行を兼ねて野球武道の試合を申込みといふ状態であつた。め、遠征チームには二三人選手の洩れてゐた事も不利の地位に置かれてゐた。

#### 熊。本。遠。征。時。代。

明治卅七年だつたと思ふ、五高主催の下に全九州中等學校の野球大會が熊本で開かれた、これに我校も参加したが、投手安東胤男、捕手淺川一夫、一壘手尾渡利雄、二壘手井上隆英、三壘手三重野參吾、遊撃手岩下保太郎、右翼手佐藤定雄、中堅手紀古了、左翼手奥川元市といふメンバーで當時五高在學中の安藤心一郎、山上猛虎、宇都宮文四郎氏らが中心となり應援頗る努められ、濟々鬨には敗れたが熊本師範、柳川中學には勝ち、相當の成績を収めた。次でその翌年も参加し投手は若冠松岡君(大分署長の息)を起用し捕手は淺川一夫と三ヶ尻喜六の兩君、一壘尾渡利雄、二壘紀古了、三壘奥川元市、右翼佐藤定雄、中堅吉川涉、左翼小野眞一の諸君が

遠征し之れ又相當の成績を齎して歸つた。この五高主催も同會の審判が五高生であり常に熊本縣下の中學校にコーチしてゐる關係で熊本縣のチームに多分に肩を持ち審判上に付他縣のチームより批難の聲多く、且つこの参加には各學校とも相當經費が嵩むといふ點から大分中學も二回限りで参加を中止したが、たしか三回位でこの大會も中絶となつた。

#### グ。ロ。ー。ブ。の。使。用。

明治四十年、自分がプレートに立つ時に今日の如きグローブが使用さるゝやうになつた、從來各壘手は勿論であるが投手さへも小型のミットを使用してゐた時先づ投手のグローブ使用時代が来たが、現在の如き精巧なものと異り一種の革手袋といふやうな薄いものであつた。め、捕手の返球や各壘手からうけるボールが強いとピリ／＼と痛く堪へられぬといふものであつた。これと同時にスパイクの着いてゐる靴を用ひるやうになつたが、未だ一般に脚絆に足袋跣足といふ服装が多いため、相手チームからスパイクのある靴を履かれては危くて怪我をするから止して貰ひたいといふ抗議を申込まるゝ程であつた。

#### 二。三。尺。子。の。使。用。

足袋時代の事とて一間半か二間位の手前から手の方から勇敢にスライディングしてゐたので、二壘を盗む際、餘り前方から這つて二三尺子供のやうに這つてベースに觸るゝといふ

滑稽もあつた。それだけ暇さへあると各選手は青草の上でス

ル／＼と這る練習を積んでゐた。當時は横打といふ戦法はなくとに角思ふが儘に打者は打ちまくる事により得點を加へてゐたので、折角長棍一振、外野に飛球を打つてもこれが畑の中に入つてボールが一寸見つからぬと審判はロストボールを宣告し走者は壘に留まりボールが発見され、フワインドといふ審判の聲と共に走壘を開始するといふ變則なルールもあつた。打者が一壘にアウトとなると審判はアウト、オン、ゼ、一ストベースと宣告して居た。

明治卅六年と七年に縣下中等學校の體育大會が大分中學の運動場で開催され陸上競技、野球、武術があり、師範、中津杵築、宇佐、竹田、臼杵の各中學に比し野球の如きは斷然王座に位してゐたが、杵築、宇佐中學の如きは當時未だ野球部は存在してなかつた。縣下中等學校の體育大會、陸上競技會の如き恐らくこれが最初のものであつたと思ふ。

とに角大分中學として卅八九年から四十年頃が第一期の野球黃金時代であり、僕等が去つて以來數年間不振凋落時代がついたと聽いてゐる。

私は大分商業が甲子園に出る毎に、大分中學だつたら。うんと力瘤を入れてお世話してみたいと近畿舊友會の同人と話してゐるのである。光輝ある大分野球史を飾るため一段の奮勵を望みたい。



### 戦塵を顧る

客員 外山利雄

大正五年更生の野球部は強剛の名を九州に響かせたが、此の時の投手は賞島榮七君で剛球投手として謳はれた。其後又もや凋落を辿り遂には野球部解散となつたが、佐伯、中津のみは頗る盛んであつた。前の野球大会が開始されたのが大正十一年で、同年十月師範球場で第一回の大会が舉行された。大師、佐中、中中が断然強く、本校は第一回の劈頭に於て、白中のため八一〇で惨敗した、逐年の優勝校は次の通り。

大正十一年	第一回	大分師範
同十二年	第二回	中津中學
同十三年	第三回	佐伯中學
同十四年	第四回	大分商業
同十五年	第五回	大分商業
昭和三年	第六回	大分商業
同四年	第七回	大分中學
同五年	第八回	大分中學

同六年 第九回 大分中學  
同七年 第十回 大分商業  
同八年 第十一回 大分中學  
同九年 第十二回 大分商業  
第一回優勝の師範は大森——猪股のバッテリーで長打者揃ひであつたと記憶する。佐賀の九州大会に準優勝戦迄奮戦して大いに氣を吐いた時だ。

第二回中津中學は鐵腕鬼塚の時代である。  
第三回佐伯もこれ又剛球投手古川の時代で九州大会には優勝の最終回まで佐賀中學を壓へて居乍ら惜しい負けをして歸つた時である。  
第四回以後は全く大中、大商の争覇戦で四、五、六と三回大商の連勝に續いて七、八、九と三回大中の連勝、第十回が大商第十一回が大中第十二回が大商と交互優勝となつて居る。

大分早慶戦といはれる大中、大商の對戦が如何に熱戦であるか今其の戦績を拾つて見よう。

大正十五年秋縣大會優勝戦

大中	一—二A	大商(師範球場)
大中	100000000000	000000000000
大商	000000000000	11A計 2A計 1

大中	原津邊下股崎藤久 牧
小	大田木猪磯佐高 5
大	47321895
大商	瀬野崎永塚木廣野子 名
柳吉磯是	大植國河 日
685142793	3

九回迄勝ち越して裏二死迄追ひ詰めてもうしめたと思つた瞬間七番打者に投じた不覺の一球それが遊撃の逸球となり左翼更にまた逸して遂に盛り返されてしまつた。これが大正年度最後の試合である。

昭和初めのスコアブックを缺ぐので省略するがこの間依然我校不調の時代であつた。

昭和四年四月	大中二—〇	大商(本校球場)
六月	大中一—五	大商(商業球場)
九月	大中五A—四	大商(別府球場)
同	大中三—二	大商(縣大會)
昭和五年五月	大中〇—三	大商(別府球場)
六月	大中十三—〇	大商(大分球場)
八月	大中一—三A	大商(中津大貞公園)
九月	大中八A—二	大商(縣大會)
昭和六年七月	大中二—四A	大商(熊本水前寺球場)
九月	大中一A—〇	大商(縣大會)
昭和七年七月	大中二—八	大商(商業球場)

十月	大中〇—九A	大商(縣大會)
同	大中七A—六	大商(高商球場)
昭和八年四月	大中七—九	大商(高商球場)
大中	230000000000	200000000000
大商	1234567890	100000000000
計	7	9

大中	山野水木内方野形橋
284165793	
大商	内原森薛 手田田玉澤
872691345	
志岡榮兒長	

七月	大中九A—八	大商(縣大會)
大中	00005301A	
大商	123456789	計 9A
1000000025		8
昭和八年七月	大中〇—一A	大商(宮崎球場)
大中	0000000000	
大商	123456789	計 1A
000000001A		0

昭和九年五月 大中 二A—一 大商  
七月 大中 四—六 大商 (縣大會)

大中	0	0	0	0	0	1	0	3
大商	1	2	3	4	5	6	7	8
計	1	2	3	4	5	6	7	8

野山木木方野永原原邊  
小吉青笠白河福千川渡  
PH 5

27	3	0	4	10	1	1	0
打數	安打	三振	四死	盜壘	失策	二打	
37	11	0	4	2	1	2	

大商 手原 澤 玉木 永田 島  
志原 長 薛 兒 証 秋 藤 大

昭和四年以降大中野球部黄金時代ともいふべく津田、小野、秋岡、青木と次々に名投手を出して居り、之を助けるに山上、原田、吉山の捕手で大中野球史に豪華版を彩つたのである。

大商との對抗以外縣外他校との試合に次の様な戦績を残してゐる。

昭和四年五月 大中 八A—六 下關中學 (高商大會)  
同 大中 〇—七 長府中學 (同 優勝戦)

七月 大中 五—六 東筑中學  
(佐賀大會 九州豫選)

八月 大中 七—一 長府中學  
(中津體協 選抜野球)

昭和五年五月 大中 十九—五 小倉工業  
(中津體協リーグ戦)

同 大中 四A—二 鹿兒島二中 (高商大會)  
同 大中 一—〇 長府中學 (同 優勝戦)

七月 大中 四A—三 修猷館  
(別府體協 選抜野球)

同 大中 四—九A 丸龜中學 (同 )  
同 大中 十二—一 都城中學  
(鹿兒島大會 南九州豫選)

同 大中 二—三A 熊本工業 (同 )  
九月 大中 一—一八 宇和島商業 (別府球場)

昭和六年五月 大中 五—七 鹿兒島一中 (高商大會)  
八月 大中 五—〇 徳山商業  
(中津體協 選抜野球)

だ。

本年大學リーグ戦に出て帝大の爲めに一番三番を打つて居る津田君小野君を先輩に持つて居ることは大中野球部の誇りであり大中フアンの喜びである。若き大中の選手諸君よ先輩の名に對して將た又部の歴史の爲めに頑張つて呉れ給へ。最後に記して置きたいことは連年優勝の蔭に大中野球部に絶大の同情を寄せられた野球後援會のあつたことである。

昭和四年の夏先輩奥川元市氏、桑原儀太郎氏其他二三氏が野球部練習費へ後援されたのが始まりで次第に大きく次第に堅實な後援會が出来上つたのである。今手許にある昭和六年度の報告書の序記を記載して幸に同好諸君への檄としたい。

昭和六年度大分中學野球部後援資金寄附報告書

みな様の御同情により左記の通り集りました。之を世話人に於て最も有意義に支出し明年三月に決算報告をする事にいたします。本年のコーチヤアは慶應の遊撃、牧野選手を七月十日頃より迎へる事になりました。此費用の大部分は内本浩亮氏より寄附下さる事に内約が出来て居ります。七月十日から午後練習を見においで下さい。「何時も氣をわかしく」

昭和六年七月二日 大分中學野球部後援會

昭和九年四月 大中 二—七 宇和島中學 (別府球場)  
對大商戦に於て十八戦九勝九敗、縣外試合に於て三十戦十五勝十五敗。此の間大商が屢々甲子園へ馬を進めたのに比して恵まれないこと夥しい。しかし大中選手は若い、これから

同 大中 六A—二 熊本工業 (同 )  
同 大中 四—二 宇和島中學 (同 優勝戦)  
同 大中 〇—二 佐賀中學  
(七高三十周年記念大會)  
同 大中 一—二 鹿兒島一中 (同 )  
同 大中 七—二 鹿兒島實業 (同 )  
同 大中 三—五 佐賀中學  
(高商球場 佐中招待野球)

昭和七年八月 大中 〇—一A 鹿兒島二中  
(鹿兒島大會南九州豫選)  
同 大中 一A—〇 南筑中學  
(春日原球場 九州選抜)

同 大中 五—六 修猷館 (同 )  
十月 大中 二—四A 宇和島中學 (本校球場)  
昭和八年三月 大中 一—十三 小倉工業 (別府球場)

四月 大中 六—一 宇和島中學 (同 )  
六月 大中 四—八A 熊本工業 (同 )  
七月 大中 三A—二 熊本師範  
(宮崎球場 南九州豫選)





### 陸上競技の展望

三十九期 衛藤 又彦

大中の陸上競技部は遠く明治二十年頃から大分師範に對抗して華々しい歴史を残してゐた。その頃年長である師範生に對して大中健兒は力と技倆を超越した意氣と熱で闘つて來た。吾等の先輩は遠く創立當時からその歴史を汚してはゐなかつた。明治二十三年二月十一日蓬萊公園に於ける恒例の本校、師範聯合運動會に於て應援團の位置争奪のことから兩校生徒の衝突事件を惹起して遂に對抗競技は中止となつた。

それから大正五年、即ち東京に於ける第三回極東大會を翌年に控へた五年の秋、初めて縣教育會主催に於る縣體育獎勵會主催の大規模な體育大會が練兵場で開催された。秋空高き十月十七日縣幾萬の壯者の精粹(青年團、學校教員、中等學校、高等小學校等)八百七十五名が参加して、こゝに縣體育史の第一頁を飾るべき大會の火蓋が切られた。

大正 六年度 縣體育獎勵會主催第一回縣體育會記録

△八八〇碼リレー 一着佐中一分五十一秒、二着大師、三着大中  
△鐵彈投は三位迄大師で占む

△走 高 跳 一着梓中五呎八吋、二等大中(安部幼男)五呎五吋  
五三、三等中中

△四四〇碼 一分七秒二豫選のみで決勝は行はれず本校から坂  
田利武、小暮行雄、佐藤茂喜が入選した。

△十哩マラソン(コースは練兵場を出で、竹町、長濱を通り高松  
に至る往復) 一着後藤(師)六〇分二四秒二、二着澁谷(師)、三  
着原武夫(大中)六二分二六秒、四着橋本(林)、五着佐藤箕(大  
中)、六着能丸(師)、七着近藤(師)、八着吉廣(大中)六五分〇  
二秒、九着坪根(中中)、十着戸山(林)

當時採點はなかつたので優勝を決することが出来なかつたが、各校が全生命を叩き込んでゐたのはマラソンであつた。マラソンの一位で優勝が決められてゐたのでこの應援は實に物凄く應援旗は兎も角、嵩を振り舞してゐたのだから頗る險難な話である。鶴崎町近くに至る迄の沿道は本校、師範が相對峙して狂的な應援戦が展開されてゐた。それだけに選手も此の種目には文字通り生命を賭けてゐた。入選した師範生の多くが天折してゐる事實に徴しても其の壯觀が豫想される。勝を宿敵師範に譲つた本校應援團は夕陽漸く蜜柑山に没する頃應援旗等を焼きながら校歌「大空高く」を唱へ相擁して泣いた。これが前例となつて負けると旗を焼き校歌を合唱しながら

ら泣くことに定めてゐた。そして堅く、來年の雪辱を誓ふのであつた。

大正 六年度

ついで六年十月十七日第二回縣體育大會が行はれた。前年の晴天に對し此の年は雨で會場の練兵場は泥の海と化し選手  
の苦戦は想像以上である。本校關係の入選者は僅かに

△鐵彈投 五等岩田金生、△四四〇碼、横田諒、阿部猛、津野省  
三、松岡昌一

にして恒例のマラソンは七哩に改められ、又年齢も十八歳以下  
十回以上と規定されたが其の成績左の如く甚だ振はず、受  
難時代を續けてゐた。

△マラソン 一着佐藤(師)四一分五一秒、二着廣瀬(師)、三着添  
田(竹中)、四着渡邊(師)、五着渡邊(佐中)、六着山村洋一(大  
中)四三分三六秒、七着松本(中中)、八着太田(佐中)、九着鶴  
木(中中)、十着清原(師)

大正七年度は折悪しく縣下に亘つて猛威を逞ふしたスベ  
イ風流行のため縣の注意に依り中止となつた。

大正 八年度

十月二十六日、第三回體育大會が練兵場に於て開かれた。  
例のマラソンでは本校並に師範とも落ち白中が斷然首位を占

め、大工、竹中之に續くと云ふ大番狂せを見せたので本校生徒は色を失ひ五年生(三十二期生)が四年以下下級生の前でオイ、泣き「母校の榮譽を如何せん、先輩の偉業、あゝ遂に汚辱したり」と叫んで應援旗ばかりでなく明治十八年本校創立以來我等と喜怒哀樂を共にして來た白地の布に日本地圖を畫いた大旗(明治三十年校旗制定迄校旗として尊重してゐた)と一緒に焼き、夜になるも練兵場を去らず長恨を呑んで泣いたものである。そして來るべき大會に於ける雪辱を堅く誓つた。そして其の誓ひは決して反古にはならなかつた見よ!其の翌年十月二十七日から上野ヶ丘グラウンドに彩る白衣の群、唯「雪辱」の二字に高鳴る若人の猛練習が開始されたのだ。其の臥薪嘗膽報ひられ後年岡、仲野、御手洗等の俊剛輩出した大中黄金時代を形成した。之等の俊剛は此の時に驟起したのである。此の年の惨敗で懦弱に溺れやうとした母校の空氣が見違へるやうに刷新され、忘れやうとした大魂が甦つて來たのだ。

大正 九年度

二豊の天地に陸軍特別大演習が展開され、長くも皇太子殿下の御親閱を忝ふした感激の一年であつた。而も大中として永遠に記念すべき十一月十四日には殿下の行啓を仰ぎ縣體育大會を臺覽に供した。此の日前日の雨で聖丘の草木は拭はれ

た如く美しく輝き、老松の緑も一入濃く、葦も山も水も總てがけふの榮を祝ぎ奉るかとも思はれた。かくて殿下には午後一時二十三分着御、柴山校長の御先導に依り生徒成績品を御覽遊ばされた後グラウンドに玉歩を進め給ひ、御機嫌いとも麗しく幾度かプログラムに御目を注がせて御熱心に運動を御覽遊ばせられた。光榮の御覽遊ばされた成績左の如くである。

- △小學校二〇〇米、一着平川春一(大分第一)三〇秒六、二着二宮恒夫(同上)、三着村上米一(女師附)
- △同四〇〇米、一着阿部賢一(男師附)一分六秒八、二着得丸要三(第一)、三着荒巻庄太郎(同)
- △同八〇〇米リレー、一着第一 二分五秒八、二着男師附、三着第二
- △中等學校四〇〇米、安部(武)師一分一秒二、二着岡健次(大中)、三着馬見塚(師)
- △同八〇〇米、安部(後)師二分二十二秒、二着姫野(師)、三着藤田(大商)
- △同八百米リレー、一着大中一分五十一秒六、二着師範、三着大商

大正十年度

大正十年は大分市で九州沖繩八縣聯合共進會が開かれたの

最成期と云はねばならぬ。即ち大朝が第三回東西對抗競技開催を機とし中等選抜選手競技大會を五月七日京阪寝屋川グラウンドで舉行につき、本縣の豫選會が四月三十日本校グラウンドで開催された。本校選手の成績は、

- △百米、一着岡健次(十一秒四)、△二百米、一着岡(二四秒八)二着仲野、△八百米、一着日野至二分二五秒八、△五千米、一着足立大助十八分十四秒二、△マラソン、一着足立三十七分四十二秒六、△八百米リレー、大中一分四十一秒四、△ハイハードル、二着是永満、△ローハードル、一着石田章三十一秒、二着石田章三着若尾、四着橋本、△五種競技、三等幸健一、△走高跳、一等是永満一米五三、△走中跳、一等小手川碩五米六九、△ホップ、ステップ、ジャンプ、三等御手洗武夫、△砲丸投、三等藤藤光雄
  - △走高跳、三等片桐、△千六百米リレー、一着大中三分五十九秒八
- 壓倒的大勝利で凱歌を奏し直ちに岡健次、仲野義孝、御手洗武夫、足立大助の四名が大阪の檜舞臺に向つた。百米決勝に於て岡は斷然トップを切り、神戸二中土居の肉薄實に物凄く同時にゴールに入つたが結果は「一着岡、タイム十二秒五分ノ二」を報じた。スタンドは割んばかりの騒ぎで「岡、岡」の聲は暫くやまず此の感激は吾人の記憶に尙ほ新しい所である。ついで千六百米リレーに移り、先づ御手洗がトップを承つて出で二位に續いたが前走者の勿ねたスパイクの泥が眼に入り、どうすることも出来ず二位の儘足立に渡す、足立も二

を機に本縣體育協會主催九州オリムピック大會が本校グラウンドで第五回極東大會(上海)第一次豫選を兼ね四月二十三、四の兩日に亘つて舉行された。

第一日の二十三日は絶好のオリムピック日和に恵まれ、九州の精鋭をすくつた本大會に於て大中の成績は旭日昇天、此の二、三年惨めなスランプに呻吟してゐた大中は一躍九州中等競技界の覇者に肉薄したので。一萬餘の觀衆は大中の躍進又躍進に呆れてしまつた。蓋し本校にとつて絢爛たる黄金時代が訪れたのである。第二日の二十四日は大雨となつたが、選手の士氣益々旺盛、物凄く接戦が次々に繰返されたが本校は結局四年橋本九州男君が圓盤投に、岡健次君が幅跳に首位をとり、人氣の焦點であつたリレーにも堂々と優勝した。而も出場選手何れも五位以下に下る者なし、選手、應援團は初めて歡喜に泣いた。惨敗の恨を呑んで校門を去つた先輩團から喜びの手紙が舞ひ込み聖丘は全く歡喜に包まれてしまつた。岡は更に東京に於ける第二豫選に幅跳選手として上京したが或る事情のため惜しくも落選した。併し之に依つて大中競技部は全國的進出に第一歩を印したのである。

大正十一年度

名實共に充實して來た本校競技部は今年を以て黄金時代の

位の儘で仲野に渡したが二、三位の追撃急を極め危く岡に渡した時は遙かに遅れた。こゝで岡は草駄天走りに肉薄又肉薄三チーム殆んど同時にゴールインしたが岡の獅子奮迅の健闘功を奏し第二位となつた。一位のタイムは三分五十九秒であつた。此の遠征は本校競技史上永遠に傳はるべき記録で本校に學ぶ者必ず此の輝く歴史を忘れてはならぬ。岡は翌年大分高商に入り更に日本の選手として活躍するに至つた芽生えは此の時に築かれた。

十月二十九日には九大に於ける極東大會第一次戦に岡、仲野、小手川、甲斐、足立、日野の一行が出場した。此の大會で岡は福岡工業の吉田を破つて斯界に多大のショックを與へた。

大正十二年度

至寶岡、御手洗、仲野、小手川等の錚々去り一沫の寂しきを感じたが足立、片桐、高平等の躍進目覚しく、依然黄金時代は聖丘に輝いてゐた。

大分高商の近縣中等競技會が六月十日初めて催されたが、此の時高商との間に小さい悶着があつた。それは競技會に中等學校選手が血みどろに闘つてゐるのに高商生の運動種目は餘りに不真面目だと云ふのであつた。結局和解が出来て出場したが、大師について二位となつた。

九月一日突如として起つた關東大震災のため縣大會は中止となつたので代つて市内四中等學校體育聯盟が組織され、その第一回が十月二十一日本校で開催された。結局一位大師三〇點、二位大中二七點五、三位大商一六點五、四位大工四點となつた。本校關係の成績左の如くである。

△百米、一着片桐十二秒四、二着廣野、△二百米、一着廣野二十秒、二着片桐、△四百米、二着大津留、三着佐藤、△八百米、一着足立五分十秒、二着日野、三着吉田、△千六百メートル、一着大中(廣野、佐藤、足立、片桐)、△走巾跳、三等岩田、△圓盤投、三等横島

大正十三年度

四月二十三日第四回中等學校對抗競技會に片桐、吉田が出場、吉田が五千米に入選し、吉田の縣大會に於ける活躍の基礎をこゝに學んだ。

五月二十一日の大分高商大會には大師、大中、白中、佐中及び杵中の順で大師が再び優勝した。高平、片桐、隅、井出野等が主として活躍した。

六月十五日、第二回市内四中等リーグ戦が本校に於て舉行され、大中三七點五、大師三六點五、大工十四點、大商六點で大中が雪辱した。高平が二百で二十四秒四、吉田が八百米で二分十九秒四、同じく五百で五分七秒二、又千六百メートルで四分五秒四の成績を作つた。

十月二十九日には本校で第一回縣體育會主催中等學校競技大會が開かれ、大中六八、中中三九、白中三一、竹中二〇、(以下略)の順で本校が第一回の覇權を握つた。尤も此の時には豪敵大師は都合で参加しなかつた。此の年には吉田が八百に二分十五秒、千五百に四分四十九秒、五千に十七分四十六秒、桑野がローハードルで二十九秒、深田が鐵彈投で十一米三五、園田が走高跳に一米五九岩田がホ、ス、ジャンプで十二米四の夫々大量新記録を出した。

大正十四年度

五月二十四日の高商大會は大中一三、大商一〇、大師八、佐中五、宇中三、で優勝した。更に市内のリーグ戦では大中三〇、大師二九、大商一九、大工一で二本の優勝旗が校内に輝いた。此の年には桑野、吉田、山内、羽根等が活躍して此の記録を作つたのだ。

ついで十月三日、第二回縣教育會主催の大會が行はれたが競技中至寶桑野が傷つき當然取るべき優勝旗を大師に渡さねばならなかつた。その成績は大師四七、大中四〇、佐中三四、中中三〇、大商二六(其他略)であつた。

こゝで注意せねばならぬことは此の年スルーイングに依る不祥事件が頻發した爲め此の種の競技が斷然禁止され、今日に及んでゐるのである。

大正十五年度

春高商大會には種々理由もあつたらうが、前年の優勝に對し此の

年は零敗と云ふ未曾有の凋落振りを示した。無論、一同、校庭に歸つて泣いて此の雪辱を誓つた。そしてそれから二十日間足らずの日

數を経て市内リーグ戦を迎へたのであるが、工藤、岡松、河野、吉田、若林等決死的奮戦に依り、覇者大師を三位(一九點)に、大商一位(二八點)、本校二位(二六點)の成績となり、春日浦で一同嬉し泣きに泣いた。僅々二十日位にこれだけの成績がテッチ上げられたのだ(やりさへすれば何でも出来ないことはない)事實をこゝに證明し尊い體驗となつた。

更に九月二十四日の縣大會では大中四四、大師三三、佐中一八、(以下略)で大中は再び歡喜に興奮したものである。そしてこゝに大中は陸上王國として燦然縣下に輝いた。昭和二年以降は諒闇のため各種大會は中止された。高商大會のみが行はれた。市内リーグ戦も多大の効果を殘して解消された。

諒闇も明けた昭和三年は沈滞の氣を一掃し飛躍の年で此の年後藤が走高跳に一米七〇を跳び全九州の注目を浴びた。そして一九二八年の全國中等走高跳のベストテンに入選した。併し縣大會では師範の優勝が實現した。

昭和四年は大正十一年と比肩すべき黄金時代が築かれた記念すべき年であつた。關大の大島氏のコーチに依り内本、久恒の風風は正に翼を擴げたのだ。五高の九州中等大會に出場したのも此の年であつた。無論縣大會には歴倒的に優勝した。

昭和五年は關大の藤枝氏のコーチに磨きがかけられたが主將園田

病み大正十四年と同様の運命を辿り優勝は遠く白杵に去つた。

昭和六年内本浩亮氏の好意に依り世界的名手織田、南部兩氏のコーチを受けたことは光榮である。そして其の効果空しからず縣大會に優勝した。内本が二百米の全國中等五傑表に入つたのも此の時であり更に西日本中等大會に出場して實に偉大な足跡を残した。

昭和七年は至寶内本が最好調にあり、高島、宇都宮、久保田、中島、牧、渡邊等の一流選手を擁してゐた。此の時中津中學に麒麟兒有野、橋本があり、大中、中中の一騎打は最近稀な大熱狂を呈し兩軍選手は血みどろとなつて闘つた。本校選手の燃ゆるが如き愛校心の迸りに依つて久し振りに連続優勝を見た時、千餘の健兒は雀躍して祝福した。

昭和八年は之等選手の大半を失ひ、牧、渡邊が孤壘を死守したが大師が奇勝を博した。中中、中商、四農、國中等、群雄割據の混亂時代であつた。

昭和九年には佐藤、田島、藥師寺、長野、大津、河野等の健兒を輩出し杵中、大工と共に優勝候補の呼び聲高かつたが俊剛安部を擁する杵中が紙一枚の差で優勝した。此の年始めて大會は上野ヶ丘を去り城崎新設グラウンドに移轉した。そして宇中井本、杵中安部、中商木村等の大物が出現し、縣大會は大正十一年前後のあの華やかな時代を再現した。陸上競技復興期を引續ぐ昭和十年度に對する期待は頗る大きい。此の復興期の成果は是非大中健兒に依つて成さるべきである。而してこそ始めて陸上王國大中の名が確保されるので

はあるまいか。其は單に陸上王國中の名に於てのみならず、榮ある創立五十年史を飾る意味に於ても、是非實現されねばならぬことではあるまいか。在校生各位の健闘を切に希望してやまない。探訪法實施以後の縣體育大會の優勝校は左の如くである。

- △大正十年 大分中學    △大正十一年 大分中學
- △大正十三年 大分中學    △大正十四年 大分師範
- △大正十五年 大分中學    △昭和三年 大分師範
- △昭和四年 大分中學    △昭和五年 臼杵中學
- △昭和六年 大分中學    △昭和七年 大分中學
- △昭和八年 大分師範    △昭和九年 杵築中學

この輝しい記録を見ても、大中體育部の生命線が陸上競技にあることが窺れる。又競技部長として献身的努力を捧げて下さった伊藤仙藏、宮崎直、大地太吉諸先生の功績を忘れてはならない。現在では縣競技界の羅針盤の稱ある河野行雄先生が全精神を注ぎ込んでゐることは寔に心強く部の前途多幸と云はねばならぬ。終りに本校のベスト・レコードホルダーを掲げてみよう。

- △一〇〇米内本勝比古(十一秒三)、△二〇〇米内本勝比古(二十三秒二)、△四〇〇米藥師寺岩雄(五五秒)、△八〇〇米渡邊章(二分一秒六)、△千五百米大津正巳(四分三九秒)、△五千米河野春生(十七分三三秒)、△低障礙久恒木應(二七秒四)、△八〇〇米繼走(高木内本、藤田、高島)一分三九秒、△走巾跳久恒木應、六米四四二)、△三段跳、久恒木應(十三米二二)、△棒高跳、久恒木應(三米五二)△走高跳、原田成一(一米七五)

### 中學校移轉の動機

—小野吉彦翁の敷地寄附—

高山英明 手記

昨年十二月の或る日、私は田口知事を官邸に訪問して、將に辭去せんとする一刹那、知人小幡山麓君が見えたので、暫らく對談する中、吾が大分中學校が、明年開校五十周年を迎へるので、吾々同窓生は記念號を發刊すべく計畫してゐる、夫れに就ても母校が荷揚町から、何故彼の地に移轉したか、若し當時の事情を承知でもあらばと云つたような話が出たので、それは私も聊か内情を承知してゐる、殊に私は其の後縣學務課や、教育會などにも關係してゐたので、及ばずながら古い記憶を辿つて、記述すべく約したのが、此の一文である、と云つて別に記録や參考書を檢討した譯でもないから、多少の誤りは勘辨して貰ひたい。

大分中學校は、今の大分第一高等女學校の北半部に設けられ、其の表門は西向き、即ち今の大手町に面し、門の右手には、士族屋敷の面影を偲ぶにふさはしい松の老樹が一本横たわつてゐた、明治十八年五月の開校當時は、生徒も僅々七十

名内外で、左まで廣大な敷地も要しなかつたが、爾來年一年生徒の増加に伴ひ、校舍増築の議が持ちあがつた、と云つて、南半部は大分縣尋常師範學校で、此の方面への擴張は無論出来ぬ、北隣の神波伊與治、木戸次郎氏等の邸宅を取り入れても、僅かに千坪位の擴張で、是れでは又候移轉論の再燃するは必然だ、寧ろ此の際百年の計を樹て、速く郊外に進出すべきである、と這う考へた時の知事岩崎小二郎氏は、明治二十四年の或る日、縣會議員で縣常置委員の小野吉彦翁に懇談されたので、小野氏は即座に答へた、夫れは少し遠方かは存せぬが、上野の臺地で支障なくば、敷地全部を私が寄附しますと、是を聞いた岩崎知事は、小野氏の厚意を感謝し、爾後話は順調に運んで、今の校地に移轉したのである、當時小野氏の寄附した面積は四千何百坪だと記憶してゐるが、其の後數度の擴張で、今は五千六百六拾五坪と云ふことだ、吉彦翁が寄附された當時の地代は、一反歩僅かに六七拾圓位であつたが、今は坪三四圓——反當り千二百圓——となつてゐる、假りに坪三圓と見積つても、其の總額は壹萬五六千圓に及ぶ譯だ、縣下資産家多しと雖ども、這んな義舉は殆んど稀有と云つてもよろしい、随つて校内の何處かに、小野吉彦翁の頌德碑を建設すべきは眞に當然のこと、信ずる。

斯くて明治二十五年の通常縣會に於て、大分中學の建築費

は議決せられ、翌二十六年四月頃より工事に着手し、其の翌二十七年六月、愈々荷揚町の舊校舍から、此の上野ヶ丘に移轉し、今日に及んだものである、併し學校は出來たが、是れにて通ずる道路はない、或るものは東新町を迂廻し、或るものは裁判所西側の祇園道を利用し、其の不便不自由は想像の外である、隨つて南新地あたりの生徒は、金池方面の田畑を自由氣儘に横切つて通學し始めたので、忽ちお百姓連の抗議となり、是れには學校當局も少からず頭を悩まし、漸やくにして縣の補助や父兄有志などの寄附を集め、一條の通學道路を開鑿することとなり、明治二十八年頃、今の九水大分營業所の西側を南に向つて開鑿したが、併し是れも鐵道開通と共に、其の南半部が鐵道構内に取圍まれ、其の代用として明治四十三年今の金池小學校の西側から、出水製絲所前を経て、律院下に開鑿したもの、其の幅員は孰れも九尺乃至十二尺と云ふ、極めて狹隘なものだが、然し翻つて當時の狀態を考へると、中學生以外は通行極めて僅少で、如何に此の道路が重要視されなかつたかと云ふことも想像されるのである。

序でながら、小野吉彦翁に就て一言して置く、翁は市内古國府字下田中の素封家で、當時六七拾萬圓の資産を有し、三十歳前後から幾たびか縣會議員に擧げられ、明治二十五年二

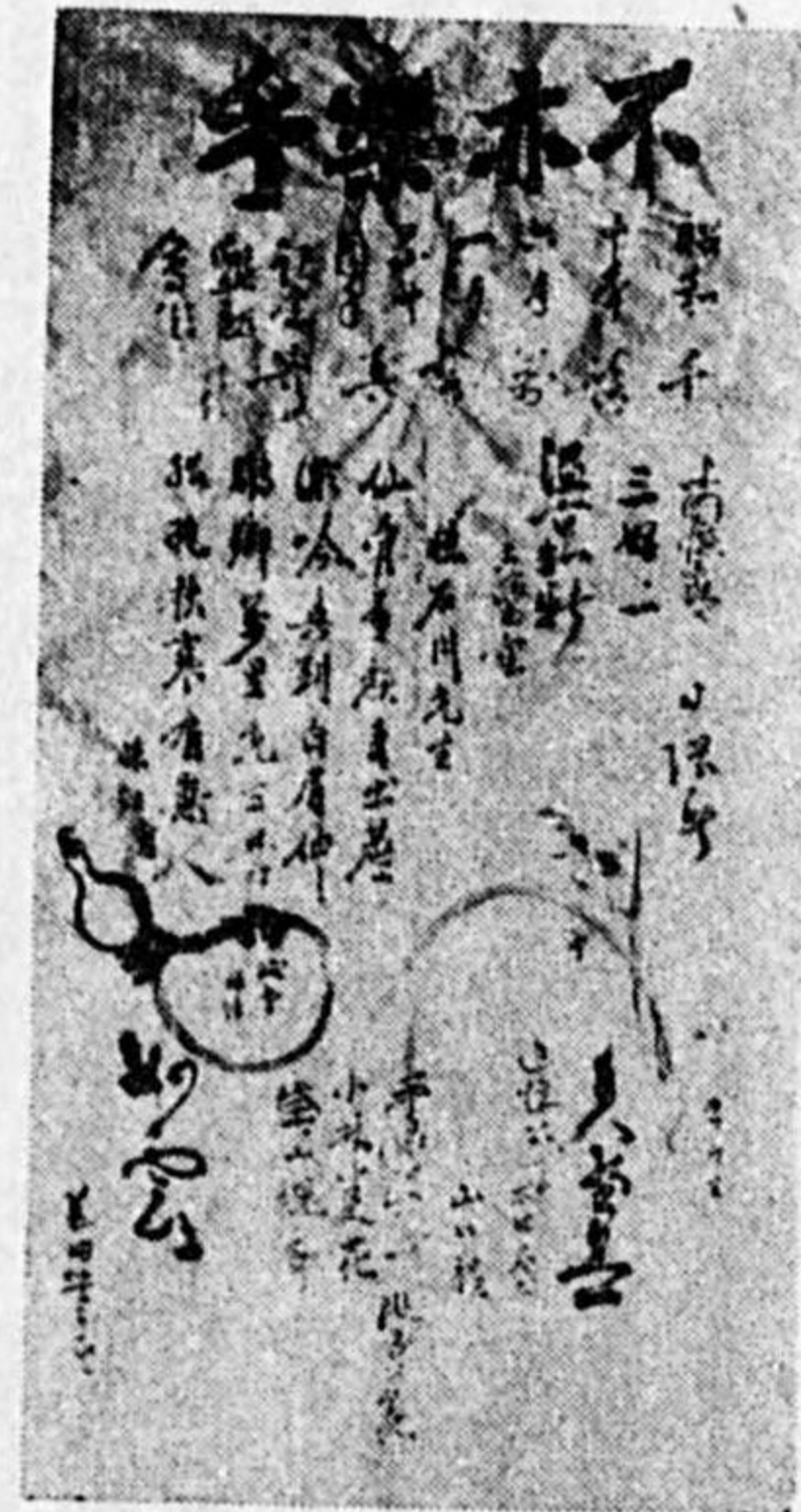
月十五日には、衆望を擔ふて衆議院議員に當選した、資性温厚、寡言沈黙、萬人の師表、一郷の典型であつた、明治二十七年大分銀行を、同三十一年大分縣農工銀行を創立し、共に其の頭取に擧げられ、縣産業の開發、財界の指導に多大の功績を残されたことは、今尙人口に膾炙する處である、而して翁は單に教育方面に力を致した許りでなく、福澤記念圖書館や、赤十字社大分支部などの建築に際しても、率先多額の金額を齎出せられたことは、約二十年の永きに涉つて、常に翁の恩顧と指導を享けた私の僞らざる告白である、尙翁が縣會議員で、共に常置委員(今の縣參事會員)であつた人々は、中島固一郎、小幡小吉(小幡山麓君の嚴父)、江島久米雄、宇佐美春三郎、永松壯三郎の諸氏と記憶する。(終)

五十周年式典を迎へて

小幡山麓

上野丘の春草未だ覺めぬ間に正に梧葉秋聲を聞く、我等は功無きを耻づる人生五十を無爲に過したとは言へ母校創立五十年を迎ふる慶祝に参加し悦を頌ち得る身の幸福を喜ばねばならぬ。我等とこの慶びを共にすべく同窓の集るもの三百五

十、來賓を合せて一千二百の人々が祇園山頭綠濃き處一堂に會して懷舊を語り數十年來全く會はざりし舊友、さては舊師に接せし時、頭に霜を戴く我々も紅顔中學生時代の追憶正に髣髴として浮ぶのであつた。「ヤア、オイ」の言葉も一點粉飾なく、他に見られざるなごやかの雰圍氣に包まれ、菓子銀棒を食つた腕白生が互に交はす式場の祝杯こそ言ひしれぬ甘露であつた。



書せ寄會親懇典式念記

由布の嶺高く、豊の海深しと校歌そのもの、風物に接し舊友の感懐特に深いものがあつた。「オイ思ひ出のくりく山が無うなつたじやないか、竹藪は何時開拓されたのか」と久しく母校を訪れなかつた連中が一種の寂寥を感じての言葉である、「だがこの運動場一隅の井戸は昔乍らにあるのがなつかしい」深いく井戸から清水を汲みあげて飲んだ味が忘れ

かねるらしく、寶戒寺山門の薨を眺めてこの邊あの邊と足跡を印した數十年前の思ひ出の場所を探すやうな感想を洩すものもあつた。

一度我々が運動場の延長ともいふべき松阪神社に行くとい層感興湧き校友某氏が社殿の維持費として奉納金の筆頭を占めてゐるのも、敬神思想の涵養と社殿の荒毀を憂慮しての心盡しだけ、限りなき床しさを覺えた。

蓬萊館の懇親會に集ふ百餘名、正に無禮講の和氣霽々ぶり、「オミキ」を酌み交しての談論風發「百年記念式だの七十五年式等は前途甚だ遼遠だ、一つ六十一年の還暦祝典をやらうや、五十五年祝典を開かうじやないか、之を機會でないと百里、二百里、三百里の遠方からは同窓は集らぬ」といふ、實に斯の如き珍客相集ふ會は從來會てないだけ再會の機會を一年でも早めたいと希望する會員の心こそ數十年前の若き中學生時代の純真そのものでなくて何であらう。

友よ五十五年、六十一年の慶祝を待つまでもない、明春には今日の式典の結晶ともいふべき記念館の竣功祝典を舉行したいと思ふ、この際は今日以上多數參會して、再び大中の隆盛に祝杯をあげやうじやないか。大中に學び榮ある五十年式典に參列できた身の譽れを喜ぶと共に記念館竣工へと折角我らは一層努力せねばなるまい。

五月廿九日

行啓記念碑除幕式

五十周年記念日を三日後に控へた五月廿九日、本校前庭に新に建設せられた行啓記念碑の除幕式が舉行せられた。

畏くも先帝 大正天皇畏くも 今上陛下御兩方東宮にまじしく御時本校に御臺臨の榮を辱うせし光榮は當時の卒業生諸氏にとつて感激新なものがあらう。茲に學園前庭西北老杉の間に壇を築き丈餘の記念碑を建て以て永遠讃仰の的としたのである。齋主彌榮神社神職祭主學校長の下に全學園起立感銘裡に嚴肅に式は了つた。因に題字は五代校長金子銓太郎先生、碑は卅八回卒業故松野武雄君家嚴十太郎氏の工費五百圓寄贈によるものである。





藝園雜抄

日本刀

明治廿八年大正三年二組の同人により編纂されしもの月一回發行、論文あり、隨筆あり、紀行文、詩歌等々少年中學生の澀刺たる意氣を吐露せるもの特に各自回覽して忌憚なき批評を朱書せるあたり頗る興味深きものがある、新潟中學校長梅田三郎氏の保存せるを今回記念館に寄贈されたもの、この中から二三を抜萃することにした。

歸郷 (……一)

孤育 (中根貞彦氏)

月日によどみなく小春の心地よき日はやすき去りて今は霜雪の如き時候となりけり、指をり數ふれば冬期休業もいと間近にせまり來りぬ、さればにや何れの室をうかぶも爐を打ちかこみておのがじ、故郷の事どもとりくに嘯しあへ

り、あませし日子を爐邊の談話に消して歸省の念勃々たる矢先に廿六日より休業とき、て失望するあり不平を云ふあり、その日をまたでかへらばやといふあり、常には靜肅なる寄宿内もさすがに此頃はかまびすし、日曜日にははや古里にと出立つもの少なからず、されど少しく心あるものなん猶残りて學の業を勉めてゐたり。  
廿五日は二時間の授業なればとてふりすて、かへるもの多し、目にあまるほどの生徒も今日はいと残り少なくなりぬ、十二時の喇叭ひびくと共にドタバタと馳する音して勇めるけしきことはりとおぼえたり、やがて食事の了る頃は彼所此所にサヨナラ御機嫌ようの聲聞えぬ皆喜ばしきさまなり、げにや親しき古里の家居には父母の立ちつ坐りつ待ちこがれたまへれば……おのれこよひ猶一夜を上野ヶ丘にあかさんと思ひしもけふ閉舎するとの事なれば、われもやむを得ず出立いそぎをしけり、用意も了りぬれば打立たむんとて他の室を見るに人の影なく腰掛、書籍、定規、夏帽子、紙片、草履などそこ、に打ち散りたるさまはそとに物悲しき心地しけ

朝來の曇天は遂に雨天になりていとうたてし、今朝立ちける友どもの如何に苦しむらん、二時過雨を冒して大分町のしるべを志して出で立つ、雨はいよく烈しく道路は練りに練りて歩みがたし、宿につきて足踏み伸ばし獨り空うちながめてこゝろは何時しか故郷にまよひぬ。

夜に入りて二三友とひ來りて例の法螺ふきて時を移しぬ、明朝八時をちぎりて友もわれも古里の土産にとて饅頭を用意したり十時寝に就く、雨なほ歇まず軒のしづくの音に何時となく夢路にわけ入りぬ。軒端の雀に驚かされて窓押し開けば旭光由布山頂に映じて明かなり、かれこれする中友ども來りて出立を促す即ち早々支度を整へて歸途に上る。  
一人の友の發議にてけふは道悪しければ明治橋まで車にて行くに決す、長池にて乗らんと袖引く車夫をふりはらひて至るにあらず、かくと知れば初めにすげなくあたさらましとおもひぬげに後悔は先に立たず。

萩原、高松面白くもなし鶴崎の一筋町を出づれば、やがて大野川なり幅二丁餘もあるべく水いと深し、縣下の大河、さるべき事なり、渡守よびて打渡るに向の岸に大なる鐵管の河岸に臨めるあり是なむ早魃の時蒸氣機關もてこの川の水を汲みて稲田に供給するものにて一分時に二十餘石を汲むといふ、世の開けゆくに従ひては旱天も旱天ならず饑饉も豊年な

り、停車場にきたりぬ車二挺あれども三人を乗するに足らず、失望落膽俄かに足の痛みをおぼえぬ「おもひたち望は絶えぬ二度までも、さても運なきものゝよりかな」坂の市もよろ／＼として打過ぎ明治橋までほらにてふきつけぬ、この時はや十二時をまた過ぎたれども立出づるとき荷の重ければとて晝飯をば携へて來りぬ如何にせばよからむ腹はへり荷は重し、今はせんなしとて一人の友の路のべにうちすわるを見れば荷を解きて土産にとてよべ共に用意せし饅頭を食ふなりけり、打見て笑ひ聲もいとたわいなし、常にはさほどにもおぼえざる坂もけふは富士の山にでものぼる心地空腹、重荷のために苦めらるゝ事如何程ぞや今後は晝食をもたで旅すまじきものとおもひぬ、やうやく頂にのぼりつきてとある茶店にいるや否や菓子つかみぐひして腹こやしぬ、これよりは下り坂にて腹もやゝこえたり時の間にて馳せ下るに向の山より蓬髪にして薄縁の法衣らしきを着たるが來れり、見るにいとおそろし如何なるものならんかとおもひて近づくに蓬髪と見しは黒き頭布にていと溫和なる高僧なりけり「げけものとおもひしものはさにあらで世にありがたき法師なりけり」麓に下りて冷泉を飲み菓子腹を癒しぬ、車ありてしきりに勤む、心の中には地獄に佛のおもひあれど態とさあらぬ體にてもてなし十二錢といふを十錢にせしめて乗りぬ、二度の失敗も少しは恢復の心地得意然として走らせぬ熊崎、江無田をも打ち過

ぎ萬里橋を打渡りて家にかへる、兄は餘り健康なるを見て欣々乎として迎へぬ。(評)とふくたるさま富士天龍も及ばじ眞に一種の好美文なり——壯絶快絶の文といふべし)

歸郷 (……二)

わが父は西南の役に戦死したまひたれば其後數月にして吾は生れたり母は悲歎の中に我ら兄弟を養育したまひしが何時しか病のおこりてわが漸く三歳の時遂にはかなくならせたまひぬ、年三十四に至りても尙ふたおやのすこやかにおはすものもあるをわれは父さへ母さへ失ひていともかなしききはみなり、されば今此兄の家は一度父上母君の住みたまひし所とてわが最も戀しくしたはしく思ふ所なり(評……實に君の身上をおもひやられて哀れなり讀者をして思はず熱涙をそらしむ)其夕は父母の靈前に晚餐を終へ祖母祖父の許へゆきて歸途立ち寄りしを言ふ、皆いたくよろこばれたまひあす一日は強ひてとまれといふ、養家の父母もまちわび玉ひぬれば(評)玉ひぬればはあまりにうたかひの言葉にして玉ひておはさん程に……として如何)従ひがたしと言ひぬ、さて其夜は兄と夜ふくるまで話しつ時計の響さえわたれるに氣付きてふしどへ入りぬ。

翌日ふしどを出で見るにあやしき雲空に満ちていとおぼつ

かなし、口すゝぎ顔あらひなどして朝けに向ふ頃一陣の風さ

つと吹き拂ひて竹の葉うつ雨の音いと騒がし、やがて雨はやみぬれど風いよ／＼強くまた時に雨ふりきたりて定まりなし、兄も空のけはひ打ながめてけふは天いと悪しければ父母もあまりに待ち玉ふまじければとまれといふ、ほいならねど今は詮なしそれより祖父祖母と心のゆくまで語りぬ、其夜祖母の家の近ければとてこゝにとまり、十時頃ねむりにつきぬ、風なほやますして幾度か故郷の夢破られぬ。

翌日早起して空うち仰ぐに碧空一帯して雲なし、されど前日來の風なほもすげなく吹きすさべりけふは風もなぐべし出立たむとて九時別れを告げて出發しぬ。

坂本橋をうちわたればやがて坂なり少しく登れば棧なり風光明媚にして幽邃愛すべし、なほうちほるに爪先上りの細路霜柱にとざ／＼れて踏むことに聲すなか／＼に物さびし、小川はつら／＼と流の聲もきこえず、風はいよ／＼烈しくして松風の籟々たるも電信線の汽笛の響するとは(評)電信線の汽笛の響とはよくも形容されたりいとも騒がしきはみなり、寒けさの強ければ田舎の赤毛布ひきかきつぎて下り來るものと多し、この山、甚だけはしけれど津久見との交通いとしげく十人廿人の人にあはぬこと稀なり、彼は下りわれは登る漸くにして絶頂に達す、顧みれば龜城は雲か山かの間にありて彷彿辨すべからず此處よりは下り坂にて只一とびに下りつき

ぬ、一人旅の氣樂さは疲れては休み、また進みてはまた休む。

蜿蜒長蛇の如き道路は石灰に成れる水昌山の麓を輕て海岸に出づ、此處は角崎とてこゝよりは佐伯津久見とて舊佐伯領なりもはや半かへりつきたる心地すれど尙五里の道あり、ゆく／＼彦峠の麓に至る時巳に午を過ぎたり、あへぎ／＼走せ登るに風俄かに強く時に身を松樹の影にかくしぬ、北方を顧みれば松樹蜿蜒として並立ちたるあり、これなむ今しがた越えきし津久見峠の並木なりけり、漸くにして登りつけば茶店の老翁はいとまめやかに香もなき茶をぞ薦めける。

東北のあたりをうちながむるに蒼海洋々として際涯なく伊豫路雲の如く横はり中國はあるかなきかに明滅せり、あはれこの大なる海洋を見れば自ら廣大の氣を養ふべし、英雄の輩出するは山紫水明の處にも限らざるべし、彦峠や津久見と佐伯との交通路なり、されど路ははしく且つ遠きを以て津久見より佐伯に出て來る者少なく従ひて此峠越す人もいと／＼稀なり此山をこえて三四人の人に出あふは頗る多き事なり、けふは僅かに二人にあひてつゝがなく麓に下りぬ、床木谷三里ありてほと／＼困じはたり、飄々と吹く風にまかせつ我家にかへりしは夕陽西の山にかゝる頃なりき、我家の門を入るとき其快いふに及ばずかくにまた及ばず、父母はわが恙なくかへりしを見たまひてよろこぶこと大かたならず。

笠のやぬしを訪ふ

好文 (梅田三郎氏)

ふる里遠くはなれて外にしるべくもあらぬたらちねのたよりたゞかりかねにとはましとすれど海も故郷やこふらん、しとふらん、父や母またともをしたふらん、いそげる旅に、かへり見もせず、かなしつれなの秋の空いつしか過ぎて冬來り、冬過ぎて春はきにけり、上野ヶ丘にきし春ののどけきにわするゝあらざめ(中略)頃は卯月の初めつかた、かねてまねかるゝがまゝ一度はおとづればやと、そのをりのみよきにかへせしかども、たび／＼來れとこゝろからなる言づてに、さらばと、田仲のきみにともなはれ中根のぬしにいさなはれつゝ一日あさまだき鷺野の里なる笠のやぬしをおとづれするところなりぬ。

風を孕みてしづかにわしる大分川の荷船さてもたのしや、由布鶴見の霞たなびきてそびゆる芙蓉の姿なつかしや、學びのまど上野の丘の邊に、いかめしく聳ゆるあたり一段の趣あり、誇りかほたる様、並松の緑あはれ昔日の思はれてそゝろ心にかけし宗麟が遺跡、われらが先祖のいかに勇に豪なりしか、その勇や豪や俊や潔、命いかなともなすこと得ならず、

むなしく去りて影なし、天地の様はむかしながらならんも、大分川の水はおなじく水なれども、しかもむかしの水にあらざるなり、あなくちをし、あなくちをし、只管に睨む天外の一偶、まさしく三人は富岡橋上にありて心はいつしか同じ空にあるなり、徳川の流くめる昔日のうらみ、われらは一步も進まざりしなり(中略)徳川のむかしこの山川草木はた人心のおのがじ、ならしめしこと、かこつも今更ら詮なし、徐ろに歩みを進めて今は全く心にうかばず昔日の追想、古巢をいでし鶯の聲朗かに岸邊の一むら茂れるうちにたのしくうたふめでたさをとやかくといひの、しりつ、うちすぎて富岡の村もすぎで鶯の君におしへられしま、電信柱つたひに田舎の一すじ道をたどりぬ、しばらく行きてとある一民家にたちよりに鶯野の里はいづれぞしらしなばおしへよと、むくつけにとふ「よしの」ぬしが言の葉、里人の朴なるはなかくにねんころにをしゆ、こゝぞ鶯野の里なる(中略)、小田の畦道した走れる程にいつしかさきの家の軒にいでたる、さてもぬしは何處、思ひしばし木蔭にた、すむ程にあやしや、ゆかしさ笛の聲やみけりと思ひしに、ぬしいで來りてこゝぞといふにともなはれてぬしがものまなぶ一室にぞ誘はれる(中略)ぬしが家は奥まりたる山のはさまなれどさすがに東南方は、うちひらけていとあもしろく見ばえあり、庭面の櫻はわれらをま

ちがほにめでたく咲けり、ぬしは常に片田舎の何一つめづらしきことなしと言へり、しかれどいかで、われはさは思はぬなり、家よりこそ見へぬいで、少しく高き處に登れば千山萬峯は遠く近くうちかすみで見ると、また緑したより見ゆるあり殊に靈山、本宮の谷々峯々の幾つあることまでさやかに見へてたのし、参差たる村落の家々の櫻花の盛りたる一きは心ゆく心地す、これぞ春の景色、秋の紅葉はいかならん、冬日の雪景、靈山の梢を飾る白妙の衣ぞいかに、そのあやめのさやかに見られてうつくしからん、たとひかゝる春秋の景色なくともわれはかへつて山家の静けき所ぞしたはる、なり、よしの、孤青はいかにととへば「いはすもがな」の外何の言葉も言はざりき(中略)やがて笠のやぬしにしろるべせられ西寒多神社に詣でんと、われら四人は家をいでたり、われらは靈山に登らんと豫て約しありしかどこの日は恰もわが校の運動會のありし次の日なりしより足つかれたれば靈山へはまたの日を約しさてこそ西寒多神社に詣でんとていでたしなり、されどをりあしくも山々に細きかけわたし小雨さへふりいでたればいかにと思ふに、さて何時ならんと見れば四時になんありける、よしの、かへりしもしそかるれば本意なけれど、又の日をちぎりて訣れをつけたり。

まなびのそら

日向泊 權 (中根貞彦氏) 七

春さり來ればよしの山  
花なす霜をふみ散らし  
秋となれば春日浦  
入江の波にうつしつゝ  
よしの、梅を見るごとに  
おもひ出てけり古郷の  
人と生れて甲斐もなく  
朽ちなむ事のくやしくて  
おいし父母もるとともに  
教へ玉ひし言の葉は  
都の人はことゝくに  
心の底はなかくくに  
まことにあつき朋どちを  
高根の花を手折るなる  
父をも母をもあとにして  
夏の朝も冬の夜も

ゆかしき香をばしるべにて  
尋ねゆきけり臥龍梅  
松にかゝれる月かげを  
なかもあかしぬ一よさを  
春日の月をめぐる光び  
おいし父母そのうへを  
あるかなきかの蓬生に  
立ち出でにけり古郷を  
行く末々の事までも  
今も耳にぞ残るなる  
いとまめだちて見ゆれども  
夜しやを欺くばかりぞやを  
こゝらの人にえりいで、  
道のしるべと頼めかし  
古さと遠く學ぶ身は  
文の林を分けよかし  
都は北よ風寒み  
まよふこころに心して  
北とはいへどなかくに  
よろづのこと心して  
なが父母は古さとに  
かへるなが身を願ふなり  
いざや別れんいざさらば  
學の海の波高く  
指かゝなへて敷ふれば  
父が教をたまひしは  
長き三年の月と日を  
何得たる事なきわれせ  
古人は月かげを  
まなびのみちにわけりつ  
文よむことをよそにして  
父の門出のいましめに  
ゆるさせ玉へ父上よ  
わするよとにはあらねども  
さらば今よりいそしみつ  
あつきめぐみに報いなん  
冬は霜雪多しとか  
かぜをな引きそやよあ子よ  
夏はてる日の強しとか  
旅のあつさにをかされな  
恙もあらず學びして  
春のあしたに秋のよに  
たゆむことなくいそしめや  
文のはやしのしげくとも  
三年の昔となりけり  
母がいましめ玉ひしも  
たい夢の間に打すぎつ  
けふぞ憂身のきはみなる  
文よむ慰のあかりにて  
名をばあげしときくものを  
月雪花にうかれつゝ  
背きし罪のいと深き  
あつき情のみことばを  
まだうらわかきならひとて  
古人をかゝみにて  
錦をさとにかざらなん



岸邊に立ちて見わたせば  
雲か水かのそのひまに  
吹風つよく波高し  
何時かは望の彼岸に

小 松 原

まなびの海のひろく  
望の岸のほの見ゆる  
よるべなきさの捨小舟  
遠することを得るならん

東のそらにあかねさし  
天てる星もいつしかに  
あけゆく空にみわたせば  
あさげの煙しづくと

よはほのくくとあけゆきつ  
敷ふるばかりになりけり  
賤が伏やの軒端より  
風になびきて立のぼる

近きわたりに薪樵る  
やまがのけしき一入に  
柴の戸推して松原を  
里のうなるのつどひるつ

里の翁の聲として  
昇る春日ものどかなり  
ひとりそらにゆきみれば  
笑ひさどめく聲ぞする

なほやうくく近づけば  
梢の風にたゝえつゝ  
たが教へけむひなうたを  
松の落葉をかきあつめ

松葉かくねのさらりと  
天津乙女の琴の音か  
うたひつゞけて黄金なす  
かきあつめてはこにみて

やがてかたみに呼びかはし  
罪なきうなるのこゝろにぞ  
附言 おのれ新體詩てふものをつくりしは今こたびを以て嚆矢

またうたひつゝかへるなる  
眞の神は宿るらん

西洋の草花に影をさして居た、運動場の方では學生等が槍投げのけいこに餘念がない、こんな平和な所で、學問するのは申分あるまい、それより中學を訪れると、宿直らしい軍人が出て來た、余の名刺を見て勝手に御覽下さいと言ふので、はじめに我々第八回の植えた記念樹をさがしたが見えない、たしかに植えたと思ふ場所には講堂が建つてゐる、庭に出て見れば、昔丈にも足りなかつた杉林は、はや電柱にもなる程に成長してゐる、校庭をめぐつて北の隅に行くとき昔ながらの井戸がある、思へばもう三十年になるのである、昔の寄宿舎などを見るといたづら時代の昔がしのばれる。

思へば或晩の事であつた、余とKと二人が垣を乗越して近くにある菓子屋に菓子喰ひに行つた事がある、勿論暗夜だつた、たらふく、喰つてかへつてから同室のY君に告げると彼頗る羨望にたえず、一人で又垣を越して菓子屋に出かけた、余とKはYの歸りがあまりにおそいので、心配のあまりむかへに出かけたなら、もうYは早くかへつたとの事である、いかにもふしぎに思つてさがして居るうちに、Yは舍監に引張られてしかられてゐることが分つた、その舍監は今西ヶ原農事試験場の所長の農學博士今關常次郎氏なのである、Yはその後京都の法科を出て、故郷で辯護士をしてゐる、歴に傷持ちのこちら二人は、公然名のつて出るわけにもゆかず、友人にたのんで訛びを入れたのであるが、なか／＼聞入れられ

ない、遂に翌日までとめおかれてやうやく許された事などもあつた。

又Kが或晩月明に乗じて柵外のすぐ下にある薩摩芋を掘りにゆき、百姓につかまつてしまひ、余はわびに行つてかれをもらつてかへつた事もある。

當時の校長は武田安之助といふ、教育家中稀にみる豪壯の士で、試験を全廢して試験制度を破つた第一の人であつた、従つて勉強せず、毎日クラブの様に一室に集つて、劍舞をしたり詩を吟じたりしてゐたものだ、けれども好きな學課だけはみな勉強した、余はこの際何物をも見ず、只數學と英語ばかりに没頭してゐた、この時余は Washington Irving's Sketch-bookなどを、辭書と首つ引きで讀破したものである。

その時クラスに一部長、二部長、三部長といふのがあつた、部長になるものは大てい温和な者であつた、手島護(後に中村といつた)君は、まるで孔子の様で始終一部長をしてゐた、二部長はA氏、之は小人島でおとなしい男であつた、今醫學博士で東京鐵道病院の外科部長をしてゐるA氏が彼である、此人はごく酒癖がわるく、久しぶりにこの間かへつてきたので、別府のなるみで鐵道會をしたところ、えらいくだを巻いて弱つた、しかしかあいゝ所がある、その席上で友人の話によれば、或日東京でたらふくのんでかへりに交番のドアに向つて小便をしたので、中の巡査はたまげたとび出し引つかま

とす、さればかき終りて見るに拙劣讀むに堪へざるあり、燒かんかとおもひしが折角作りしものなれば諸君の添削を仰がんとおもひかくは本紙を汚したるなり、理想の低きはさらにもいはず調もまた高からず只伏して諸君の添削の勞ををしみ玉はざらむことを祈る耳

### 無畏林莊隨筆

野上菊太郎(遺書抜萃)

野上氏は第九回卒業生、大阪に野上工業所を設立又豊後電氣會社を創設し電氣工業界に活動せし人、昭和九年八月一日逝去せらる。

### 上野ヶ丘

久しぶりに天氣晴れ、秋氣澄む、郊外のモータードライブには最もいい日である、Y氏と共に大分に向ふ、途中教會に立寄り朝の祈禱を捧げ、一路直ちに上野ヶ丘にゆく、高商から來年の卒業生を採用してくれとの手紙が來てゐたので、一度學校もみておきたいと思つて、同校に立寄つた、校地はやゝ高く、余が中學時代には、この邊一帶は百合若大臣の墓のある所と言われてゐた場所である、秋の日は校庭にある種々の

へ、本署に連行を強いてゐた、所に丁度警視廳に出てゐる友人がきてあやまつてやつたので、巡査は許してくれたさうである、その後は彼は交番の前を通り得ず、いつもまはりみちをして病院に通ふさうである、古庄君が第三部長で、すこぶる聰明な立派な人格者であつたが、をしい事には京大を出て一年足らずしてたふれてしまつた、日本銀行の中根や、大分合同銀行頭取の首藤や、九水の村上はみな當時のいたづらつ兒であつた。

日清戦争後の平和會議で、日本が支那より遼東半島の一部を得る事に決定した時露獨佛の三聯合國が、日本を壓迫して遼東を還附せしめた、その時代は國論沸騰して大分やかましかつたものである、水戸藩から來てゐた綿貫香雲といふ、二十二三の漢學の師匠は、水戸言葉でしきりにえとうはくぶみとよなつて、授業中攻撃ばかりやつてゐた、中學校でもこの日を記念するために、柞原神社より松の木を移植して、それに向つて全生徒が遼東還附記念の鬱憤をしきりに吹きかけたものである、香雲第一に立ち、えとうはくぶみを連發して讀み、今京都大學教授鳥鴻隆三君は溫和なる口調で「それ松よ」と呼びかけて、記念文を讀みはじめた事を未だに忘れる事は出來ない、さがしてみたがその松もない、創立以來約四十年になるこの學校が、思出多き歴史に對して注意力を欠いてゐる事はなげかほしい事である、オックスフォードや、ケムブ

リツチには古き記念物が多く残つてゐる、それにつけても何とか記念物保存の道を講じたいものだと思ふ。

それより古國府の石佛を見る、車を降りて深い溝に添へる田舎道を歩いてゆく、小春日和のそのあたゝかからず寒からずの陽光の下に、氣持のよい散歩である、水路の岸には黄菊白菊が咲きみだれ、道の下の百姓家もおだやかで、何とも言へない好い氣持である、石佛は岩壁に刻まれ、中央の大日如来と稱するものがやゝ頭部を明らかにしてゐるが、その他は破損してゐてわからない、いづれ古いものであらう、中學時代にはこの邊までよく散歩にきてゐたが、稻のからなどが佛像のまはりに積み重ねられてゐた、それを武田安之助氏が見て、これは大したものだといふ事になりその後次第に世人が研究する様になつて來たのである、京大の濱田耕作氏が專門に之を研究して一冊になしてゐる、此處を去つて昔水泳をしてゐた大分川に出て見れば、渡し舟のあつた所に今は橋がかゝつてゐる、その邊一帶桑園であつたのが、今は家が路傍に密接して出來てゐる。

思出多き上野ヶ丘を後にして五ホテルにかへつて來たのは丁度十一時すぎであつた、短時間ではあつたが、十分に秋の行樂をつくして、爽快な氣分になれたのはうれしい(十一月十二日)



### 學級日誌

(自明治三十年五月至明治三十一年四月)

#### 第三年級二ノ組主任

#### 山田小太郎先生手記抄出

明治三十年四月廿二日 木曜

午前第九時ヨリ正堂ニ於テ各級修業證書及特待生級長辭令書授與式ノ執行アリ、伊東政喜本組級長ニ任セラレ特待生ヲ命セラレ

廿三日 金曜

本日ヨリ各級授業ニ着手スル答ナリシニ各級生徒ノ出席者頗ル寡ク且ツ日課表編製等ヲ始メ階般ノ授業準備未ダ結了セザルニヨリ本日ハ授業ニ代ヘテ主任教師及學科受持教員各教室ニ臨ミ本學年中生徒ニ望ム所及各學科學習上ノ心得ヲ演述ス

五月二日 日曜日

午前第九時ヨリ蓬萊丘ニ於テ本組生ノ運動親睦會アリ出會者三十九人フットボール、ベースボール等ノ演技アリ、第十二時半ニ及ビ演技ヲ畢ヘ丘後ノ樹間青草ノ上ニ於テ茶話會ヲ催シ席上伊東、工藤希一、工藤芳夫、鶯海、和田、友成等ノ演説アリ茶菓ヲ喫シ胸襟ヲ開

キ益々親睦ヲ修メ志行ヲ高クシ學業ヲ勉メ以テ本組ノ名譽ヲ發揚セシムコトヲ期スル旨誓約セリ

本日此席上ニテ左ノ規約ヲ評決セリ

- 一、從來隔月開會ノ運動親睦會ヲ自今毎月開會(會費ハナルダケ低減シテ)席上必ズ講談ヲナスコト
- 一、毎月第二土曜日ニ教室ニ於テ練習的演説ヲナスコト
- 右ハ朝倉每人ノ發議ニヨル
- 一、前學年ニ成立セル貴善ノ規約ヲ本學年ニ繼續シ益々其實行ヲ期スルコト

#### ○貴善規約

同組中ニ品行不良又學業怠廢ノ者アル時ハ遠慮ナク互ニ忠告シ尙改悛悔悟セザル時ハ斷然之ト絶交シ之ヲ主任教師又ハ校長ニ申告シテ其ノ處分ヲ請フコト

右ハ伊東政喜ノ發議ニヨル

次ニ主任教師本學年ニ於テ希望スルコロヲ演述セリ其ノ要旨左ノ如シ

本組生ハ本學年ニ於テハ既ニ中學第三年級ニ登リ學弟ノ第二級ノ組ニ對シテ學兄ノ地位ニ在ルヲ以テ益々學業ヲ勉強シ操行ヲ修正シ特ニ左ノ件ヲ實行センコトヲ期スベシ

- 一、正課ノ餘暇強メテ武術ヲ講演シ膽氣ヲ養ヒ身體ヲ壯健ニスルコト

一、登高遠行ヲ行ヒ心身ノ快活ヲ求ムルコト  
 一、在學中ハ演劇歌舞又ハ類似ノ演藝ヲ觀又ハ聽クベカラズ但角  
 觚能樂ハ此限ニアラズ  
 一、猥俗ナル小説稗史ハ斷ジテ繕クベカラズ  
 一、喫烟ヲ禁ズベシ  
 一、勤儉ノ旨義ニヨリ金錢ヲ節用シ衣食ヲ質素ニシ學業ノ外ノ勤  
 勞ヲ甘ンズベシ  
 右學ヲ第二時半頃一同退散セリ  
 八 日 土曜

本日午後第六時三十分ヨリ通學生控所ニ於テ講談部ノ例會アリ出演  
 者頗ル多シ、本組ノ出演者左ノ如シ  
 朝倉每人 鷺海徹 友成英一  
 十五日 土曜

午前第七時半本校生徒五百餘名ハ職員ニ引率セラレ速見郡別府ニ趣  
 キ碇泊ノ松島艦外ニ艦ヲ參觀ス  
 十七日 月曜

昨今夏服ヲ着用スルモノアリ違制ノコトナレバ校規ニヨルコトヲ演  
 達ス  
 軍艦參觀ノ通船料二錢五厘ヲ至急主任教師ニ納ムベキコトヲ告達ス  
 六月一日  
 本日ハ本校第三回記念日ニ就キ例ニヨリ勅語捧讀式及閱兵式アリテ

學ヲ第九時ヨリ通學生控所ニ於テ劍道大會アリ  
 六 日

午後第一時ヨリ蓬萊公園ニ於テ第二回例月運動會アリ、諸種ノ演技  
 後第五時ヨリ丘後樹間ニ茶話會ヲ開キ第六時頃退散セリ  
 本日野上喜久男ノ發議ニヨリテ左ノ件ヲ議決ス  
 一、級員全體ヨリ平原貞人氏ノ實父逝去ヲ弔ムル郵書ヲ同氏ニ送  
 ルコト  
 十六日 水曜

午後終課後ヨリ體操場ニ於テ第四年級ト第三年級トベースボールノ  
 競技アリ選手及結果左ノ如シ  
 第四年級 選手  
 中西龍夫、宇佐美健吉、茨木育人、溝部洋六、島村貴一、松本虎  
 夫、木戸四郎、長谷部晋、小野覺  
 第三年級 選手  
 村上武磨、齋藤薰夫、古城貞、太田榮昌、工藤芳夫、工藤稀一、  
 首藤茂、渡邊全、朝倉每人  
 結果  
 第四年級合計十七 第三年級合計十九  
 廿六日 金曜

本日午後終課ヨリ正堂ニ於テ衛生講話會アリ夏期衛生上ノ心得ヲ説  
 示セリ講話者左ノ如シ  
 辻學校醫 夏期衛生法一班

吉原教諭 脚氣自療ノ實驗  
 武田校長 學生ノ衛生上ノ心得

廿八日 月曜  
 本日第一時目(習字科)ニ於テ本組生徒教員ノ命ヲ奉ゼズ願ル放恣ノ  
 行爲ヲナセシ旨通告アリタレバ本日ハ英語時間ニハ該科ニ替フルニ  
 倫理的訓話ヲ以テシ大ニ其不應爲ヲ責メ且ツ將來ヲ戒メ一禮以テ師  
 長ニ事ヘ一ノ校訓ヲ實踐シ各自ノ操行ヲ修正シ級風ノ改善ヲ期スベ  
 キ旨ヲ訓諭ス其要旨左ノ如シ  
 一、毎日一回其ノ日ノ言行ヲ反省シ惡ヲ改メ善ニ進ムノ道ヲ講ズ  
 ベシ  
 一、一日一回自己ノ家郷ニ向ヒ在郷ノ父母ヲ遙拜シ父母ガ如何ナ  
 ル憂心ト希望トヲ抱懷シ居ラル、カヲ想念スベシ  
 一、毎日一回三條ノ校訓ヲ捧讀スベシ  
 一、毎日始課前自己ハ當初何ノ爲メ本校ニ入學セルヤヲ反省スベ  
 シ  
 一、一年一回又ハ數回(自己ノ誕生日父母ノ誕生日又ハ忌日自家  
 ノ記念日)自己ノ生來ノ實歴ヲ精密ニ省察シ果シテ父母鞠育教  
 養ノ洪恩ニ負キタルコトナキヤ否ヤヲ反省スベシ

七月二日 金曜  
 本日午後第一時ヨリ新川口ニ於テ水泳科ヲ開始ス  
 廿六日 月曜  
 本日ハ降雨ノ虞アルニヨリ水泳科ヲ休課ス

廿七日 火曜  
 本日水泳科休課昨日ノ如シ  
 廿八日 水曜  
 豫定ノ如ク本日午前第拾時ヨリ大分港内外ニ於テ水泳大會及ボート  
 レースアリ  
 本日日本組生ハ第四回目ニ於テ第四年一組ニ對シ第六回目ニ於テハ第  
 五年級ニ對シテ勝利ヲ獲タリ、本組生競艇選手左ノ如シ  
 渡邊全、野上喜久男、工藤芳夫、御手洗昌、清家俊三、首藤茂、  
 平野久豊、朝倉每人  
 又本日ノ二千米突遠程游泳ニ加ハリシ本組生左ノ如シ  
 高倉董太郎、伊東政喜、城内義夫、五島治郎八  
 卅一日 土曜  
 本日ハ閉業式ヲ行ヒ及ヒ夏期休業ノ心得ヲ告諭シ以テ日課ニ替フ  
 九月十一日  
 校規ニヨリ本日午前第九時ヨリ始業式ヲ行ヒ武田校長ノ生徒ニ對ス  
 ル訓話アリ學ヲ退散ス  
 十九日  
 午前第九時ヨリ春日浦頭ニ於テ第三回運動親睦會アリ然ルニ遊技器  
 具及場所ハ不幸ニシテ本校他級生ト師範校生ニ先占セラレタレバ不  
 得止運動遊技ハ徒競走ト二人三脚一人一脚ニ止メ演了後浦頭ノ樹下  
 青草上ニ席ヲ設ケ茶話會ヲ開キ席上伊東政喜外二三子ノ夏期休業中  
 ノ見聞及所感ヲ述ブ主任教諭亦一席ノ講話ヲナス

三十日

午前第九時校長ノ旨ヲ承ケ左ノ件々ヲ告示セリ

一、來月十二日啓行熊本地方ヲ目的トシテ秋期修學旅行ヲ兩豊肥筑ノ地ニ行フ答ナレバ來月七日マデニ各自ノ行否ヲ主任教師ニ申出ヅベシ

一、同行セザル者ハ父兄ノ證明運署ノ届書ヲ同日限り差出スベシ  
一、旅行費ハ一人分貳圓六拾錢ヲ來月八日マデニ主任教師ニ差シ出スベシ

十二日

午前第七時大分發程秋期修學旅行ノ途ニ就ク此行全校生徒ノ同行者二百三十餘名而シテ本組生ノ同行者十五名ナリ

渡邊全、中島乙五郎、朝倉每人、村上季彦、鷲海徹、進治夫、姫野幸作、古庄鳳四郎、工藤稀一、工藤芳夫、大津五郎、渡邊巖、小野金助、手島明治郎、千葉銀六

二十四日

本日午後第五時頃本組修學旅行生各部隊ト無恙歸ス

十一月十三日

午前第九時ヨリ豫定ノ如ク本校構内ニ於テ秋期大運動會アリ演技數十番來觀者二百名

廿一日

午前第九時ヨリ通學生控所ニ於テ秋期劍道大會アリ第四時中閉會ス  
廿六日

午前第九時正堂ニ於テ秋期講談部大會アト本組生ノ出演

朝倉每人、演題内地雜居

訓示

一、本校生徒中東新町裏ナル田間ノ小徑ヲ往來スルモノ少カラズ地主ノ愁訴アリ、今後ハ右徑道ヲ通行スベカラズ

十二月四日

豫定ノ如ク本日午後第三時終課後本組生二十九名 北海道郡大佐井村ヘ兎狩ノ途ニ上リ途中明治村ノ山中ニ狩獵ニ回テ試ミ兎一頭ヲ獲タリ午後第七時右獵隊歸町ニ着定シ豫定ノ旅舎岩津方ニ投宿ス

五日

午前第六時崎崎町ヲ發シ大野川ヲ涉リ大佐井村ニ向フ第七時半同村大字城原ニ於テ第一回兎狩ヲ試ミ効ナク第二回及第三回ニ於テ各一頭ヲ獲タリ午後第六時半歸分ス

六日

本日午後第三時ヨリ上野安部氏宅ニ於テ前記獵遊生相會シ獵獲ノ兎肉ヲ料トシ晚餐會ヲ催セリ

二十四日

午後第一時間目ニ於テ第二學期學課成績ヲ報告シ將來ノ反省ヲ促シ且ツ冬期休業中ノ心得ヲ訓示シ日課ニ替フ

明治三十一年一月八日

例ニヨリ午前第九時ヨリ始業式ヲ執行ス

廿九日

本校生徒三部隊ニ區分シ高崎靈山及猪野ノ三方面ニ於テ兎狩ヲナス

三十日

昨日ノ兎狩執行ノ本組生ニ對シ訓戒ス要旨左ノ如シ

一、狩獵又一日行軍ノ如キハ大ニ規律的習慣ト快活氣象トヲ養成スル手段ナレバ本校ハ特ニ日課ニ替ヘテ之ヲ行ヘリ然ルニ諸子ハ之ヲ輕視シ其當日ハ臨時休暇ヲ得タルガ如キ懐ヲナシ下宿自宅ニアリテ全日ヲ消スモノ多シ、如斯ハ本校教養ノ本義ニ反シ青年男兒ノ本分ニ負ケル懦弱ノ行爲ナレバ今後進シテ從行スベシ右畢テ執行者二三人ニ就キ其ノ事由ヲ尋問ス

二月十八日

昨日午後休憩時間ニ教室ニ入り讀書セシモノアリ、之等ノ生徒ニハ其ノ非違ヲ實メ反省ヲ促セリ、尙本日第一時間目ニ於テ日課ニ替ヘテ組生徒ニ訓話ヲナセリ、其要旨左ノ如シ

一、青年修徳ノ要ハ日常ノ細行ヲ慎ミ小事ヲ忽ニセザルニ在ルコト  
一、學校教育ノ目的ハ單ニ青年輩ニ處生の智識ヲ與ヘ技能ヲ授クルノミニアラズ之ヲシテ一郷ノ善士一國ノ良民タラシムルニアレバ青年受教ノ輩モ宜シク此趣旨ヲ服膺シ自己ノ行ヲ正クシ禮ヲ守リ徳ヲ養ヒ善ニ進ムノ工夫ヲ勤ムベシ

一、士ノ徳ヲ修メ善ニ進ムハ猶山ニ登ルガ如ク卑キヨリス家庭ニアリ起臥飲食ノ小禮ヲ守リ洒掃應對ヲ慎ム如キ學校ニアツテ校規ヲ守リ言動ヲ慎ミ師長ト同儕トニ禮儀ヲ破ラザル如キハ初學

徳ニ入ルノ門戸ニシテ一郷一國ノ善士良民タルノ基礎ナリ

一、諸子仁義忠孝ヲ論ズルモ日常細行ヲ慎マズ小禮ヲ守ラズ即昨日尙カニ教室ニ入り休憩セル如キハ修徳ノ順序ヲ失ヘリ宜シク反省スベキコト  
一、毎朝一回校訓三條ヲ一讀シテ其趣旨ヲ奉行センコトヲ期スベキコト  
一、古今内外ノ善人君子ノ傳記ヲ閱讀シ其言行ニ鑑ミ之ニ私淑センコトヲ期スベシ古今英雄君子立志成業ノ實蹟ヲ觀ズルニ多ク此ノ手段ニヨレリ

三月二十日

午前第九時ヨリ蓬萊丘ニ於テ本組生徒ノ相互告別會アリ、出席者四十名。

本日主任教師左ノ件々ヲ演述セリ

一、來學年ヨリハ諸子ハ學兄タル階級ニ進ム答ナレバ益々舉行ヲ正フシ學業ヲ勤メ下級生ノ模範タランコトヲ期スベシ  
一、現在ノ責善規約ヲ依然保存シ、更ニ左ノ條項ヲ加フベシ  
1、時間及約束ヲ嚴守スルコト  
2、授業料ヲ滞納セザルコト  
3、演劇演藝ヲ觀又聽カザルコト  
4、式日ヲ敬重シ行軍等ヲ輕視セザルコト

廿六日

午前第十時ヨリ職員會議ヲ開キ各學級ノ及落處分ヲ協議ス本組生ノ及第者三十六名ニシテ不合格者七名ナリ





碩田詞藻

温泉國

中根貞彦

昭和九年大晦日神戸を立ちて歸郷す

温泉國の春戀ひゆく船までばおなじ心に人むらがり  
ふるさとに久にしかへるわが船は錦丸とふ名ぐはしきふね  
今治の港に立てる孤燈のひかりうすれて年明けにけり  
警報をさびしみにつゝ夜船乗り安寝をいねて初日仰ぐも  
島ゆ島に棚引く雲にあかねさし榮ゆく御代の初日のぼるも  
ほばしらに高く飾れる若松に初日のひかりさしそめにけり  
船の上にむかふる春や知る知らぬひとつ卓に雑煮を祝ふ  
雲沈著く四方のそきへの島青く瀬戸の海原晴れわたりたり  
雲居にか故郷あらむ筑紫方はたゞ白濤の千重に五百重に

温泉街にしるくも高き大佛のすがたは遠く船の上ゆ見ゆ  
うら戀ひてかへり來ぬれば温泉郷はめぐみゆたかに初日照り  
みつ

ふるさとの正月は親し誰れも彼れも道ゆく人のうれし顔なる  
温泉浴場に小桶ひびかふ音のしてまだきに旅の夢はさめける  
温泉浴場あかるき晝をたゞひとり乾ける石におり立つわび  
しさ

新春のひかりは裾にみちにつゝ雪ほの白し鶴見が岳は

鶴見岳底かも燃ゆる裾野にはこゝだ温泉の天霧らしたり

いにしへの戦のあとを偲びつゝ見ればはるけし石垣原は

朝かげに木の實あさるか鶴鳥の森より森に鳴きわたる聲

うちわたす裾野ヶ原の森にして鳴く諸鳥の聲のはるけさ

扇山立ちの聳えに裾野曳き大きなぞへを天垂らしたり

温泉湖の熱さやいかに立ちのぼる煙は雲と山になづさふ(海

地獄)

地獄邊は時じくあつみ罌の子ら己がふるさとと思ひつゝかゝ  
る(鬼山地獄)

泥坊主どろくこゝだ噴きて消えきえてはふきて古ゆ今に  
(坊主地獄)

遠近に温泉のあぐる湯烟の靡かふ國にはるけくも來つ

地の下はなべてたぎれる温泉としおもへば恐し速見國原

いまもかも猿いできてたはむるとふ高崎山にいつかのぼらむ

祝らがかぶる烏帽子によく似たる高崎山は神さぶる山

四極山むかしの如く神さびてましらもいづときけばなつかし

名に立てる女車掌の聲きくと地獄めぐりのバスに乗りつも

温泉街のホテルのぬしにあひしかば大き掌つとさしのべし

石川栗菴先生詩文鈔

風夕不寝

疾風吹落木。蕭颯度秋聲。月扶霜威苦。寒儘更漏生。行藏懷  
道義。成敗笑功名。底事窓前竹。徹宵鳴不平。

冬 曉

江城曉鼓破眠時。爐火全消燈焰微。入枕寒刀風瑟瑟。射窓亂

箭霰霏々。療饑未啜顏公粥。掩肌頻拖杜叟衣。唯有鷓鴣偏得  
意。相呼噪々繞蒼飛。

春遊進退韻

十日春陰不出家。忽逢新霽意如何。猩紅含淚桃花濕。鴨綠織  
文江水波。階砌折花驚蝶夢。村亭喚酒聽鶯歌。由來浪跡常多  
責。失脚無貽末路嗟。

偶來江上豈前期。逢著烟光輒賦詩。深翠初歸江柳眼。淺江漸  
入海棠眉。荒村寒食澹晴景。花下春遊闌午暉。風物如斯知幾  
日。匏樽蠟屐莫遲々。

春夕泛舟

渺茫烟水闊。閑泛一葉船。乍見東方白。月上東山巔。流光明  
千里。來潮碧連天。

同人載酒興悠々。且橫中流暫逗留。魏戟塵世冠蓋地。唯聽漁  
翁鼓柁謳。想得牛渚當年客。欲追高調奈難儔。酒酣醉臥篷窗  
底。夢繞蓬瀛第三洲。

讀光武記

予讀光武記。而知漢祚之所以獨永也。古日一張一弛文武之道。

光武得焉。初高祖之率役徒起於沛也。群雄力爭。並事拜吞。勢不得不用武也。及嬴氏既滅項氏尋已。則宜飾文而戢兵也。然而其初與事者。皆天下稱勇桀驁之選。以文服之。固不易焉。而高祖之意。專在以武懾服之。是以今日裁一將。明日繫一相。慢侮相將。不啻犬彘。其功臣令終者。絕無而僅有。何其刻薄少恩也。其舉措終始頓武力。有叔孫通陸賈二子。僅能制其驕暴耳。其祖也陵土未乾而天下始亂。豈無因也哉。光武以帝室之胄乘人心思漢。比之於高祖徒手而起。其難易固勿論已矣。但其自少常從儒生游。講學修行。深知威武之不足以服衆也。及即位。首尊禮師儒。崇尚風節。以為固本之謀。不使功臣任事。以寵爵保全之。以厚其恩。處事縝密。為後世慮也遠矣。蓋鑒高祖之失也。及其衰季。雖以桓靈之暗弱萎靡。風俗之美。人材之衆。比之殷周而無愧焉者。豈非崇文之效乎。若使光武循高祖之轍。則漢之再造未可知也。而四百之曆數長耀史籍者。蓋以光武更張得其宜也。嗚呼不亦偉哉。

懷舊詞六首並小引

珠江今村孝次

昭和乙亥六月朔。大分中學舉行創立五十周年記念祝典。因賦七絕六首。以敘追懷往時師友之情云。

石川栗菴先生

先生名總弘。日出人。少而從學帆足萬里先生門。學成。下帷各地。晚歲任大分中學校教諭。齒垂耳順。諄諄誨而不倦。當時都鄙西學盛行。南豐斯文不墜地者。先生與而有力矣。

仙骨童顏自出塵。微醺上臉白眉伸。鵬鄉萬里先生學。紹絕興衰有此人。

溫萊士先生

先生美洲人。弱冠畢大學之業。與新夫人相携來朝。為大分中學囑託教授。白哲長身。溫容可親。頗有德望。先生在吾邦四十餘年。一意誘掖後進。孜孜如一日。頃歸國。住于紐育。仍以兩國親善為念云。

鸞鳳翻躍海上來。雙栖扶木拓蒿萊。迢迢四十餘年事。白髮門人夢屢回。

室伏力次郎先生

先生水府人。夙受皇學於叔父栗田寬博士。又學于東京高等師範文科。業成而來教。精于國史國文。才美內蘊。不外見。樸茂而謙抑。虛己而愛人。是以學徒信服焉。

吾儂一去孰相憐。屋後秦椒悲夕蟬。短褐少年懷不語。波山水恨綿綿。起承二句。引用先生平昔所愛唱之俚歌。

佐野友三郎先生

別號小川比刀根。上毛人。學于東京大學法科。尋轉文科。皆不成而已。蓋鬱鬱不合也。為人豪爽而俊異。人謂非池中之物矣。居吾校一年。後赴公臺灣。歷補總督府秘書官辨務署長等職。處事果決。往々有出於人意表者焉。退官之後。為山口縣圖書館長。館事日興旺。範於全國府縣云。大正某年某月某日。清整後事。從容伏刃而死。人無知其故。

刀根之水汨汪洋。妙義之山鬱蒼蒼。明鏡忽摧雄劍折。曠原星墮凜寒芒。

加藤本四郎君

考諱茂弘。為森藩少參事。君其四子。以明治三年生于玖珠郡森町。明治十八年入吾校。為第一期生。居二年。進學于第五高等學校。廿八年卒大學法科業。應外交官試。以第二位登第。歷官京城倫敦蘇州香港仁川天津等公衙。明治四十年。任奉天總領事。四十一年十一月。以病遂不起。享年三十有九。君性精敏而寬厚。接人不設城府。人一見服其宏量云。蓋東大廿八年同榜之一異采矣。其歿時人有喪國士之嘆焉。

大打洪鳴小細鳴。檐存猶存節槩識生平。他年廊廟三槐器。無奈天書辟玉京。

吉丸一昌君

號萬古刀。白杵人。為人磊落奇異。有古狂夫之風。善和歌。精于音律。大正四年以音樂學校教授歿。研精餘暇。興私塾。教貧家子弟。給以衣食。又於西鄰時事。頗有所關心。未及見大成而逝。為可惜。

舊曲度來誰奏管。風雲未會死塵塗。醉哦狂態何時見。嗟箇南豐快丈夫。

糸長蓬萊評。字字精鍊。句句遒健。諸師友之面目。躍如于紙表。一唱三嘆。

創立記念式に。

三十二期 瓜生 鐵雄

さまざまに世過ぐし今日の幸をよろこびあふも  
母校の庭に  
五十周年記念式に臨みて吾は念ふさまざまに人  
は住みつくべしと  
大臣將官博士實業家世に出でて今日ぞ榮ある上  
野が丘は  
校歌の聲青葉の庭に響かへば少年の日の如くき  
ほひき  
勤績表彰の職員の中につらなれる安東熙榮先生  
に幸あれかしな  
ただ一人残れりといふ年老いし同窓生の祝辭は  
涙ぐましき

手をとりにて親しき友や恙なく幾年ぶりぞ山に入  
りゆく

けはしくなりし今の世さがに比ぶればのびのび  
として我はありにき  
大臣を思ひ學者夢見し少年の我が感傷はとりと  
めもなし  
青筋の帽をほこりて氣負ひたる少年の日を忘る  
るなかれ  
箸をきり冬の日影を浴みたりしくりくり山はと  
りのけられし  
ストライキに心きほひしこともありき櫻の花の  
暮れゆく山に  
銃器庫に古びし銃の並べるをさみしく思ひし日  
もありたりき  
腹減りて休み時間を冷豆腐食ひし日こそし  
たしき  
少年にして戀を語りし吾が友は氣ぐるむつひ  
に死にゆきしとぞ  
うらうらに春日かければグラウンドに今もフッ  
トボールの聞ゆることし

追。 慕。

四十六期 是 永 勉

世の中のけはしさ知らず直かりし少年我は幸な  
りき  
ユニホーム着し少年を今日は見すひろひろ萌え  
し青芝の原  
友に會ふ親しき持ちて朝影の青葉寂けき丘に來  
れり  
見放れば並立つ松のをちかたに大分川しろく曲  
り光れり  
すくすくと直ぐ立つ杉の穂の上に遠く光れる海  
濱が見ゆ  
眼に觸れて古き記憶もよみかへれ校舎の前に深  
き葉櫻  
たくましく南洋蘭は繁けれど荒金先生今は世に  
なし  
過ぎし世を悔ひつつぞ居り罌粟花の赤く揺れば  
憤ろしき  
けはしき世に吾ありなれてすぎければ今日ぞ戀  
しき師の面影は

搖籃の丘にのぼれば  
松の梢の空は青く  
過去の琴線にふれる懐しい想ひ出がある。  
今日、丘は緑に濡れて  
明るい空の下  
ねころんでくちすさむ中學の歌の一節。  
丘への道は  
記憶にきざまれた音律をかんでて  
私の胸によみがへる新しい想ひ出がある。

この坂を通ひし頃の想ひ出に山苺のみのるが嬉  
しかりけり

鐵棒に體操時間を嘆きいし其の鐵棒にも永くふ



れざりし  
春雨に右近櫻を嘆きみし國語が得意の友も逝き  
たり (憶磯崎君)  
思ひ出を速き記憶にたどりつつ祇園の森に落葉  
ふみ行く

大分中學五十周年を壽ぐ

五年 飯川 五郎

一、萌ゆる嫩葉の  
祇園山の 色匂ふ  
上野が丘の 曉に  
齢かさねて 學び舎は  
今日喜びの 五十年  
壽ぎ祝へ 式舉ぐる  
いざともに  
二、峨々たる由布を 仰いでは  
決意の眉を ひき緊めて  
新日本を 背負ひ立つ  
我が大中の 健男子

剛健の旗 押し立て、  
壽ぎ祝へ いざともに  
三、わが聖丘の 學び舎に  
あゝ悠久の 雲流る  
健兒一千 有二百  
赤き血潮に 胸おどる  
今ぞ記念の 機來る  
壽ぎ祝へ いざともに

上野ヶ丘を詠める (舊稿)

外山利雄

龍ヶ鼻石佛  
冬されの崖に剝けたる御佛  
西山城趾  
大友の古き屋形や冬椿  
道祖神  
春淺き椋裸木の祠かな  
百合若大臣塚  
雛の世の霞の國の君やらん

寶戒寺  
御大師の攝待あるや春の風  
六坊の跡は今なき霞かな  
祇園山  
松山へなぐれて飛べり花の屑  
律院  
社領より寺領を歩む朧かな  
古國府  
轉りやこゝ古への覇府の跡  
神宮寺浦を望む  
南蠻の船泊りけん世ぞ麗ら

選手を送る歌

一 空は晦冥 風は靜然  
吾が聖丘に血はどよむ  
いざ立てよ我が選手  
榮の背皮を偲ばずや  
不逞の敵はうかいへり  
二 吾に光あり 吾に守あり

應援歌 (其一)

一 アルプスの峯肉は飛び  
ラインの流れ血はどよむ  
あゝ君知るや昆崙の  
嵐は叫び風泣いて  
南嶺の雲安からず  
二 それ撥亂の旗立てし  
大友の趾いづこぞや  
祇園山頭秋更けて  
英雄墓に言問へば

三 松吹く風に恨みあり  
 いざ立て健兒時は今  
 正義の御旗押し立て、  
 斬靨の劔抜きつれて  
 健兒立たずば乾坤の  
 不貞の亂れいかにせん

應援歌 (其二)

一 秋碩田の氣は澄みて  
 玲瓏清き由布が峯に  
 曉光赤く照りそめぬ  
 渺茫盪きぬ豊後灘  
 見よ争鬨の濤高し  
 嗚呼血や跳る我胸に

二 身は青春の意氣に染み  
 筋骨隆々、腕は鳴る  
 血雨凄風陣頭に  
 面決心の色見せて  
 立てる我等が大選手  
 出師の秋や空高し

凱歌

一 勝ちぬ勝ちぬ 吾勝ちぬ  
 桂の冠をいただきて  
 榮ある丘に歸るとき  
 燃ゆる夕日はうするいで  
 譽は丘に輝きぬ

二 熱の劍を抜きつれて  
 冤軍に組する我仇を  
 こゝに刺したり我勝てり  
 黒き暮は這ひよりて  
 仇なす敵は消え去りぬ

三 勝ちぬ勝ちぬ 我勝ちぬ  
 若き選手の胸の上に  
 赤き血潮の燃ゆるとき  
 我は歌ひぬ我が勝を  
 勝利の神と諸共に



雁信一箋

謹啓 母校の隆盛を祝し併せて諸先生益々御健勝の段奉賀候平素は御無沙汰に打過ぎ申譯無之候遠く異境の空にて滿洲國のため微力を捧げ居り申候是迄新京に勤務致居り候も去る四月十六日當地に赴任仕候母校に記念事業資金募集の御企てある事通知頂きたるは既に申込期日終了後に有之知らざることとは申せ失禮致居り候段御許し被下度候

今回改めて母校五十周年記念事業の通知を拜見轉々往時を追憶し感慨一入に御座候双手を擧げて此の事業に賛同致し輕少乍ら分に應じ小生も金貳拾圓贈出致度候本月末頃送附申上可候右御通知まで如斯に御座候乍末筆諸先生の御多祥祈上申候 敬具(五月七日)

滿洲國間島省延吉市間島輯私局内 三八期 前川 正二

度々會報御送り頂きまして誠に有難う存じました。今度は御校滿五十周年をお迎遊ばされました御榮の程まことに御目出度く存じ上げます。就きましては種々お喜びの御計畫なども御座います由にて敷ならぬ私共まで御誘ひ頂きまして有り難うございました。

最初の御誘ひ頂きましたのは昨年の十一月中旬と存じますが其頃既に主人至儀病篤く然し意識は確かでございますので今度の御計畫の趣など申しましたところ御趣意に御添ひいたし度は山々ながら

と申しましたのみにて十二月九日逝去いたしました。大阪で勤務中病を得まして一昨年秋上京いたし其後経過よろしく昨年五月には殆ど回復いたしましたが夏期に向ひました爲め當地に轉地いたしましたたが其後病狀思はしからず當地で逝きました。御校三十六回か七回の卒業生で御座います。

在學中蒙りました諸先生の御恩また皆々様の御交誼、故人も定めて感謝申上げて居る事と存じます。代りまして厚く御禮申上げます諸先生をはじめ皆々様には早速御挨拶申上げます筈で御座いました郷里へ埋骨其他に月餘を費して歸京いたしました其儘倒れ臥し只今當地にて靜養専心の日を過して居ります次第、朝夕心に懸りながら本日まで失禮を重ねました次第あしからず御容赦下さいませ同級の皆様並に諸先生に宜敷御披露下さいませ。

尚今度の御計畫には只今の有様にて思ふに任せず誠に残念では御座いますがまたの機會にゆづらせて頂き度う存じます。

主人生前の言葉も御座います故私といたしましては出來得る丈の事をいたし度く考へて居ります。

末ながら皆様の御健康と御計畫の御成功とを御祈りいたして居ります。かしこ(五月二十日)

千葉縣長生郡一松村三富方 故日野至 妻 佐々子

◆ 行き度きは海山なれど豊後路は雲居遙けくカンタンにゆかず  
 五十年人材雲と湧く清水

◆ 國柱こゝだはぐくむ乳母かな

右三首御祝ひ旁々差上候御披露願上候(五月十九日)

東京豊嶋區長崎町二ノ一九六〇 竹雨庵 小泉秀之助

同窓會諸君 春風秋雨四拾年今創立五十周年記念式御舉行につき御招待の榮を得まして之を機縁に一言申上ります。

貴校を去りましてより京都府立一中に新潟縣新發田中學より糸魚川中學を経て金澤第二中學教頭を勤むる二十二年間昭和六年退職、やはり金澤の北陸女學校に教の鞭をとつて居ましたが、その間、家破産、大正八年妻を失ひ爾來再び求めず、孤獨多年、他姓の子を貰ひ育てまして新潟高校より京大卒業、松江銀行に入りましたが病に染み職を辞しました。

惠まれぬ家庭事情と老來のせいお頻りに尊嚴の感深く昨夏北女の教職を辭して故郷出雲の高原に歸り雨讀晴耕を事として居ましたが高原寒長く五月霰を飛ばすの状、病を養うて居ました養嗣子また重病に罹り注意の目を放たれず、私もまた心苦積り長寒に冷え神經痛にて手病み、家庭累あり身恙あり、參上久々にて昔を語り奮を叙し度きは山々なれど折角の佳會に參る能はず。

諸賢は各其所を得、數々御榮達、恭賀々々

冀くば益々御健勝にて雄飛活躍強く生きて成功を得られよ、只今は招待を添うしてそこに感慨無量なるものあり、痛い手で秃筆をねぶり蕪費久潤の情を叙し併せて貴意を得奉ります。(五月二十日)

よく咲けと蕾の花に滲きけむ涙の雫今も乾かず  
よる郷の出雲高原楓の屋に歸れども吾れ君を忘れず

島根縣仁多郡温泉村楓の屋五九一 川角拾兵衛

明治三十一年 御在學同窓諸賢各位

拜啓貴校創立五十周年に當り記念品送々御贈與被下正に拜受感謝之至に御座候不取敢右御請迄早々

東京目黒區中目黒三ノ九九〇 金子銓太郎

境と人と共に純美なる豊國諸君の御高情に浴し貴校の上に永久の光榮あれかしと祈申候(六月十日)

水戸市白銀町 室伏力次郎

一、置時計一個(大中創立五十周年記念式動續者表彰記念品)

右本月七日汽車便にて着

一、表彰狀並風呂敷

右小包郵便にて本日着

右の品々儘かに受領仕候

昭和十年六月十一日

東京芝區二本榎西町二 山田小太郎

拜啓去六月一日貴校創立五十周年記念式御舉行に相成り御寵招を蒙り候處出席致兼其旨御報申上置候處本日記念品として御校章入り御惠贈被下雖有拜受仕候右御受け迄申上候草々敬具(六月十日)

東京杉並區永福町四二九 阿部判三郎

拜啓今回は貴校創立五十周年記念品として結構なる貴校徽章入風呂敷御惠贈を被り謹に拜領仕候

過ぐる二十九年貴校に一教師として在職僅に一年三ヶ月に過ぎず圖らざりき今日尙且斯の如き御厚意を添うせんとは老生誠に感激に堪へず謹で茲に御厚禮申上候 頓首(六月十日)

鹿兒島造士會支部住宅 川上 大記

拜啓時下向暑の節と相成申候處愈々御清祥の段奉大賀候扱て過日は貴校創立五十周年の御案内を戴き今又見事なる記念品御惠贈下され重ね々御芳志萬謝仕り候

貴校は小生の教員生活の第一歩にて實に印象深きものに御座候 (六月十日)

山口中學校 田中 敏一

青葉若葉の好期益々御清祥賀上候扱我等の大分中學も愈々盛に目出度き五十周年の記念日を迎へる喜を得て深く御一同と與に祝意を表する次第に候其の記念として結構なる品御送りに預り有難く拜受致し候益々御校の御隆盛を切に祈上候

東京中野區野方町一ノ六二六 窪田 隆藏

謹啓今回御校五十周年記念大會については遠方應々記念品御郵送被下御芳情の段誠に難有深く感謝申上候 回首せば卒業主中既に内務大臣を出し小生が教授せし中にも安藤狂四郎君は早や茨木縣知事其他知名の士中々輩出實に芽出度限り引續いて善長教育を御施し被下度小生も大分縣人宇佐郡北馬城村の出生双手を擧げて益々御隆盛

ならんを偏に祈上候 敬具(六月十日)

東京中野區昭和三丁目一八 松崎 覺本

創立五十周年の式典の盛大を遙に想望致し候 昨日は御鄭重なる記念品御贈り被下雖有御禮申上候 櫻花の中に帽章三本の緑線を配した意匠に當時を忍び申候 勿々不備(六月十日)

濱松師範 杉村 盛茂

五十周年祝賀行事無滞御完了奉賀候 今回は老生の如き未置まで結構なる記念品御送付下し置かれ感佩此事に候大切に保存御好意に副ひ度存居候御禮迄 拜具

國東中學校 本重 且二



### 編輯後記

外山利雄  
佐藤定雄

- ◆創立五十周年といふ大分中學として輝やかしい時期に際會し、この記念誌をつくり得たことを喜ばねばならぬ。
- ◆本誌には諸先生や先輩の玉稿在學生諸君が御多用中執筆され最初の豫定三百頁を超過した事も、母校愛の發露として深く感謝する次第であります。
- ◆本誌は藤本、今村兩氏その他委員諸賢、武智校長先生が數回會合され編纂方針を定められ、不肖らを鞭撻、上梓の運びとなつたものである。
- ◆特に「思ひ出五十年」の長篇は我校五十年間の活歴史を物語る金玉の文字であり尊い記録であるだけ本校教育の辿つて來た道程を知つていたゞき一面には反省の資料として、將來躍進の方向を指示する貴重なる文獻と信じます。
- ◆裝幀は福田平八郎氏、口繪は權藤種男氏諸名(背文字)は中根貞彦氏に御執筆を乞ひ本誌を絢爛たるものに爲し得た事を感謝いたします、殊に本校に關する古文書は縣廳の深き御理解の下に筆寫輯録に便宜を與へられ、本誌を飾り得たもので厚く御禮申します。
- ◆誌中「上野風景」として三葉の寫眞を挿入いたしました、母校在學當時を偲ぶ思ひ出ともならば幸いと存じます。

昭和十年九月二十日印刷  
昭和十年九月三十日發行

【非賣品】

大分縣立大分中學校内  
編輯兼 外山利雄  
發行者

大阪市西區北堀江二番町六  
印刷者 田村市太郎

大阪市西區北堀江二番町六  
印刷所 日本印刷所  
電話新町三七六九番

大分市上野  
發行所 大分縣立大分中學校

# 大分新報

## 大分中學校 五十周年の祝典

### 新なる飛躍の 出発点として

（可認物更部第三第百九十五号三月五日刊）

（昨日一十三）

（日一月六年十昭和）

大分中學校五十周年の祝典は、昨日（三月五日）本校グラウンドに於て盛大に挙られた。この祝典には、本校教職員、卒業生、同窓生、関係者、及び近隣住民など、合計約千二百名が参加した。祝典は午前九時に始まり、まず校長の訓詞で開かれた。校長は、本校が創立五十周年を迎えるにあたり、過去半世紀の歩みを振り返り、今後の発展を期すことを述べた。続いて、各界の来賓が祝詞を述べ、本校の発展を願った。祝典のハイライトは、本校の歴史を物語る展示と、卒業生による合唱であった。展示には、本校の創立当時の写真や、歴代校長の肖像などが展示された。合唱は、本校の校歌と、卒業生が作成した祝賀歌であった。祝典は午後一時に閉幕した。この祝典を通じて、本校の歴史を再認識し、今後の飛躍のスタート地点とした。

## 開校五十周年を迎へ 大分中學校記念式

### 縣内外の名士千二百名を集め 一日華々しく舉行

縣内外の名士千二百名を集め、一日華々しく舉行した。この記念式には、大分県知事、各市長、議員、教育界、文化界、実業界の要人が参加した。式は午前九時に始まり、まず校長の訓詞で開かれた。校長は、本校が創立五十周年を迎えるにあたり、過去半世紀の歩みを振り返り、今後の発展を期すことを述べた。続いて、各界の来賓が祝詞を述べ、本校の発展を願った。祝典のハイライトは、本校の歴史を物語る展示と、卒業生による合唱であった。展示には、本校の創立当時の写真や、歴代校長の肖像などが展示された。合唱は、本校の校歌と、卒業生が作成した祝賀歌であった。祝典は午後一時に閉幕した。この祝典を通じて、本校の歴史を再認識し、今後の飛躍のスタート地点とした。

大分中學校では、今日（三月五日）の祝典を記念して、大分県内各地から多くの来賓が参加した。この祝典には、大分県知事、各市長、議員、教育界、文化界、実業界の要人が参加した。式は午前九時に始まり、まず校長の訓詞で開かれた。校長は、本校が創立五十周年を迎えるにあたり、過去半世紀の歩みを振り返り、今後の発展を期すことを述べた。続いて、各界の来賓が祝詞を述べ、本校の発展を願った。祝典のハイライトは、本校の歴史を物語る展示と、卒業生による合唱であった。展示には、本校の創立当時の写真や、歴代校長の肖像などが展示された。合唱は、本校の校歌と、卒業生が作成した祝賀歌であった。祝典は午後一時に閉幕した。この祝典を通じて、本校の歴史を再認識し、今後の飛躍のスタート地点とした。

祝賀宴は、午後六時から本校グラウンドに於て行われた。この祝賀宴には、本校教職員、卒業生、同窓生、関係者、及び近隣住民など、合計約千二百名が参加した。祝賀宴は、本校の歴史を物語る展示と、卒業生による合唱で盛り上げられた。祝賀宴は午後八時に閉幕した。この祝賀宴を通じて、本校の歴史を再認識し、今後の飛躍のスタート地点とした。

同窓會は、午後九時から本校グラウンドに於て行われた。この同窓會には、本校卒業生、同窓生、関係者、及び近隣住民など、合計約千二百名が参加した。同窓會は、本校の歴史を物語る展示と、卒業生による合唱で盛り上げられた。同窓會は午後十一時に閉幕した。この同窓會を通じて、本校の歴史を再認識し、今後の飛躍のスタート地点とした。

農會長、技術員協議會を開く  
一日大分郡農會で

大分郡農會では、今日（三月五日）の祝典を記念して、大分県内各地から多くの来賓が参加した。この祝典には、大分県知事、各市長、議員、教育界、文化界、実業界の要人が参加した。式は午前九時に始まり、まず校長の訓詞で開かれた。校長は、本校が創立五十周年を迎えるにあたり、過去半世紀の歩みを振り返り、今後の発展を期すことを述べた。続いて、各界の来賓が祝詞を述べ、本校の発展を願った。祝典のハイライトは、本校の歴史を物語る展示と、卒業生による合唱であった。展示には、本校の創立当時の写真や、歴代校長の肖像などが展示された。合唱は、本校の校歌と、卒業生が作成した祝賀歌であった。祝典は午後一時に閉幕した。この祝典を通じて、本校の歴史を再認識し、今後の飛躍のスタート地点とした。

## 豊州新報

夕刊  
六月一日



273  
40

大分中學校の創立五十周年を迎へて、昨日（三月五日）本校グラウンドに於て盛大に祝典が挙られた。この祝典には、本校教職員、卒業生、同窓生、関係者、及び近隣住民など、合計約千二百名が参加した。祝典は午前九時に始まり、まず校長の訓詞で開かれた。校長は、本校が創立五十周年を迎えるにあたり、過去半世紀の歩みを振り返り、今後の発展を期すことを述べた。続いて、各界の来賓が祝詞を述べ、本校の発展を願った。祝典のハイライトは、本校の歴史を物語る展示と、卒業生による合唱であった。展示には、本校の創立当時の写真や、歴代校長の肖像などが展示された。合唱は、本校の校歌と、卒業生が作成した祝賀歌であった。祝典は午後一時に閉幕した。この祝典を通じて、本校の歴史を再認識し、今後の飛躍のスタート地点とした。

祝賀宴は、午後六時から本校グラウンドに於て行われた。この祝賀宴には、本校教職員、卒業生、同窓生、関係者、及び近隣住民など、合計約千二百名が参加した。祝賀宴は、本校の歴史を物語る展示と、卒業生による合唱で盛り上げられた。祝賀宴は午後八時に閉幕した。この祝賀宴を通じて、本校の歴史を再認識し、今後の飛躍のスタート地点とした。

同窓會は、午後九時から本校グラウンドに於て行われた。この同窓會には、本校卒業生、同窓生、関係者、及び近隣住民など、合計約千二百名が参加した。同窓會は、本校の歴史を物語る展示と、卒業生による合唱で盛り上げられた。同窓會は午後十一時に閉幕した。この同窓會を通じて、本校の歴史を再認識し、今後の飛躍のスタート地点とした。

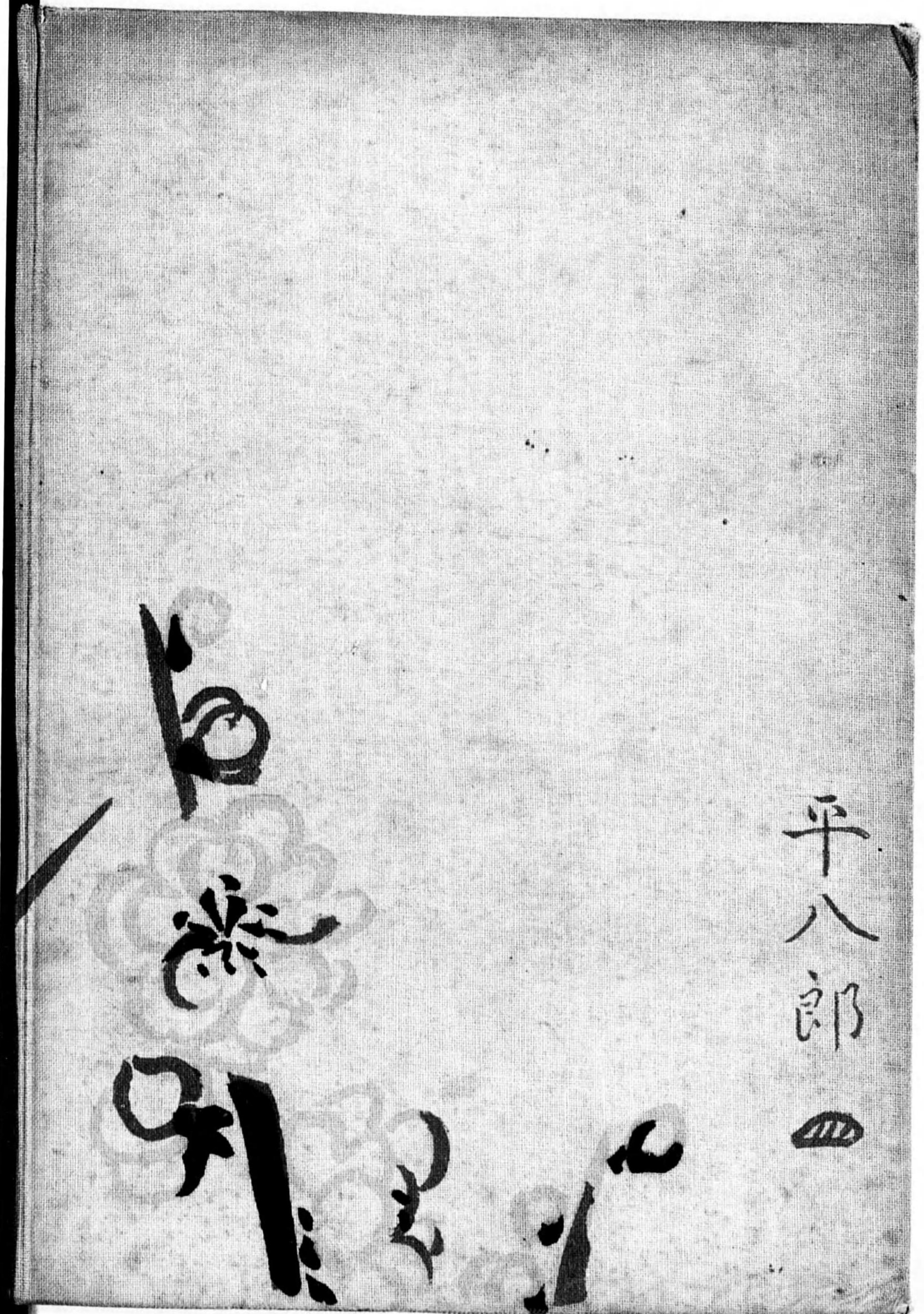
農會長、技術員協議會を開く  
一日大分郡農會で

大分郡農會では、今日（三月五日）の祝典を記念して、大分県内各地から多くの来賓が参加した。この祝典には、大分県知事、各市長、議員、教育界、文化界、実業界の要人が参加した。式は午前九時に始まり、まず校長の訓詞で開かれた。校長は、本校が創立五十周年を迎えるにあたり、過去半世紀の歩みを振り返り、今後の発展を期すことを述べた。続いて、各界の来賓が祝詞を述べ、本校の発展を願った。祝典のハイライトは、本校の歴史を物語る展示と、卒業生による合唱であった。展示には、本校の創立当時の写真や、歴代校長の肖像などが展示された。合唱は、本校の校歌と、卒業生が作成した祝賀歌であった。祝典は午後一時に閉幕した。この祝典を通じて、本校の歴史を再認識し、今後の飛躍のスタート地点とした。

農會長、技術員協議會を開く  
一日大分郡農會で

大分郡農會では、今日（三月五日）の祝典を記念して、大分県内各地から多くの来賓が参加した。この祝典には、大分県知事、各市長、議員、教育界、文化界、実業界の要人が参加した。式は午前九時に始まり、まず校長の訓詞で開かれた。校長は、本校が創立五十周年を迎えるにあたり、過去半世紀の歩みを振り返り、今後の発展を期すことを述べた。続いて、各界の来賓が祝詞を述べ、本校の発展を願った。祝典のハイライトは、本校の歴史を物語る展示と、卒業生による合唱であった。展示には、本校の創立当時の写真や、歴代校長の肖像などが展示された。合唱は、本校の校歌と、卒業生が作成した祝賀歌であった。祝典は午後一時に閉幕した。この祝典を通じて、本校の歴史を再認識し、今後の飛躍のスタート地点とした。

終



平八郎